Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド

リリース 10.1.3.2

2007 年 4 月

ORACLE

Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド , リリース 10.1.3.2

部品番号：E05028-01

原本名：Oracle Business Intelligence Presentation Services Administration Guide, Version 10.1.3.2

原本部品番号：B31766-01

Copyright © 2006, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、JD Edwards、PeopleSoft、Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行（製品またはサービスの提供、保証義務を含む）に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

目次

第 1 章 :　このリリースの新機能

第 2 章 :　Oracle BI Presentation Services の管理

Oracle BI Presentation Services の構成の変更　14

Oracle BI Presentation Services の ODBC DSN の変更　15

Oracle BI Presentation Services の構成ファイルのパスの設定　15

Oracle BI Presentation Services でユーザーの名前とパスワードを記憶する機能の無効化　16

Oracle BI Presentation Services のアイドル状態のクライアント接続の有効期限の設定　16

Oracle BI Presentation Services でのセッションの管理　17

Oracle BI Presentation Services のクライアント・セッションの有効期限の設定　20

Oracle Business Intelligence で保存されていないリクエストを保持する時間の設定　20

Oracle Business Intelligence で放置されたリクエストを取り消す時間の設定　21

Oracle BI Presentation Services からユーザーを自動ログオフする時間の設定　21

ユーザーの優先タイムゾーンの設定　22

- タイムゾーンが使用される場所　22
- タイムゾーンの設定　23
- タイムゾーンの優先順位　24
- タイムゾーンの指定が格納される場所　24
- タイムゾーンの設定の説明　25
- 例 : タイムゾーンを指定するための構成ファイルの設定　26

Oracle BI Presentation Services のキャッシュ設定の管理　27

Oracle BI Presentation Services の Cookie ドメインの構成　28

Oracle BI Presentation Services での URL の生成とリソース・ファイルの場所の管理　29

Oracle BI Presentation Services のログイン画面に表示するデフォルトの言語の指定　33

Oracle BI Presentation Services のフィールドに HTML 入力を許可するかどうかの指定　33

Oracle BI Presentation Services での Javahost サービスの使用　34

- Javahost サービスの起動と停止　34
- Javahost サービスのコマンドライン・オプション　35
- Javahost サービスのコマンドライン・プロパティ　37

Javahost サービスの構成　38
Javahost サービスのロギング　43
構成キー　43

第 3 章 :　Oracle BI Answers の管理

Oracle BI Presentation Services のグラフ・イメージ・サーバーの設定の管理　46
Oracle BI Presentation Services のグラフ設定の管理　47
Answers のピボット・テーブル設定の構成　49
Answers のテーブル・ビューに表示できる行の最大数の構成　50
Answers でのナビゲーションとドリルダウンのサポートの追加　50
Answers のデフォルトの通貨の変更　51
Answers の選択ペインでのフォルダのネスト　52
Answers でのリクエストのブロック　52
条件に基づくリクエストのブロック　52
計算式に基づくリクエストのブロック　54
検証ヘルパー関数　55
Answers および Dashboards のユーザー画面に表示するビューのデフォルトの指定　56
ビューのデフォルトに使用する XML メッセージ・ファイル　56
Answers および Dashboards のデフォルト値のカスタマイズの例　57
反転バーの色の変更　61

第 4 章 :　Oracle BI Delivers の管理

Delivers iBot と偽装について　64
Delivers iBot とウイルス対策ソフトウェアについて　64
Delivers iBot のログ・ディレクトリにあるエントリの表示　65
Delivers の無効化　65
Oracle BI Scheduler を実行するマシンの指定　66
Delivers iBot の配信内容格納先ディレクトリの変更　66
Delivers と Oracle Siebel Workflow との統合　67
Delivers を使用した Oracle BI Server キャッシュのシード　67
Delivers および iBot の権限設定について　67
Delivers のデバイス・タイプの管理　68
SA システム・サブジェクト領域と iBot 配信スケジュールについて　69
SA システム・サブジェクト領域のログオン名における大文字と小文字の区別の設定　70

iBot の配信オプションの制御　70

アクティブな Delivers iBot セッションに関する情報の表示　72

第 5 章：　Oracle BI Dashboards の管理

ダッシュボードの管理について　74

ダッシュボードの管理　74

Dashboards アクション・リンクの作成　76

画面に表示する Dashboards の名前の個数の設定　77

Dashboards の保存済選択オプションへのアクセス制御　78

- Dashboards の保存済選択の概要　78
- 保存済選択の管理　78
- 保存済選択を作成するための権限の設定の一覧表　81
- 保存済選択の管理のサンプル使用例　82

Oracle Business Intelligence ブリーフィング・ブックの追加リンク数の設定　82

UNICODE フォーマット以外による Oracle Business Intelligence の結果のダウンロード　83

他のポータルまたはイントラネットへの Answers の統合　83

レポート書込み機能の構成　85

- 書込みの構成タスク　86
- 書込み機能　87
- 書込みテンプレートの作成　87
- 例：書込みテンプレート　88
- 書込みの制限　89

第 6 章：　Oracle BI Presentation Catalog の管理

Presentation Catalog について　92

Presentation Catalog の名前および場所の変更　93

4000 人を超えるユーザー用の Presentation Catalog の構成　93

Oracle BI Presentation Services の複数インスタンスを実行する環境における Presentation Catalog キャッシュの管理　93

新規 Presentation Catalog の作成　94

別のインストールへの Presentation Catalog の移動　94

本番環境へのオブジェクトのコミット　94

Presentation Catalog のレプリケート　95

- レプリケーション・ログ・ファイルについて　96
- Presentation Catalog レプリケーションの設定　97

レプリケーション・ログ・ファイルが使用できない場合のレプリケーションの再開　99
Oracle BI Presentation Services Replication Agent の使用　100
レプリケーション用の config.xml ファイルの作成　102
レプリケーション用の instanceconfig.xml ファイルの編集　105
Presentation Catalog のアーカイブ　106
Presentation Catalog での項目の管理　107

第 7 章：　Oracle BI Catalog Manager による Presentation Catalog の管理

Catalog Manager について　112
Catalog Manager の操作に関するガイドライン　112
Catalog Manager の起動　112
Presentation Catalog を Catalog Manager で開く方法　113
Catalog Manager のワークスペースについて　115
Catalog Manager ワークスペースのビューの管理　116
Catalog Manager を使用しての Presentation Catalog 項目の検索　116
Presentation Catalog 間における項目のコピーと貼付け　117
Presentation Catalog 項目名の変更　118
Presentation Catalog 項目のプロパティの操作　119
Presentation Catalog 項目の権限の設定　119
XML 形式での Presentation Catalog オブジェクトの表示と編集　121
Catalog Manager におけるブラウザ・プリファレンスの設定　121
Catalog Manager におけるオブジェクトのプレビュー　122
Catalog Manager を使用しての Presentation Catalog テキスト文字列の検索と置換　122
単一 Presentation Catalog テキスト文字列の検索と置換　122
複数の Presentation Catalog テキスト文字列の検索と置換について　123
複数の Presentation Catalog テキスト文字列の検索と置換　124
Catalog Manager を使用しての Presentation Catalog データ表示レポートの作成　124
Presentation Catalog のキャプションのローカライズ　125
Presentation Catalog の新規バージョンへのアップグレードについて　127
Catalog Manager を使用しての Presentation Catalog のアーカイブと解凍　127

第 8 章：　Oracle BI Presentation Services のセキュリティの管理

Oracle BI Presentation Services のセキュリティの概要　132

Presentation Services グループのタイプ　134
Presentation Services グループの管理　135
Oracle BI Presentation Services のユーザー認証について　138
Presentation Services グループとセッション変数について　140
Oracle BI Presentation Services の権限の継承　141
Oracle BI Presentation Services の権限（共有情報アクセス制御用）の設定について　143
「Oracle BI Presentation Services Administration」画面の概要　145
Oracle BI Presentation Services Administration における権限の設定　147
Oracle BI Presentation Services の権限（サービス利用全般）の設定について　148
Oracle BI Presentation Services Administration における権限の設定　149
デフォルトの Oracle BI Presentation Services 権限割当て　150
Oracle BI Presentation Services のセキュリティを Presentation Catalog とダッシュボード用に構成するためのガイドライン　157
- Presentation Services グループの作成　157
- Presentation Catalog 構造の設定　157
- Presentation Catalog 項目に対する権限の設定　159
- 共有 Dashboards の作成　159
- 共有 Dashboards のページとコンテンツの追加　160
- 共有項目の作成と使用　161
- Dashboards のテスト　161
- 共有 Oracle Business Intelligence ドキュメント用の仮想ディレクトリの設定　162
- ユーザー・コミュニティへのダッシュボードのリリース　162

代理ユーザーの承認について　162
代理ユーザーの承認のプロセス　163
- プロキシ・ユーザーとターゲット・ユーザーとの間における関連付けの定義　163
- プロキシ機能用セッション変数の作成　164
- プロキシ機能用 instanceconfig.xml ファイルの変更　165
- プロキシ機能用カスタム・メッセージ・テンプレートの作成　165
- プロキシ権限の割当て　168

ユーザー開始管理操作の有効化　168

第 9 章：　Oracle BI Presentation Services ロギングの使用

Oracle BI Presentation Services ロギング機能の使用　172
Oracle BI Presentation Services 構成ファイルの構造　173
- ログ・メッセージのフォーマットの例　178

Oracle BI Presentation Services メッセージ構造　180

Oracle BI Presentation Services ロギング・レベル　181

Oracle BI Presentation Services ログ・フィルタ　182

第 10 章： Oracle BI Presentation Services のユーザー・インタフェースのカスタマイズ

スキンおよびスタイルについて　186

SKIN 変数の使用　186

スキンおよびスタイルの使用　186

Oracle BI Presentation Services のユーザー・インタフェース・スタイルの変更　187

Oracle BI Presentation Services のスタイルおよびスキンのデフォルトの指定　189

Oracle BI Presentation Services のダッシュボード以外のコンポーネントのカスタマイズ　190

XML メッセージ・ファイルを使用した Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースのカスタマイズ　190

Oracle BI Presentation Services 画面への言語の選択の追加　195

頻繁にカスタマイズされる Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェース・メッセージ　196

Oracle BI Presentation Services ログイン画面の外観のカスタマイズ　197

Oracle Business Intelligence ReportUI Portlet の構成　197

Oracle BI ReportUI Portlet のインストールおよび構成　198

portlet.xml ファイルの編集による Oracle BI ReportUI Portlet の構成　198

Oracle BI ReportUI Portlet のデプロイ　201

Oracle BI ReportUI Portlet での認証の構成　201

第 11 章： HTTP を使用した Oracle BI Presentation Services の企業環境への統合

Go URL コマンドを使用した Oracle Business Intelligence の結果の外部ポータルまたは外部アプリケーションへの取込み　206

Oracle BI Presentation Services の Dashboard URL コマンドを使用した外部ポータルまたは外部アプリケーションでのダッシュボード・コンテンツの参照　209

Oracle BI Presentation Services の Go URL コマンドを使用した SQL の発行とフィルタの受渡し　210

Oracle BI Presentation Services の Go URL コマンドを使用した SQL の発行　210

URL（ナビゲーション）を使用した Oracle BI Presentation Services の Go URL コマンドへのフィルタの受渡し　211

Oracle Business Intelligence とサード・パーティの SQL ツールとの統合例　215

索引

1 このリリースの新機能

Oracle Business Intelligence Enterprise Edition は、以前 Siebel Systems 社が Siebel Business Analytics Platform として販売していたコンポーネントで構成されており、大幅な機能拡張が行われています。

『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』は、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition のドキュメント・セットの一部です。このマニュアルには、Oracle Business Intelligence Presentation Services Administration の画面や Oracle Business Intelligence Catalog Manager を使用して実行する作業など、Oracle BI Presentation Services の管理に関する情報が記載されています。このマニュアルには、新しい記述と、以前は『Siebel Analytics Web Administration Guide』というタイトルで公開されていた記述があります。

Oracle BI Infrastructure をインストール、使用またはアップグレードする前に、Oracle Business Intelligence Enterprise Edition のリリース・ノートに目を通すことをお薦めします。Oracle Business Intelligence Enterprise Edition のリリース・ノートは、次の場所にあります。

- Oracle Business Intelligence Enterprise Edition の CD-ROM
- Oracle Technology Network（http://www.oracle.com/technology/documentation/bi_ee.html）（Oracle Technology Network の無料アカウントを登録するには、http://www.oracle.com/technology/about/index.html にアクセスしてください）

『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』に記述された新機能

表 1 に、リリース 10.1.3.2 のソフトウェアをサポートするために、このリリースのドキュメントに記述された変更内容を一覧表示します。

表 1.　『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』に記述された製品の新機能

項	説明
「ユーザーの優先タイムゾーンの設定」（22 ページ）	ユーザーの優先タイムゾーンの設定に関する新しい項を追加しました。
「Oracle BI Presentation Services のフィールドに HTML 入力を許可するかどうかの指定」（33 ページ）	フィールドへの HTML 入力を許可するかどうかの指定に関する新しいトピックを追加しました。
「Oracle BI Presentation Services での Javahost サービスの使用」（34 ページ）	Javahost サービスに関する項を改訂しました。
「Answers のテーブル・ビューに表示できる行の最大数の構成」（50 ページ）	ResultRowLimit エントリに関する情報を改訂しました。

表 1.　『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』に記述された製品の新機能

項	説明
「Delivers のデバイス・タイプの管理」（68 ページ）	Oracle Business Intelligence Delivers のデバイス・タイプの管理に関する新しい項を追加しました。
「SA システム・サブジェクト領域のログオン名における大文字と小文字の区別の設定」（70 ページ）	UpperCaseRecipientNames 要素を説明する新しい項を追加しました。
「iBot の配信オプションの制御」（70 ページ）	iBot の配信オプションの制御に関する新しい項を追加しました。
「レポート書込み機能の構成」（85 ページ）	書込みの実行に関して、より詳細な情報を記述するように改訂しました。
Presentation Catalog に関する項	Presentation Catalog の拡張を説明するために、第 6 章「Oracle BI Presentation Catalog の管理」の項を改訂しました。
「Presentation Catalog のレプリケート」（95 ページ）	この項のレプリケーションに関する項を改訂しました。
「Presentation Catalog のアーカイブ」（106 ページ）	Oracle BI Presentation Services Administration を使用した Presentation Catalog のアーカイブに関する新しい項を追加しました。
Oracle Business Intelligence Catalog Manager に関する項 Oracle Business Intelligence Catalog Manager は、以前は Siebel Analytics Catalog Manager と呼ばれていたものです。	Catalog Manager に関する項を改訂し、これらの項を独立した章に移動し、Catalog Manager の拡張機能を説明する新しい項を追加しました。新しい章のタイトルは、第 7 章「Oracle BI Catalog Manager による Presentation Catalog の管理」です。
「Catalog Manager を使用しての Presentation Catalog のアーカイブと解凍」（127 ページ）	Oracle Business Intelligence Catalog Manager を使用した Oracle Business Intelligence Presentation Catalog のアーカイブおよび解凍に関する新しい項を追加しました。
「Presentation Services グループのタイプ」（134 ページ）	この項から Authenticated Users グループを削除しました。
「Presentation Services グループの管理」（135 ページ）	Presentation Services グループの管理手順を更新しました。
「「Oracle BI Presentation Services Administration」画面の概要」（145 ページ）	Oracle BI Presentation Services Administration の「Activities」セクションのリンクを説明する表を更新して、「Manage Device Types」、「Manage BI Publisher」、「Toggle Maintenance Mode」の各リンクを追加しました。「Product Information」セクションに、「Available Paging Memory」および「Available Virtual Address Space」を追加しました。

表 1.　『Oracle Business Intelligence Presentation Services 管理ガイド』に記述された製品の新機能

項	説明
「Oracle BI Presentation Services Administration における権限の設定」（147 ページ）	権限の設定手順を更新しました。
「Oracle BI Presentation Services Administration における権限の設定」（149 ページ）	権限の設定手順を更新しました。
「デフォルトの Oracle BI Presentation Services 権限割当て」（150 ページ）	Oracle Business Intelligence Infrastructure の権限およびデフォルト設定を一覧表示する表を更新しました。
「共有項目の作成と使用」（161 ページ）	共有項目の作成と使用を説明する新しい項を追加しました。
プロキシ機能に関する項	第 8 章「Oracle BI Presentation Services のセキュリティの管理」に、他のユーザーの代理となる権限をユーザーに与える機能に関する新しい項を追加しました。
「Oracle BI Presentation Services 構成ファイルの構造」（173 ページ）	Writer 要素の fmtName 属性に関する情報を追加しました。
「Oracle BI Presentation Services 画面への言語の選択の追加」（195 ページ）	Oracle BI Presentation Services の画面に言語選択を追加する方法を説明する新しい項を追加しました。
「Oracle Business Intelligence ReportUI Portlet の構成」（197 ページ）	Oracle BI ReportUI Portlet の構成に関する項を改訂しました。

2 Oracle BI Presentation Services の管理

この章では、Oracle Business Intelligence Answers、Oracle Business Intelligence Delivers、Oracle Business Intelligence Interactive Dashboard または Oracle Business Intelligence Presentation Catalog に限定せずに、全般的なインストール後の構成および管理手順について説明します。Oracle BI Presentation Services のこれらのコンポーネント固有の構成手順については、後の各章で説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- Oracle BI Presentation Services の構成の変更（14 ページ）
- Oracle BI Presentation Services の ODBC DSN の変更（15 ページ）
- Oracle BI Presentation Services の構成ファイルのパスの設定（15 ページ）
- Oracle BI Presentation Services でユーザーの名前とパスワードを記憶する機能の無効化（16 ページ）
- Oracle BI Presentation Services のアイドル状態のクライアント接続の有効期限の設定（16 ページ）
- Oracle BI Presentation Services でのセッションの管理（17 ページ）
- Oracle BI Presentation Services のクライアント・セッションの有効期限の設定（20 ページ）
- Oracle Business Intelligence で保存されていないリクエストを保持する時間の設定（20 ページ）
- Oracle Business Intelligence で放置されたリクエストを取り消す時間の設定（21 ページ）
- Oracle BI Presentation Services からユーザーを自動ログオフする時間の設定（21 ページ）
- ユーザーの優先タイムゾーンの設定（22 ページ）
- Oracle BI Presentation Services のキャッシュ設定の管理（27 ページ）
- Oracle BI Presentation Services の Cookie ドメインの構成（28 ページ）
- Oracle BI Presentation Services での URL の生成とリソース・ファイルの場所の管理（29 ページ）
- Oracle BI Presentation Services のログイン画面に表示するデフォルトの言語の指定（33 ページ）
- Oracle BI Presentation Services のフィールドに HTML 入力を許可するかどうかの指定（33 ページ）
- Oracle BI Presentation Services での Javahost サービスの使用（34 ページ）
- 構成キー（43 ページ）

Oracle BI Presentation Services の構成の変更

この項では、構成の変更手順について説明します。変更が必要となるのは、Presentation Catalog の名前などデフォルトの要素を変更したり、クライアント接続の有効期限など内部のデフォルト設定を上書きする場合のみです。

構成を変更するには、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を変更します。このファイルには、Oracle BI Presentation Services の構成設定が保持されています。

Oracle Application Server を使用する組織では、Oracle Application Server Control を使用して構成ファイルを変更することをお薦めします。その他のアプリケーション・サーバーを使用する組織では、JConsole を使用してください。詳細は、『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストレーションおよび構成ガイド』を参照してください。

注意：それまでに、Windows レジストリを変更することによって構成を変更していた場合は、それらの変更を Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）に移行する必要があります。Windows レジストリでは、Common キーの下のエントリが有効になっています。

Oracle BI Presentation Services の XML ファイルのカスタマイズに関する一般的な背景情報は、「XML メッセージ・ファイルを使用した Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースのカスタマイズ」（190 ページ）を参照してください。

構成ファイル instanceconfig.xml を変更するには

1. 次の場所にナビゲートします。

   SADATADIR¥web¥config

   SADATADIR は、データ・ディレクトリです。

   警告：変更する前に、必ず instanceconfig.xml ファイルをコピーしてバックアップしてください。

2. instanceconfig.xml ファイルを検索して、バックアップ・コピーを作成します。
3. テキスト・エディタを使用して instanceconfig.xml ファイルを開きます。
4. この章全体を通して説明する値を使用して、<ServerInstance> 要素と </ServerInstance> 要素の間にエントリを挿入します。
5. 終了したら、ファイルを保存します。

   変更は、Oracle BI Presentation Services のサービスを再起動すると有効になります。

instanceconfig.xml ファイルの例

次の XML ファイルは、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）の例です。

```
<?xml version="1.0" ?>
<!-- Oracle BI Presentation Services Configuration File -->
<!-- The following example shows initialization settings for a server instance. -->

<WebConfig>
```

```
      <ServerInstance>
         <CatalogPath>/OracleBIData/web/catalog/default</CatalogPath>
         <DSN>AnalyticsWeb</DSN>
      </ServerInstance>
   </WebConfig>
```

instanceconfig.xml ファイルには、Presentation Catalog のパスや、Oracle BI Presentation Services が Oracle BI Server へのアクセスに使用する Oracle Business Intelligence Server のデータソース名など、一部のエントリがデフォルトとしてすでに存在しています。

たとえば、Presentation Catalog のパスは、<CatalogPath> 要素と </CatalogPath> 要素の間に示されています。

- Windows では、パスの例は次のようになります。

  ```
  <CatalogPath>c:¥OracleBIData¥web¥catalog¥default</CatalogPath>
  ```

- UNIX では、パスの例は次のようになります。

```
<CatalogPath>/usr/local/OracleBIData/web/catalog/default</CatalogPath>
```

Oracle BI Presentation Services の ODBC DSN の変更

Oracle BI Presentation Services は、Oracle BI Server の 1 つのデータソース名（DSN）を使用して、Oracle BI Server のリポジトリにアクセスします。インストール・プロセスでは、この目的のために、Analytics Web という名前の DSN が構成されます。新規または既存の DSN の構成方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

Answers では、1 つの DSN を使用する必要があります。

DSN の名前を変更する場合は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を更新して、新しい名前を使用する必要があります。

次に、エントリの例を示します。

```
<DSN>Oracle BI Presentation Services Production</DSN>
```

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイルのパスの設定

Oracle BI Presentation Services が起動時に検索する構成ファイルのパスは上書きできます。内部のデフォルト設定は、$(SADATADIR)¥web¥config です。

Oracle BI Presentation Services には、このパスに対する読取り権限が必要です。デフォルトのデータ・ディレクトリは、OracleBIData です。

内部のデフォルトを上書きするには、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）に次のエントリを追加します。このとき、*value* には完全修飾パスを使用します。

```
<ConfigDir>value</ConfigDir>
```

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services でユーザーの名前とパスワードを記憶する機能の無効化

デフォルトでは、Oracle BI Presentation Services にログインする際に、ユーザー名とパスワードを記憶させるかどうか質問されます。この動作は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集して次のエントリを追加することによって変更できます。この値を「No」に設定すると、ユーザー名とパスワードの入力が常に必要となります。

次に、エントリの例を示します。

```
<AllowRememberPassword>No</AllowRememberPassword>
```

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services のアイドル状態のクライアント接続の有効期限の設定

ConnectionExpireMinutes エントリは、Oracle BI Presentation Services と Oracle BI Server の間の接続を閉じるまでの、許容可能なアイドル時間の長さを定義します。この経過時間（分）は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集して次のエントリを追加することによって上書きできます。内部のデフォルトは 3 分です。

次に、エントリの例を示します。

```
<ConnectionExpireMinutes>3</ConnectionExpireMinutes>
```

ユーザーが Analytics アプリケーションにログインすると、ブラウザのクライアントから Oracle BI Presentation Services への接続、および Oracle BI Presentation Services から Oracle BI Server への接続が作成されます。ユーザーのセッションがアイドル状態のまま（ユーザーがなんの操作も行わないまま）3 分以上経過すると、Oracle BI Presentation Services から Oracle BI Server への接続が閉じる、つまり削除されます。ブラウザから Oracle BI Presentation Services への接続は、そのまま維持されます。ユーザーが次にレポートの実行やダッシュボードへのナビゲーションなどの操作を行ったとき、Oracle BI Presentation Services から Oracle BI Server への接続が新しく作成されます。

注意：この設定の影響を受けるのは、アイドル時間のみです。たとえば、処理に 3 分以上かかるようなリクエストを実行した場合、Oracle BI Presentation Services から Oracle BI Server に最初に作成された接続は、3 分間のアイドル時間が再び検出されるまで、そのまま維持されます。したがって、この設定によって、サーバーとの間で開いている接続の数が抑制されます。

また、ユーザーを自動的にログオフするまでの経過時間も設定できます。詳細は、「Oracle BI Presentation Services からユーザーを自動ログオフする時間の設定」（21 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services でのセッションの管理

Oracle BI Presentation Services Administration の「Session Management」画面を使用すると、ログオン中のユーザーや実行中のリクエストに関する情報を表示したり、リクエストを取り消したり、キャッシュを消去できます。

「Session Management」画面にアクセスするには

1. Oracle BI Presentation Services にログインします。
2. 「Settings」→「Administration」を選択します。
3. 「Manage Sessions」リンクをクリックします。

   「Session Management」画面が表示され、次の表が表示されます。

   - 「Sessions」テーブル：Oracle BI Presentation Services にログオンしているユーザーに関する情報を表示します。

フィールド	説明
User ID	Oracle BI Presentation Services に接続しているユーザーの名前。
Host Address	Web サーバーへの HTTP 接続を開始したマシンの名前または IP アドレス。これは、ユーザーの PC、携帯端末、ファイアウォールなどです。
Session ID	Oracle BI Presentation Services によって各クライアント・セッションに割り当てられる一意の識別子。
Browser Info	Oracle BI Presentation Services へのアクセスに使用されているブラウザに関する情報。
Logged On	このユーザー ID が Oracle BI Presentation Services にログオンしたときのタイムスタンプ。
Last Access	Oracle BI Presentation Services でこのユーザー ID が最後に実行したアクティビティのタイムスタンプ。これには、ダッシュボード・ページの切替えなど、システム上のあらゆる種類のアクティビティが含まれます。

■ 「Cursor Cache」テーブル：ユーザーが実行したリクエストのステータスを表示します。

フィールド	説明
ID	このエントリの一意の内部キャッシュ識別子。
User	リクエストを実行し、最後にそれをキャッシュに配置したユーザーの名前。ID が 2 つ表示された場合、2 番目の ID は 1 つ目の ID の代理になります。たとえば、lhurley/administrator というエントリは、ログオンしたアカウントが Administrator で、その代理が lhurley であることを示します。この現象は、Oracle Business Intelligence Scheduler がユーザーのかわりに iBot を起動した場合に発生する可能性があります。Oracle BI Scheduler は、ログオンし、その後も引き続きセキュリティとコンテンツ・フィルタを適用できるように、そのユーザーを代行します。
Refs	このエントリがキャッシュに配置されてからの、このエントリが参照された回数。
Status	このキャッシュ・エントリを使用しているリクエストのステータス。 ■ **Running:** リクエストは現在実行中です。 ■ **Finished:** リクエストは終了しました。 ■ **Queued:** スレッドが利用可能になり、リクエストを処理できるようになるまでシステムが待機しています。 ■ **Canceling:** アプリケーションがリクエストの取消し処理を実行中です。 ■ **Error:** リクエストの処理中または実行中にエラーが検出されました。「Statement」列で、エラーの詳細を確認してください。
Time	リクエストの処理と実行にかかっている時間を、秒単位で表示します。この値が 0（ゼロ秒）の場合は、リクエストが 1 秒未満で終了したことを示します。
Action	■ **Cancel:** リクエストを中断します。進行中のリクエストに対して表示されます。リクエストを実行しているユーザーには、リクエストが管理者によって取り消されたことを示すメッセージが送信されます。 ■ **Close:** このリクエストに関連付けられたキャッシュ・エントリを消去します。完了したリクエストに対して表示されます。 ■ **View Log:** このリクエストの nQQuery.log ファイル内のエントリを表示します（このユーザーのロギングが有効になっている場合）。このファイルには、個々のユーザー・レベルで行われたシステム上のクエリー・アクティビティのログが記録されます。 クエリー・ロギングは、デフォルトで無効に設定されています。このロギングは、ユーザーごとに異なるロギング・レベルで有効にすることができます。各ユーザーのロギングは、Oracle BI Server 管理者が Security Manger を使用して有効にします。 nQQuery.log ファイル（デフォルトで、Oracle Business Intelligence のインストール・ディレクトリの Log ディレクトリに格納）は、Windows のメモ帳などのテキスト・エディタで表示することもできます。nQQuery.log ファイルの最大サイズは、Oracle BI Server 管理者が、NQSConfig.ini ファイルの USER_LOG_FILE_SIZE パラメータを使用して決定します。

フィールド	説明
Last Accessed	リクエストに対応するために、このリクエストのキャッシュ・エントリが最後に使用されたときのタイムスタンプ。
Statement	リクエストに対して発行された SQL。リクエストがエラーになった場合は、エラーの性質を示す情報。
Information	使用状況トラッキング情報（クエリーが含まれているレポートなど）。
Records	結果セット内に表示されたレコードの数（たとえば、「50+ to」の場合は、表示された 50 個のレコードのほかにフェッチされるレコードがあることを示し、「75」の場合は、表示された 75 個のレコードのほかにフェッチされるレコードがないことを示します）。

実行中のリクエストをすべて取り消すには

1. 「Cancel Running Requests」ボタンをクリックします。
2. 「Finished」をクリックします。

実行中のリクエストを 1 つ取り消すには

- 「Cursor Cache」テーブルで、そのリクエストを特定して、「Action」列の「Cancel」リンクをクリックします。

  このユーザーに、リクエストが管理者によって取り消されたことを示すメッセージが送信されます。

Web キャッシュを消去するには

1. 「Cursor Cache」テーブルで、そのリクエストを特定して、「Close All Cursors」ボタンをクリックします。
2. 「Finished」をクリックします。

リクエストに関連付けられたキャッシュ・エントリを消去するには

- 「Cursor Cache」テーブルで、そのリクエストを特定して、「Action」列の「Close」リンクをクリックします。

クエリー・ファイルでリクエストの情報を確認するには

- 「Cursor Cache」テーブルで、そのリクエストを特定して、「View Log」リンクをクリックします。

注意：このログ・ファイルにデータを保存するには、クエリー・ロギングを有効にする必要があります。クエリー・ロギングの詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

Oracle BI Presentation Services のクライアント・セッションの有効期限の設定

ClientSessionExpireMinutes エントリは、Oracle BI Presentation Services がメモリーからユーザーのクライアント（ブラウザ）セッション情報を削除するまでの、許容可能なアイドル時間の長さを定義します。このセッションには、リクエストのキャッシュ、ダッシュボード・ページの状態、サブジェクト領域の情報、接続情報など、ユーザー固有の状態情報が含まれます。

内部のデフォルトは 1440（24 時間）です。

たとえば、ユーザーが 24 時間以上 Oracle BI Presentation Services にアクセスしなかった場合、そのセッションに関するサーバーの情報は完全に削除されます。この場合、ユーザーはアプリケーションからログアウトされるため、再度ログインする必要があります。状態情報はすべて失われます。

ブラウザのクライアント・セッションが削除されるまでの経過時間（分）は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集して次のエントリを追加することによって上書きできます。この値は、「Oracle Business Intelligence で保存されていないリクエストを保持する時間の設定」（20 ページ）で説明している SearchIDExpireMinutes 設定に指定した値以上であることが必要です。

次に、エントリの例を示します。

```
<ClientSessionExpireMinutes>1440</ClientSessionExpireMinutes>
```

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

Oracle Business Intelligence で保存されていないリクエストを保持する時間の設定

保存されていないリクエストを有効なまま保持する時間（分）は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集して次のエントリを追加することによって上書きできます。このエントリが適用されるのは、保存されていないリクエストのみです。内部のデフォルトは 180（3 時間）です。

注意：この値は、「Oracle BI Presentation Services のクライアント・セッションの有効期限の設定」（20 ページ）で説明している ClientSessionExpireMinutes 設定に指定した値以下であることが必要です。

次に、エントリの例を示します。

```
<SearchIDExpireMinutes>1440</SearchIDExpireMinutes>
```

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

Oracle Business Intelligence で放置されたリクエストを取り消す時間の設定

放置されたリクエストを取り消すまでの経過時間（分）は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集して次のエントリを追加することによって上書きできます。放置されたリクエストとは、この設定で指定した時間（分）内にアクセスされなかったリクエストを指します。内部のデフォルトは 5、最小値は 2 です。

このエントリは、ユーザーが Answers で「Request」画面を開いたまま、少なくとも一時的にリクエストを中断して他の場所を閲覧しているような状態を処理します。ただし、ユーザーがリクエストに戻る場合があるので、極端に小さい値は設定しないでください。

次に、エントリの例を示します。

```
<UnaccessedRunningTimeoutMinutes>5</UnaccessedRunningTimeoutMinutes>
```

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services からユーザーを自動ログオフする時間の設定

ユーザーを自動的にログオフするまでの経過時間（分）は上書きできます。この設定が適用されるのは、「Log In」画面で次のオプションを選択していないユーザーのみです。

Remember my ID and password

この値が、ConnectionExpireMinutes エントリに設定した値より早く期限切れになった場合、ユーザーは既存のセッションにログインしなおすことができます。ConnectionExpireMinutes エントリの詳細は、「Oracle BI Presentation Services のアイドル状態のクライアント接続の有効期限の設定」（16 ページ）を参照してください。

デフォルトは 180（3 時間）です。この時間（分）は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集して変更できます。

次に、エントリの例を示します。

```
<LogonExpireMinutes>180</LogonExpireMinutes>
```

注意：この設定を無効にするには、「Oracle BI Presentation Services のクライアント・セッションの有効期限の設定」（20 ページ）で説明している ClientSessionExpireMinutes 設定の値より大きな値を設定します。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

ユーザーの優先タイムゾーンの設定

Oracle BI Presentation Services のタイムゾーンと異なるゾーンにユーザーがいる場合は、そのユーザーの Oracle Business Intelligence に表示するタイムスタンプを指定できます。たとえば、サーバーの所在地が米国の太平洋タイムゾーンに属しているとします。このような場合に、米国の東海岸にいるユーザーの画面で、タイムスタンプを東部標準時で表示するように指定できます。

管理者がタイムゾーンを設定せず、ユーザーも Answers の「My Account」画面で優先タイムゾーンを指定しない場合、ユーザーの画面には、Oracle BI Presentation Services のローカルのタイムゾーンに従って時刻が表示されます。

ユーザーが自分の優先タイムゾーンを指定する方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

この項で優先タイムゾーンについて説明した内容は次のとおりです。

- タイムゾーンが使用される場所（22 ページ）
- タイムゾーンの設定（23 ページ）
- タイムゾーンの優先順位（24 ページ）
- タイムゾーンの指定が格納される場所（24 ページ）
- タイムゾーンの設定の説明（25 ページ）
- 例：タイムゾーンを指定するための構成ファイルの設定（26 ページ）

タイムゾーンが使用される場所

優先タイムゾーンの設定を開始する前に、表 2 で、タイムゾーンが使用される場所に関する情報を確認してください。

表 2.　タイムゾーンの使用方法

タイプ	説明
Oracle BI Presentation Services	Oracle BI Presentation Services で使用するタイムゾーンは、Presentation Services 管理者が指定できます。
データベースから取得したデータ	データベースから取得したデータのタイムゾーンは、Oracle BI Server 管理者が指定できます。 タイムゾーンを設定しない場合、ユーザーの画面に表示されるタイムスタンプ・データは、Oracle BI Server 管理者が設定した元データのタイムゾーンになります。

表 2.　タイムゾーンの使用方法

タイプ	説明
Oracle Business Intelligence に表示されるコンテンツ	レポートおよびダッシュボード・プロンプトに表示されるタイムゾーンは、レポートを作成するユーザーが指定できます。この指定は、管理者が指定した設定より優先されます。また、エンド・ユーザーがクエリーの列を使用してタイムゾーンを設定している場合は、その設定より優先されます。 指定された表示用のタイムゾーンがサマータイムをサポートしている場合、表示されるタイムスタンプの値は、サマータイムに合せて自動的に調整されます。
イベントの発生時刻を示す一般的なタイムスタンプ	次のような一般的な数多くのスタンプのタイムゾーンは、エンド・ユーザーが指定できます。 ■ iBot のスケジュール時間 ■ アラートまたはレポートの生成時刻 ■ Presentation Catalog の項目が作成、変更およびアクセスされた時刻
ログ・ファイル	ログ・ファイルには、様々なアクティビティのタイムスタンプが記録されます。

タイムゾーンの設定

次の手順に従って、ユーザーのタイムゾーンを設定します。

ユーザーの優先タイムゾーンを設定するには

1. Oracle BI Presentation Services に設定されているタイムゾーンを確認します。
2. Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）の要素、またはセッション変数を使用します。詳細は、次の記述を参照してください。
   - タイムゾーンの優先順位の詳細は、表 3 を参照してください。
   - セッション変数および要素の説明については、表 4 を参照してください。
   - 「例：タイムゾーンを指定するための構成ファイルの設定」（26 ページ）を参照してください。
   - セッション変数の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。
3. エンド・ユーザーに対して、Answers の「My Account」画面を使用して優先タイムゾーンを指定するように指示します。
4. レポートを作成するユーザーに対して、次の手順でレポートのタイムスタンプを設定するように指示します。
   a. レポートの列に表示するタイムゾーンを指定するには、「Column Properties」ダイアログの「Data Format」タブを使用します。
   b. ダッシュボード・プロンプトに表示するタイムゾーンを設定するには、「Time Zone」ダイアログを使用します。

タイムゾーンの優先順位

様々なコンテンツに表示される実際のタイムゾーンは、表 3 で説明する優先順位に従っています。この表では、番号の小さい項目が、番号の大きい項目より優先されます。たとえば、項目 1 は項目 2 より優先されます。

表 3.　タイムゾーンの優先順位

タイムゾーンの使用先	優先順位
データ	1 DATA_TZ セッション変数の設定 2 instanceconfig.xml ファイル内の <DefaultDataOffset> 要素の設定 3 Oracle BI Server 管理者が設定した元データのタイムゾーン（Oracle BI Presentation Services ではタイムゾーンが認識されないため）
データ表示	1 レポートの作成者が指定した設定 2 DATA_DISPLAY_TZ セッション変数の設定 3 instanceconfig.xmlファイル内の<DefaultDataDisplay>要素の設定 4 「ユーザーの優先タイムゾーン」
一般的なタイムスタンプ（列データとログ・ファイルを除く）	1 「ユーザーの優先タイムゾーン」 2 Oracle BI Presentation Services に使用されるタイムゾーン
ログ・ファイル情報	1 instanceconfig.xml ファイル内の <Logging> 要素の設定 2 Oracle BI Presentation Services に使用されるタイムゾーン

ユーザーの優先タイムゾーン

ユーザーの優先タイムゾーンは、次の順序で決定します。

1. Answers の「My Account」画面でユーザーが行った指定
2. TIMEZONE セッション変数の設定
3. instanceconfig.xml ファイル内の <DefaultUserPreferred> 要素の設定

タイムゾーンの指定が格納される場所

ドロップダウン・リストに表示されたり、セッション変数の値や Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）内の要素の値として出力されるタイムゾーンの指定は、常に TimeZones.xml ファイルから取得されます。このファイルは、SADATADIR¥common¥timezone ディレクトリに格納されています（SADATADIR はデータ・ディレクトリ）。

TimeZones.xml ファイルには、世界中のほぼすべてのタイムゾーンが含まれています。このファイルにゾーンを追加する必要はありませんが、必要であれば自由に編集できます。組織のユーザーが使用することのないゾーンは削除してもかまいません。

タイムゾーンの値の指定

各種のエディタでは、タイムゾーンの値に含まれるアンパサンドが、アンパサンド文字そのものとして、またはエスケープ・シーケンスとして表示されます。タイムゾーンの値を入力するときは、次の点に注意してください。

- セッション変数の値にアンパサンドを使用する場合は、「`Pacific Time (US & Canada); Tijuana`」のように、値にアンパサンド文字（&）を含めます。
- Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）内の要素の値にアンパサンドを使用する場合は、「`Pacific Time (US & Canada); Tijuana`」のように、値にアンパサンドのエスケープ・シーケンスを挿入します。

タイムゾーンの設定の説明

表 4 では、タイムゾーンの設定に使用するセッション変数と Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）内の要素について説明します。instanceconfig.xml ファイルに要素を追加する場合は、すべてのユーザーの画面に表示するタイムゾーンを指定します。セッション変数を使用する場合は、ユーザーごとに異なるタイムゾーンを指定できます。セッション変数を使用し、さらに instanceconfig.xml ファイルの適切な要素に値を指定した場合は、セッション変数の値が instanceconfig.xml ファイルの設定より優先されます。

表 4.　タイムゾーンの設定

要素	セッション変数	説明	値
<DefaultDataOffset>	DATA_TZ	元データのタイムゾーンのオフセット。ユーザーの画面に適切なゾーンが表示されるようにタイムゾーンを変換するには、この要素または変数の値を設定する必要があります。 これを設定しない場合、値が「unknown」になるため、タイムゾーンは変換されません。 たとえば、グリニッジ標準時（GMT）から 5 時間遅れの米国東部標準時（EST）にタイムゾーンを変換する場合は、EST に変換されるようにこの値を指定する必要があります。	GMT 時間からの時差を示すオフセット。次に例を示します。 5 時間遅れの場合は、「GMT-05:00」または「-300」と指定します。

表 4.　タイムゾーンの設定

要素	セッション変数	説明	値
<DefaultDataDisplay>	DATA_ DISPLAY_TZ	データの表示に使用するタイムゾーンを指定します。 これを設定しない場合、値は「ユーザーの優先タイムゾーン」になります。	TimeZones.xml ファイルで指定するタイムゾーンの 1 つ。 「タイムゾーンの値の指定」を参照してください。
<DefaultUserPreferred>	TIMEZONE	ユーザーが Answers の「My Account」画面で独自のタイムゾーンを選択する前に表示される、デフォルトの優先タイムゾーンを指定します。 これを設定しない場合、値は Oracle BI Presentation Services のローカルのタイムゾーンになります。	TimeZones.xml ファイルで指定するタイムゾーンの 1 つ。 「タイムゾーンの値の指定」を参照してください。
<Logging>	なし	Oracle BI Presentation Services で生成されるログ・ファイルに記録されるタイムスタンプのタイムゾーン。 これを設定しない場合、値は Oracle BI Presentation Services のローカルのタイムゾーンになります。	TimeZones.xml ファイルで指定するタイムゾーンの 1 つ。 「タイムゾーンの値の指定」を参照してください。
<TimeZone>	なし	優先タイムゾーンに影響する要素の親要素です。また、<ServerInstance> 要素の子要素でもあります。	なし

例：タイムゾーンを指定するための構成ファイルの設定

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）に <TimeZone> 要素が追加されたセクションのサンプルを次に示します。

```
<TimeZone>

    <DefaultDataOffset>0</DefaultDataOffset>

    <Logging>(GMT-08:00) Pacific Time (US &amp; Canada); Tijuana</Logging>

    <DefaultUserPreferred>(GMT-08:00) Pacific Time (US &amp; Canada); Tijuana</
    DefaultUserPreferred>

    <DefaultDataDisplay>(GMT-06:00) Central Time (US &amp; Canada)</DefaultDataDisplay>

</TimeZone>
```

Oracle BI Presentation Services のキャッシュ設定の管理

Oracle BI Presentation Services のキャッシュを管理するには、この項で説明するエントリを使用します。

- 「Oracle BI Presentation Services のキャッシュにエントリが存在できる最長時間の指定」（27 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services のキャッシュにエントリが存在できる最短時間の指定」（27 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services のキャッシュにエントリが使用後に存在できる最短時間の指定」（28 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services のオープン・レコード・セットの最大数の指定」（28 ページ）

キャッシュは、ユーザーが Answers でリクエストを実行したときにアクセスされます。これは、Oracle BI Server でアクセスされるキャッシュとは異なります。内部のデフォルトは、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集してキャッシュ・エントリを追加することによって変更できます。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services のキャッシュにエントリが存在できる最長時間の指定

キャッシュ内のエントリが削除されるまで存在できる最長時間（分）は上書きできます。内部のデフォルトは 60（1 時間）です。

実行中のリクエストの数によっては、制限時間が経過する前にエントリが削除される場合もあります。

注意：「Oracle BI Presentation Services のキャッシュにエントリが使用後に存在できる最短時間の指定」で説明する CacheMinUserExpireMinutes を設定すると、あるユーザーのエントリが、CacheMaxExpireMinutes で指定した時間より長く存在するように強制できます。

次に、エントリの例を示します。

```
<CacheMaxExpireMinutes>60</CacheMaxExpireMinutes>
```

Oracle BI Presentation Services のキャッシュにエントリが存在できる最短時間の指定

キャッシュ内のエントリが削除されるまで存在できる最短時間（分）は上書きできます。内部のデフォルトは 10 です。

次に、エントリの例を示します。

```
<CacheMinExpireMinutes>10</CacheMinExpireMinutes>
```

Oracle BI Presentation Services のキャッシュにエントリが使用後に存在できる最短時間の指定

キャッシュ内のエントリがユーザーによって表示された後に存在できる最短時間（分）は上書きできます。内部のデフォルトは 10 です。

たとえば、CacheMaxExpireMinutes が 60 分に設定されていて、あるユーザーが 59 分経過した時点でエントリを表示した場合、そのエントリの存続時間は、そのユーザーに対して 10 分間延長されます。このユーザーは、新しいリクエストを実行しなくても、引き続きデータを見ることができます。

次に、エントリの例を示します。

```
<CacheMinUserExpireMinutes>10</CacheMinUserExpireMinutes>
```

Oracle BI Presentation Services のオープン・レコード・セットの最大数の指定

Oracle BI Presentation Services で同時に開いておくオープン・レコード・セットの最大数は上書きできます。内部のデフォルトは 10、最小値は 3 です。負荷の多いシステムでは、この値を 500 または 1000 に増やすことをお薦めします。

次に、エントリの例を示します。

```
<CacheMaxEntries>100</CacheMaxEntries>
```

Oracle BI Presentation Services の Cookie ドメインの構成

Cookie ドメインは、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集して次のエントリを追加することによって構成できます。

- 「Oracle BI Presentation Services の Cookie ドメイン情報の指定」（28 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services の Cookie ドメイン・パスの上書き」（28 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services で保持される Cookie の有効期限の指定」（29 ページ）

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services の Cookie ドメイン情報の指定

ブラウザに送信される Cookie のドメイン情報を指定できます。デフォルト値はありません。

次に、エントリの例を示します。

```
<CookieDomain>value</CookieDomain>
```

Oracle BI Presentation Services の Cookie ドメイン・パスの上書き

Cookie が適用されるドメイン・パスは上書きできます。内部のデフォルトは「/」です。

次に、エントリの例を示します。

```
<CookiePath>/usr/local/test/cookies</CookiePath>
```

Oracle BI Presentation Services で保持される Cookie の有効期限の指定

保持される Cookie の有効期限は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集して次のエントリを追加することによって上書きできます。たとえば、記憶されているパスワードは、この日に期限切れとなります（「Oracle BI Presentation Services でユーザーの名前とパスワードを記憶する機能の無効化」（16 ページ）を参照）。デフォルト値は「Tue, 31 Dec 2030 23:59:59 GMT」です。

日付の書式は「day, dd mon year hh:mm:ss GMT」です。各要素を次に説明します。

day	曜日を 3 文字で表す標準的な略称
dd	2 桁の日付
mon	月を 3 文字で表す標準的な略称
year	4 桁の年
hh:mm:ss	時、分、秒
GMT	グリニッジ標準時タイムゾーン

このエントリを変更する必要はありません。

次に、エントリの例を示します。

```
<CookieExpire>Tue, 31 Dec 2040 23:59:59 GMT<¥CookieExpire>
```

Oracle BI Presentation Services での URL の生成とリソース・ファイルの場所の管理

Oracle BI Presentation Services での URL の生成方法およびリソース・ファイルの配置先は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集して次のエントリを追加することによって上書きできます。

- 「Oracle BI Presentation Services でのコマンド URL の生成方法の指定」（30 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services での静的 URL の生成方法の指定」（30 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services のプライマリ・リソース・ファイルの場所の指定」（30 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services のプライマリ・リソース・ファイルのパスの指定」（31 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services のプライマリ以外のリソース・ファイルの場所の指定」（31 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services のプライマリ以外のリソース・ファイルのパスの指定」（32 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services で完全修飾された URL を生成するかどうかの指定」（32 ページ）

<URL> 要素および </URL> 要素を <ServerInstance> 要素の後ろに作成し、<URL> 要素および </URL> 要素の間にエントリを配置する必要があります。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

注意：ほとんどの URL エントリは、相互に関係付けられています。

Oracle BI Presentation Services でのコマンド URL の生成方法の指定

Oracle BI Presentation Services でコマンドの URL を生成する方法を指定できます。

エントリを明示的に指定する場合は、次の書式を使用する必要があります。

```
protocol://server/virtualpath
```

virtualpath は、Oracle BI Presentation Services の完全な仮想パスです。デフォルトは、クライアントから Oracle BI Presentation Services に送信される URL に基づいて、クライアントごとに別々に決定されます。

次に、エントリの例を示します。

```
<URL>
   <AbsoluteCommandURLPrefix>value</AbsoluteCommandURLPrefix>
</URL>
```

Oracle BI Presentation Services での静的 URL の生成方法の指定

Oracle BI Presentation Services で静的リソース（イメージ、スクリプト・ファイル、スタイルシート、その他のユーザー指定のファイルなど）の URL を生成する方法を指定できます。デフォルトは、「Oracle BI Presentation Services でのコマンド URL の生成方法の指定」（30 ページ）で説明している URL¥AbsoluteCommandURLPrefix 設定の protocol://server です。

エントリを明示的に指定する場合は、次の書式を使用する必要があります。

```
protocol://server
```

仮想パスを指定しても削除されます。

このエントリは、静的リソースの配信用として別の Web サーバーを指定するため、メインの Web サーバーの負荷が軽減します。この接頭辞は、「/Path/file」という書式で完全修飾された仮想パスが指定されているリソースに使用されます。リソース・ファイルに「Path/file」という書式で相対的な仮想パスが指定されている場合、使用される接頭辞は、Oracle BI Presentation Services の拡張機能に対するコマンドに使用される接頭辞と同じになります。

次に、エントリの例を示します。

```
<URL>
   <ResourceServerPrefix>value</ResourceServerPrefix>
</URL>
```

Oracle BI Presentation Services のプライマリ・リソース・ファイルの場所の指定

Oracle BI Presentation Services のプライマリ・リソース・ファイルの物理的な場所は上書きできます。プライマリ・リソース・ファイルとは、Oracle BI Presentation Services とともに配布されたリソース・ファイルで、カスタム・スタイルやカスタム・スキンのように、ユーザーがカスタマイズしたファイルではありません。内部のデフォルトは、$(SAROOTDIR)¥web¥app¥res です。

フルパスを指定する必要があります。Oracle BI Presentation Services には、このパスに対する読取り権限が必要です。たとえば、これが共有ネットワーク・リソースの場合、Oracle BI Presentation Services を実行しているユーザーが、この共有リソースに対する読取り権限を持っていることと、この共有リソースのエクスポート元であるファイル・システムに対する読取り権限を持っていることを確認する必要があります。

注意：このエントリの値が、Oracle BI Presentation Services の DLL の物理的な場所と異なる場合は、「Oracle BI Presentation Services のプライマリ・リソース・ファイルのパスの指定」（31 ページ）で説明する URL¥ResourceVirtualPath に設定を指定する必要があります。

次に、エントリの例を示します。

```
<URL>
   <ResourcePhysicalPath>value</ResourcePhysicalPath>
</URL>
```

Oracle BI Presentation Services のプライマリ・リソース・ファイルのパスの指定

Oracle BI Presentation Services のプライマリ・リソース・ファイルに使用する仮想パスは上書きできます。このパスは、「Oracle BI Presentation Services のプライマリ以外のリソース・ファイルの場所の指定」（31 ページ）で説明する URL¥ResourcePhysicalPath の設定で指定されています。これらのリソース・ファイルとユーザー定義のリソース・ファイルは、同じ Web サーバーからサービスされる必要があります。

相対 URL の生成では、仮想パスのデフォルトは、Res に設定されています。これは、リソース・フォルダが Oracle BI Presentation Services の DLL ファイルと同じ仮想ディレクトリに存在するということを想定しています。

絶対 URL の生成では、URL¥AbsoluteCommandURLPrefix という値のエントリがデフォルトとして使用されます。

この値は、次の書式で完全修飾された仮想パスであることが必要です。

```
'/VirtualPath'
```

先頭のスラッシュは、省略しても自動的に付加されます。

次に、エントリの例を示します。

```
<URL>
   <ResourceVirtualPath>value</ResourceVirtualPath>
</URL>
```

Oracle BI Presentation Services のプライマリ以外のリソース・ファイルの場所の指定

デフォルトのインストールに含まれていないリソース・ファイルの物理的な場所は上書きできます。このようなリソース・ファイルには、カスタマイズされたスタイルやスキンなどがあります。内部のデフォルトは、$(SADATADIR)¥web¥app¥res です。

フルパスを指定する必要があります。Oracle BI Presentation Services には、このパスに対する読取り権限が必要です。たとえば、これが共有ネットワーク・リソースの場合、Oracle BI Presentation Services を実行しているユーザーが、この共有リソースに対する読取り権限を持っていることと、この共有リソースのエクスポート元であるファイル・システムに対する読取り権限を持っていることを確認する必要があります。

次に、エントリの例を示します。

```
<URL>
   <CustomerResourcePhysicalPath>value</CustomerResourcePhysicalPath>
</URL>
```

Oracle BI Presentation Services のプライマリ以外のリソース・ファイルのパスの指定

デフォルトのインストールに含まれていないリソース・ファイルに使用する仮想パスは上書きできます。このパスは、「Oracle BI Presentation Services のプライマリ以外のリソース・ファイルの場所の指定」（31 ページ）で説明する URL¥CustomerResourcePhysicalPath の設定で指定されています。内部のデフォルトは Res です。

次に、エントリの例を示します。

```
<URL>
   <CustomerResourceVirtualPath>value</CustomerResourceVirtualPath>
</URL>
```

Oracle BI Presentation Services で完全修飾された URL を生成するかどうかの指定

Oracle BI Presentation Services で、仮想パスが完全修飾されているリソース・ファイルに対して、常に完全修飾された URL を生成するかどうかについては上書きできます。内部のデフォルトは No です。

No に設定すると、リソースおよび Oracle BI Presentation Services の拡張機能は、どちらも同じサーバーからサービスされます。Yes に設定すると、デフォルトのリソースは、Oracle BI Presentation Services の拡張機能と同じサーバーからサービスされ、ユーザーのリソースは、別のサーバーからサービスされます。この項で説明している他の設定の値に応じて、デフォルトのリソースとユーザーのリソースを同じサーバーからサービスし、Oracle BI Presentation Services の拡張機能を別のサーバーからサービスするように設定することもできます。

次に、エントリの例を示します。

```
<URL>
   <ForceAbsoluteResourceURL>value</ForceAbsoluteResourceURL>
</URL>
```

Oracle BI Presentation Services のログイン画面に表示するデフォルトの言語の指定

Oracle BI Presentation Services のログイン画面に表示されるデフォルトの言語は、ユーザーのクライアント・ブラウザの設定から取得されます。次の手順では、この言語を変更する方法について説明します。

注意：次の手順では、例として Internet Explorer 6.0 を使用します。他のブラウザを使用している場合は、必要な代替操作を行ってください。

ユーザーのログイン画面に表示されるデフォルトの言語を変更するには

1. Internet Explorer で、「ツール」→「インターネット オプション」を選択します。

   「インターネット オプション」ダイアログ・ボックスが表示されます。

2. 「言語」をクリックします。

   「言語の優先順位」ダイアログ・ボックスが表示されます。

   「言語」リストに、インストールされている言語が表示されます。リストの先頭の言語が、デフォルトの言語として使用されています。

3. 目的の言語がブラウザにインストールされていない場合は、その言語を追加します。
4. 「上へ」ボタンと「下へ」ボタンを使用して、目的の言語をリストの先頭に移動します。
5. ブラウザを再起動して、Oracle BI Presentation Services にログインします。

   デフォルトの言語が、ブラウザの「言語」リストで指定した言語になります。

   注意：ユーザーがログイン画面のドロップダウン・リストから別の言語を選択しない場合は、ユーザーの「My Account」画面にある「User Interface Language」の設定により、ユーザー・インタフェースの表示言語が決定します。

Oracle BI Presentation Services のフィールドに HTML 入力を許可するかどうかの指定

HardenXSS 要素によって、Oracle BI Presentation Services がクロスサイト・スクリプティング（XSS）から保護されます。XSS から保護すると、通常は許可される Oracle BI Presentation Services のフィールドへの HTML 入力が禁止されます。

デフォルトでは、Oracle BI Presentation Services は XSS から保護されているため、ユーザーは HTML を入力できず、プレーン・テキストのみを入力できます。ユーザーの HTML 入力を許可する場合は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）に HardenXSS 要素を追加して、false に設定します。

注意：セキュアな環境（つまり、HardenXSS が true に設定されているデフォルトの状態）では、Oracle BI Presentation Services に配置されているリソース（イメージ）のみを使用できます。これらのイメージは、先頭が "fmap:" の相対パス（例、fmap:images/someimage.gif）を使用して参照され、完全な URL（例、http://www.somewhere.com/images/someimage.gif）を使用して取得することはできません。

HardenXSS は、HTML（説明、ティッカ、静的テキストおよび結果なし）や「Advanced」タブが含まれる表示は処理しません。かわりに、信頼されないユーザーに対して、次の権限へのアクセスを拒否する必要があります。

- View Narrative
- View Ticker
- View Static Text
- View No Results
- Answers: Access Advanced Tab

権限の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の権限（サービス利用全般）の設定について」（148 ページ）を参照してください。

次に、エントリの例を示します。

```
<ServerInstance>
   <HardenXSS>false</HardenXSS>
</ServerInstance>
```

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services での Javahost サービスの使用

Javahost サービスを使用すると、Oracle BI Presentation Services で Java ライブラリの機能を使用できるようになります。このサービスでは、次のコンポーネントがサポートされます。

- グラフの生成（Corda）
- SVG レンダラ（Apache Batik）
- Oracle BI Scheduler を支援する Java タスク
- Oracle BI Publisher

Javahost サービスの起動と停止

Javahost サービスの起動と停止は自動的に行われるため、通常は個別に起動および停止する必要はありません。ただし、構成を変更する必要がある場合は、Javahost の構成ファイル（config.xml）と Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集してから、Javahost サービスを停止し、再起動する必要があります。

Javahost サービスの実行モードには、次の 2 つがあります。

- **サービス・モード：** Javahost はバックグラウンドで実行されます。コンソールは表示されず、ユーザーがコンピュータにログオンする必要もありません。このモードは通常、本番環境モードとして使用されます。
- **コンソール・モード：** Javahost はユーザーのコンソールで実行されます。このモードではメッセージが表示されるため、トラブルシューティングに便利です。

UNIX で Javahost サービスを起動または停止するには

- (SAROOTDIR)/setup/common.sh ファイルを入手して、(SAROOTDIR)/web/javahost/bin/run.sh コマンドを使用します。
  - サービス・モードで起動するには、「-service」コマンドライン・スイッチを使用します。
  - Javahost サービスを停止するには、(SAROOTDIR)/web/javahost/bin/shutdown.sh コマンドを使用します。

  このユーティリティによって、Javahost への TCP/IP 接続が開き、Javahost に停止信号が送信されます。

Windows で Javahost サービスを起動または停止するには

- Javahost サービスをサービス・モードで起動または停止するには、「コントロール パネル」の「サービス」を使用して、Oracle Business Intelligence Javahost Service を起動または停止します。
- Javahost サービスをコンソール・モードで起動および停止するには、コマンドラインを使用する必要があります。
  - 起動するには、<SAROOTDIR>/web/bin/sawjavahostsvc.exe を実行します。
  - 停止するには、[Ctrl] キーを押しながら [C] キーを押します。

Javahost サービスのコマンドライン・オプション

UNIX および Windows でコマンドラインを使用するときは、いくつかのコマンドライン・オプションを指定できます。

UNIX で Javahost サービスの起動に使用できるコマンドラインは、次のとおりです。

```
run.sh [-h] [-service] [-Config Javahostconfig]
```

UNIX で Javahost サービスの停止に使用できるコマンドラインは、次のとおりです。

```
shutdown.sh [-h] [-Config Javahostconfig] [-Port port] [-Host host]
```

Windows で、Javahost サービスをコンソール・モードで起動するときに使用できるコマンドラインは、次のとおりです。

```
sawjavahostsvc.exe [-regserver instancename | -regserverauto instancename | -
unregserver instancename | -h | -service -V ] [-user username] [-pwd password] [-
SAWConfig instanceconfig] [-Config Javahostconfig]
```

注意：Javahost の構成ファイル（config.xml）と Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）は、それぞれ複数指定できます。複数の Javahost 構成ファイルを指定したほうが便利な場合があります。たとえば、Javahost サービスでサポートされるすべてのコンポーネントと他の必要な設定を 1 つのファイルに定義し、リスニング・ポートの変更と Javahost でサポートされる一部のコンポーネントの有効化または無効化を別のファイルで行うような場合です。
複数のファイルを指定した場合、構成要素がマージされ、ファイルの指定順序に基づいて、ファイル内の値の優先順位が決まります。

次に例を示します。

```
sawjavahostsvc.exe /SAWConfig ../OracleBIData/web/config/instanceconfig.xml /Config
../javahost/config/config.xml /Config ../javahostconfigs/config.xml
```

表 5 は、コマンドライン・オプションとその説明を示しています。

表 5.　Javahost サービスのコマンドライン・オプション

オプション	オペレーティング・システム	説明
-regserver instancename	Windows	Oracle Business Intelligence Javahost サービスを、手動起動モードで登録します。 （オプション）この instancename パラメータは、複数の Javahost サービスを 1 台のマシンに登録する場合に使用します。指定した場合、この Javahost サービス名が、OracleBI Java Host の <instancename> に設定されます。
-regserverauto instancename	Windows	Oracle Business Intelligence Javahost サービスを、自動起動モードで登録します。 （オプション）この instancename パラメータは、複数の Javahost サービスを 1 台のマシンに登録する場合に使用します。指定した場合、この Javahost サービス名が、OracleBI Java Host の <instancename> に設定されます。
-unregserver instancename	Windows	Oracle Business Intelligence Javahost サービスの登録を解除します。 （オプション）この instancename パラメータは、複数の Javahost サービスが 1 台のマシンに登録されている場合に使用します。
-service	UNIX、Windows	Javahost をサービス・モードで実行します。Windows では、このパラメータを明示的に使用しないでください。かわりに、「コントロール パネル」の「サービス」を使用して、Oracle Business Intelligence Javahost サービスを起動および停止します。
-V	Windows	バージョンを表示します。
-user username	Windows	Windows で Javahost サービスの起動に使用されるユーザー・アカウントのユーザー名を指定します。-regserver オプションおよび -regserverauto オプションと組み合せて使用します。

表 5.　Javahost サービスのコマンドライン・オプション

オプション	オペレーティング・システム	説明
-pwd password	Windows	Windows で Javahost サービスの起動に使用されるユーザー・アカウントのパスワードを指定します。-regserver オプションおよび -regserverauto オプションと組み合せて使用します。
-SAWConfig instanceconfig	UNIX、Windows	Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）のパスを指定します。デフォルトのパスは次のとおりです。 SADATADIR/web/config/instanceconfig.xml（SADATADIR はデータ・ディレクトリ）
-Config Javahostconfig	UNIX、Windows	config.xml のパスを指定します。デフォルトのパスは次のとおりです。 SAROOTDIR¥web¥javahost¥config（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ） **注意：** SSL 接続を使用している Javahost サービスを停止する際は、必要な SSL 構成パラメータを読み取れるように、-Config を使用する必要があります。
-Port port	UNIX	Javahost のリスニング・ポートを指定します。
-Host hostname	UNIX	Javahost サービスを実行しているコンピュータを指定します。

UNIX では、shutdown.sh コマンドによって果たされる目的は、ホストとポートの接続情報を渡して、停止信号が Javahost サービスに送信されるようにすることです。各パラメータの相互作用には、次のようなルールがあります。

- -Host と -Port いずれかのパラメータを指定した場合、shutdown.sh は -Config パラメータを無視します。
- -Host を指定して -Port を指定しない場合、shutdown.sh はポート番号として 9810 を使用します。
- -Config パラメータを指定した場合､shutdown.sh は instanceconfig.xml ファイルを使用して Javahost のリスニング・ポートを検索します。Javahost サービスは、ローカル・コンピュータ（Host=localhost）で実行されているものとみなされます。
- パラメータを何も指定しない場合、shutdown.sh は Host=localhost および port=9810 を使用します。

Javahost サービスのコマンドライン・プロパティ

Oracle Business Intelligence 環境では、ルート・ディレクトリなどの特殊なディレクトリの場所が、Java のプロパティを通じて Javahost サービスに渡されます。

これらのプロパティは、次のように、Java コマンドラインで自動的に設定されます。

- Windows では、sawjavahostsvc コマンド
- UNIX では、SAROOTDIR/setup ディレクトリ（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）にある saw.sh スクリプト

これらのプロパティを変更するには、プロパティの値を明示的に設定して Java コマンドラインを構成します。

表 6 は、Javahost サービスのコマンドライン・プロパティとその説明を示しています。

表 6.　Javahost サービスのコマンドライン・プロパティ

プロパティ	説明
oracle.bi.presentation.coreconfigdir	SAROOTDIR¥web¥config ディレクトリ（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）
oracle.bi.presentation.dataconfigdir	SADATADIR¥web¥config ディレクトリ（SADATADIR はデータ・ディレクトリ）
oracle.bi.rootdir	SAROOTDIR ディレクトリ（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）
oracle.bi.presentation.rootdir	SAROOTDIR¥web ディレクトリ（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）
oracle.bi.tempdir	一時ディレクトリ
oracle.bi.javahostdir	Javahost のルートディレクトリ
oracle.bi.presentation.cordaroot	Corda のルート・ディレクトリ

Javahost サービスの構成

Javahost サービスを構成するには、次の各ファイルで Javahost サービスの構成要素を編集します。

- Javahost の構成ファイル（config.xml）。このファイルは、SAROOTDIR¥web¥javahost¥config ディレクトリ（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）にあります。

  編集できる要素の詳細は、「config.xml ファイルに含まれる Javahost サービスの構成要素」（39 ページ）を参照してください。

- Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）。このファイルは、SADATADIR¥web¥config ディレクトリ（SADATADIR はデータ・ディレクトリ）にあります。

  編集できる要素の詳細は、「instanceconfig.xml ファイルに含まれる Javahost サービスの構成要素」（42 ページ）を参照してください。

config.xml ファイルに含まれる Javahost サービスの構成要素

表 7 は、Javahost の構成ファイル（config.xml）に含まれる Javahost サービスの要素とその説明を示しています。これらの要素は、/JavaHost 要素で始まる相対パスによって特定されます。

表 7.　config.xml に含まれる Javahost サービスの構成要素

要素	説明
Loaders	次の要素が含まれています。 ■ ListOfEnabledLoaders ■ Loader（Loader 要素は、複数存在する場合があります）
Loaders/ListOfEnabledLoaders	有効にするコンポーネント（PDF、グラフ、Oracle BI Publisher など）のリスト。 ファイルにこの要素がない場合は、すべてのローダーが有効になります。この要素の値が空の場合は、すべてのローダーが無効になります。 各コンポーネントには、それぞれ対応する Loader 要素があります。ここに一覧表示されたコンポーネントの名前は、対応する Loader/Name 要素で指定された名前と一致している必要があります。
Loaders/Loader	次の要素が含まれており、これによって特定のコンポーネントの構成情報が指定されます。 ■ Name ■ Class ■ ConfigNodePath ■ ClassPath
Loaders/Loader/Name	コンポーネントの一意の名前を指定します。この名前は、ListOfEnabledLoaders に使用します。
Loaders/Loader/Class	コンポーネントのローダーのメイン・クラスを指定します。
Loaders/Loader/ConfigNodePath	ローダーの構成情報の XPath を指定します。XPath は /Javahost 要素で始まります。
Loaders//Loader/ClassPath	クラスパスを指定します。
MessageProcessor	SocketTimeout 要素が含まれています。
MessageProcessor/SocketTimeout	ソケットのアイドル・タイムアウト（ミリ秒）を指定します。この時間が経過すると、ソケットがアイドル・ソケット・プールに戻されます。Javahost は、ソケット・ポーリング・メカニズムを使用して、単一スレッド内のアイドル・ソケット全体に関する新しいデータが取得されるまで待機します。 デフォルト：5000（5 秒）

表 7.　config.xml に含まれる Javahost サービスの構成要素

要素	説明
Listener	次の要素が含まれています。 ■ PermittedClientList ■ Port ■ Address ■ Secure
Listener/PermittedClientList	IP アドレスとホスト名のリストを指定します。Javahost は、ここからの着信接続要求を受け入れます。クライアントはそれぞれカンマで区切ります。すべてのクライアント接続を受け入れるには、この要素にアスタリスク（*）を設定します。 デフォルト：*
Listener/Port	Javahost の TCP/IP リスニング・ポートを指定します。 デフォルト：9810 Hosts/Host 要素を使用して、Javahost プロセスの具体的なインスタンスを特定する方法は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。
Listener/Address	Javahost がバインドされるネットワーク・インタフェースを指定します。この要素に値を指定しない場合、Javahost は使用可能なすべてのネットワーク・インタフェースにバインドされます。
Listener/Secure	SSL 暗号化を有効にするかどうかを指定します。 ■ Yes: SSL 暗号化を有効にする ■ No: SSL 暗号化を無効にする デフォルト：No SSL の詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。
Charts	次の要素が含まれています。 ■ InputStreamLimitInKB ■ ChartRoot ■ CordaRoot ■ EnableConsoleOutput
Charts/InputStreamLimitInKB	グラフのリクエストの最大入力サイズを指定します。値がゼロの場合、この制限は解除されます。デフォルト値でグラフを生成できない場合は、設定値を慎重に増やしながら最適な値を見つけてください。 デフォルト：1024

表 7.　config.xml に含まれる Javahost サービスの構成要素

要素	説明
Charts/ChartRoot	Corda の chart_root ディレクトリのパスを指定します。 デフォルト：{CordaRoot}/chart_root
Charts/CordaRoot	Corda のインストール・ディレクトリのパスを指定します。 デフォルト：SAROOTDIR/Corda50 （SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）
Charts/EnableConsoleOutput	Corda のコンソール診断メッセージを有効にするかどうかを指定します。 ■ Yes: Corda のコンソール診断メッセージを有効にする ■ No: Corda のコンソール診断メッセージを無効にする デフォルト：No
Scheduler	次の要素が含まれています。 ■ Enabled ■ DefaultPurgingPeriod
Scheduler/Enabled	スケジューラを有効にするかどうかを指定します。 ■ True: スケジューラを有効にする ■ False: スケジューラを無効にする デフォルト：False
Scheduler/DefaultUserJarFilePath	ユーザーが Java 拡張ユーティリティの jar ファイルを配置するデフォルトのディレクトリを指定します。 スケジューラを有効にした場合、この要素は必須で、1 つのパスのみを受け入れます。
Scheduler/DefaultTempFilePath	スケジューラのリクエストに使用するデフォルトの一時ファイル・ディレクトリを指定します。 デフォルト：{systemtempdir} （{systemtempdir} はシステムの一時ディレクトリ）
Scheduler/DefaultPurgingPeriod	スケジューラのリクエストが、失敗したジョブをクリーンアップするときに使用するデフォルトのパージ時間（秒）を指定します。 デフォルト：300
XMLP	InputStreamLimitInKB 要素が含まれています。
XMLP/InputStreamLimitInKB	Oracle BI Publisher のリクエストの最大入力サイズを指定します。値がゼロの場合、この制限は解除されます。 デフォルト：8192

instanceconfig.xml ファイルに含まれる Javahost サービスの構成要素

表 8 は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）に含まれる Javahost サービスの要素とその説明を示しています。これらの要素は、/WebConfig/ServerInstance 要素で始まる相対パスによって特定されます。

表 8.　instanceconfig.xml に含まれる Javahost サービスの構成要素

要素	説明
JavaHome	JDK または JRE インストールのルート・ディレクトリのパスを指定します。 デフォルト：環境変数 JAVA_HOME の値
JavaHost/InitLoggerDir	sawjavahostsvc.exe が java をロードする前にログ情報を書き込むディレクトリの絶対パスを指定します。この要素の値が空の場合は、ロギングが無効になります。 デフォルト：SADATADIR/web/log/javahost（SADATADIR はデータ・ディレクトリ）
JavaHost/JniLibrary	jvm.dll の絶対パスを指定します。 デフォルト：{JavaHome}/jre/bin/server/jvm.dll そのファイルが存在しない場合は、次のようになります。 {JavaHome}/bin/server/jvm.dll（{JavaHome} は、JDK または JRE インストールのパス）。
JavaHost/JVMOptions	Java コマンドライン・パラメータを指定します。 デフォルト：-Xms128m -Xmx256m -Xrs "-Djava.class.path={CLASSPATH}" "-Djava.awt.headless=true" "-Djava.util.logging.config.file= {JAVAHOSTROOTDIR}/config/logconfig.txt"。 {CLASSPATH} は、Javahost の jar ファイルのリストで、各ファイルはセミコロンで区切られています。{JAVAHOSTROOTDIR} は、Javahost のルート・ディレクトリ SADATADIR/web/javahost です。
JavaHost/UseDefaultJVMOptions	デフォルトの JVMOptions を使用するかどうかを指定します。 ■ Yes: JavaHost/JVMOptions 要素の値を、この要素のデフォルト値とマージする ■ No: Java の正確なコマンドラインを指定する、JavaHost/JVMOptions 要素の値を使用する デフォルト：Yes

Javahost サービスのロギング

Javahost サービスには、Java の標準的なロギング・エンジンが使用されます。デフォルトでは、SADATADIR/web/config/logconfig.txt（SADATADIR はデータ・ディレクトリ）にあるロギングの構成ファイルが使用されます。ロギングのファイル・フォーマットの詳細は、市販の Java ドキュメントを参照してください。

Windows では、Java が初期化される前に、いくつかの初期化メッセージが書き込まれる場合があります。これらのメッセージの書込み先を制御するには、JavaHost/InitLoggerDir 構成キーを使用します。

構成キー

Oracle BI Presentation Services の動作を定義する要素の多くは、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を使用して構成します。これらのキーは、定義済のデフォルト値を上書きする場合以外は使用しないでください。instanceconfig.xml ファイルはできるだけ短くし、実装の構成に必要な設定のみを上書きするようにしてください。

Oracle Application Server を使用する組織では、Oracle Application Server Control を使用して構成ファイルを変更することをお薦めします。その他のアプリケーション・サーバーを使用する組織では、JConsole を使用してください。詳細は、『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストレーションおよび構成ガイド』を参照してください。

構成キーのフォーマットはすべて、次のようにします。

```
<key_name>value</key_name>
```

例：DefaultTimeoutMinutes（レベルは「/」）および MaxVisiblePages（レベルは「/PivotView」）の構成キーを、instanceconfig.xml に追加します。

```
<WebConfig>
   <ServerInstance>
      <CatalogPath>/OracleBIData/web/catalog/default</CatalogPath>
      <DSN>AnalyticsWeb</DSN>
      <DefaultTimeoutMinutes>3000</DefaultTimeoutMinutes>
      <PivotView>
         <MaxVisiblePages>2000</MaxVisiblePages>
      </PivotView>
   </ServerInstance>
</WebConfig>
```

3 Oracle BI Answers の管理

この章では、Oracle BI Answers の管理に使用する手順について説明します。Answers の概要については、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

この章の内容は次のとおりです。

- Oracle BI Presentation Services のグラフ・イメージ・サーバーの設定の管理（46 ページ）
- Oracle BI Presentation Services のグラフ設定の管理（47 ページ）
- Answers のピボット・テーブル設定の構成（49 ページ）
- Answers のテーブル・ビューに表示できる行の最大数の構成（50 ページ）
- Answers でのナビゲーションとドリルダウンのサポートの追加（50 ページ）
- Answers のデフォルトの通貨の変更（51 ページ）
- Answers の選択ペインでのフォルダのネスト（52 ページ）
- Answers でのリクエストのブロック（52 ページ）
- Answers および Dashboards のユーザー画面に表示するビューのデフォルトの指定（56 ページ）
- 反転バーの色の変更（61 ページ）

Oracle BI Presentation Services のグラフ・イメージ・サーバーの設定の管理

Oracle BI Presentation Services には、サード・パーティのグラフ作成エンジン（CORDA Technologies 社の PopChart Image Server）が使用されています。デフォルトのイメージ・タイプは、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集して次のエントリを追加することによって上書きできます。

- 「Oracle Business Intelligence のグラフのイメージ・タイプの指定」（46 ページ）
- 「Oracle Business Intelligence でのデフォルトのイメージ・タイプとしての Flash のダウンロードと使用について」（46 ページ）

<Charts> 要素および </Charts> 要素を <ServerInstance> 要素の後ろに作成し、<Charts> 要素および </Charts> 要素の間にエントリを配置する必要があります。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

Oracle Business Intelligence のグラフのイメージ・タイプの指定

PopChart Image Server で生成されるイメージ・タイプは上書きできます。内部のデフォルトは Flash です。

他の選択肢には、SVG（W3C Scalable Vector Graphics）、PNG（W3C Portable Network Graphics）および JPEG があります。Flash イメージおよび SVG イメージは、マウスオーバー動作（ポップアップ・データ・ラベルなど）、ナビゲーションおよびドリルをサポートしているため、最大限の対話性を発揮します。

次に、エントリの例を示します。

```
<Charts>
   <DefaultImageType>PNG</DefaultImageType>
</Charts>
```

Oracle Business Intelligence でのデフォルトのイメージ・タイプとしての Flash のダウンロードと使用について

組織によっては、ユーザーは最新の Flash ソフトウェアを、ベンダーの Web サイトではなく、社内の特定の場所からダウンロードするように指示されることがあります。Oracle BI Presentation Services では、デフォルトのダウンロード元がベンダーの Web サイトに設定されています。このデフォルトのダウンロード元を、別の場所を指すように変更できます。さらに、ユーザーが Oracle Business Intelligence でグラフを表示するときに、社内のサーバーに最新の Flash ソフトウェアが用意されている場合、最新バージョンをダウンロードするように要求することもできます。この項の内容は次のとおりです。

- 「Flash のデフォルトのダウンロード元の変更」（47 ページ）
- 「Flash の新規バージョンのダウンロード・プロンプトの有効化」（47 ページ）

Flash のデフォルトのダウンロード元の変更

Flash プラグインでは、デフォルトのダウンロード元がベンダーの Web サイトに設定されています。これを別の場所に変更するには、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集して、Flash コード・ベースが保持されている場所を指すようにします。

注意： <FlashCodeBase> 要素および </FlashCodeBase> 要素を <Charts> 要素の後ろに作成し、<FlashCodeBase> 要素および </FlashCodeBase> 要素の間にエントリを配置する必要があります。

次に、エントリの例を示します。

```
<Charts>
   <FlashCodeBase>¥¥CORPORATE¥Download¥Flash</FlashCodeBase>
</Charts>
```

Flash の新規バージョンのダウンロード・プロンプトの有効化

Flash のデフォルトのダウンロード元を変更したら、ダウンロードを促すプロンプトを有効にすることができます。これには、Flash の ActiveX コントロールに新しい classID を作成して、カスタムのグローバル識別子（clsid）のプロパティを追加します。グローバル識別子の現在のプロパティは、Oracle BI Presentation Services のグラフ作成機能を使用しているマシンから取得できます（Oracle Business Intelligence で使用されているグローバル識別子のプロパティは、D27CDB6E-AE6D-11CF-96B8-444553540000）。カスタムのグローバル識別子のプロパティには、Flash のデフォルトの ActiveX コントロールで使用されているグローバル識別子と同じ数の文字およびダッシュを使用する必要があります。

次に、エントリの例を示します。

```
<Charts>
   <FlashCLSID>E38CDB6E-BA6D-21CF-96B8-432553540000</FlashCLSID>
</Charts>
```

Flash のグラフは、Oracle Business Intelligence と関係なく個別にテストして、カスタムのグローバル識別子のプロパティで機能することを確認する必要があります。

Oracle BI Presentation Services のグラフ設定の管理

Oracle BI Presentation Services の一部のグラフ設定は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）にエントリを追加することによって、内部のデフォルト設定から変更できます。

- 「Oracle BI Presentation Services のグラフ・キャッシュに使用する一時記憶域の場所の指定」（48 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services でのグラフの対話型動作の指定」（48 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services でのグラフのナビゲーション先 URL の指定」（48 ページ）

<Charts> 要素および </Charts> 要素を <ServerInstance> 要素の後ろに作成し、<Charts> 要素および </Charts> 要素の間にエントリを配置する必要があります。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services のグラフ・キャッシュに使用する一時記憶域の場所の指定

Oracle BI Presentation Services でグラフ・キャッシュの一時記憶域として使用する場所については、内部のデフォルトのエントリを上書きできます。内部のデフォルトは、dirletter:¥SADATADIR¥Temp¥nQWCharts です。dirletter は Oracle BI Presentation Services ソフトウェアがインストールされているドライブ、SADATADIR はデータ・ディレクトリです。

場所には、d:¥OracleBIChartCache のように、完全修飾されたパス名を指定する必要があります。Oracle BI Presentation Services のサービスを再起動する前に、フォルダまたはディレクトリの構造を作成しておく必要があります。

次に、エントリの例を示します。

```
<Charts>
   <CacheDirectory>/usr/local/OracleBI/Data/temp/chartcache</CacheDirectory>
</Charts>
```

Oracle BI Presentation Services でのグラフの対話型動作の指定

Oracle BI Presentation Services のグラフのデフォルトの対話型動作は上書きできます。有効なエントリは、Drill、Navigate および None です。デフォルトは Drill です。つまり、デフォルトでは、ドリル可能なグラフが作成されます。

Navigate を指定した場合、グラフは、「Oracle BI Presentation Services でのグラフのナビゲーション先 URL の指定」（48 ページ）に示す URL にナビゲートします。None を指定した場合、グラフは対話型にはなりません。たとえば、グラフやグラフ・リージョンをクリックしても、何も起こりません。

次に、エントリの例を示します。

```
<Charts>
    <DefaultInteraction>Navigate</DefaultInteraction>
</Charts>
```

Oracle BI Presentation Services でのグラフのナビゲーション先 URL の指定

グラフの対話型動作として Navigate を指定した場合（「Oracle BI Presentation Services でのグラフの対話型動作の指定」（48 ページ）を参照）、グラフのナビゲート先となるデフォルトの URL を上書きできます。内部のデフォルトの URL は http://www.oracle.com/ です。

対話型動作が Navigate に指定されていない場合、このエントリは無視されます。

次に、エントリの例を示します。

```
<Charts>
   <DefaultNavigationPath>http://www.intranet.com/</DefaultNavigationPath>
</Charts>
```

Answers のピボット・テーブル設定の構成

一部のピボット・テーブル設定は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）の <PivotView> 要素にエントリを追加することによって、内部のデフォルトから変更できます。

- 「Oracle Business Intelligence のピボット・テーブルで処理するレコードの最大数の指定」
- 「Oracle Business Intelligence のピボット・テーブルで移入されるセルの最大数の指定」
- 「Oracle Business Intelligence のピボット・テーブルに表示するセクションの最大数の指定」

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

Oracle Business Intelligence のピボット・テーブルで処理するレコードの最大数の指定

ピボット・テーブルで処理できるレコードの最大数は上書きできます。内部のデフォルトは 20000 です。

次に、エントリの例を示します。

```
<CubeMaxRecords>30000</CubeMaxRecords>
```

Oracle Business Intelligence のピボット・テーブルで移入されるセルの最大数の指定

Oracle BI Presentation Services のピボット・テーブルに移入されるセルの最大数は上書きできます。内部のデフォルトは 150000 です。この値を超えると、ピボット・テーブルのレンダリング時にサーバーからエラー・メッセージが返されます。

次に、エントリの例を示します。

```
<CubeMaxPopulatedCells>160000</CubeMaxPopulatedCells>
```

Oracle Business Intelligence のピボット・テーブルに表示するセクションの最大数の指定

Oracle BI Presentation Services のピボット・テーブルに表示するセクションの最大数は上書きできます。内部のデフォルトは 1000 です。

次に、エントリの例を示します。

```
<MaxVisibleSections>500</MaxVisibleSections>
```

Answers のテーブル・ビューに表示できる行の最大数の構成

テーブル・ビューに表示できる行の最大数は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集して次のエントリを追加することによって上書きできます。内部のデフォルトは 65000 です。この値を超えると、テーブル・ビューのレンダリング時にサーバーからエラー・メッセージが返されます。

注意：このエントリが適用されるのは、ピボット・テーブル・ビューでなくテーブル・ビューです。

次に、エントリの例を示します。

```
<ResultRowLimit>95000</ResultRowLimit>
```

ResultRowLimit エントリは、DefaultRowsDisplayed、DefaultRowsDisplayedInDelivery、DefaultRowsDisplayedInDownload の各エントリに設定できる最大値を制御します。DefaultRowsDisplayed、DefaultRowsDisplayedInDelivery または DefaultRowsDisplayedInDownload を、ResultRowLimit の現在値より大きい値に設定するには、ResultRowLimit の値も、目的の値以上に変更する必要があります。

Answers でのナビゲーションとドリルダウンのサポートの追加

リクエストを作成する際に、関連するリクエストとコンテンツにユーザーがナビゲートできるようにすることができます。Oracle BI Server 管理者がサブジェクト領域のディメンションおよびディメンション階層を設定すると、ユーザーは、グラフ、テーブルおよびピボット・テーブルに表示されるデータ結果をドリルダウンして、詳細情報を取得できます。

Oracle BI Presentation Services のナビゲーション機能およびドリルダウン機能へのアクセスを左右する具体的な権限設定はありません。これらの機能は、すべてのユーザーが利用できます。

ディメンション階層とは、1 対多の関係で相互に関連付けられた、ディメンション内のレベルの体系です。たとえば、地域階層の場合は、郵便番号をまとめたものが市区町村になり、市区町村をまとめたものが地域になるように定義することもできます。1 つの郵便番号に対応する市区町村と地域は 1 つのみですが、1 つの市区町村には多数の郵便番号が対応し、1 つの地域にも多数の市区町村が対応する場合があります。

ユーザーは、サブジェクト領域に関連付けられたディメンション階層をドリルダウンしながら移動することで、詳細な結果を取得します。たとえば、結果に合計売上の列が含まれている場合は、合計売上をクリックすると地域別の売上にドリルダウンでき、地域をクリックするとその地域内の市区町村別の売上を表示することができます。Oracle BI Presentation Services のユーザーがドリルダウンを使って入手できる情報は、Oracle BI Server 管理者が具体的なサブジェクト領域に構成するディメンション階層によって絞り込まれます。

ディメンションと階層の設定方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

Answers のデフォルトの通貨の変更

Answers のユーザー・インタフェースに表示するデフォルトの通貨（フランス・フランやユーロなど）は変更できます。

Oracle Business Intelligence アプリケーションをカスタマイズしないで使用している場合、必要な設定は、データ・ウェアハウスのデフォルトの通貨のみです。

追加のサブジェクト領域を作成した場合は、通貨列のデータが数値のフォーマットになっているため、2 番目の手順に示すように、カスタマイズしたサブジェクト領域に通貨を指定する必要があります。

Answers のフォーマット設定機能の使用方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

データ・ウェアハウスのデフォルトの通貨を設定するには

1. ¥¥SAROOTDIR¥web¥config ディレクトリにある currencies.xml ファイルを開きます（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）。
2. USD、CAD、PEN、MAD など、デフォルトにする通貨を検索します。
3. currency 要素全体をコピーします。

   たとえば、ユーロの場合は、次の currency タグをコピーします。

   ```
   - <Currency tag="int:euro-l" type="international" symbol="_"
   displayMessage="kmsgCurrencyEuroLeft" digits="2" format="$ #">

   <negative tag="minus" format="-$ #" />

   </Currency>
   ```

4. ファイルの上方にあるテキスト文字列 int:wrhs を検索します。
5. この要素全体を選択し、コピーした要素を貼り付けて置き換えます。
6. int:wrhs を読み取れるように、タグの属性を置き換えます。

   たとえば、`tag="int:euro-l"` の場合は、`tag="int:wrhs"` に置き換えます。

7. Oracle BI Presentation Services のサービスを再起動します。

カスタマイズしたサブジェクト領域に通貨を指定するには

1. Answers で、そのサブジェクト領域を使用しているリクエストを変更します。
2. 通貨列の「Format Column」ボタンをクリックします。

   「Column Properties」ダイアログ・ボックスが表示されます。

3. 「Value Format」タブの「Data Format」領域で、次のオプションをクリックします。

   Override Default Data Format

4. 「Treat Numbers As」ドロップダウン・リストで、「Currency」を選択します。
5. 「Currency Symbol」ドロップダウン・リストで、通貨記号を選択します。

6 この設定を、このデータ型のシステム全体のデフォルトとして保存するには、「Save」をクリックし、適切なオプションを選択します。

7 終了したら「OK」をクリックします。他にも変更する列があったら同じ手順を繰り返します。

Answers の選択ペインでのフォルダのネスト

選択ペインの選択肢を識別しやすくするには、Oracle Business Intelligence Administration Tool でプレゼンテーション・レイヤーを設定して、ネストされたフォルダの表示方法を指定します。たとえば、Sales Facts フォルダを Facts フォルダのサブフォルダとして表示することができます。これを実現するには、プレゼンテーション・レイヤーの作成時に、サブフォルダとして表示するフォルダの名前の先頭に、ハイフン（ - ）とスペースを付けます。

このような作成例には、Oracle Siebel の業務系アプリケーションに事前構成されている Oracle Business Intelligence のリポジトリなどがあります。詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

Answers でのリクエストのブロック

特定の列を別の列に挿入することをユーザーに要求したり、特定の列がリクエストされたときにフィルタを要求するなど、特定のリクエストをブロックしたほうがよい場合があります。Answers には API が用意されており、これを使用すると、ユーザーのリクエストに指定された条件またはリクエスト内の計算式に基づいてクエリーをブロックできます。JavaScript を使用してこれらの API にアクセスすると、条件を確認したりリクエストを検証することができます。

この項の内容は次のとおりです。

- 条件に基づくリクエストのブロック（52 ページ）
- 計算式に基づくリクエストのブロック（54 ページ）
- 検証ヘルパー関数（55 ページ）

条件に基づくリクエストのブロック

コードでブロックされているリクエストをユーザーが実行しようとしたときに、エラー・メッセージを表示して、そのリクエストが実行されないようにすることができます。answerstemplates.xml ファイルには、kuiCriteriaBlockingScript という名前のメッセージが存在します。このメッセージを上書きして、validateAnalysisCriteria 関数を定義する JavaScript を定義または挿入することができます。デフォルトでは、このメッセージには、常に True を返す関数が含まれています。これを上書きするには、「XML メッセージ・ファイルを使用した Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースのカスタマイズ」（190 ページ）で説明する手順に従ってください。

Answers は、ユーザーがリクエストを実行しようとしたときに validateAnalysisCriteria 関数をコールします。この関数は、リクエストがブロックされていない場合は True、ブロックされている場合は False またはメッセージを返すことができます。メッセージまたは False 以外の値が返された場合は、ポップアップ・ウィンドウに表示されます。いずれの場合も、クエリーはブロックされます。

次のコードの例は、クエリーのブロックを示しています。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<WebMessageTables xmlns:sawm="com.siebel.analytics.web.messageSystem">
   <WebMessageTable system="QueryBlocking" table="Messages">

   <WebMessage name="kuiCriteriaBlockingScript" translate="no">
      <HTML>
         <script language="javascript" src="fmap:myblocking.js" />
      </HTML>
   </WebMessage>

   </WebMessageTable>
</WebMessageTables>

Sample blocking script in …/OracleBIData/web/res/myblocking.js

// This is a blocking function.It makes sure users pick what I want them to.
function validateAnalysisCriteria(analysisXml)
{

   // Create the helper object
   var tValidator = new CriteriaValidator(analysisXml);

   // Validation Logic
   if (tValidator.getSubjectArea() != "Paint")
      return "Why don't you try Paint?";

   if (!tValidator.dependentColumnExists("Markets","Region","Markets","District"))
   {

      // If validation script notifies user, then return false
      alert("Region and District go so well together, don't you think?");
      return false;
   }

   if (!tValidator.dependentColumnExists("Sales Measures","","Periods","Year"))
   return "You picked a measure so pick Year!";

   if (!tValidator.filterExists("Sales Measures","Dollars"))
   return "Why don't you filter on Dollars?";

   if (!tValidator.dependentFilterExists("Markets","Market","Markets"))
   return "Since you're showing specific Markets, please filter the markets.";

   var n = tValidator.filterCount("Markets","Region");
   if ((n <= 0) || (n > 3))
      return "Please select 3 or fewer specific Regions";

   return true;
}
```

前述のテンプレートを使用してこの関数を上書きしない場合、またはこの関数から False 以外の値が返された場合は、この条件が有効とみなされ、リクエストが発行されます。プレビュー操作や保存操作でも、条件の検証には同じメカニズムが使用されます。

計算式に基づくリクエストのブロック

Answers には、JavaScript の検証関数を作成して組み込む工夫がなされています。この検証関数は、ユーザーが列の計算式を入力したり変更するときに、Answers からコールされます。このコールが失敗してメッセージが返されると、ユーザーにそのメッセージが表示され、操作が取り消されます。このほか、DOM を手動で行き来しないで、クエリーのブロック関数でフィルタや列などをチェックできるよう、ヘルパー関数も用意されています。ヘルパー関数の詳細は、「検証ヘルパー関数」（55 ページ）を参照してください。

criteriatemplates.xml ファイルには、kuiFormulaBlockingScript という名前のメッセージが存在します。このメッセージを上書きして、validateAnalysisFormula 関数を定義する JavaScript を挿入することができます。デフォルトでは、このメッセージには、常に True を返す関数が含まれています。

Answers は、ユーザーが行った変更を適用する前に、validateAnalysisFormula をコールします。この関数から True が返された場合、計算式は受け入れられます。False が返された場合、計算式は拒否されます。それ以外の値が関数から返された場合は、無効な計算式が入力された場合の現在の対応と同様に、その値が計算式の下のメッセージ領域に表示されます。

ユーザーは、「OK」をクリックしてエラーを無視することもできます。独自のアラートを表示して、ユーザーが操作を続行できるようにするには、この関数から True を返す必要があります。クエリーをブロックするには、False またはメッセージを返します。この関数では、検証用の JavaScript 文字列と正規表現手法を使用して、渡された計算式を検査する必要があります。

次のコードの例は、サンプルのカスタム・メッセージを示しています。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<WebMessageTables xmlns:sawm="com.siebel.analytics.web.messageSystem">
   <WebMessageTable system="QueryBlocking" table="Messages">

      <WebMessage name="kuiFormulaBlockingScript" translate="no">
         <HTML>
            <script language="javascript" src="fmap:myblocking.js" />
         </HTML>
      </WebMessage>

   </WebMessageTable>
</WebMessageTables>
```

次のコードの例は、入力された計算式に基づくブロックの方法を示しています。

```
// This is a formula blocking function.It makes sure the user does not enter an
unacceptable formula.
function validateAnalysisFormula(sFormula, sAggRule)
{

   // we don't allow the use of concat || in our formulas
   var concatRe = /¥|¥|/gi;
   var nConcat = sFormula.search(concatRe);
   if (nConcat >= 0)
      return "You used concatenation (character position " + nConcat + ").That is
not allowed.";
```

```
    // no case statements please
    var caseRe = /CASE.+END/gi;
    if (sFormula.search(caseRe) >= 0)
       return "Please do not use a case statement.";

    // Check for a function syntax: aggrule(formula) aggrule should not contain a '.'
    var castRe = /^¥s*¥w+¥s*¥(.+¥)¥s*$/gi;
    if (sFormula.search(castRe) >= 0)
       return "Please don't use a function syntax such as RANK() or SUM().";

    return true;
}
```

検証ヘルパー関数

これらの関数は、answers/queryblocking.js という名前の JavaScript ファイルに定義されています。表 9 に、ヘルパー関数とその説明を示します。

表 9.　検証ヘルパー関数

検証ヘルパー関数	説明
CriteriaValidator.getSubjectArea()	リクエストで参照されるサブジェクト領域の名前を返します。一般的には、他の検証を行う前に、関数内のスイッチ文で使用されます。リクエストの条件がセット・ベースの場合、NULL を返します。
CriteriaValidator.tableExists (sTable)	指定したテーブルがユーザーによってリクエストに追加されている場合は True、追加されていない場合は False を返します。
CriteriaValidator.columnExists (sTable, sColumn)	指定した列がユーザーによってリクエストに追加されている場合は True、追加されていない場合は False を返します。
CriteriaValidator.dependentColumnExists(sCheckTable, sCheckColumn, sDependentTable, sDependentColumn)	checkColumn が存在する場合に、dependentColumn が存在していることを確認します。checkColumn が存在しない場合、または checkColumn と dependentColumn が存在している場合は、True を返します。checkColumn と dependentColumn が NULL の場合は、テーブルが検証されます。checkTable の列が 1 つでも存在する場合は、dependentTable の列も存在している必要があります。
CriteriaValidator.filterExists(sFilterTable, sFilterColumn)	指定した列にフィルタが存在する場合は True、存在しない場合は False を返します。

表 9.　検証ヘルパー関数

検証ヘルパー関数	説明
CriteriaValidator.dependentFilterExists(sCheckTable, sCheckColumn, sFilterTable, sFilterColumn)	予測リストに checkColumn が存在する場合に、dependentFilter が存在していることを確認します。checkColumn が存在しない場合、または checkColumn と dependentFilter が存在している場合は、True を返します。
CriteriaValidator.filterCount(sFilterTable, sFilterColumn)	所定の論理列に指定されているフィルタの値の数を返します。フィルタの値が「equals」、「null」、「notNull」または「in」の場合は、選択された値の数を返します。この列がフィルタに使用されていない場合は、ゼロを返します。この列がデフォルトなしで要求された場合は、-1 を返します。それ以外のすべてのフィルタ演算子（「greater than」、「begins with」など）については、値の数を判別できないため、999 を返します。

Answers および Dashboards のユーザー画面に表示するビューのデフォルトの指定

Answers 内のリクエストに追加された新しいビューや、ダッシュボード・ページに追加された新しいオブジェクトについて、初期状態の一部の概観を制御できます。これを行うには、適切な XML メッセージ・ファイルをカスタマイズして、Oracle BI Presentation Services で配布されたデフォルト値を上書きします。

デフォルト値をカスタマイズすると、次のような操作を実現できます。

- ダッシュボード内のテーブルの列のソートを許可する
- 新規レポートにデフォルトのページ・フッターを追加する
- ビューを操作しているときに結果が自動プレビューされないようにする
- 複合レイアウト・ビューに含めるビューを指定する
- ダッシュボード内で埋込みレポートとともに表示するリンクを指定する
- 新規作成されたダッシュボード・セクションを開閉可能にする

ビューのデフォルトに使用する XML メッセージ・ファイル

この項では、カスタマイズすることによって、Oracle BI Presentation Services で配布されたビューのデフォルトを上書きできる XML メッセージ・ファイルについて説明します。

注意：XML メッセージ・ファイルのカスタマイズで必要となる中心的な作業の詳細は、「XML メッセージ・ファイルを使用した Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースのカスタマイズ」（190 ページ）を参照してください。

Answers の場合は、kuiAnswersReportPageEditorHead 内にある kuiCriteriaDefaultViewElementsWrapper というメッセージが、answerstemplates.xml ファイルに含まれています。このメッセージには、さらに 2 つのメッセージが含まれています。1 つは、デフォルト値を定義できる kuiCriteriaDefaultViewElements、もう 1 つは、マスクが定義されている kuiCriteriaDefaultViewElementsMask です。

注意：マスクの XML メッセージは保護されているため、内容の変更はできません。

このラッパー・メッセージは、この XML の組合せを JavaScript 変数 kuiDefaultViewElementsXML に追加します。新しいデフォルト値は、この変数を使用して適用されます。

Dashboards の場合は、dashboardtemplates.xml ファイルに kuiDashboardDefaultElementsWrapper というメッセージが含まれており、これにより、XML が JavaScript 変数 kuiDefaultDashboardElementsXML に追加されて、ダッシュボード・エディタ内で使用できるようになります。

Answers および Dashboards のデフォルト値のカスタマイズの例

次の項では、デフォルト値のカスタマイズの例を示します。

- 「新規レポートへのデフォルトのヘッダーまたはフッターの追加」（57 ページ）
- 「Dashboards 内でのテーブルのソートの許可」（58 ページ）
- 「Answers での結果の自動プレビューの防止」（58 ページ）
- 「Answers での複合レイアウト・ビューのデフォルトの設定」（59 ページ）
- 「Dashboards のセクションのデフォルトの変更」（59 ページ）
- 「Dashboards のレポートへの「Refresh」リンクおよび「Modify」リンクの挿入」（60 ページ）
- 「ダッシュボード・ページのデフォルトへのヘッダーおよびフッターの追加」（60 ページ）

注意：XML メッセージ・ファイルのカスタマイズで必要となる中心的な作業の詳細は、「XML メッセージ・ファイルを使用した Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースのカスタマイズ」（190 ページ）を参照してください。この項では、前述の情報が理解されているものと想定して例を示します。

新規レポートへのデフォルトのヘッダーまたはフッターの追加

システムに対して、すべての新規レポートにデフォルトのヘッダーとフッターを表示するように指定することができます。たとえば、フッターには、機密保護に関する告示や会社名などのメッセージを入れることができます。デフォルトのヘッダーまたはフッターを指定するには、適用するテキストとフォーマットを指定した XML メッセージを作成し、Oracle BI Presentation Services に配布します。

次に例を示す XML コードは、「Acme Confidential」というテキストを赤色の太字で表示するフッターを作成します。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<WebMessageTables xmlns:sawm="com.siebel.analytics.web.messageSystem">
   <WebMessageTable system="Answers" table="ViewDefaults">
```

```
<WebMessage name="kuiCriteriaDefaultViewElements" translate="no"><HTML>
   <view signature="compoundView" >
      <pageProps pageSize="a4">
         <pageFooter showOnDashboard="true" show="true">
            <zone type="top"><caption>[b]Acme Confidential[/b]</caption>
            <displayFormat fontColor="#FF0000"/></zone>
         </pageFooter>
      </pageProps>
   </view>
</HTML></WebMessage>

   </WebMessageTable>
</WebMessageTables>
```

Dashboards 内でのテーブルのソートの許可

デフォルトでは、Oracle Business Intelligence のテーブル・ビューは、ダッシュボード内および結果ビュー内でソートできないようになっています。テーブルをソートできるようにするには、適用するテキストとフォーマットを指定した XML メッセージを作成し、Oracle BI Presentation Services に配布します。これにより、Answers で新しいテーブル・ビューを作成したときに、ダッシュボードでのソートを許可するオプションがデフォルトで選択されるようになります。

次の例に示す XML コードは、ソートを許可するオプションを有効にします。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<WebMessageTables xmlns:sawm="com.siebel.analytics.web.messageSystem">
   <WebMessageTable system="Answers" table="ViewDefaults">

<WebMessage name="kuiCriteriaDefaultViewElements" translate="no"><HTML>
   <view signature="tableView" sortable="true" />
</HTML></WebMessage>

   </WebMessageTable>
</WebMessageTables>
```

Answers での結果の自動プレビューの防止

Oracle Business Intelligence の Answers では、ほとんどの場合、ビューの編集時にリクエストの結果が表示されるようになっています。結果を表示するかどうかをユーザーに明示的に尋ねたい場合は、ビューの新規作成時に自動プレビューを無効にするように指定した XML メッセージを作成します。この場合でも、ユーザーは結果表示へのリンクをクリックすると、ビューの編集時に結果を表示することができます。

次の例に示す XML コードは、Answers でビューを操作しているときに結果の自動プレビューを禁止します。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<WebMessageTables xmlns:sawm="com.siebel.analytics.web.messageSystem">
   <WebMessageTable system="Answers" table="ViewDefaults">

<WebMessage name="kuiCriteriaDefaultViewElements" translate="no"><HTML>
   <view signature="tableView" showToolBar="true" showHeading="true />
   <view signature="pivotTableView" autoPreview="false" />
   <view signature="titleView" autoPreview="false" />
   <view signature="viewSelector" autoPreview="false" />
```

```
      <view signature="htmlviewnarrativeView" autoPreview="false" />
      <view signature="tickerview" autoPreview="false" />
      <view signature="htmlview" autoPreview="false" />
   </HTML></WebMessage>

      </WebMessageTable>
   </WebMessageTables>
```

Answers での複合レイアウト・ビューのデフォルトの設定

Answers では、新しく作成したリクエストの結果が、タイトル・ビューおよびそれに続くテーブル・ビューとして表示されます。この複合ビューのデフォルトを、テーブル・ビューおよびそれに続くフィルタ・ビューのように、ビューの別集合に指定した XML メッセージを作成できます。この場合でも、ユーザーは、複合レイアウト・ビュー内でビューの追加および並べ替えを行うことができます。

次の例に示す XML コードは、デフォルトの複合レイアウト・ビューを、テーブル・ビューおよびそれに続くフィルタ・ビューに設定します。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<WebMessageTables xmlns:sawm="com.siebel.analytics.web.messageSystem">
   <WebMessageTable system="Answers" table="ViewDefaults">

<WebMessage name="kuiCriteriaDefaultViewElements" translate="no"><HTML>
   <view signature="compoundView" >
      <cv signature="tableView" />
      <cv signature="filtersView" />
   </view>
</HTML></WebMessage>

   </WebMessageTable>
</WebMessageTables>
```

Dashboards のセクションのデフォルトの変更

Oracle Business Intelligence のダッシュボードでは、デフォルトで、ドリルの結果は新しいページに表示し、セクション名はダッシュボードに表示しないように設定されています。また、ユーザーはセクションを開閉できます。これらのデフォルト値を変更するには、ダッシュボード・セクションに新しいデフォルト値を指定した XML メッセージを作成します。

次の例に示す XML コードは、セクションの見出しを表示し、ドリルを有効にし、ユーザーがセクションを開閉できないようにします。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<WebMessageTables xmlns:sawm="com.siebel.analytics.web.messageSystem">
   <WebMessageTable system="Answers" table="ViewDefaults">

<WebMessage name="kuiDashboardDefaultElements" translate="no"><HTML>
   <element signature="dashboardSection" drillInline="true" showHeading="true"
collapsible="false" />
</HTML></WebMessage>

   </WebMessageTable>
</WebMessageTables>
```

Dashboards のレポートへの「Refresh」リンクおよび「Modify」リンクの挿入

デフォルトでは、Oracle Business Intelligence のダッシュボード内の埋込みレポートの結果には、リンクが表示されません。新しく追加するレポートに、「Refresh」や「Modify」などのリンクをデフォルトで表示させる場合は、レポートの要素がこのように動作するように指定した XML メッセージを作成します。この場合でも、ダッシュボードを編集しているユーザーは、ダッシュボード・エディタ内のメニューを使用して、この動作を変更することができます。

XML メッセージ・ファイルのリンク属性には、表 10 に示すように、d、f、g、m、r の各文字を任意に組み合せて、各文字に対応するリンクを追加できます。

表 10. 埋込みレポートへのリンクの追加に使用する属性値

属性	ダッシュボードのレポートに追加されるリンク
d	Download
f	Print
g	Add to Briefing Book
m	Modify
r	Refresh

次の例に示す XML コードは、ダッシュボードに埋め込まれた新規レポートに「Modify」リンクおよび「Refresh」リンクを追加します。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<WebMessageTables xmlns:sawm="com.siebel.analytics.web.messageSystem">
   <WebMessageTable system="Answers" table="ViewDefaults">

<WebMessage name="kuiDashboardDefaultElements" translate="no"><HTML>
   <element signature="reportView" display="embed" links="mr" />
</HTML></WebMessage>

   </WebMessageTable>
</WebMessageTables>
```

ダッシュボード・ページのデフォルトへのヘッダーおよびフッターの追加

デフォルトでは、Oracle Business Intelligence のダッシュボードは、ヘッダーもフッターもなく縦向きに印刷されます。新しく追加するダッシュボード・ページが、カスタムのヘッダーおよびフッターとともに横向きに印刷されるようにデフォルトで設定するには、これらの項目を指定した XML メッセージを作成します。この場合でも、ダッシュボードを編集しているユーザーは、ダッシュボード・エディタ内のメニューを使用して、この動作を変更することができます。

次の例に示す XML コードは、ダッシュボード・ページにカスタムのヘッダーおよびフッターを追加して、横向きを指定します。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<WebMessageTables xmlns:sawm="com.siebel.analytics.web.messageSystem">
   <WebMessageTable system="Answers" table="ViewDefaults">

<WebMessage name="kuiDashboardDefaultElements" translate="no"><HTML>
```

```
<element signature="dashboardPage" personalSelections="false">
     <pageProps orientation="portrait" printRows="all" pageSize="a4">
         <pageHeader showOnDashboard="true" show="true">
            <zone type="top"><caption>[b]Acme is Cool[/b]</caption>
            <displayFormat fontSize="9pt" hAlign="center"
fontColor="#FFFFFF" backgroundColor="#000000"/></zone>
         </pageHeader>
         <pageFooter showOnDashboard="true" show="true">
            <zone type="top"><caption>[b]CONFIDENTIAL
@{timeCreated[mm/dd/yy]}[/b]</caption>
            <displayFormat fontSize="7.5pt" hAlign="center"
fontColor="#999999" borderColor="#CC99CC" fontStyle="italic"
borderPosition="all" borderStyle="single"/></zone>
         </pageFooter>
       </pageProps>
   </element>

</HTML></WebMessage>

   </WebMessageTable>
```

反転バーの色の変更

ピボット・テーブルと通常のテーブルには、どちらも反転行に色付きのバーを表示できます。これらの反転バーのデフォルトの色は、緑に設定されています。ピボット・テーブルの場合は、「Edit Format」ウィンドウに、反転バーの色のコントロールなど、フォーマット設定に関する拡張コントロールが数多く用意されています。テーブルのデフォルトの色を変更する必要がある場合は、スタイルの構成ファイルを編集できます。

色を変更するには、b_mozilla_4 フォルダにある views.css ファイルを編集します。次のテキストを探します。

```
TABLE.ResultsTable TD.ECell
{
background-color: #DDF2DD;
```

色を示す 6 桁の 16 進値を、新しい色の値に変更します。

反転テキストを有効にするためのコントロールは、「Edit View」ウィンドウにあります。「Enable alternating row "Green bar" styling.」というラベルのチェック・ボックスがこれに該当します。バーの色を変更した場合は、新しく使用する色を示すように、このラベルを変更する必要があります。

ラベルのテキストを変更するには、tableviewmessages.xml ファイルを開いて、次のエントリを探します。

```
WebMessageName = "kmsgTableViewEnableGreenbarReporting"
```

このエントリとその下のテキスト行を、カスタム・メッセージ・フォルダ内のカスタム・メッセージ・ファイルにコピーし、テキスト行を必要に応じて変更します。次に例を示します。

```
WebMessageName = "kmsgTableViewEnableGreenbarReporting"
<TEXT>Enable alternating row "RED bar" styling</TEXT>"
```

カスタム・メッセージの詳細は、「XML メッセージ・ファイルを使用した Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースのカスタマイズ」（190 ページ）を参照してください。

4 Oracle BI Delivers の管理

この章では、Oracle BI Delivers の管理に使用する手順について説明します。Delivers の使用方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

この章の内容は次のとおりです。

- Delivers iBot と偽装について（64 ページ）
- Delivers iBot とウイルス対策ソフトウェアについて（64 ページ）
- Delivers iBot のログ・ディレクトリにあるエントリの表示（65 ページ）
- Delivers の無効化（65 ページ）
- Oracle BI Scheduler を実行するマシンの指定（66 ページ）
- Delivers iBot の配信内容格納先ディレクトリの変更（66 ページ）
- Delivers と Oracle Siebel Workflow との統合（67 ページ）
- Delivers を使用した Oracle BI Server キャッシュのシード（67 ページ）
- Delivers および iBot の権限設定について（67 ページ）
- Delivers のデバイス・タイプの管理（68 ページ）
- SA システム・サブジェクト領域と iBot 配信スケジュールについて（69 ページ）
- SA システム・サブジェクト領域のログオン名における大文字と小文字の区別の設定（70 ページ）
- iBot の配信オプションの制御（70 ページ）
- アクティブな Delivers iBot セッションに関する情報の表示（72 ページ）

Delivers iBot と偽装について

Delivers では、インテリジェント・エージェントまたは Bot（iBot と呼ばれる）が使用されます。iBot は、スケジュールまたはイベントによって起動されるソフトウェアベース・エージェントで、定義された条件に基づいてデータにアクセスしてフィルタ処理したり、分析を実行します。ユーザーは、iBot から情報をアラートの形態で受信します。アラートは、指定された配信デバイスまたはダッシュボードに表示されます。

iBot を作成するには、Oracle Business Intelligence 管理者およびユーザーは、Delivers を使用して iBot で実行する処理を定義します。Oracle BI Presentation Services によって、優先順位、配信デバイス、ユーザーおよびその他の特性に関する情報が収集されます。そして、収集された情報がジョブにパッケージ化されて、ジョブを実行するタイミングが Oracle BI Scheduler に通知されます。

Oracle BI Scheduler は、ユーザーのパスワードにアクセスしたりパスワードを格納したりせずにこれらのジョブを代行するため、Oracle BI Server では、Scheduler および Oracle BI Presentation Services によるユーザーの偽装が許可されます。これは、他のユーザーのために代行できる管理者権限を持つユーザー ID およびパスワードを使用するように Scheduler を構成することで実行されます。iBot はこのユーザー ID とパスワードを使用してシステムにログオンし、Scheduler がユーザーのためにジョブを代行します。

注意：ユーザーをデータベース・ログオンを介して認証するように Oracle BI Server が構成されている場合は、偽装は許可されません。Delivers とデータベース認証が連動するのは、Oracle Business Intelligence Administration Tool で認証用に設定されている初期化ブロックにおいて、接続プールがパススルー認証と併用されている場合のみです。この接続プールを、その他の初期化ブロックまたはリクエストで使用することはできません。

ユーザー認証オプションの詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。Oracle BI Scheduler の詳細は、『Oracle Business Intelligence Scheduler ガイド』を参照してください。

Delivers iBot とウイルス対策ソフトウェアについて

ウイルス対策ソフトウェア・プログラム（Norton AntiVirus など）によっては、スクリプトブロック機能が有効になるものがあります。スクリプトブロック機能では、システム・オブジェクト（Windows ファイル・システム・オブジェクトなど）に対してスクリプトが実行するすべてのコールが、ウイルス対策ソフトウェアによって安全ではないとみなされ、スクリプト実行がブロックされます。

iBot 後処理の一部としてスクリプトを起動すると、ウイルス対策機能によって予期しない結果が発生する場合があります。Oracle BI Scheduler がインストールされているマシンで、スクリプトブロック機能を持つウイルス対策ソフトウェアを実行している場合は、スクリプトブロック機能を無効にして、ウイルス対策ソフトウェアが予期せずに iBot スクリプト・コールをブロックしないようにする必要があります。

Delivers iBot のログ・ディレクトリにあるエントリの表示

iBot の処理がすべて実行されなかった場合や、Oracle BI Scheduler でデバッグ機能がオンになっている場合、ログ・ファイルがその iBot に対して生成されます。

iBot のログ・ファイルの場所は、Oracle BI Scheduler の「Job Manager Configuration」ダイアログ・ボックスの「iBots」タブで指定します。デフォルトの場所は、Scheduler がインストールされているマシンにある Oracle Business Intelligence インストール・ディレクトリの Log ディレクトリです。

ログ・ファイル名の形式は、次のとおりです。

NQiBot-JobID-InstanceID.xxx

このログ・ファイル名に関する説明を次に示します。

NQibot	iBot のすべてのログ・ファイルに付く接頭辞
JobID	対象となる iBot の Scheduler ジョブ ID
InstanceID	対象となる iBot の Scheduler インスタンス ID
xxx	ファイル拡張子 ■ iBot エラー・ログ・ファイルの場合は、.err ■ デバッグ・ログ・ファイルの場合は、.log

iBot のエラー・ログ・ファイルおよびデバッグ・ログ・ファイルは、実行エラーが発生した iBot インスタンスごとに別々のファイルとして生成されます。テキスト・エディタを使用して、これらのファイルを表示することができます。エントリは通常、自明な内容です。終了コードは汎用コードであり、特定の状態を示していません。

エラー・ログが生成されても、iBot で致命的なエラーが発生したとはかぎりません。たとえば、iBot がコンテンツを複数の電子メール・アドレスに配信すると仮定します。このとき、アドレスの一部が無効か、電子メール・サーバーが停止していると、この iBot に対してエラー・ログが生成されます。

Oracle BI Scheduler の詳細は、『Oracle Business Intelligence Scheduler ガイド』を参照してください。

Delivers の無効化

Delivers は、Oracle BI Presentation Services のオプション・コンポーネントであり、適切なライセンスを購入した組織ではデフォルトで有効になっています。Delivers を無効にするには、次のエントリを追加することによって、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集します。デフォルトの値は Yes（Delivers は有効）です。Delivers を無効にするには、この値を No に設定します。

<Alerts> 要素および </Alerts> 要素の間にエントリを配置します。

次に、エントリの例を示します。

```
<Alerts>
   <Enabled>No</Enabled>
</Alerts>
```

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

Oracle BI Scheduler を実行するマシンの指定

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）の ScheduleServer エントリを編集することによって、Oracle BI Scheduler を実行するマシンを特定できます。デフォルトでは、Oracle BI Scheduler がローカル・マシン上で実行されている場合は、エントリにはローカル・マシンの名前が設定されます。Oracle BI Scheduler が標準ポート 9705 で実行されていない場合は、IP アドレス：ポート番号の形式で、ScheduleServer エントリに値を指定する必要があります。

次に、エントリの例を示します。

```
<Alerts>
   <ScheduleServer>Server02</ScheduleServer>
</Alerts>
```

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

ScheduleServer 要素の設定方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストレーションおよび構成ガイド』および『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。

注意：Oracle Business Intelligence 環境を新しいシステムに移行する場合は、Oracle Business Intelligence のリポジトリ・ファイルおよび Scheduler のテーブルも移行する必要があります。Scheduler のテーブルは iBot に必要です。

Delivers iBot の配信内容格納先ディレクトリの変更

次のエントリを追加することによって、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集し、iBot の配信内容が格納されるディレクトリを指定できます。配信ディレクトリは、デフォルトで Presentation Catalog と同じ場所に格納されます。（「Presentation Catalog の名前および場所の変更」（93 ページ）で説明している値によって、Presentation Catalog の格納場所が定義されます。）起動時に、Oracle BI Presentation Services によって配信ディレクトリの作成が試行されます。

<Web> 要素および </Web> 要素を <ServerInstance> 要素の後ろに作成し、<Web> 要素および </Web> 要素の間にエントリを配置する必要があります。

次に、エントリの例を示します。

```
<PersistentStorageDirectory>/usr/local/OracleBIData/web/catalog/TestDelivery</
PersistentStorageDirectory>
```

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

Delivers と Oracle Siebel Workflow との統合

Delivers の「Advanced」タブを使用して、Oracle Siebel Workflow アプリケーションでワークフローをトリガーするように iBot を設定できます。この機能を構成する手順は、『Oracle Business Intelligence Scheduler ガイド』を参照してください。

デフォルトでは、Oracle Business Intelligence 管理者のみが、ワークフローをトリガーするよう iBot を設定するために必要な権限を持っています。

Delivers の「Advanced」タブの詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Delivers を使用した Oracle BI Server キャッシュのシード

Delivers の「Destinations」タブを使用して、Oracle BI Server キャッシュをシードするように iBot を設定できます。キャッシュをシードすると、ユーザーが Answers でリクエストを実行するときやダッシュボードに埋め込まれたリクエストを表示するとき、レスポンス時間を短縮できます。これは、対象のデータをリフレッシュするリクエストを実行するように iBot をスケジュールすることによって実現されます。

Oracle BI Server キャッシュの詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

Delivers の「Destinations」タブの詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

Delivers および iBot の権限設定について

Delivers および iBot の権限設定は、Oracle BI Presentation Services Administration の「Privilege Administration」画面の「Delivers」セクションにあります。

また、「Publish iBots for Subscription」権限にアクセスする権限が付与されているユーザーが iBot を変更または削除できるようにするには、これらのユーザーに、Oracle BI Presentation Catalog の共有 iBot オブジェクトおよび子オブジェクトに対する「Change/Delete」権限を付与する必要があります。

「Manage Catalog」機能を使用することによって、「Change/Delete」権限を付与できます。「Manage Catalog」機能の使用方法の詳細は、「Presentation Catalog での項目の管理」（107 ページ）を参照してください。

Delivers のデバイス・タイプの管理

Delivers では、携帯電話やポケットベルのようなデバイス・カテゴリとは異なるデバイス・タイプを使用して、iBot のコンテンツがユーザーに配信されます。Delivers でサポートされるデバイス・カテゴリのデバイス・タイプの表示、作成、編集および削除を実行できます。

注意：システムによってシードされたデバイス・タイプ（AT&T Wireless など）は、表示のみ実行できます。これらのデバイス・タイプを編集または削除することはできません。

「Manage Device Types」権限を持つユーザーは、デバイス・タイプを管理できます。デフォルトでは、この権限は、Oracle Business Intelligence 管理者に付与されます。権限の設定方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services Administration における権限の設定」（149 ページ）を参照してください。

デバイス・タイプを表示するには

1. Oracle BI Presentation Services にログインします。
2. 「Settings」→「Administration」を選択します。
3. 「Manage Device Types」リンクをクリックします。
4. 表示するデバイス・タイプに対応する「View」アイコン（ユーザーが作成したデバイスの場合は「Edit」アイコン）をクリックします。

デバイス・タイプを作成するには

1. Oracle BI Presentation Services にログインします。
2. 「Settings」→「Administration」を選択します。
3. 「Manage Device Types」リンクをクリックします。
4. 「Create New Device Type」リンクをクリックします。
5. 「Device Type Name」フィールドに名前を入力します。
6. 「Category」ドロップダウン・リストで、デバイス・タイプで適切なカテゴリを選択します。
7. 「Domain」フィールドにデバイス・タイプの詳細を入力します。

   たとえば、サービス・プロバイダの電子メール・アドレス・ドメイン名（pagenet.net など）を入力します。
8. 指定する特定のバッファ・サイズがある場合を除いて、「Buffer Size」チェック・ボックスの選択を解除しないでください。
9. 「Create Device Type」をクリックして、「Manage Device Types」画面に戻ります。

   デバイスが「Device Type Name」リストに表示されます。

   作成したデバイス・タイプは、ユーザーが配信オプションを構成するときに、「Device / Provider」ドロップダウン・リストで選択可能になります。詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

デバイス・タイプを編集するには

1. Oracle BI Presentation Services にログインします。
2. 「Settings」→「Administration」を選択します。
3. 「Manage Device Types」リンクをクリックします。
4. 編集するデバイス・タイプに対応する「Edit」アイコンをクリックします。
5. 必要に応じて詳細を更新します。
6. 「Update Device Type」をクリックして、「Manage Device Types」画面に戻ります。

デバイス・タイプを削除するには

1. Oracle BI Presentation Services にログインします。
2. 「Settings」→「Administration」を選択します。
3. 「Manage Device Types」リンクをクリックします。
4. 削除するデバイス・タイプに対応する「Delete」アイコンをクリックします。

   「Confirm Device Type Deletion」画面が表示されます。
5. 「はい」をクリックして削除を確認し、「Manage Device Types」画面に戻ります。

SA システム・サブジェクト領域と iBot 配信スケジュールについて

この項は、Oracle Siebel 業務系アプリケーションを使用する組織にのみ適用されます。

SA システム・サブジェクト領域が使用されている場合、Oracle Business Intelligence リポジトリにのみ定義されているユーザー ID に対して iBot 配信を実行することはできません。このような内部定義されたユーザー ID には、Administrator ユーザー ID が含まれます。

SA システム・サブジェクトでは、Oracle Business Intelligence の使用を許可されているすべてのユーザーに対応する行を返す必要があります。Oracle Siebel 業務系アプリケーションではすべて、Administrator ユーザー ID は Siebel OLTP には定義されないため、このユーザー ID が、SA システム・サブジェクト領域に対するクエリーから返されません。有効な Siebel OLTP ユーザーでのアラート送信をテストする必要があります。

SA システム・サブジェクト領域の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

SA システム・サブジェクト領域のログオン名における大文字と小文字の区別の設定

SA システム・サブジェクト領域を使用するとき、ログオン名が SA システム・サブジェクト領域の「Logon」列と比較されます。デフォルトでは、比較する際に大文字と小文字が区別されます。つまり、たとえばログイン名 Fred は、SA システム・サブジェクト領域のエントリ fred とは一致しません。認証方法で大文字と小文字が区別される場合は、ログインで受け付けられるログイン名 fred は、SA システム・サブジェクト領域の「Logon」列の fred と一致するため、問題ありません。しかし、認証方法で大文字と小文字が区別されない場合は、SA システム・サブジェクト領域の比較においても大文字と小文字が区別されないようにする必要があります。

SA システム・サブジェクト領域の比較で大文字と小文字が区別されないようにする手順は次のとおりです。

- SA システム・サブジェクト領域ですべてのログオン名が大文字で格納されていることを確認します。
- UpperCaseRecipientNames 要素を true に設定します。これによって、ログオン名が SA システム・サブジェクト領域のクエリーに追加される前に大文字に変換されるようになります。

UpperCaseRecipientNames 要素を true に設定するには、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を次のように編集します。<Alerts> 要素と </Alerts> 要素（<ServerInstance> 要素の後ろに表示される）の間に UpperCaseRecipientNames 要素を追加してから true に設定します。

次に、エントリの例を示します。

```
<ServerInstance>

.. .. ..

   <Alerts>
   .. .. ..
      <UpperCaseRecipientNames>true</UpperCaseRecipientNames>
   .. .. ..
   </Alerts>

.. .. ..

</ServerInstance>
```

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

iBot の配信オプションの制御

配信オプション（配信デバイスと配信プロファイル）によって、iBot のコンテンツがユーザーに配信される方法が決まります。配信オプションは、SA システム・サブジェクト領域において構成でき、またユーザーによって構成できます。SA システム・サブジェクト領域の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）に次の要素を追加することによって、SA システム・サブジェクト領域で構成される配信オプションおよびユーザー定義の配信オプションの可用性を制御できます。

要素	説明
SystemSubjectArea **注意：**この要素は、instanceconfig.xml ファイルにおいて <ServerInstance> 要素の後ろに配置されます。	SA システム・サブジェクト領域で構成された配信デバイスおよび配信プロファイルが認識されるかどうかを指定します。 ■ **True**:SA システム・サブジェクト領域で構成された配信デバイスおよび配信プロファイルが認識され、これらは「My Account」画面に表示されます。 ■ **False**:SA システム・サブジェクト領域で構成された配信デバイスおよび配信プロファイルが無視され、これらは「My Account」画面に表示されません。 デフォルトは True です。
IgnoreWebcatDeliveryProfiles **注意：**この要素は、instanceconfig.xml において <ServerInstance> 要素の後ろにある <Alerts> 要素および </Alerts> 要素との間に配置されます。	ユーザー定義の配信デバイスおよび配信プロファイルを無視するかどうかを指定します。 ■ **True**: ユーザー定義の配信デバイスおよび配信プロファイルが無視され、これらは「My Account」画面に表示されません。つまりこれによって、ユーザーは新しい配信デバイスおよび配信プロファイルを作成できなくなります。 ■ **False**: ユーザー定義の配信デバイスおよび配信プロファイルが認識され、これらは「My Account」画面に表示されます。 デフォルトは False です。

注意：SystemSubjectArea 要素および IgnoreWebcatDeliveryProfiles 要素は、SA システム・サブジェクト領域が使用されている場合にのみ有効です。

次に、エントリの例を示します。

```
<ServerInstance>
    <SystemSubjectArea>false</SystemSubjectArea>
    <Alerts>
        <IgnoreWebcatDeliveryProfiles>false</IgnoreWebcatDeliveryProfiles>
    </Alerts>
</ServerInstance>
```

アクティブな Delivers iBot セッションに関する情報の表示

Oracle BI Presentation Services Administration の「iBot Session Management」画面を使用すると、Oracle BI Scheduler によってトリガーされた現在アクティブな iBot セッションに関する次の情報を表示できます。

- セッションごとのアクティブな iBot のリスト
- アクティブな各 iBot の受信者

1 つ以上の iBot セッションがアクティブな場合、Scheduler によって iBot セッションに割り当てられているジョブ ID やインスタンス ID などの、各 iBot セッションに関する情報が表示されます。特定の iBot セッションに対応する「Primary iBot」列のリンクをクリックすると、ポップアップ・ウィンドウが開き、Delivers における iBot セッションの定義にナビゲートされます。

iBot セッションを開くと、個々の iBot が表示されます（1 つの iBot、または連鎖されている場合は複数の iBot）。iBot の状態は、次のいずれかです。

- Created
- Populated
- Conditional Request Resolved

特定のセッションの特定の iBot を開くと、対象の iBot の受信者とそのタイプ（グループに定義されているエンジニアの受信者や個々のユーザーなど）が表示されます。受信者がグループの場合、グループの個々のメンバーは表示されません。個々の iBot に対応する「Path」列のリンクをクリックすると、ポップアップ・ウィンドウが開き、Delivers における iBot の定義にナビゲートされます。

注意：iBot が連鎖されている場合、受信者リストは親 iBot に依存します。受信者は、親 iBot の定義に対してのみ表示され、連鎖 iBot の実際の実行に対しては表示されません。

「iBot Session Management」画面にアクセスするには

1. Oracle BI Presentation Services にログインします。
2. 「Settings」→「Administration」を選択します。
3. 「Manage iBot Sessions」リンクをクリックします。

アクティブな iBot セッションに関する情報を表示するには

1. 特定の列にある値別に iBot セッションをソートするには、対象となる列のソート・ボタンをクリックします。
2. iBot セッションに関する情報をさらに表示するには、開くボタンをクリックします。
3. 特定のセッション内の iBot に関する情報をさらに表示するには、開くボタンをクリックします。
4. Delivers における iBot セッションまたは個々の iBot の定義を表示するには、対象となるセッションまたは iBot のリンクをクリックします。

5 Oracle BI Dashboards の管理

適切な権限を持つエンド・ユーザーは、個人の Dashboards や共有の Dashboards を変更できます（ページやコンテンツの追加も含まれる）。ただし、エンド・ユーザーはダッシュボードを作成することはできません。

この章に記載されている手順を実行すると、ダッシュボードを作成および管理できます。ダッシュボードの概要およびエンド・ユーザーがダッシュボードを変更する手順の詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』および Oracle Business Intelligence Presentation Services のオンライン・ヘルプを参照してください。

この章の内容は次のとおりです。

- ダッシュボードの管理について（74 ページ）
- ダッシュボードの管理（74 ページ）
- Dashboards アクション・リンクの作成（76 ページ）
- 画面に表示する Dashboards の名前の個数の設定（77 ページ）
- Dashboards の保存済選択オプションへのアクセス制御（78 ページ）
- Oracle Business Intelligence ブリーフィング・ブックの追加リンク数の設定（82 ページ）
- UNICODE フォーマット以外による Oracle Business Intelligence の結果のダウンロード（83 ページ）
- 他のポータルまたはイントラネットへの Answers の統合（83 ページ）
- レポート書込み機能の構成（85 ページ）

注意：ダッシュボードのビューのデフォルトを指定する方法の詳細は、「Answers および Dashboards のユーザー画面に表示するビューのデフォルトの指定」（56 ページ）を参照してください。

ダッシュボードの管理について

共有ダッシュボードを作成する前に、Presentation Catalog のディレクトリやフォルダの構造およびセキュリティ計画を策定してください。Presentation Catalog の構造およびセキュリティ・フレームワークの広範なコンテキストの中で共有ダッシュボードを作成するためのガイドラインは、「Oracle BI Presentation Services のセキュリティを Presentation Catalog とダッシュボード用に構成するためのガイドライン」（157 ページ）を参照してください。

Presentation Catalog における共有フォルダの構造の詳細は、第 6 章「Oracle BI Presentation Catalog の管理」を参照してください。

権限の詳細は、第 8 章「Oracle BI Presentation Services のセキュリティの管理」を参照してください。

共有ダッシュボードを作成するには、一般的に最初にダッシュボードを作成してから Dashboard Editor を使用してコンテンツを追加します。また、ダッシュボードにアクセスするための Presentation Services グループ権限を割り当てることもできます。複数の Presentation Services グループのメンバーであるユーザーは、アクセスできる権限のあるすべてのダッシュボードから、デフォルトで表示されるダッシュボードを選択できます。

また、別のユーザーの代理となるユーザーの権限を与えることもできます。この権限により、このユーザーは別のユーザーのダッシュボードにアクセスできます。詳細は、「代理ユーザーの承認について」（162 ページ）を参照してください。

この項では、管理者の観点からダッシュボードの作成や削除を行う方法だけでなく、セクションを追加する方法についても説明します。エンド・ユーザーの観点からページ、セクションおよびコンテンツを追加する方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

ダッシュボードの管理

Oracle BI Presentation Services Administration の「Manage Dashboards」画面を使用して、次の作業を実行できます。

- 「Create Dashboard」画面にアクセスして新しいダッシュボードを作成する作業
- 「Dashboard Properties」画面にアクセスしてダッシュボードのプロパティを変更する作業
- 「Change Item Permissions」画面にアクセスしてダッシュボードの権限を変更する作業
- ダッシュボードを削除する

「Manage Dashboards」画面にアクセスするには

1. Oracle BI Presentation Services にログインします。
2. 「Settings」→「Administration」を選択します。
3. 「Manage Interactive Dashboards」リンクをクリックします。

「Create Dashboard」画面にアクセスして新しいダッシュボードを作成するには

1. 「Create Dashboard」ボタンをクリックして、「Create Dashboard」画面を表示します。

2 次のフィールドのエントリを指定します。

a ドロップダウン・リストで適切な「Group Folder」を選択します。

この Presentation Services グループのメンバー（および適切な権限を持つ他のグループおよびユーザー）は、共有ダッシュボードの「Read」権限を持つことになります。

b 「Dashboard Name」フィールドで、ダッシュボードの名前を入力します。

c 「Dashboard Builder」フィールドで、ダッシュボードを変更できるようにするユーザーまたは Presentation Services グループの名前を入力します。

3 「Finished」をクリックすると、「Manage Dashboards」画面に戻ります。

4 「Finished」をクリックします。

5 「Close Window」をクリックします。

6 Answers で、選択ペインの「Dashboards」タブをクリックしてから、選択ペイン下部の「Refresh Display」リンクをクリックします。

新しく作成されたダッシュボードが、ダッシュボードのリストに表示されます。

7 Dashboards で、ダッシュボードにナビゲートして「Page Options」→「Edit Dashboard」をクリックします。

「Dashboard Editor」画面が開きます。この画面でコンテンツをダッシュボードに追加できます。詳細は、Oracle Business Intelligence Presentation Services のオンライン・ヘルプを参照してください。

「Dashboard Properties」画面にアクセスするには

■ 変更するプロパティのあるダッシュボードを探してから、関連する「Properties」アイコンをクリックします。ダッシュボードのプロパティを変更する方法の詳細は、Oracle Business Intelligence Presentation Services のオンライン・ヘルプを参照してください。

「Change Item Permissions」画面にアクセスするには

■ 変更する権限のあるダッシュボードを探してから、関連する「Permissions」アイコンをクリックします。権限の変更方法の詳細は、Oracle Business Intelligence Presentation Services のオンライン・ヘルプを参照してください。

ダッシュボードを削除するには

1 削除するダッシュボードを探してから、関連する「Delete」アイコンをクリックします。

「Confirm Deletion」画面が表示されます。

2 「はい」をクリックします。

3 「Finished」をクリックします。

Dashboards アクション・リンクの作成

エンド・ユーザーのダッシュボードから Siebel の業務系アプリケーションにあるレコードにナビゲートするためのリンクを用意するには、アクション・リンクを使用します。Oracle Business Intelligence アプリケーションには、リクエストとダッシュボードにビルトイン・アクション・リンクがあります。たとえば、ユーザーは Oracle Sales Analytics ダッシュボードから Oracle Siebel Sales ビューの特定のレコードに直接ドリルダウンできます。ドリルダウンは、リクエストに含まれる行識別子列に基づいて行われます。

注意：エンド・ユーザーがビューやドリルダウン・リンクにアクセスするには、適切な権限と職責が必要です。また、Siebel アプリケーション・サーバーからコンテンツをサービスする Web サーバーのホスト名（または仮想 IP）は、Oracle BI Presentation Services のものと一致する必要があります。これは、JavaScript セキュリティ・モデルにより、一方のサーバーのスクリプトが別のサーバーに対して動作できなくなるためです。

Oracle Business Intelligence Infrastructure が稼動していると、Siebel の業務系アプリケーションに接続されません。そのため、新しいアクション・リンクを作成することも、事前定義されたアクション・リンクにアクセスすることもできません。「Navigate」ドロップダウン・メニューの「Action Links」コマンドは、ユーザーが統合アプリケーションにログインしたときにのみ表示できます。

リクエストがリンクとしてダッシュボードに追加され、新しいウィンドウで開くように設定されると、そのリクエストが含まれるアクション・リンクを実行しても、Siebel の業務系アプリケーションにナビゲートされません。

アクション・リンクを作成するには

1. Siebel の業務系アプリケーションで対象となるビューを特定します。
2. Siebel の業務系アプリケーションのビューまたはドリルダウン先アプレットを選択してから、「Help」→「About View」を選択します。

   ポップアップ・ウィンドウにビューとアプレットの名前が表示されます。ビューとアプレットの名前をメモします。これらの名前は、ステップ 7 で必要になります。
3. 対象となるアプレットに適切な「Subject Area」で、Answers を使用して行識別子列（たとえば、Account_Row_ID）を持つ新しい Oracle Business Intelligence リクエストを作成します。
4. 列の「Properties」ボタンをクリックします。

   「Column Properties」ダイアログが表示されます。
5. 「Column Format」タブをクリックします。
6. 「Value Interaction」フィールドで、「Type」ドロップダウン・メニューから「Action Link」を設定します。
7. 次の表を参照しながら、フィールドで値を入力します。

フィールド名	説明
View	ステップ 2 で決定したビューの名前を入力します。
Applet	ステップ 2 で決定したアプレットの名前を入力します。

フィールド名	説明
Show Action Link Icon	結果として作成されるレポートに「Action Link」アイコンを含める場合、このチェック・ボックスを選択します。
Pass value from	このドロップダウン・メニューでクエリーの ROW_ID フィールドを設定します。 ステップ 4 において「ROW_ID」フィールドで「Column Properties」ボタンをクリックした場合、ドロップダウン・メニューから「This Column」を選択します。別のフィールドで「Column Properties」ボタンをクリックした場合は、「ROW_ID」を選択します。

8 「OK」をクリックすると、リクエストがダッシュボードに表示されます。

リクエストを保存してダッシュボードに配置すると、行識別子列に Siebel の業務系アプリケーションへのアクション・リンクが格納されます。

画面に表示する Dashboards の名前の個数の設定

Oracle Business Intelligence では、通常、個々のダッシュボードの名前が画面の上部に表示されます。この表示スペースを小さくするために、Oracle Business Intelligence では表示するダッシュボード名が 15 個を超えるとドロップダウン・リストが作成され、ユーザーは表示するダッシュボードをドロップダウン・リストで選択できます。ドロップダウン・リストには、個々のダッシュボードがフォルダ名の下にグループ化されて表示されます。そのフォルダ名に応じて画面上部のダッシュボード名も置き換わります。この項で説明しているエントリとともに、Presentation Catalog 内のダッシュボードが含まれるフォルダを作成および操作して、目的のダッシュボード表示を作成します。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を変更して次のエントリを追加すると、ドロップダウン・リストが表示されるためのダッシュボード名の表示個数の条件を変更できます。最小値は 1 です。

注意：このエントリは、指定した値より多くのダッシュボードが含まれているフォルダがある場合、ダッシュボードが含まれるすべてのフォルダに対して有効です。たとえば、ダッシュボード・フォルダ A に 8 個のダッシュボードがあり、ダッシュボード・フォルダ B に 11 個のダッシュボードがある場合、値を 10 に設定すると、ドロップダウン・リストは両方のフォルダに対して表示されます。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

次に、エントリの例を示します。

```
<DashboardMaxBeforeMenu>10</DashboardMaxBeforeMenu>
```

Dashboards の保存済選択オプションへのアクセス制御

この項では、保存済選択の概要と保存済選択の管理について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 「Dashboards の保存済選択の概要」（78 ページ）
- 「保存済選択の管理」（78 ページ）
- 「保存済選択を作成するための権限の設定の一覧表」（81 ページ）
- 「保存済選択の管理のサンプル使用例」（82 ページ）

Dashboards の保存済選択の概要

Dashboards の保存済選択を使用すると、ユーザーはプロンプトとフィルタで最も頻繁に使用するものやお気に入りのものがあるダッシュボード・ページを表示することができます。これによって、ダッシュボード・ページに表示されるすべてのプロンプトとフィルタを手動で選択する必要がなくなります。

適切な権限とダッシュボードにアクセスする権限を持つユーザーとグループは、次の作業を実行できます。

- 個人で使用するためや他のユーザーが使用できるようにするために、フィルタとプロンプトの様々な選択の組合せを保存済選択として保存する作業
- 個人で使用するためや他のユーザーが使用できるようにするために、保存済選択をダッシュボード・ページのデフォルトの選択として指定する作業
- 保存済選択を切り替える作業

この動作を次のように制限することができます。

- ユーザーは自分に割り当てられた保存済選択のみを表示できるように制限する。
- ユーザーは個人用の選択のみを保存できるように制限する。
- ユーザーは個人用の選択と他のユーザーが使用可能な選択を保存できるようにする。

注意：保存済選択をエンド・ユーザーが使用する方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』において、ダッシュボード・ページの個人用保存済選択と共有保存済選択の作成と割当てに関する項を参照してください。

保存済選択の管理

この項では、保存済選択の管理に必要な権限について説明します。また、保存済選択の格納と管理に関する Presentation Catalog の関連事項についても説明します。

保存済選択の権限

Oracle BI Presentation Services Administration の「Dashboards」領域にある次の権限は、主要なダッシュボード要素の権限設定と併用して、ユーザーやグループが選択の保存や割当てを実行できるかどうかを制御します。

- Save Selections
- Assign Default Selections

必要なアクセス・レベルに応じて、ユーザーやグループに対して、両方の権限なし、片方の権限のみまたは両方の権限ありに設定できます。たとえば、両方の権限がないユーザーは、デフォルトの選択として割り当てられた保存済選択のみを表示できます。

保存済選択の権限

この項では、保存済選択の管理に必要なダッシュボード・ページの権限について説明します。また、共有の保存済選択と個人用の保存済選択の権限を設定するための、Presentation Catalog 構造の関連事項についても説明します。

ダッシュボードへの権限の割当て

ダッシュボードの権限（「Read」や「Change/Delete」など）は、「Manage Dashboards」画面で設定します。この画面は、「Oracle Business Intelligence Administration」画面から「Manage Interactive Dashboards」リンクをクリックすると、表示されます。このダッシュボードのページは、ユーザーまたはグループに設定された権限が継承されます。

ダッシュボード・ページにおける保存済選択の権限の割当て

特定のダッシュボード・ページに保存済選択を割り当てる権限は、「Dashboard Properties」画面で設定します。この画面は、Dashboard Editor で「Dashboard Properties」ボタンをクリックすると表示されます。

「Dashboard Properties」画面で「Enabled」リンクがクリックされ、選択セキュリティが有効になっている場合、2 つのボタンが「Selection Security」列に表示されます。

- 左側のボタンは、そのダッシュボード・ページの共有選択を保存できるユーザーを制御します。
- 右側のボタンは、そのダッシュボード・ページのデフォルト選択を割り当てることができるユーザーを制御します。

それぞれのボタンをクリックすると、そのオブジェクトに対する Presentation Catalog の適切な場所にナビゲートします。Presentation Catalog のオブジェクトと権限の使用例は、次の各項で説明します。

保存済選択の Presentation Catalog フォルダ構造

Oracle Business Intelligence Administration で設定された権限以外に、ユーザーとグループが保存済選択に対して保持する制御のレベルは、主要要素にアクセスする権限によって異なります。たとえば、基礎となるダッシュボードの作成と編集を行う作業、選択としてのダッシュボード・ビュー・プリファレンスの保存を行う作業、デフォルトの選択として他のユーザーへの選択の割当てを行う作業をそれぞれユーザーやグループができるようにするには、共有記憶域の主要要素に対し「Full Contorl」権限が必要です。一方、割り当てられたデフォルトの保存済選択のみをユーザーやグループが表示できるようにするには、共有記憶域の主要要素に対して「Read」権限のみが必要です。

Presentation Catalog の主要要素には、次のフォルダが含まれます。

- 共有記憶域フォルダ

  ダッシュボードの共有記憶域フォルダは、_portal フォルダ内にあります。ダッシュボードは、割り当てられた名前により識別されます。

  権限設定により、特定の編集用ダッシュボードへのアクセスを制御します。一般的に、権限が _selections フォルダと _defaults フォルダに継承されると、ダッシュボードを編集可能なユーザーは、選択と設定済デフォルトを保存することもできます。特定のダッシュボード・フォルダにアクセスする権限により、ユーザーやグループがダッシュボードを編集できるかどうかを制御します。

  ダッシュボード・フォルダ内の _selections フォルダには、各ダッシュボード・ページのページ識別子フォルダがあります。共有保存済選択は、このフォルダの中にあります。ページ識別子フォルダにアクセスする権限により、ユーザーやグループがそのページの選択を、表示、保存または編集できるかどうかを制御します。

  _selections フォルダ内の _defaults フォルダには、割り当てられたデフォルト選択があります。各グループに割り当てられたデフォルトがある場合、ここに格納されます。このフォルダにアクセスする権限により、ユーザーやグループがデフォルトの割当てを実行できるかどうかを制御します。

- 個人用記憶域フォルダ

  ユーザーの個人用フォルダの中にある _selections フォルダには、各ユーザーの保存済選択が格納されます。共有の _selections フォルダと同様に、個人用の _selections フォルダには各ダッシュボード・ページのページ識別子フォルダがあります。ページ識別子フォルダには、個人用の保存済選択が格納されるだけでなく、ユーザーの選択した項目を個人用のデフォルト選択に指定する _defaultlink ファイルが格納されます。

  個人用の保存済選択のデフォルトは、割り当てられた共有選択のデフォルトより優先されます。

注意：保存済選択のあるダッシュボード・ページがシステムから削除されると、保存済選択も Presentation Catalog から削除されます。基礎となるダッシュボードの構造が変更された場合（たとえば、ユーザーがアクセスしたときに保存済選択が無効になっている場合など）、デフォルトのコンテンツがダッシュボードに表示されます。

保存済選択を作成するための権限の設定の一覧表

表 11 では、一般的なユーザーのロールと特定の権限設定について説明します。それによって、ユーザーは保存済選択を作成できるようになります、「権限の設定」の列にあるフォルダ名については、前の項に説明が記載されています。

表 11. ユーザーのロールと保存済選択の権限の設定

ユーザーのロール	権限の設定
次の作業を実行する必要があるパワー・ユーザー（IT ユーザーなど）： ■ 基礎となるダッシュボードの作成と編集を行う作業 ■ ダッシュボード・ビュー・プリファレンスを選択として保存する作業 ■ 選択を他のユーザーに対してデフォルトの選択として割り当てる作業	Presentation Catalog の「Shared」セクションでは、次のフォルダに対して「Full Control」権限が必要です。 ■ dashboard_name ■ _selections ■ _defaults 通常、さらに権限を割り当てる必要はありません。
次の作業を実行する必要があるテクニカル・ユーザー（マネージャなど）： ■ 選択を個人用として保存する作業 ■ 他のユーザーが使用できるようにするために選択を保存する作業 ユーザーは基礎となるダッシュボードの作成や編集を行ったり、ビューの選択をデフォルトの選択として他のユーザーに割り当てることはできません。	Presentation Catalog の「Shared」セクションでは、次のフォルダに対して「Read」権限が必要です。 ■ dashboard_name Presentation Catalog の「Shared」セクションでは、次のフォルダに対して「Write」権限が必要です。 ■ _selections ■ _defaults 通常、さらに権限を割り当てる必要はありません。
個人用の選択のみを保存する必要がある一般ユーザー	Oracle BI Presentation Services Administration で、次の権限を設定する必要があります。 ■ Save Selections ダッシュボード・ページで、次のオプションを設定する必要があります。 ■ Allow Saved Selections Presentation Catalog では通常、さらに権限設定を行う必要はありません。

表 11. ユーザーのロールと保存済選択の権限の設定

ユーザーのロール	権限の設定
割り当てられたデフォルト選択のみを表示する必要があるゲスト・ユーザー	Presentation Catalog の「Shared」セクションでは、次のフォルダに対して「Read」権限が必要です。 ■ dashboard_name ■ _selections ■ _defaults Presentation Catalog では通常、さらに権限設定を行う必要はありません。

保存済選択の管理のサンプル使用例

権限を設定したり権限を付与することにより、ユーザーやグループが保存済選択を作成、割当ておよび使用できる権限の様々な組合せを実現できます。

たとえば、パワー・ユーザーのグループは本番環境のダッシュボードは変更できないが、保存済選択を作成し、それを他のユーザーにデフォルト選択として割り当てることが許可されているとします。この場合、このグループには、次の権限設定が必要です。

- ダッシュボードの「Read」権限（「Manage Dashboards」画面を使用して割り当てる）
- Presentation Catalog のダッシュボード・フォルダにある _selections サブフォルダと _defaults サブフォルダに対する「Change/Delete」権限（Dashboard Editor から「Dashboard Properties」画面にアクセスして割り当てる）

Oracle Business Intelligence ブリーフィング・ブックの追加リンク数の設定

ブリーフィング・ブック・ナビゲーション・リンクは特別なタイプのリンクで、Dashboard Editor を使用してダッシュボードに追加できます。最大リンク数のデフォルト値は、5 です。

このデフォルトは、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を編集して次のエントリを追加することによって変更できます。最小値は 1 です。最大値は 10 です。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

次に、エントリの例を示します。

```
<MaxFollowLinks>10</MaxFollowLinks>
```

UNICODE フォーマット以外による Oracle Business Intelligence の結果のダウンロード

Oracle Business Intelligence には、結果をダウンロードするためのオプションが用意されています。このオプションは、Answers において「Download」リンクのオプションとして表示されます。「Download」リンクは、ダッシュボードのリクエストに表示することもできます。

デフォルトでは、「Download Data」オプションを使用すると、UNICODE でエンコードされたタブ区切りテキスト・ファイルとして結果がダウンロードされます。特定のアプリケーションで使用するために UNICODE 以外でエンコードされたカンマ区切りファイルが必要な組織は、「Download Data」オプションの動作を無効にするか、XML メッセージ・ファイル viewscontrolmessages.xml にあるメッセージ kmsgEVCDownloadLinks を変更して別のダウンロード・オプションを追加できます。

「Download Data」オプションの動作を変更する場合や、カンマ区切りのデータを取得する新しいオプションを追加する場合、この項の説明にある Oracle BI Presentation Services 構成ファイル（instanceconfig.xml）のエントリを使用して、使用するキャラクタ・セットを指定します。SADATADIR¥web¥config ディレクトリ（SADATADIR はデータ・ディレクトリ）にあるメッセージ・ファイル charactersetdefinitions.xml を調べると、サポートされるキャラクタ・セットを確認できます。

たとえば、次の XML コードを viewscontrolmessages.xml ファイルのメッセージ kmsgEVCDownloadLinks に追加すると、「Download CSV」オプションが「Download」リンクに追加されます。

```
            <a class="NQWMenuItem" name="SectionElements"
href="javascript:void(null);" onclick="NQWClearActiveMenu();
Download('@{command}&amp;Format=csv&amp;Extension=.csv')">Download CSV</a>
```

「Download CSV」オプションにより、次のエントリを使用してキャラクタ・セットが決まるカンマ区切りファイルがダウンロードされます。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

次に、エントリの例を示します。

```
<CSVCharset>us-ascii</CSVCharset>
```

XML メッセージ・ファイルの変更方法の詳細は、「XML メッセージ・ファイルを使用した Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースのカスタマイズ」（190 ページ）を参照してください。

他のポータルまたはイントラネットへの Answers の統合

次のカスタマイズ設定を使用すると、Dashboards を使用することなく Answers を他のポータルやイントラネットに統合できます。これらの設定は、XML メッセージ・ファイルで構成します。

次の作業を実行できます。

- 「Dashboards」リンクのテキストを変更する作業

■ ユーザーがリンクをクリックしたときのリンク先 URL を変更する作業

注意：統合作業を行う前に、「XML メッセージ・ファイルを使用した Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースのカスタマイズ」（190 ページ）に記載された情報を調べてください。

ダッシュボード・リンクのテキストを変更するには

1 uimessages.xml ファイルにナビゲートします。

このファイルは、SAROOTDIR¥web¥msgdb¥l_xx¥messages フォルダにあります。ここで、SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ、xx は選択されたロケールの言語識別子をそれぞれ表します。

警告：変更する前に、必ず uimessages.xml ファイルをコピーしてバックアップしてください。

2 テキスト・エディタを使用して、uimessages.xml ファイルを開きます。

3 メッセージ "kmsgUIPortal" を探します。

メッセージの形式を次に示します。

```
<WebMessage name="kmsgUIPortal">
  <TEXT>Dashboards</TEXT>
</WebMessage>
```

デフォルトのテキストは Dashboards です。

4 デフォルトのテキストを適切なテキストに変更します。

たとえば、このテキストを会社のイントラネットに適用するには、次のように変更できます。

```
<WebMessage name="kmsgUIPortal">
  <TEXT>Intranet</TEXT>
</WebMessage>
```

5 終了したら、ファイルを保存します。

変更は、Oracle BI Presentation Services のサービスを再起動すると有効になります。

ダッシュボード・リンクのリンク先を変更するには

1 controlmessages.xml ファイルにナビゲートします。

このファイルは、SAROOTDIR¥web¥msgdb¥l_xx¥messages フォルダにあります。ここで、SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ、xx は選択されたロケールの言語識別子をそれぞれ表します。

警告：変更する前に、必ず ControlMessages.xml ファイルをコピーしてバックアップしてください。

2 テキスト・エディタを使用して、ControlMessages.xml ファイルを開きます。

3 メッセージ "kmsgPortalLink" を探します。

メッセージの形式を次に示します。

```
<WebMessage name="kmsgPortalLink">
```

```
    <HTML>
      <A insert="1">
       <MessageRef name="kmsgUIPortal" />
      </A>
    </HTML>
  </WebMessage>
```

デフォルトの場所は、Dashboards です（insert="1" で示され、内部参照用）。

4 デフォルトの場所を適切な場所に変更します。

注意：場所が指定されないと、リンクは Answers に表示されません。

たとえば、これを会社のイントラネットに変更するには、適切な属性を含めて、その場所を指すように変更します。

```
  <WebMessage name="kmsgPortalLink">
    <HTML>
      <A href="http://intranet" target="_top" title="Click here for your intranet">
       <MessageRef name="kmsgUIPortal" />
      </A>
    </HTML>
  </WebMessage>
```

5 終了したら、ファイルを保存します。

変更は、Oracle BI Presentation Services のサービスを再起動すると有効になります。

Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースのデフォルトの表示と動作を制御する方法の詳細は、「XML メッセージ・ファイルを使用した Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースのカスタマイズ」（190 ページ）を参照してください。

レポート書込み機能の構成

書込み機能は、値をレポートに直接入力して、入力した値をレポートにおける計算やグラフで使用するための機能です。たとえば、書込みフィールドとして販売ノルマ数量、データ・ウェアハウスからのフィールドとして販売数量、計算フィールドとしてノルマ達成率（販売数量の値を販売ノルマ数量の値で除算した値）が、レポートでそれぞれ定義されていると仮定します。レポートが表示されたときに販売ノルマ数量を変更すると、ノルマ達成率のフィールドが正しく再計算されます。

次の項では、書込み機能について説明します。

- 書込みの構成タスク（86 ページ）
- 書込み機能（87 ページ）

■ 書込みテンプレートの作成（87 ページ）
■ 例：書込みテンプレート（88 ページ）
■ 書込みの制限（89 ページ）

書込みの構成タスク

書込みフィールドの構成処理は、次の作業で構成されます。特定の実装用に適合させるにはこれらの作業をカスタマイズする必要があります。

1. 組織におけるレポートのニーズを調べて、表示するレポートと必要な書込みフィールドのリストを作成します。
2. 必要な各書込みフィールド用の列があるデータベースにおいて物理テーブルを作成します。create table 文では、書込みフィールドは NULL 値不可にすることをお薦めします。

   注意：最適なセキュリティを実現するには、書込みデータベース・テーブルを一意のデータベース・インスタンスに格納します。

3. Administration Tool を使用して、新しいテーブルを構成します。
   a. 論理ファクト列が公開され、適切なディメンションで正しく集計されるように、物理テーブルを論理モデルにマップします。
   b. 「Physical Table」ウィンドウで書込みテーブルの「Make Table Cacheable」プロパティを無効にします。これにより、キャッシュされた値でなく、データベースに書き込まれたデータがユーザーに表示されるようになります。
   c. 接続プールの書込みを有効にします。
   d. ユーザーがその職責に適切なレコードのみにアクセスできるように、コンテンツ・フィルタを設定します。たとえば、販売担当者は自分のレコードのみを表示可能にして、営業管理者はその指示レポートのレコードを表示可能にします。

   手順の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

4. 作成したテーブルへの値の挿入や更新に必要な SQL 文を指定する書込みテンプレートを作成します。詳細は、「書込みテンプレートの作成」（87 ページ）を参照してください。
5. Oracle BI Presentation Services で、書込み権限を付与します。
   a. 管理者とレポート作成者に対しては、「Manage Write Back」権限を有効にします。この操作により、Answers の「Write Back」プロパティ・ウィンドウが有効になり、列の「Write Back」相互作用タイプが有効になります。
   b. 管理者、レポート作成者および選択されたユーザーに対しては、「Write Back to Database」権限を有効にします。この操作により、書込みのユーザー・インタフェース制御が有効になり（フィールドが編集可能になり、書込みボタンが表示される）、データベースにデータを書き込むサーバー・コールが有効になります。

   権限の付与方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services Administration における権限の設定」（149 ページ）を参照してください。

6. Answers で、書込みレポートを構成します。
   a. 新しい列が使用されるテーブル・ビューが含まれるレポートを作成します。

b レポートの新しい各列で、列のフォーマットを編集します。「Column Interactions」フィールドを「Write Back」に設定します。

c 必要に応じて、列フォーマット・ダイアログでキーの列を「Hidden Keys」に設定します。

d 「Table View」プロパティを編集し、書込み機能を有効にして、書込みテンプレートの名前と書込みボタンのテキストを指定します。

e レポートを保存します。

f レポートをダッシュボード・ページに埋め込みます。

レポートの作成方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

書込み機能

ユーザーに「Write Back to Database」権限がある場合、レポートの書込みフィールドは編集可能フィールドとして表示されます。ユーザーにこの権限がない場合、書込みフィールドは通常のフィールドとして表示されます。ユーザーが値を編集可能フィールドに入力して書込みボタンをクリックすると、アプリケーションでは書込みテンプレートが読み込まれ、SQL の適切な挿入コマンドまたは更新コマンドが取得されます。その後、挿入コマンドまたは更新コマンドが発行されます。コマンドが成功すると、レコードが読み込まれ、レポートが更新されます。テンプレートが読み込まれたときや SQL コマンドが実行されたときにエラーが発生すると、エラー・メッセージが表示されます。

テーブルにレコードが存在しないときにユーザーが新しいデータを入力すると、挿入コマンドが実行されます。この場合、NULL 値が初期値であるテーブル・レコードにユーザーは値を入力したことになります。

ユーザーが既存のデータを変更すると、更新コマンドが実行されます。ユーザーが書き込む物理テーブルに存在しないレコードを表示するために、類似テーブルを別に作成できます。この類似テーブルを使用して、Oracle BI Dashboards でユーザーが変更できるプレースホルダ・レコードを表示します。

書込みテンプレートの作成

書込みテンプレートは XML フォーマットのファイルです。このファイルには、作成した書込みテーブルと列においてレコードの挿入と更新を行うために必要な SQL コマンドが格納されます。複数の書込みテンプレートを作成して、各レポートで使用されるフィールドごとにカスタマイズできます。レポート・プロパティで、使用する書込みテンプレートの名前を指定します。

書込みテンプレートは、次の要件を満たす必要があります。

- セキュリティ要件を満たすために、レコードの挿入と更新を行う SQL コマンドとともに接続プールを指定する必要があります。この SQL では、書込みスキーマに渡す値を参照して、SQL 文を生成し、データベース・テーブルを変更します。値は、位置（@1、@3 など）または列 ID（@{c0}、@{c2} など）で参照できます。列の位置は番号 1 から始まり、列 ID は c0 から始まります。列 ID を使用することをお薦めします。

  注意： @n は @{cn-1} と同じではありません。これは、ID cn-1 の列がテーブルの n 番目の列でない場合があるからです。

- テンプレートには、<insert> 要素と <update> 要素の両方を含める必要があります。SQL コマンドをこの要素の中に入れない場合、開始タグと終了タグの間に空白を挿入する必要があります。たとえば、要素を次のように入力する必要があります。

  ```
  <insert>  </insert>
  ```

  次のようにしないでください。

  ```
  <insert></insert>
  ```

  この空白が省略されると、「The system is unable to read the Write Back Template 'my_template'」という書込みエラー・メッセージが表示されます。

- パラメータのデータ型が整数型または実数型でない場合、一重引用符で囲みます。データベースで自動コミットを行わない場合、insert ノードと update ノードの後にオプションの postUpdate ノードを追加して、コミットを強制的に実行します。postUpdate ノードは通常、次の例のように指定します。

  ```
  <postUpdate>COMMIT</postUpdate>
  ```

- 書込みテンプレートのファイルは、CustomMessages フォルダに格納します。システムに複数の CustomMessages フォルダが存在する場合があります（SAROOTDIR¥web¥msgdb¥customMessages などで、ここで SAROOTDIR はインストール・ディレクトリを示す）。詳細は、「XML メッセージ・ファイルを使用した Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースのカスタマイズ」（190 ページ）を参照してください。

- 書込みテンプレートのファイル名は、独自に選んだ名前にすることができます。これはシステムでは CustomMessages フォルダにあるすべての XML ファイルが読み込まれるためです。書込みを正常に動作させるには、書込みテーブル作成時に指定した SQL テンプレートの名前をファイルの WebMessage 要素に含めます。1 つのファイルに複数の WebMessage 要素を格納することも、各要素で 1 つの SQL テンプレートを指定することもできます。

  次に、"SetQuotaUseID" という SQL テンプレートを指定する例を示します。

  ```
  <WebMessage name="SetQuotaUseID">
  ```

例：書込みテンプレート

書込みテンプレートの例を次に示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8" ?>
<WebMessageTables xmlns:sawm="com.siebel.analytics.web/message/v1">
<WebMessageTable lang="en-us" system="WriteBack" table="Messages">

   <WebMessage name="SetQuotaUseID">
      <XML>
         <writeBack connectionPool="Supplier">
            <insert>INSERT INTO regiontypequota
VALUES(@{c0},@{c1},'@{c2}','@{c3}',@{c4})</insert>
            <update>UPDATE regiontypequota SET Dollars=@{c4} WHERE YR=@{c0} AND
Quarter=@{c1} AND Region='@{c2}' AND ItemType='@{c3}'</update>
         </writeBack>
      </XML>
   </WebMessage>
```

```
   <WebMessage name="SetQuota">
      <XML>
         <writeBack connectionPool="Supplier">
            <insert>INSERT INTO regiontypequota VALUES(@1,@2,'@3','@4',@5)</insert>
            <update>UPDATE regiontypequota SET Dollars=@5 WHERE YR=@1 AND Quarter=@2
AND Region='@3' AND ItemType='@4'</update>
         </writeBack>
      </XML>
   </WebMessage>

</WebMessageTable>
</WebMessageTables>
```

書込みの制限

次に書込み機能の制限について説明します。

- 書込み機能は、テーブル・ビュー専用です。グラフ、ゲージおよびピボットが含まれる他のビューでも表示できますが、値を変更する編集フィールドを持たせることはできません。
- 書込み列のすべての値は、編集可能です。プリンタに出力されることが考慮されていない形式のコンテキストで表示すると、編集可能フィールドはユーザーが「Write Back」権限を持っているように表示されます。ただし、論理列が変更可能な物理列にマップされていると、論理列では複数レベルと交差する値が返されます。この使用例では、問題が発生する場合があります。
- レポートにおけるフィールドは、作成した書込みテーブルから導出されたものでない場合でも、書込みフィールドとしてフラグを設定することができます。レポート作成者は、フィールドを適切にタグ設定する必要があります。
- 書込みレポートでは、ドリルダウン機能はサポートされません。
- ユーザー・インタフェースでは、最低限のデータ入力検証のみが行われます。フィールドが数値型である場合、ユーザーがテキスト・データを入力すると、ユーザー・インタフェースでは入力データが検出され、不正な入力データはデータベースに入力されません。ただし、不正なデータの入力チェックは他の形態では検出できません（許容範囲外の値、文字列と数値の混合など）。ユーザーが書込みボタンをクリックして挿入や更新が実行されたときに、不正なデータが検出されると、データベースからエラー・メッセージが返されます。ここで、ユーザーは不正な入力を修正できます。レポート作成者はユーザーの入力間違いを防止するために、数値データのフィールドに英字を入力しないことを指示するようなテキストを、書込みレポートに含めることができます。
- テンプレートには、挿入と更新以外の SQL 文を含めることができます。書込み機能により、これらの文はデータベースに渡されます。ただし、挿入や更新以外の文を使用することはサポートされていないので、お薦めしません。
- 書込み機能は、任意の新しいレコードを入力する場合に適していません。つまり、これをデータ入力ツールとして使用しないでください。
- 数値列には数値のみを入力する必要があります。ドル記号（$）、シャープ記号（#）、パーセント記号（%）などのデータ・フォーマット文字は入力しないでください。
- テキスト列には、文字列のみを入力する必要があります。

警告：この機能では、ユーザーの入力内容を取得し、データベースに直接書き込みます。物理データベースのセキュリティは、管理者の責任で確保してください。最適なセキュリティを実現するには、書込みデータベース・テーブルを一意のデータベース・インスタンスに格納します。

6 Oracle BI Presentation Catalog の管理

この章では、Oracle BI Presentation Catalog の管理方法および基本的なメンテナンス手順について説明します。

Oracle Business Intelligence Catalog Manager を使用して Presentation Catalog を管理することもできます。Catalog Manager の詳細は、第 7 章「Oracle BI Catalog Manager による Presentation Catalog の管理」を参照してください。

この章の内容は次のとおりです。

- Presentation Catalog について（92 ページ）
- Presentation Catalog の名前および場所の変更（93 ページ）
- 4000 人を超えるユーザー用の Presentation Catalog の構成（93 ページ）
- Oracle BI Presentation Services の複数インスタンスを実行する環境における Presentation Catalog キャッシュの管理（93 ページ）
- 新規 Presentation Catalog の作成（94 ページ）
- 別のインストールへの Presentation Catalog の移動（94 ページ）
- 本番環境へのオブジェクトのコミット（94 ページ）
- Presentation Catalog のレプリケート（95 ページ）
- Presentation Catalog のアーカイブ（106 ページ）
- Presentation Catalog での項目の管理（107 ページ）

Presentation Catalog について

Presentation Catalog には、Answers および Dashboards でユーザーが作成するコンテンツが格納されます。フォルダ、リンク、オブジェクトなどの項目が含まれるこのコンテンツ（リクエスト、フィルタ、プロンプト、ダッシュボードなど）は、個々のファイルのディレクトリ構造に格納されます。

注意： Oracle Business Intelligence Publisher のレポートは、Presentation Catalog には保存されません。Oracle BI Publisher の詳細は、『Oracle Business Intelligence Publisher ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

各オブジェクトはそれぞれ独自の .xml ファイルに格納されます。たとえば、Answers で作成した Report 1 というリクエストは、Report1.xml というファイルに格納されます。

各項目にはそれぞれ対応する属性ファイルがあります。たとえば、Report 1 というリクエストに対応する属性ファイルは、report1.atr になります。

属性ファイルには、項目のフルネーム、アクセス制御リスト（ACL）、説明などが含まれます。

注意： 1 つのファイルに対して同時に複数の書込み処理が行われないように、項目に書き込む際、ロック・ファイルが作成されます。まれに（停電後など）、Presentation Catalog 内の一時ロック・ファイルが完全にクリーンアップされない場合があります。Oracle BI Presentation Services でそのようなロック・ファイルに関するレポートが生成された場合は、手動で削除する必要があります。

Oracle Business Intelligence Infrastructure をインストールすると、`default` という名前の Presentation Catalog ディレクトリが作成されます。

Presentation Catalog ディレクトリのデフォルトの場所は次のとおりです。

- Windows の場合

  ```
  SADATADIR¥web¥catalog
  ```

  SADATADIR は、データ・ディレクトリです。デフォルトのデータ・ディレクトリは、C:¥OracleBIData です。使用しているデータ・ディレクトリは、異なる場合があります。

- UNIX の場合

  ```
  SADATADIR/web/catalog
  ```

  SADATADIR は、データ・ディレクトリです。デフォルトのデータ・ディレクトリは、/usr/local/OracleBIData です。使用しているデータ・ディレクトリは、異なる場合があります。

注意： Oracle BI Presentation Services の以前のリリースでは、Presentation Catalog（旧称は Siebel Analytics Web Catalog）は、個々のファイルのディレクトリ構造ではなく、単一のファイルに格納されていました。以前のリリースの Presentation Catalog がある場合は、新しいフォーマットに変換する必要があります。また、Presentation Catalog は、単一のファイルではなく個々のファイルで構成されるディレクトリ構造に格納されるため、以前のリリースで行われていた自動バックアップは不要です。ファイル・システムのバックアップのかわりに、サイトのバックアップ計画を使用できます。Presentation Catalog を新しいフォーマットに変換する方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Infrastructure アップグレード・ガイド』を参照してください。

Presentation Catalog の名前および場所の変更

Presentation Catalog の移動または名前の変更を行う場合は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を更新して、新しい場所または名前を指定する必要があります。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

次に、エントリの例を示します。

```
<CatalogPath>/usr/local/OracleBIData/web/catalog/default</CatalogPath>
```

4000 人を超えるユーザー用の Presentation Catalog の構成

Presentation Catalog ユーザーが 4000 人を超えている場合や、Presentation Catalog ユーザーが今後 4000 人を超える予定がある場合は、ファイル・システムの制限に対応するために、ユーザーのホーム・ディレクトリのハッシングをオンにする必要があります。ハッシングをオンにするには、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）において HashUserHomeDirectories 要素を 2 に設定します。この要素をオンにすると、たとえば、Steve というユーザーのホーム・ディレクトリのデフォルト名は、/users/st/steve になります。

次に、エントリの例を示します。

```
<Catalog>

    <HashUserHomeDirectories>2</HashUserHomeDirectories>

</Catalog>
```

警告：この要素を有効にするには、Oracle BI Presentation Services のインストール直後に設定する必要があります。

Oracle BI Presentation Services の複数インスタンスを実行する環境における Presentation Catalog キャッシュの管理

レプリケーションやクラスタ化によって Oracle BI Presentation Services のインスタンスを複数実行している場合は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）に次のエントリを追加して、Presentation Catalog キャッシュをディスクから更新するタイミングを管理する必要があります。

```
<Catalog>

    <AccountIndexRefreshSecs>120</AccountIndexRefreshSecs>
    <AccountCacheTimeoutSecs>180</AccountCacheTimeoutSecs>
    <PrivilegeCacheTimeoutSecs>180</PrivilegeCacheTimeoutSecs>
    <CacheTimeoutSecs>120</CacheTimeoutSecs>
    <CacheCleanupSecs>600</CacheCleanupSecs>

</Catalog>
```

新規 Presentation Catalog の作成

次の手順では、新規 Presentation Catalog を作成する方法について説明します。

新規 Presentation Catalog を作成するには

1. Oracle BI Presentation Services のサービスを停止します。

   注意： Oracle BI Presentation Services が Microsoft IIS Web サーバーにインストールされていると、IIS Web サーバーでは、Microsoft IIS のインストールで指定されている場所に Web キャッシュ機能用の一時ファイルが作成されます。Oracle BI Presentation Services より前に Oracle BI Server を停止すると、通常はこれらの一時ファイルが残され、ディスク領域が占有されます。

2. Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）で CatalogPath 要素を設定して、Presentation Catalog の新しい場所（既存の場所以外）を指定します。

   詳細は、「Presentation Catalog の名前および場所の変更」（93 ページ）を参照してください。

3. Presentation Catalog の新しい場所が空であることを確認します。
4. Oracle BI Presentation Services のサービスを再起動します。

別のインストールへの Presentation Catalog の移動

既存の Presentation Catalog を、別の Oracle Business Intelligence インストールに移動できます。この場合、WinZip（Windows の場合）または ZIP（UNIX の場合）を使用して圧縮し、移動先のインストールで解凍します。

既存の Presentation Catalog を別のインストールに移動する前に、Oracle BI Presentation Services のサービスを停止することをお薦めします。

Oracle Business Intelligence インストール全体の移行方法の詳細は、Oracle Siebel SupportWeb の「Technical Notes」を参照してください。

本番環境へのオブジェクトのコミット

単純なオブジェクト（権限のあるダッシュボードなど）は、アーカイブおよびアーカイブ解除の機能を使用して、本番環境に対してコミットできます。

複雑なオブジェクト（外部フィルタへの参照を含むオブジェクトなど）のコミットには、高度な手順が必要です。Oracle Corporation では、この手順についての高度なトレーニング・コースを用意しています。複雑なオブジェクトを本番環境に対してコミットする前に、このコースに出席することをお薦めします。

本番環境への単純なオブジェクトのコミット

1. 次のいずれかを使用してオブジェクトをアーカイブします。

- Oracle BI Presentation Services Administration

  Oracle BI Presentation Services Administration でのアーカイブ方法の詳細は、「Presentation Catalog のアーカイブ」（106 ページ）を参照してください。

- Catalog Manager

  Catalog Manager でのアーカイブ方法の詳細は、「Catalog Manager を使用しての Presentation Catalog のアーカイブと解凍」（127 ページ）を参照してください。

2. アーカイブしたファイルを本番マシンにコピーします。
3. 本番マシンで、オブジェクトのアーカイブを解凍します。オブジェクトのアーカイブの解凍方法の詳細は、「Catalog Manager を使用しての Presentation Catalog のアーカイブと解凍」（127 ページ）を参照してください。
4. オブジェクトに対する権限を適切に設定します。

Presentation Catalog のレプリケート

Oracle Business Intelligence では、Oracle BI Presentation Services インスタンス間において、選択した Presentation Catalog フォルダのコンテンツをコピーおよびマージできます。レプリケーションの構成は、個々のタスクに分割できます。レプリケーション・タスクは、指定したカタログ・フォルダのカタログ・コンテンツを、あるサーバーから別のサーバーへ定期的にマージするよう指示することです。双方向のレプリケーションが可能です。

レプリケーションが役立つ典型的な使用例は、Oracle BI Presentation Services の 1 つのインスタンスを使用して共有レポートを準備して公開し、複数の本番インスタンスを使用してユーザーをサポートする場合です。この使用例では、Instance1 のカタログを 2 つの本番インスタンスで共有し、各本番インスタンス上のカタログを相互に共有します。これを実現するには、Oracle BI Presentation Services Replication Agent（sawrepaj）構成ファイルで次のレプリケーション・タスクを設定します。

- /shared: Instance1 から Instance2 へ
- /shared: Instance1 から Instance3 へ
- /users: Instance2 から Instance3 へ
- /users: Instance3 から Instance2 へ

Oracle BI Presentation Services のインスタンスがパブリッシャまたはサブスクライバとしてレプリケーションに参加すると、レプリケート対象としてマークされているカタログ項目に対する変更をトラッキングして、内部でレプリケーション・ログ・ファイルに保存します。別の Oracle BI Presentation Services インスタンスでは、これらの変更に関するリクエストを行う SOAP コールを実行できます。リクエストでは、変更をファイルにエクスポートするか、以前に別のインスタンスからエクスポートしたファイルに記録されている変更をインポートして再生するかのどちらかをリクエストします。Oracle BI Presentation Services Replication Agent では、SOAP を使用してすべての Oracle BI Presentation Services インスタンス上のレプリケーション関連アクティビティを管理し、インポートとエクスポートの操作を実行します。使用する SOAP コールの詳細は、『Oracle Business Intelligence Web Services ガイド』を参照してください。

レプリケーション・ログ・ファイルについて

レプリケーション・ログ・ファイルには、レプリケーションの対象となるカタログ項目に対して行われた変更が記録されます。レプリケーション・ログ・ファイルには次の 2 種類があります。

- 変更ログ・ファイル：カタログ項目に対してローカルで行われた変更が記録されます。これらのファイルは、{presentationcatalogpath}/replication/changelog フォルダ（{presentationcatalogpath} は Presentation Catalog フォルダへのフルパス）に格納されます。
- 再生ログ・ファイル：カタログ項目に対する変更が記録されます。この変更は、他の Oracle BI Presentation Services インスタンスから再生されたものです。これらのファイルは、{presentationcatalogpath}/replication/playback フォルダ（{presentationcatalogpath} は Presentation Catalog フォルダ）に格納されます。

レプリケーション・ログ・ファイルは、定期的にクリーンアウトするまで、ディスク上に無期限に保存されます。レプリケーション操作を実行すると、Oracle BI Presentation Services では、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）において ReadLogRecordsSinceHoursAgo 要素で指定されている間隔でレプリケーション・ログ・ファイルのみの読取りを行います。ReadLogRecordsSinceHoursAgo 要素の詳細は、「レプリケーション用の instanceconfig.xml ファイルの編集」（105 ページ）を参照してください。

トラブルシューティングなどの目的でレプリケーション・ログ・ファイルの確認が必要になる場合がありますが、ログ・ファイルは手動で編集しないでください。

レプリケーション・ログ・ファイルのレコード

レプリケーション・ログ・ファイルには様々なタイプのレコードが記録されますが、各レコードはカンマで区切られた複数のフィールドで構成されます。レプリケーション・ログ・ファイルに記録される最も重要なレコード・タイプは次のとおりです。

- **ファイル・ヘッダー・レコード**：各ログ・ファイルの先頭に書き込まれ、次のフィールドがあります。

  `Size`、`Type`、`Timestamp`、`Version`、`Flags`

- **Oracle BI Presentation Services 起動レコード**：Oracle BI Presentation Services が起動するたびに書き込まれ、次のフィールドがあります。

  `Size`、`Type`、`Timestamp`

- **変更前レコード**：Presentation Catalog の項目が変更される直前に書き込まれ、次のフィールドがあります。

  `Size`、`Type`、`Timestamp`、`Change sequence number`、`Change type`

- **変更後レコード**：Presentation Catalog の操作完了直後に書き込まれ、次のフィールドがあります。

  `Size`、`Type`、`Timestamp`、`Change sequence number`、`Operation outcome`

- **ファイル終了レコード**：レプリケーション・ログ・ファイルにおいて最後のレコードとして書き込まれ、次のフィールドがあります。

  `Size`、`Type`、`Timestamp`、`Name of next log file`

前述のフィールドに関する説明を次に示します。

- **Size**:16 進数表記されたレコード・サイズです（バイト単位）。
- **Type**: レコード・タイプを示し、次のレコード・タイプがあります。

  - **H**: ファイル・ヘッダー・レコードを示します。
  - **S**: Oracle BI Presentation Services 起動レコードを示します。
  - **B**: 変更前レコードを示します。
  - **A**: 変更後レコードを示します。
  - **F**: ファイル終了レコードを示します。
- **Timestamp**: レコードのタイムスタンプを示します。UTC の 1970 年 1 月 1 日午前 0 時(00:00:00)から起算した経過時間（秒単位）を表す 16 進数で記録されます。
- **Change sequence number**: 順序番号を示します。対応する変更前レコードおよび変更後レコードは同じ番号になります。
- **Change type**: 変更のタイプを示します。次のフラグの組合せを表す 16 進数で記録されます。
  - **1**: 挿入を示します。
  - **2**: 削除を示します。
  - **4**: 書込みを示します。
  - **8**: カタログ項目情報の変更を示します。
  - **16**: 所有者の変更を示します。
  - **32**: セキュリティの変更を示します。
- **Operation outcome**: 操作の結果を示します。次のいずれかを示す値になります。
  - **0**: 失敗を示します。
  - **1**: 成功を示します。

Presentation Catalog レプリケーションの設定

Presentation Catalog レプリケーションを有効にするには、この項で説明する条件を設定します。

レプリケーション用の instanceconfig.xml の編集

Oracle BI Presentation Services のインスタンスごとに、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を次に示すように編集する必要があります。

- レプリケーションを有効にします。デフォルトでは、レプリケーション機能は Oracle BI Presentation Services のインスタンスに対して無効になっています。
- クラスタ化された環境用にレプリケーションを構成します。クラスタ化された環境では、複数の Oracle BI Presentation Services インスタンスで同じ Presentation Catalog が共有される場合があります。レプリケーションを適切に行うには、次の確認が必要です。
  - 同時実行性に関する問題を回避するために、Oracle BI Presentation Services の各インスタンスが独自のログ・ファイルに書き込むことを確認します。
  - インポートおよびエクスポートの操作中にすべてのインスタンスで行われる変更が考慮されていることを確認します。

- レプリケーション・ログ・ファイルに保存するレコードの数を指定します。
- レプリケーション・ログ・ファイルをレプリケーション操作で読み込む時間間隔（時間単位）を指定します。

instanceconfig.xml ファイルをレプリケーション用に編集する方法の詳細は、「レプリケーション用の instanceconfig.xml ファイルの編集」（105 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services Replication Agent 構成ファイルの作成

Oracle BI Presentation Services Replication Agent の構成ファイル（config.xml）を作成し、Oracle BI Presentation Services のどのインスタンスのどのフォルダをレプリケートするかを指定する必要があります。詳細は、「レプリケーション用の config.xml ファイルの作成」（102 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services Replication Agent の使用

Oracle BI Presentation Services Replication Agent（sawrepaj）は、Oracle BI Presentation Services の両方のインスタンスに対してネットワークを介してアクセス可能なコンピュータ上で実行できます。このエージェントでは、すべてのレプリケーション・タスクが処理されます。コマンドラインにはオプションがいくつかあります。詳細は、「Oracle BI Presentation Services Replication Agent の使用」（100 ページ）を参照してください。

Presentation Catalog ファイルのコピー

Oracle BI Presentation Services Replication Agent は、Presentation Catalog に対する変更をコピーします。コンテンツ全体ではなく変更のみがコピーされるため、最初に Oracle BI Presentation Services のサブスクライブ・インスタンスごとにコピー元の Presentation Catalog からコピーする必要があります。

レプリケートされる Presentation Catalog フォルダのリストのメンテナンス

Presentation Catalog は別のインスタンスに由来しているため、レプリケートされるカタログ・フォルダのリストが正しくない場合があります。sawrepaj mark コマンドを使用して、レプリケートされるカタログ・フォルダのリストをメンテナンスします。詳細は、「Oracle BI Presentation Services Replication Agent の使用」（100 ページ）を参照してください。

レプリケーション・ログ・ファイルが使用できない場合のレプリケーションの再開

なんらかの理由で、Oracle BI Presentation Services のインスタンスでレプリケーション・ログ・ファイルが使用できないとき、該当するインスタンスのサブスクライブ先の Presentation Catalog フォルダを上書きコピーすることによるレプリケーションの再開が必要になる場合があります。ただし、この方法では、他のインスタンスにレプリケートされていないカタログ・コンテンツが失われます。次の方法を使用すると、カタログ・コンテンツがすべて保持されます。

注意： Oracle BI Presentation Services のオフライン時間が config.xml ファイルの ReadLogRecordsSinceHoursAgo 要素で構成されている時間を経過した後で、レプリケーションを再開する必要がある場合は、オフライン時間のログ・ファイルがレプリケートされるように ReadLogRecordsSinceHoursAgo の値を調整できます。その後、ReadLogRecordsSinceHoursAgo を元の設定にリセットします。

レプリケーション・ログ・ファイルが使用できない場合にレプリケーションを再開するには

1. Oracle BI Catalog Manager を使用して、{presentationcatalogpath}/replication/changelog フォルダおよび {presentationcatalogpath}/replication/playback フォルダ（{presentationcatalogpath} は Presentation Catalog フォルダへのフルパス）にあるすべてのレプリケーション・ログを消去します。

   Catalog Manager の詳細は、第 7 章「Oracle BI Catalog Manager による Presentation Catalog の管理」を参照してください。

2. Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）において UseReplication 要素を N に設定します。詳細は、「レプリケーション用の instanceconfig.xml ファイルの編集」（105 ページ）を参照してください。
3. Oracle BI Presentation Services のインスタンスを起動します。
4. 他のインスタンスからレプリケートされたフォルダを削除するかフォルダの名前を変更し、sawrepaj remotecopy コマンドを使用して他のインスタンスからコピーします。
5. instanceconfig.xml において UseReplication 要素を Y に設定します。詳細は、「レプリケーション用の instanceconfig.xml ファイルの編集」（105 ページ）を参照してください。
6. Oracle BI Presentation Services のインスタンスを再起動します。
7. Oracle BI Presentation Services のインスタンスに対して sawrepaj mark コマンドを使用して、レプリケートされるフォルダのリストをリストアします。詳細は、「Oracle BI Presentation Services Replication Agent の使用」（100 ページ）を参照してください。
8. 構成ファイルを編集し、Oracle BI Presentation Services のインスタンスをインポートまたはエクスポートの対象としているすべての ReplicationTask 要素から lastPerformed 属性を削除することにより、レプリケーション・タスクを再び有効にします。

Oracle BI Presentation Services Replication Agent の使用

Oracle BI Presentation Services Replication Agent（sawrepaj）は、一般的なレプリケーション・タスク（レプリケーションのコピー、エクスポート、インポートおよびマークなど）を実行するユーティリティです。

Oracle BI Presentation Services Replication Agent では、Oracle BI Presentation Services のインスタンスおよびレプリケーション・タスクに関する情報が必要です。この情報は、config.xml ファイルに格納します。config.xml ファイルの詳細は、「レプリケーション用の config.xml ファイルの作成」（102 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services Replication Agent のコマンドラインでは、次のフォーマットを使用します。

- UNIX の場合

  `sawrepaj.sh [/C パス ] コマンド [ コマンドのパラメータ ]`

  sawrepaj.sh ファイルは SAROOTDIR¥web¥bin¥sawrepaj（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）にあります。

- Windows の場合

  `sawrepaj.bat [/C パス ] コマンド [ コマンドのパラメータ ]`

  sawrepaj.bat ファイルは SAROOTDIR¥web¥bin¥sawrepaj（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）にあります。

/C に続くパスでは、config.xml ファイルへのパスを指定します。コマンドは次のいずれかを使用できます。

- mark
- remotecopy
- run

mark

すべての Oracle BI Presentation Server または指定した Oracle BI Presentation Server において、レプリケート対象のカタログ・フォルダのリストから、指定したカタログ・フォルダを追加または削除します。レプリケートされるカタログ・フォルダのリストは、{presentationcatalogpath}/root/system/replication（{presentationcatalogpath} は Presentation Catalog フォルダへのフルパス）にある構成項目に格納されます。

カタログ・フォルダをリストに追加しても、対応するカタログ項目がただちにレプリケートされるわけではありません。このコマンドを実行した後に行われた変更のみがレプリケーション・ログ・ファイルに記録され、記録後にレプリケートされます。

mark コマンドの構文は次のとおりです。

`sawrepaj [/C パス ] mark {all| サーバー名 } [/n] [ カタログ・フォルダ ]`

- **all | servername**:mark コマンドの実行先 Oracle BI Presentation Server の名前を指定します。すべてのサーバーにおいて mark コマンドを実行する場合は、all を指定します。特定のサーバーを使用する場合は、config.xml ファイルにおいて対応するサーバー要素の名前属性と一致する名前を指定する必要があります。

- **/n**: 指定したカタログ・フォルダをレプリケート対象のカタログ・フォルダのリストから削除する場合に指定します。これを指定しない場合は、カタログ・フォルダが追加されます。
- **カタログ・フォルダ**: レプリケート対象となるカタログ・フォルダのリストにおいて追加または削除するカタログ・フォルダのリストを指定します。リストの各フォルダは空白で区切ります。Presentation Catalog 全体（すべてのフォルダと情報（システム権限や Catalog グループのメンバーシップなど）を含む）を追加または削除する場合は、/ を使用します。フォルダを指定しない場合は、config.xml ファイルにリストされている指定したサーバーのすべてのフォルダに対して sawrepaj mark コマンドが実行されます。

次に例を示します。

```
sawrepaj /C OracleBI¥web¥bin¥sawrepaj mark all /
```

remotecopy

指定したカタログ・フォルダのコンテンツをコピー元サーバーからエクスポートして、コピー先サーバーにインポートします。

remotecopy コマンドの構文は次のとおりです。

```
sawrepaj [/C パス] remotecopy コピー元サーバー名 コピー先サーバー名 カタログ・フォルダ
```

- **コピー元サーバー名** :config.xml ファイルで指定されているコピー元サーバーの名前を指定します。
- **コピー先サーバー名** :config.xml ファイルで指定されているコピー先サーバーの名前を指定します。
- **カタログ・フォルダ**: リモートでコピーするカタログ・フォルダのリストを指定します。リストの各フォルダは空白で区切ります。フォルダを指定しない場合は、config.xml ファイルにリストされている指定したサーバーのすべてのフォルダに対して sawrepaj remotecopy コマンドが実行されます。

次に例を示します。

```
sawrepaj /C OracleBI¥web¥bin¥sawrepaj remotecopy Server1 Server2 users shared
```

run

config.xml ファイルで設定され期限切れになっていないすべてのレプリケーション・タスクを実行します。このコマンドには、実行パラメータはありません。

run コマンドの構文は次のとおりです。

```
sawrepaj [/C パス] run
```

次に例を示します。

```
sawrepaj /C OracleBI¥web¥bin¥sawrepaj run
```

レプリケーション用の config.xml ファイルの作成

Oracle BI Presentation Services Replication Agent の構成ファイル（config.xml）は、SAROOTDIR¥web¥bin¥sawrepaj（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）にあり、構造は次のとおりです。

```
<Config>
  <General>
    < ExportDirectory />
    < LogExpiresHours/>
    < RetryAttempts/>
  </General>
  <Server/>
  <Folderset>
    <Folder/>
  </Folderset>
  <ReplicationTask/>
</Config>
```

表 12 では、config.xml ファイルで設定可能な要素について説明します。

表 12. config.xml ファイルの要素

要素	親	出現回数	説明
Config	なし	1	XML ルート要素です。
General	Config	1	すべてのインスタンスおよびレプリケーション・タスクに適用される一般的な設定が含まれます。
Export Directory	General	1	エクスポート・ファイルの配置先共有ディレクトリへの UNC パスを指定します。すべての Oracle BI Presentation Services インスタンスから同じ名前でアクセスできる必要があります。 また、Oracle BI Presentation Services のインスタンスを実行するために使用するユーザー・アカウントでは、このディレクトリに対する読取り権限および書込み権限が必要です。
LogExpiresHours	General	1	すべての Oracle BI Presentation Services インスタンスでレプリケーション・ログが期限切れになる時間（倍精度型の値で単位は時間）を指定します。 この要素は、レプリケーションに参加している Oracle BI Presentation Services のすべてのインスタンスの中で最も小さい ReadLogRecordsSinceHoursAgo 要素の値に設定します。ReadLogRecordsSinceHoursAgo 要素の詳細は、「レプリケーション用の instanceconfig.xml ファイルの編集」（105 ページ）を参照してください。

表 12. config.xml ファイルの要素

要素	親	出現回数	説明
RetryAttempts	General	1	項目の変更を再試行する回数を指定します。 項目の変更で再試行が必要な場合は、項目がロックされていた場合などです。
Server	Config	1 ～ n	Oracle BI Presentation Server ごとに接続情報を定義します。その属性を次に示します。 ■ **name**: サーバーの論理 ID です。レプリケーション・タスクおよび sawrepaj コマンドラインでサーバーを識別するために使用します。 ■ **url**:Oracle BI Presentation Services のインスタンスの URL です。次に例を示します。http://localhost/analytics/saw.dll ■ **user**: ユーザー名です。 ■ **pwd**: パスワードです。
Folderset	Config	0 ～ n	カタログ・フォルダのリストを定義します。属性は次の 1 つだけです。 ■ **name**
Folder	Folderset	0 ～ n	フォルダがフォルダセットに追加されます。カタログ・フォルダへのフルパスを指定します。

表 12. config.xml ファイルの要素

要素	親	出現回数	説明
ReplicationTask	Config	0 ～ n	レプリケーション・タスクを定義します。その属性を次に示します。 ■ **source**: レプリケート元サーバー名です。Server 要素で定義したインスタンスと一致する必要があります。 ■ **destination**: レプリケート先サーバー名です。Server 要素で定義したインスタンスと一致する必要があります。 ■ **folders**: フォルダ・セットの名前です。Folderset 要素で定義したフォルダ・セットと一致する必要があります。 ■ **lastPerformed**: このタスクが最後に正常に実行されたときのタイムスタンプです。sawrepaj ユーティリティによりこの値が更新されます。 ■ **localChanges**: レプリケート元サーバーで直接行われた変更をエクスポートするかどうかを指定します。 　■ **true**: この値を指定すると、変更はエクスポートされます。 　■ **false**: この値を指定すると、変更はエクスポートされません。 　デフォルトは true です。 ■ **remoteChanges**: 別のサーバーで行われた変更がレプリケート元サーバーにおいてレプリケートされた場合に、変更を再エクスポートするかどうかを指定します。 　■ **true**: この値を指定すると、変更は再エクスポートされます。 　■ **false**: この値を指定すると、変更は再エクスポートされません。 　デフォルトは false です。

config.xml ファイルの例

次の XML ファイルは、config.xml ファイルの例です。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!-- Oracle BI Presentation Services Replication Agent Configuration File -->
<!-- The following example specifies that the entire Presentation Catalog (that is
all folders) on Server 1 is to be replicated on server 2 and that the entire Presentation
Catalog on Server 2 is to be replicated on server 1. -->

<Config>
   <General>
      <ExportDirectory>¥¥host1¥shared</ExportDirectory>
   </General>
```

```
      </Server name="1" pwd="" url="http://host1/analytics/saw.dll"
user="administrator"       pwd=""/>
      </Server name="2" pwd="" url="http://host2/analytics/saw.dll"
user="administrator"       pwd=""/>

      <Folderset name="all">
         <Folder>/</Folder>
      </Folderset>

      <ReplicationTask destination="2" source="1" folders="all" />
      <ReplicationTask destination="1" source="2" folders="all" />
   </Config>
```

レプリケーション用の instanceconfig.xml ファイルの編集

表 13 では、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）でレプリケーション用に設定可能な要素について説明します。

表 13. instanceconfig.xml ファイルにおけるレプリケーション用の要素

要素	説明
UseReplication	Oracle BI Presentation Services のインスタンスが、パブリッシャまたはサブスクライバとしてレプリケーションに参加するかどうかを指定します。 ■ **Y**: この値を指定すると、レプリケーションが有効になります。 ■ **N**: この値を指定すると、レプリケーションが無効になります。 デフォルトは N です。
Replication/Cluster/MyInstanceID	Oracle BI Presentation Services のこのインスタンスで生成されるログ・ファイルで使用する接尾辞（%INSTANCEID%）を特定します。ログ・ファイルの名前は次のような名前になります。 ■ 変更ログ・ファイルの場合：sawchange_%INSTANCEID%_%SEQNUM%.log ■ 再生ログ・ファイルの場合：sawplayback_%INSTANCEID%_%SEQNUM%.log この要素は、クラスタ化された環境では必須です。

表 13. instanceconfig.xml ファイルにおけるレプリケーション用の要素

要素	説明
Replication/Cluster/IDsInCluster	クラスタ内にあるすべての Oracle BI Presentation Services インスタンスを ID により特定します。ID はそれぞれカンマで区切ります。 この要素は、クラスタ化された環境では必須です。
Replication/RecordsInFileLimit	レプリケーション・ログ・ファイルに保存するレコードの数を指定します。 デフォルトは 5000 です。
Replication/ReadLogRecordsSinceHoursAgo	レプリケーション・ログ・ファイルをレプリケーション操作で読み込む時間間隔（時間単位）を指定します。 デフォルトは 168 です。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」を参照してください。

Presentation Catalog のアーカイブ

Presentation Catalog 内の個々のカタログ・フォルダまたは Presentation Catalog 全体をアーカイブできます。Presentation Catalog（カタログのルート・フォルダ）または個々のカタログ・フォルダをアーカイブすると、そのフォルダおよびサブフォルダにあるすべてのオブジェクトが単一の圧縮ファイルに保存されます。

注意：アーカイブ機能は、「Catalog: Archive Catalog」権限が割り当てられている Answers ユーザーおよび Delivers ユーザーも使用できます。Answers および Delivers のアーカイブ機能の詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』を参照してください。権限の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の権限（サービス利用全般）の設定について」（148 ページ）を参照してください。

Catalog Manager を使用すると、Presentation Catalog または個々のカタログ・フォルダをアーカイブすることも、Presentation Catalog または個々のカタログ・フォルダのアーカイブを解凍することもできます。アーカイブ解凍機能は Catalog Manager でのみ使用できます。Catalog Manager の使用方法の詳細は、第 7 章「Oracle BI Catalog Manager による Presentation Catalog の管理」を参照してください。

Presentation Catalog の個々のカタログ・フォルダまたは Presentation Catalog 全体をアーカイブするには

1. Oracle BI Presentation Services にログインします。
2. 「Settings」→「Administration」を選択します。
3. 「Manage Presentation Catalog」リンクをクリックします。

   「Manage Catalog」画面が表示されます。

4 カタログ全体ではなくカタログ・フォルダ（およびすべてのサブフォルダ）をアーカイブする場合は、対象となるフォルダにナビゲートします。

5 アーカイブ対象に応じて次の操作を行います。

- それぞれの項目やフォルダに割り当てられた権限も対象にする場合は、「Keep Permissions」チェック・ボックスを選択します。

  このオプションを選択しない場合、アーカイブ処理には権限が含まれません。アーカイブを解凍する際、システムによって、親フォルダの権限がすべての項目とフォルダに割り当てられます。

- アーカイブ対象となる項目とフォルダに割り当てられたタイムスタンプも対象にする場合は、「Keep Timestamp」チェック・ボックスを選択します。

  このオプションを選択しない場合、アーカイブ処理にはタイムスタンプ情報が含まれません。アーカイブを解凍する際、システムによって、項目またはフォルダが解凍された時間を示すタイムスタンプが適用されます。

6 「Archive Catalog」ボタンをクリックします。

「File Download」ダイアログ・ボックスが表示されます。

7 「Save」をクリックします。

「Save As」ダイアログ・ボックスが表示されます。

8 「Save As」ダイアログ・ボックスで適切な値を指定してから、「Save」をクリックします。

Presentation Catalog での項目の管理

Presentation Catalog の共有フォルダは、Oracle BI Presentation Services Administration の「Manage Catalog」画面で管理します。非表示項目が含まれるフォルダやコンテンツの表示、フォルダやコンテンツの作成、名前の変更、コピー、移動および削除を実行できます。項目の所有権を取得することもできます。項目の所有権を取得すると、所有者のみが項目を変更できます。これは、リクエストなどのサポートがユーザーにおいて必要になる場合に便利です。

Catalog Manager を使用すると、Presentation Catalog 内の項目を管理することもできます。Catalog Manager の使用方法の詳細は、第 7 章「Oracle BI Catalog Manager による Presentation Catalog の管理」を参照してください。

注意： Oracle BI Administration Tool の「Presentation」レイヤーで変更が行われると、変更に関連するテーブルや列に基づいたレポートやダッシュボードに影響する場合があります。Catalog Manager を使用すると、Presentation Catalog を「Presentation」レイヤーにおける変更と同期させることができます。

Presentation Catalog 内の項目に対する権限を変更する方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の権限（共有情報アクセス制御用）の設定について」（143 ページ）を参照してください。

Presentation Catalog の共有フォルダを表示するには

1 Oracle BI Presentation Services にログインします。

2 「Settings」→「Administration」を選択します。

3 「Manage Presentation Catalog」リンクをクリックします。

「Manage Catalog」画面が表示されます。

4 「Shared Folder」リンクをクリックします。

非表示項目を表示するには

■ 「Show Hidden Items」チェック・ボックスを選択します。

この操作によって、次のような非表示項目がユーザーのホーム・ディレクトリで表示されます。

- _alerts
- _briefingbook
- _delivers
- _filters
- _ibots
- _portal
- _prefs
- _selections
- _subscriptions

注意：「Show Hidden Items」チェック・ボックスの機能は、「See Hidden Items」権限で制御します。詳細は、「デフォルトの Oracle BI Presentation Services 権限割当て」（150 ページ）を参照してください。

新しいフォルダを作成するには

■ 「Create New Folder」リンクをクリックして画面の指示に従います。

フォルダのコンテンツを表示するには

■ フォルダ名をクリックします。

項目の所有権を取得するには

1 項目にナビゲートします。

2 対象となる項目の「Properties」アイコンをクリックします。

「Item Properties」画面が表示されます。

3 適切な認可レベルがある場合は、次のいずれかのリンクをクリックすると、項目またはフォルダの所有権を取得できます。

- Take Ownership of this item
- Take Ownership of this item and all subitems

フォルダまたは項目の名前を変更するには

1. 名前を変更するフォルダまたは項目にナビゲートします。
2. 対象となる項目の「Edit name and Description」アイコンをクリックします。

   「Rename Item」画面が表示されます。
3. 項目の新しい名前を入力します。

   説明も入力できます。
4. 項目の古い名前に対して他のユーザーが指定した参照を保持するには、次のオプションを選択します。

   Preserve references to the old name of this item

   このオプションを選択しないと、この項目を参照しているユーザーに対して項目を表示できなくなります。
5. 「Rename」をクリックします。

フォルダまたは項目を削除するには

1. 削除するフォルダにナビゲートします。
2. 対象となるフォルダの「Delete」アイコンをクリックします。

   「Confirm Item Deletion」画面が表示されます。

   注意：共有フォルダまたは共有項目を削除すると、共有項目を個人のダッシュボードに追加しているユーザーが共有項目にアクセスできなくなることに注意してください。
3. 削除を確認するには、「はい」をクリックします。

項目をコピーまたは移動するには

1. 項目にナビゲートします。
2. 対象となる項目の「Copy/Move」ボタンをクリックします。

   「Copy/Move Item Here」画面が表示されます。
3. 画面の指示に従います。
   - 新しいフォルダを作成するには、「Create New Folder」リンクをクリックして画面の指示に従います。
4. 非表示項目を表示するには、「Show Hidden Items」チェック・ボックスを選択します。

   この操作によって、次のような非表示項目がユーザーのホーム・ディレクトリで表示されます。
   - _alerts
   - _briefingbook
   - _delivers
   - _filters
   - _ibots
   - _portal

- _prefs
- _selections
- _subscriptions

注意：「Show Hidden Items」チェック・ボックスの機能は、「See Hidden Items」権限で制御します。詳細は、「デフォルトの Oracle BI Presentation Services 権限割当て」（150 ページ）を参照してください。

5 完了したら、「Copy/Move Item Here」をクリックします。

7 Oracle BI Catalog Manager による Presentation Catalog の管理

この章では、Oracle BI Catalog Manager を使用して Presentation Catalog を管理する方法について説明します。

この章の内容は次のとおりです。

- Catalog Manager について（112 ページ）
- Catalog Manager の操作に関するガイドライン（112 ページ）
- Catalog Manager の起動（112 ページ）
- Presentation Catalog を Catalog Manager で開く方法（113 ページ）
- Catalog Manager のワークスペースについて（115 ページ）
- Catalog Manager ワークスペースのビューの管理（116 ページ）
- Catalog Manager を使用しての Presentation Catalog 項目の検索（116 ページ）
- Presentation Catalog 間における項目のコピーと貼付け（117 ページ）
- Presentation Catalog 項目名の変更（118 ページ）
- Presentation Catalog 項目のプロパティの操作（119 ページ）
- Presentation Catalog 項目の権限の設定（119 ページ）
- XML 形式での Presentation Catalog オブジェクトの表示と編集（121 ページ）
- Catalog Manager におけるブラウザ・プリファレンスの設定（121 ページ）
- Catalog Manager におけるオブジェクトのプレビュー（122 ページ）
- Catalog Manager を使用しての Presentation Catalog テキスト文字列の検索と置換（122 ページ）
- Catalog Manager を使用しての Presentation Catalog データ表示レポートの作成（124 ページ）
- Presentation Catalog のキャプションのローカライズ（125 ページ）
- Presentation Catalog の新規バージョンへのアップグレードについて（127 ページ）
- Catalog Manager を使用しての Presentation Catalog のアーカイブと解凍（127 ページ）

Catalog Manager について

Catalog Manager は、Presentation Catalog をオンラインおよびオフラインで管理できるツールです。このツールは、Oracle Business Intelligence 管理者のみがアクセスできるセキュアなコンピュータにインストールする必要があります。

Catalog Manager では、次のことができます。

- Presentation Catalog 項目（フォルダ、リンクおよびオブジェクト（リクエスト、フィルタ、プロンプト、ダッシュボードなど））の管理。たとえば、項目名の変更、項目の削除、Presentation Catalog 間における項目の移動やコピーなどができます。
- eXtensible Markup Language（XML）形式における Presentation Catalog オブジェクトの表示と編集。
- リクエストやプロンプトなどのオブジェクトのプレビュー。
- Presentation Catalog テキストの検索と置換。
- Presentation Catalog 項目の検索。
- Presentation Catalog データを表示するレポートの作成。
- Presentation Catalog キャプションのローカライズ。
- Presentation Catalog の新規バージョンへのアップグレード。サイト固有の変更や拡張を損なうことなく実行できます。

注意：Catalog Manager で実行できる操作の多くは、Oracle BI Presentation Services Administration の「Manage BI Catalog」の操作を介して実行することもできます。詳細は、第 6 章「Oracle BI Presentation Catalog の管理」および第 8 章「Oracle BI Presentation Services のセキュリティの管理」を参照してください。

Catalog Manager の操作に関するガイドライン

Catalog Manager の操作に関するガイドラインを、次に示します。

- 必ず、操作対象となる Presentation Catalog をコピーしてバックアップしてください。
- 変更内容は確認してください。Catalog Manager では、変更が即時にコミットされます。Answers や Dashboards には、変更が表示されないことを通知するエラー・メッセージや変更を元に戻す機能はありません。ただし、適切でない変更を行った場合は、最後に保存したバックアップに戻すことができます。
- 電子メールへの貼付けコピーは行わないでください。この機能はサポートされていません。

Catalog Manager の起動

次の手順に従って、Catalog Manager を起動します。

Catalog Manager を起動するには

- Catalog Manager がインストールされているコンピュータで、「スタート」メニューから「プログラム」→「Oracle Business Intelligence」→「Catalog Manager」を選択します。

Presentation Catalog を Catalog Manager で開く方法

Presentation Catalog は、次の 2 つのモードのいずれかで開くことができます。

- オンライン・モード：実行中の Web サーバーにある Presentation Catalog に接続します。このモードでは、ユーザーの権限が適用されます。所持している権限に対応する項目のみを表示できます。
- オフライン・モード：ローカルのファイル・システムに接続します。このモードでは、スーパーユーザーまたはシステム・ユーザーとしてログインすることになるため、権限は適用されません。Presentation Catalog のすべての項目を表示できます。

オンライン・モードとオフライン・モードで実行できる操作

Catalog Manager を使用して実行できる操作の多くは、オンラインとオフラインの両方のモードで実行できます。どちらかのモードでのみ実行できる操作もあります。一般的に、各モードで実行できる操作は次のとおりです。

- オンライン・モード：読取り専用の操作およびカタログ全体に影響しない書込み操作（項目の権限設定など）
- オフライン・モード：オンライン・モードで実行できるほとんどの操作およびカタログ全体に影響する書込み操作（Presentation Catalog テキストの検索や置換など）

具体的に、各モードで実行できる操作を次に示します。

オンライン・モード操作	オフライン・モード操作
項目の切取り	項目の切取り
項目のコピー	項目のコピー
項目の貼付け	項目の貼付け
別のカタログに貼り付けるための項目のコピー	別のカタログに貼り付けるための項目のコピー
別のカタログからの項目の貼付け	別のカタログからの項目の貼付け
項目のショートカットの作成	項目のショートカットの作成
項目の削除	項目の削除
項目名の変更（参照を更新しない）	項目名の変更（参照を更新しない）
Catalog Manager のワークスペースのリフレッシュ	Catalog Manager のワークスペースのリフレッシュ
フォルダの作成	フォルダの作成
項目の権限の設定	項目の権限の設定
項目のプロパティの操作	項目のプロパティの操作
ワークスペースのビューの管理	ワークスペースのビューの管理
項目の検索	項目の検索
Catalog Manager データ表示レポートの作成	Catalog Manager データ表示レポートの作成
ブラウザ・プリファレンスの設定	ブラウザ・プリファレンスの設定

オンライン・モード操作	オフライン・モード操作
オブジェクトのプレビュー	項目名の変更とそれに伴う参照の更新（スマート・リネーム）
	Presentation Catalog テキストの検索と置換
	ローカライズを目的としたキャプションのエクスポート
	Catalog Manager の新規バージョンへのアップグレード

オンライン・モードとオフライン・モードの選択

オンライン・モードとオフライン・モードのどちらを使用するかは、実行するアクティビティによって決まります。一般的に、次のように使用することをお薦めします。

- オンライン・モード：Presentation Catalog に対してマイナーな増分変更や追加を行う場合（権限に関連する変更、単一項目の更新、本番環境への新規項目の移行など）
- オフライン・モード：Presentation Catalog 全体に対して変更を行う場合（項目名のグローバルな変更、再編成のための複数の項目の移動など）

注意：一般的に、オフライン・モードは、オンライン・モードよりも高速に処理されます。これは、個々のファイルのアクセス、作成および更新が直接行われるためです。また、Presentation Catalog では、オンライン・モードで操作を行う場合のように Oracle BI Presentation Services と通信する必要がないからです。

Presentation Catalog を開くには

1. Catalog Manager で、「File」→「Open Catalog」を選択します。
2. 必要なフィールドで適切な値を指定します。

   一部のフィールドとその説明を次の表に示します。

フィールド	説明
Type	Presentation Catalog を開くときのモード（オンライン・モードまたはオフライン・モード）を選択します。
Path	Presentation Catalog へのパスを入力します。 ■ Presentation Catalog をオンライン・モードで開く場合は、次の例のように、Oracle BI Presentation Services の URL を入力します。 http://<machinename>/analytics/saw.dll ■ Presentation Catalog をオフライン・モードで開く場合は、次の例のように、ローカルのファイル・システムにある Presentation Catalog フォルダを指定します。 C:¥OracleBIData¥web¥catalog¥default
Read-Only	Presentation Catalog を読取り専用モードで開く場合は、このフィールドを選択します。

3. 「OK」をクリックします。

Catalog Manager のワークスペースについて

Catalog Manager のワークスペースでは、Presentation Catalog 項目の表示や操作を行うことができます。開いている Presentation Catalog の次のフォルダが表示されます。

- 共有フォルダ：複数の Catalog ユーザー間で共有されるコンテンツが格納されます。これには、ビルトイン・アプリケーションとともに配布された事前構成済のダッシュボードやリクエスト、共有フィルタなどの項目が含まれます。
- システム・フォルダ：Oracle BI Presentation Services の管理要素が格納されます。これらの要素には、製品とともに配布される要素と、権限などのように Oracle BI Presentation Services 管理者によって設定される要素があります。
- ユーザー・フォルダ：適切な権限を持つ Catalog ユーザーが個人用フォルダに保存したコンテンツ（個々のリクエストなど）が格納されます。

Catalog Manager の外観

Catalog Manager は、次の主要コンポーネントで構成されます。

- メニュー・バー：次のメニューへのアクセスに使用します。
  - File: Presentation Catalog を開いたり閉じたりする操作や Catalog Manager の終了などを実行できるオプションがあります。
  - Edit: Presentation Catalog 項目を管理するためのオプション（「Cut」、「Copy」、「Permissions」など）があります。これらのオプションの多くは、マウスを右クリックすると表示されるポップアップ・メニューからも使用できます。
  - View: Catalog Manager ワークスペースの表示を管理するためのオプション（「Show Tree」、「Show Job Status」など）があります。
  - Tools: Presentation Catalog を管理するためのオプション（「Search and Replace」、「Upgrade Catalog」など）があります。
  - Help: Oracle Web サイトにアクセスするためのオプションと Catalog Manager に関する情報に対するオプションがあります。
- ツールバー：頻繁に使用するオプションに素早くアクセスできるボタン（「Cut」、「Copy」、「Paste」など）があります。
- 「Tree」ペイン：Presentation Catalog のフォルダが表示されます。「View」メニューの「Tree」オプションで「Show Objects」が選択されている場合のみ、このペインにはオブジェクトも表示されます。
- 「Table」ペイン：Presentation Catalog のフォルダとオブジェクトが表示されます。次の要素で構成されます。
  - ナビゲーション・バー（パス名を入力することにより操作対象となる Presentation Catalog 項目にナビゲート可能）
  - 「Name」、「Type」、「Permissions」、「Date Created」および「Last Modified」の列

    「Type」列により項目のタイプを識別します。「unknown file」と識別された項目は、通常は内部使用の項目であるため、Catalog Manager にはタイプが表示されません。

- 右クリックで表示されるポップアップ・メニュー：Presentation Catalog 項目を管理するためのオプション（「Rename」、「Properties」、「Permissions」など）があります。これらのオプションの多くは、「Edit」メニューでも使用できます。

Catalog Manager ワークスペースのビューの管理

Catalog Manager で表示する内容を管理できます。たとえば、「Tree」ペインにオブジェクトを表示したり、ジョブのステータスを表示できます。

Catalog Manager ワークスペースのビューを管理するには

- Catalog Manager で「View」を選択してから、次のオプションのいずれかを選択します。

オプション	説明
Show Tree	「Tree」ペインが閉じている場合に、「Tree」ペインが表示されます。
Show Table	「Table」ペインが閉じている場合に、「Table」ペインが表示されます。
Show Job Status	「Search and Replace」や「Smart Rename」などの実行中の処理の進行状況を確認できる「Background Job Status」ペインが表示されます。このペインの右上隅にあるアイコンを使用すると、終了したすべてのジョブを削除したり、進行状況の参照を設定することもできます。
Show Objects in Tree	フォルダだけでなく、オブジェクト（リクエストやフィルタなど）も「Tree」ペインに表示されます。
Refresh	「Tree」ペインと「Table」ペインに表示されている項目がリフレッシュします。データのリフレッシュは、Presentation Catalog の操作中に別のユーザーが行った変更を確認する場合などに実行します。

Catalog Manager を使用しての Presentation Catalog 項目の検索

Presentation Catalog にある項目は、「Search」機能を使用して検索できます。たとえば、administrator という値のプロパティを持つすべての項目を検索できます。

検索時は、次のオプションで検索を絞り込むことができます。

- Name: 項目名に検索を絞り込みます。
- Description: 「Description」プロパティに検索を絞り込みます。
- Property values: プロパティの値に検索を絞り込みます。
- Owner: 項目の所有者に検索を絞り込みます。

- Object type: すべてのタイプのオブジェクトを検索するか、または指定したタイプのオブジェクトに検索を絞り込みます。フォルダ、リクエスト、フィルタ、iBot、ダッシュボード・プロンプトまたはダッシュボード・ページを指定できます。
- Date: 指定した日において作成されたか更新された項目に検索を絞り込みます。

項目を検索するには

1. Catalog Manager で、Presentation Catalog を開きます。
2. ツールバーで「Search」をクリックします。
3. 「Search for any or all criteria below」フィールドに、検索する語句を入力します。
4. 検索を絞り込む場合は、「Advanced Search」をクリックします。
5. 「Advanced Search」領域で、検索の絞込み条件を指定します。
6. 「Search」をクリックします。

ヒント： 検索が終了したら、ツールバーで「Explorer」をクリックすると、「Tree」ペインと「Table」ペインに戻ります。

Presentation Catalog 間における項目のコピーと貼付け

あるカタログの項目をコピーして、別のカタログに貼り付けることができます。どのモードでカタログを開いていても、違いはありません。つまり、項目のコピーと貼付けは、次のカタログ間で実行できます。

- オンライン・カタログからオフライン・カタログへ（またはオフライン・カタログからオンライン・カタログへ）
- あるオンライン・カタログから別のオンライン・カタログへ
- あるオフライン・カタログから別のオフライン・カタログへ

この機能は特に、オフラインで新しい項目をカタログに作成してから、Oracle BI Presentation Services を停止せずに項目を本番環境に移行する場合などに便利です。

Presentation Catalog は、階層構造でフォルダが作成されます。項目のコピーやマージを行うときは、対象となる項目に関連付けられた項目（ダッシュボード・フォルダ、リクエスト・リンク、リクエストなど）もコピーされることに注意してください。外部アプリケーション内の URL パスは、フォルダ・パス全体をコピーしない場合（たとえば、リンクまたはテキストとしてダッシュボードに追加した場合）には、コピーまたはマージの操作を実行した後で再び確立を行う必要があります。

Presentation Catalog 間における項目のコピーと貼付けを行うには

1. Catalog Manager で、変更対象となる Presentation Catalog（コピー先のカタログ）を開きます。

   ヒント： 両方のカタログが同じ名前の場合は、作業中に 2 つのカタログを区別できるように、開く前にどちらかの名前を変更しておくと便利です。

2 別の Catalog Manager インスタンスを使用して、コピーする項目がある Presentation Catalog（コピー元のカタログ）を開きます。

3 必要に応じて、両方の Catalog Manager インスタンスの画面上の位置を変更して、両インスタンスのタイトル・バーを表示できるようにします。

4 コピー元の Presentation Catalog で、コピーする項目を右クリックしてから、「Copy for another catalog」を選択します。

5 コピー先の Presentation Catalog で、項目を貼り付ける場所で右クリックしてから、「Paste from another catalog」を選択します。

Presentation Catalog 項目名の変更

Presentation Catalog の項目名は変更できます。これは、開発環境から本番環境へ移行する際に便利です。

項目名を変更するには、次の 2 種類の方法があります。

- 参照を更新せずに名前を変更する方法：項目名は変更されますが、他のカタログ項目で使用している場合がある元の名前への参照は維持されます。
- 名前を変更して参照も更新する方法：項目名は変更し、他の項目で使用している場合がある参照が新しい名前に変更されます（つまり、元の名前への参照は維持されない）。

  注意：項目名を変更して参照も更新するには、Presentation Catalog をオフライン・モードで開く必要があります。

警告：ユーザー・フォルダにある「My Dashboard」ダッシュボードの名前は変更しないでください。

参照を更新せずに項目名を変更するには

1 Catalog Manager で、Presentation Catalog を開きます。

2 名前を変更する項目にナビゲートします。

3 「Name」列で項目を右クリックしてから、「Rename」を選択します。

4 項目の新しい名前を入力します。

項目名を変更して参照も更新するには

1 Catalog Manager で、Presentation Catalog をオフライン・モードで開きます。

2 名前を変更する項目にナビゲートします。

3 「Name」列で項目を右クリックしてから、「Smart Rename」を選択します。

4 項目の新しい名前を入力します。

注意：ウィンドウの右下にあるプログレス・バーに、参照の更新の進行状況が表示されます。

Presentation Catalog 項目のプロパティの操作

Catalog Manager の「Properties」オプションを使用すると、次のことができます。

- Presentation Catalog 項目のプロパティの作成、表示、編集および削除
- Presentation Catalog 項目の所有権の取得

  項目の所有権を取得すると、その所有者のみが項目を変更できるようになります。これは、リクエストなどのサポートがユーザーにおいて必要になる場合に便利です。
- Oracle Business Intelligence で Presentation Catalog 項目を非表示にするための属性の変更

Presentation Catalog 項目のプロパティを操作するには

1. Catalog Manager で、Presentation Catalog を開きます。
2. 項目にナビゲートします。
3. 「Name」列で項目を右クリックしてから、「Properties」を選択します。
4. 必要な操作を実行します。
   - a プロパティを作成、編集または削除するには、「New」ボタン、「Edit」ボタンまたは「Delete」ボタンを使用します。

     注意：「New」ボタンは、新規プロパティの作成に使用します。このボタンは、オラクル社から指示があった場合にのみ使用してください。
   - b 項目の所有権を取得するには、「Take ownership」ボタンをクリックします。
   - c 項目の属性を変更して非表示にする（項目が Oracle Business Intelligence に表示されないようにする）には、「Hidden」オプションを選択します。

     注意：「Read-Only」オプションは使用されません。「System」オプションは、項目がシステム内部で管理されていることを示します。このオプションは変更しないでください。
5. 「閉じる」をクリックします。

Presentation Catalog 項目の権限の設定

権限は、Presentation Catalog 項目のアクセス制御に使用されます。

Oracle BI Presentation Services の権限の詳細は、第 8 章「Oracle BI Presentation Services のセキュリティの管理」を参照してください。

Presentation Catalog 項目の権限を設定するには

1. Catalog Manager で、Presentation Catalog を開きます。
2. 項目にナビゲートします。
3. 「Name」列で項目を右クリックしてから、「Permissions」を選択します。

   「Permissions」ダイアログ・ボックスに、次の 2 つのリストが表示されます。

- 「**Users and groups (Explicit Permissions)**」リスト：この項目に設定されている明示的な権限があるユーザーとグループが表示されます。
- 「**Additional users and groups (Effective Permissions)**」リスト：グループの継承を介して付与されたアクセス権限があるユーザーとグループ、およびリクエストへのアクセス権限がないユーザーとグループがそれぞれ表示されます。

4 権限を設定する項目が「Additional users and groups (Effective Permissions)」リストにある場合は、項目を選択してから左矢印ボタン（<）をクリックして、「Users and groups (Explicit Permissions)」リストに移動します。

注意：グループのみを表示するには、「Show groups only」オプションを選択します。

5 「Users and groups (Explicit Permissions)」リストで項目を選択します。

6 「Permissions」列のドロップダウン・リストで、新しい権限を選択します。

権限	意味
No Access	項目に対するユーザーまたはグループのアクセスが拒否されます。アクセスの明示的な拒否は、他の権限よりも優先されます。
Read	ユーザーまたはグループに項目の表示を許可しますが、変更はできません。
Traverse	選択したフォルダにアクセスする権限をユーザーが所持していない場合、そのユーザーまたはグループに、選択したフォルダにあるフォルダ・オブジェクトへのアクセスを許可します。 たとえば、ユーザーに /shared/test フォルダに対する「Traverse」権限を付与したとします。この場合、ユーザーは /shared/test フォルダにあるオブジェクトにはアクセスできません。しかし、そのフォルダよりも下位レベルのフォルダ（/shared/test/guest など）にあるオブジェクトにはアクセスできます。
Change/Delete	ユーザーまたはグループに、項目の表示、変更または削除を許可します。
Full Control	ユーザーまたはグループに、項目に対する完全制御を許可します。これは、事前構成された管理者ユーザー ID にデフォルトで付与されている認可レベルです。

7 必要に応じて、「Apply Permissions: Recursively」オプションをクリックします。

8 「OK」をクリックします。

注意：「Users and groups (Explicit Permissions)」リストのユーザーまたはグループを、「Additional users and groups (Effective Permissions)」リストに移動すると、そのユーザーまたはグループの権限は「No Access」にリセットされます。ユーザーまたはグループを複数のリスト間において移動するには、移動するユーザーまたはグループを選択してから、右矢印ボタンまたは左矢印ボタンをクリックします。

XML 形式での Presentation Catalog オブジェクトの表示と編集

リクエスト、ダッシュボード、フィルタなどの Presentation Catalog オブジェクトは、XML 形式で表示および編集できます。

警告：XML コードを変更すると、Presentation Catalog におけるオブジェクトの表現が変わります。

オブジェクトの XML の説明を表示するには

1. Catalog Manager で、Presentation Catalog を開きます。
2. オブジェクトにナビゲートします。
3. 「Name」列でオブジェクトを右クリックしてから、「Properties」を選択します。
4. 「Edit XML」をクリックします。
5. XML 定義の確認が終了したら、「XML」ダイアログ・ボックスを閉じます。
6. 「Properties」ダイアログ・ボックスで「閉じる」をクリックします。

オブジェクトの XML の説明を編集するには

1. Catalog Manager で、Presentation Catalog を開きます。
2. オブジェクトにナビゲートします。
3. 「Name」列でオブジェクトを右クリックしてから、「Properties」を選択します。
4. 「Edit XML」をクリックします。
5. 「Object XML」領域で変更を行います。

   注意：オブジェクトの XML の説明を編集すると、Presentation Catalog では XML の書式エラーのみがチェックされ、他のエラーはチェックされません。
6. 「Save」をクリックします。
7. 「Properties」ダイアログ・ボックスで「閉じる」をクリックします。

Catalog Manager におけるブラウザ・プリファレンスの設定

オブジェクトを Catalog Manager でプレビューする場合は、オブジェクトを表示するデフォルト・ブラウザを識別する必要があります。オブジェクトのプレビュー方法の詳細は、「Catalog Manager におけるオブジェクトのプレビュー」を参照してください。

ブラウザ・プリファレンスを設定するには

1. Catalog Manager で、「Tools」→「Preferences」を選択します。

2 「Default Browser」フィールドで、使用しているオペレーティング・システム用に設定されているデフォルト・ブラウザと同じブラウザを選択します。

3 「OK」をクリックします。

Catalog Manager におけるオブジェクトのプレビュー

リクエストやプロンプトなどのオブジェクトを Catalog Manager でプレビューできます。

注意：オブジェクトをプレビューするには、Presentation Catalog をオンライン・モードで開く必要があります。

オブジェクトをプレビューするには

1 Catalog Manager で、Presentation Catalog をオンライン・モードで開きます。

2 オブジェクトにナビゲートします。

3 「Name」列でオブジェクトを右クリックしてから、「Preview」を選択します。

Catalog Manager を使用しての Presentation Catalog テキスト文字列の検索と置換

Catalog Manager を使用すると、Presentation Catalog にある特定のテキスト文字列を検索して他のテキスト文字列に置換できます。

具体的には、次の検索と置換を実行できます。

- 単一テキスト文字列の検索と置換
- 複数のテキスト文字列の一括検索と一括置換

注意：テキスト文字列の検索と置換を実行するには、Presentation Catalog をオフライン・モードで開く必要があります。

単一 Presentation Catalog テキスト文字列の検索と置換

次の手順に従って、Presentation Catalog にある単一テキスト文字列を検索し、他のテキスト文字列に置換します。

単一テキスト文字列を検索して置換するには

1 Catalog Manager で、Presentation Catalog をオフライン・モードで開きます。

2 「Tools」→「Search and Replace」を選択します。

3 「Search (general)」フィールドに、検索するテキスト文字列を入力します。

4 「Replace with」フィールドに、置換後のテキスト文字列を入力します。

5 「OK」をクリックします。

複数の Presentation Catalog テキスト文字列の検索と置換について

複数の Presentation Catalog テキスト文字列の一括検索と一括置換は、対象となるテキスト文字列を指定した XML ファイルをインポートすることで実行できます。

複数のテキスト文字列の検索と置換に使用する XML ファイルのフォーマット

検索と置換用の XML ファイルには、<action> 要素を使用して、検索対象のテキスト文字列と置換後のテキスト文字列を指定します。<action> 要素は、<commands> 要素内に定義します。

<action> 要素には、次の属性があります。

- command: テキスト文字列、列名、サブジェクト領域名のどれを置換するかを指定します。有効な値を次に示します。
  - textReplace: 列名またはサブジェクト領域名以外のテキスト文字列を置換します。
  - renameColumn: 列名を置換します。
  - renameSubjectArea: サブジェクト領域名を置換します。
- oldValue: 検索するテキスト文字列を指定します。
- newValue: 置換後のテキスト文字列を指定します。

複数のテキスト文字列の検索と置換に使用する XML ファイル例

ここでは、複数のテキスト文字列の一括検索と一括置換に使用する XML ファイルの例を示します。

```
- <commands>

    <action command="textReplace" oldValue="Analytics" new Value="Oracle Business
    Intelligence"/>

    <action command="textReplace" oldValue="Markets.Region" new
    Value="Markets.CountryRegion"/>

    <action command="renameColumn" oldValue="Region" new Value="CountryRegion"/>

    <action command="renameSubjectArea" oldValue="SupplierSales" new
    Value="SupplySales"/>

  </commands>
```

複数の Presentation Catalog テキスト文字列の検索と置換

次の手順に従って、複数の Presentation Catalog テキスト文字列を一括で検索して置換します。

複数のテキスト文字列を検索して置換するには

1. 複数のテキスト文字列の検索と置換に使用する XML ファイルを作成します。詳細は、「複数の Presentation Catalog テキスト文字列の検索と置換について」（123 ページ）を参照してください。
2. Catalog Manager で、Presentation Catalog をオフライン・モードで開きます。
3. 「Tools」→「Search and Replace」を選択します。
4. 「Import from File」フィールドで、手順 1 で作成した XML ファイルのパスを入力するか、参照して選択します。
5. 「OK」をクリックします。

Catalog Manager を使用しての Presentation Catalog データ表示レポートの作成

次のオブジェクト・タイプの Presentation Catalog データを表示するレポートを作成できます。

- リクエスト
- ダッシュボード
- セグメント
- セグメント・ツリー
- リスト・フォーマット

レポートは、画面に表示することも、ファイルに保存することもできます。

Presentation Catalog データを表示するレポートを作成するには

1. Catalog Manager で、Presentation Catalog を開きます。作成するレポートにおいて、Oracle BI Presentation Services に対して送信するオブジェクトの SQL を出力する場合は、Presentation Catalog をオンライン・モードで開く必要があります。
2. 「Tools」→「Create Report」を選択します。
3. 「Columns in Report」リストに、レポートに表示する列を指定します。「Available Columns」リストと「Columns in Report」リストの間で列を移動するには、左矢印ボタンと右矢印ボタン（< と >）を使用します。レポートに表示する列の順序を設定するには、プラス記号ボタンおよびマイナス記号ボタン（+ と -）を使用します。
4. 同じ行をレポートに出力しないようにするには、「Distinct」フィールドを選択します。
5. 「Output the following」セクションに、データの出力元フォルダ（すべての共有フォルダまたは特定のパスにあるフォルダ）を指定します。

6 レポートをファイルに保存するには、「Save report to」セクションで、保存先ファイルのパス名を指定します。さらに、ファイルを上書きするか、ファイルの末尾にデータを追加するかのどちらかを指定します。ファイルが存在しない場合は、新しく作成されます。

7 「OK」をクリックします。

Presentation Catalog のキャプションのローカライズ

Presentation Catalog のテキスト文字列をローカライズする必要がある場合は、テキスト文字列を翻訳用にエクスポートして、翻訳が完了した時点で公開することができます。ローカライズ・チームとともに、文字が適切にエスケープ処理されていることを確認し、翻訳後のテキスト文字列に誤りがある場合は修正します。

注意：テキスト文字列をエクスポートするには、Presentation Catalog をオフライン・モードで開く必要があります。

エクスポート処理では、共有フォルダにある最初のレベルの各サブフォルダに XML ファイルが 1 つ作成され、ファイル名は foldernameCaptions.xml のフォーマットになります。foldername は、共有フォルダにあるサブフォルダの名前になります。各 XML ファイルには、対応する最初のレベルのフォルダとそのサブフォルダにあるすべてのコンテンツを示すテキスト文字列が挿入されます。

たとえば、Presentation Catalog の共有フォルダに、最初のレベルのフォルダとして Marketing フォルダ、Service フォルダおよび Sales フォルダがある場合、エクスポート処理では、次の 3 つの XML ファイルが作成されます。

- MarketingCaptions.xml
- SalesCaptions.xml
- ServiceCaptions.xml
- コンテンツが翻訳されたら、それらのフォルダを次に示すような SADATADIR ディレクトリの対応する場所に配置します。SADATADIR はデータ・ディレクトリです。

  SADATADIR¥web¥res¥l_xx¥Captions

  Oracle BI Presentation Services のサービスが起動すると、コンテンツがロードされます。

Presentation Catalog のテキスト文字列をエクスポートするには

1 Catalog Manager で、Presentation Catalog をオフライン・モードで開きます。

2 「Tools」→「Export Captions」を選択します。

3 出力の書込み先を参照して選択し、「OK」をクリックします。

4 新しいテキスト文字列、および最後のエクスポート以降に変更されたテキスト文字列のみをエクスポートするには、「Only export new or changed strings」を選択します。

5 「Description」プロパティをエクスポートから除外するには、「Exclude Descriptions」を選択します。

6 「OK」をクリックします。

  エクスポート処理は数分かかる場合があります。

7 エクスポート処理が完了したら、出力ファイルをローカライゼーション・チームに配布します。

翻訳する言語ごとに、すべての出力ファイルをコピーする必要がある場合もあります。

Presentation Catalog のテキスト文字列を公開するには

■ 翻訳された XML ファイルを、次に示すような SADATADIR ディレクトリの対応する場所に配置します。SADATADIR はデータ・ディレクトリです。

SADATADIR¥web¥res¥l_xx¥Captions

xx は、言語拡張子です。

次の表に、言語拡張子の例を示します。

言語拡張子	言語
cs	チェコ語
da	デンマーク語
de	ドイツ語
en	英語
es	スペイン語
fi	フィンランド語
fr	フランス語
it	イタリア語
ja	日本語
ko	韓国語
nl	オランダ語
pt	ポルトガル語
pt-br	ポルトガル語（ブラジル）
sv	スウェーデン語
zh	簡体字中国語
zh-tw	繁体字中国語

サポートされている言語の詳細は、Siebel SupportWeb にある『Oracle Business Intelligence Suite Enterprise Edition システム要件およびサポートされるプラットフォーム』を参照してください。

翻訳されたキャプションを開発環境から本番環境へ移行するには

■ キャプション・ファイルの有無に応じて、次のいずれかの操作を行います。

  ■ キャプション・ファイルが本番環境に存在しない場合は、単純にファイルを開発環境から本番環境にコピーします。

- キャプション・ファイルが本番環境にすでに存在している場合は、最初に既存のファイルをコピーしてバックアップします。次に、キャプション・ファイルを本番環境においてテキスト・エディタまたは XML 編集ツールで開き、開発環境で行った変更を手動で挿入します。この挿入操作は慎重に行ってください。

Presentation Catalog の新規バージョンへのアップグレードについて

次のような場合は、組織で現在使用している Presentation Catalog を新しいバージョンにアップグレードする必要があります。

- インストール済のビルトイン・アプリケーションがある場合
- Presentation Catalog がカスタマイズされている場合
- Presentation Catalog の新規バージョンを受領した場合

注意：以前のバージョンのビルトイン・アプリケーションで配布された Presentation Catalog に変更を加えていない場合は、カタログのアップグレードは必要ありません。新しいバージョンのカタログを使い始めることもできます。

Presentation Catalog の更新では、次の 3 つのカタログが使用されます。

- 元の Presentation Catalog: 現在インストールされている Oracle BI アプリケーションとともに配布された Presentation Catalog です。インストール CD-ROM にも、ルート・レベルの OracleBI フォルダとして配布されています。
- 現在の Presentation Catalog: SADATADIR¥web¥catalog ディレクトリとしてインストールされている Presentation Catalog です。SADATADIR はデータ・ディレクトリです。
- 変更済の Presentation Catalog: 現在使用している Presentation Catalog です。

Catalog Manager を使用して、Presentation Catalog をアップグレードします。Catalog Manager では、現在の Presentation Catalog と変更済の Presentation Catalog の両方のコンテンツが、元の Presentation Catalog のコンテンツと比較され、変更が現在の Presentation Catalog にマージされて、アップグレード相違点のリストが作成されます。これらの相違点は、その処理方法を指定することによって解決する必要があります。Presentation Catalog 間においてコンテンツが競合する場合は、どの Presentation Catalog のコンテンツを採用するかを選択できます。最終的には、新しいメタデータのみでなく、サイト固有の変更も含まれる Presentation Catalog にマージされます。

Catalog Manager を使用して Presentation Catalog をアップグレードする方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Applications Upgrade Guide』を参照してください。

Catalog Manager を使用しての Presentation Catalog のアーカイブと解凍

アーカイブと解凍は、Presentation Catalog 全体に対して行うことも、Presentation Catalog にある個々のカタログ・フォルダに対して行うこともできます。それぞれ次のように処理されます。

- Presentation Catalog（カタログのルート・フォルダ）または個々のカタログ・フォルダをアーカイブすると、フォルダにあるすべてのオブジェクトとそのフォルダのサブフォルダが 1 つの圧縮ファイルに保存されます。
- Presentation Catalog または個々のカタログ・フォルダを解凍すると、アーカイブ・ファイルが解凍されて、フォルダにあるすべてのオブジェクトとそのフォルダのサブフォルダが現在のオフライン・カタログに格納されます。既存のフォルダの名前が、解凍されるフォルダと同じ名前の場合、既存のフォルダは上書きされます。

Oracle BI Presentation Services Administration を使用して、Presentation Catalog をアーカイブすることもできます。解凍機能は Catalog Manager でのみ使用できます。詳細は、「Presentation Catalog のアーカイブ」（106 ページ）を参照してください。

Presentation Catalog にある個々のカタログ・フォルダまたは Presentation Catalog 全体を指定ファイルにアーカイブするには

1. Catalog Manager で、Presentation Catalog をオフライン・モードで開きます。
2. 次のいずれかの手順を実行してアーカイブします。
   - Presentation Catalog 全体をアーカイブする場合は、「File」→「Archive Catalog」を選択します。
   - 個々のカタログ・フォルダをアーカイブする場合は、アーカイブするカタログ・フォルダを右クリックしてから、「Archive」を選択します。
3. 「Archive File Path」フィールドに、Presentation Catalog または個々のカタログ・フォルダのアーカイブ先となるファイルのパス名を指定します。
4. アーカイブ対象に応じて次の操作を行います。
   - アーカイブ対象となる項目とフォルダに割り当てられたタイムスタンプも対象にする場合は、「Keep Timestamp」チェック・ボックスを選択します。

     このオプションを選択しない場合、アーカイブ処理にはタイムスタンプ情報が含まれません。アーカイブを解凍する際、システムによって、項目またはフォルダが解凍された時間を示すタイムスタンプが適用されます。
   - それぞれの項目やフォルダに割り当てられた権限も対象にする場合は、「Keep Permissions」チェック・ボックスを選択します。

     このオプションを選択しない場合、アーカイブ処理には権限が含まれません。アーカイブを解凍する際、システムによって、親フォルダの権限がすべての項目とフォルダに割り当てられます。
5. 「OK」をクリックします。

最後に使用したアーカイブ・ファイルに Presentation Catalog 全体をアーカイブするには

1. Catalog Manager で、Presentation Catalog をオフライン・モードで開きます。
2. 「File」→「Quick Archive」を選択します。

Presentation Catalog 全体または個々のカタログ・フォルダを解凍するには

1. Catalog Manager で、Presentation Catalog をオフライン・モードで開きます。

2. カタログ・フォルダを解凍する場合は、そのフォルダの解凍場所にナビゲートします。
3. 「File」→「Unarchive Catalog」を選択します。
4. 「Archive File Path」フィールドに、解凍する Presentation Catalog またはカタログ・フォルダのパス名を指定します。
5. 「OK」をクリックします。

8 Oracle BI Presentation Services のセキュリティの管理

この章では、ユーザーの権限が次の項目に限定されるように Oracle BI Presentation Services のセキュリティを設定する方法について説明します。

- Presentation Catalog の適切な項目にアクセスする権限
- ユーザーに対して適切な操作を実行する権限

組織において Oracle Business Intelligence Infrastructure やビルトイン・アプリケーションを使用しており、アプリケーションの外部で追加コンテンツを作成した場合に、この章の記載に従ってください。

この章の内容は次のとおりです。

- Oracle BI Presentation Services のセキュリティの概要（132 ページ）
- Presentation Services グループのタイプ（134 ページ）
- Presentation Services グループの管理（135 ページ）
- Oracle BI Presentation Services のユーザー認証について（138 ページ）
- Presentation Services グループとセッション変数について（140 ページ）
- Oracle BI Presentation Services の権限の継承（141 ページ）
- Oracle BI Presentation Services の権限（共有情報アクセス制御用）の設定について（143 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services Administration」画面の概要（145 ページ）
- Oracle BI Presentation Services Administration における権限の設定（147 ページ）
- Oracle BI Presentation Services の権限（サービス利用全般）の設定について（148 ページ）
- Oracle BI Presentation Services Administration における権限の設定（149 ページ）
- デフォルトの Oracle BI Presentation Services 権限割当て（150 ページ）
- Oracle BI Presentation ServicesのセキュリティをPresentation Catalogとダッシュボード用に構成するためのガイドライン（157 ページ）
- 代理ユーザーの承認について（162 ページ）
- 代理ユーザーの承認のプロセス（163 ページ）
- ユーザー開始管理操作の有効化（168 ページ）

Oracle BI Presentation Services のセキュリティの概要

この項では、Oracle BI Presentation Services のセキュリティの概要について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 「Oracle BI Presentation Services のセキュリティが設定される場所」（132 ページ）
- 「グループと Presentation Services グループとの間の相違点」（132 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services におけるセキュリティの目標」（133 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services のアクセス制御と権限について」（133 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services のユーザー権限について」（134 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services のユーザー認証について」（134 ページ）

Oracle BI Presentation Services のセキュリティが設定される場所

Oracle BI Presentation Services に反映されるセキュリティ設定は、次の Oracle Business Intelligence コンポーネントで設定されます。

- **Oracle BI Administration Tool**: これを使用して、次の作業を実行します。
  - ビジネス・モデル、テーブル、列およびサブジェクト領域に対する権限を設定する作業
  - 各ユーザー用にデータベースにアクセスする権限を指定する作業
  - ユーザーからアクセス可能なデータを制限するフィルタを指定する作業
  - 認証オプションを設定する作業

  詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。
- **Oracle BI Presentation Services Administration**: これを使用して、Presentation Catalog の項目（ダッシュボードなど）に対する権限および操作（ビューの編集、iBot の作成、プロンプトの作成など）の実行権限を設定します。
- **Catalog Manager**: これを使用して、Presentation Catalog の項目（ダッシュボードなど）に対する権限を設定します。Catalog Manager の詳細は、第 7 章「Oracle BI Catalog Manager による Presentation Catalog の管理」を参照してください。

グループと Presentation Services グループとの間の相違点

Oracle Business Intelligence では、グループと Presentation Services グループの両方が使用されます。両者は似ていますが、相違点があります。どちらのタイプのグループも、一連のユーザーに対する権限を付与または拒否するセキュリティ属性のセットです。ユーザーをグループ化することによって、これらの権限の管理が簡略化されます。

- グループでは、Oracle BI Server オブジェクトに権限が適用されます。
- Presentation Services グループでは、Oracle BI Presentation Services オブジェクトに権限が適用されます。

Oracle BI Presentation Services におけるセキュリティの目標

セキュリティの主な目標は、次の点を確保することです。

- 適切なユーザーのみが、Oracle BI Presentation Services にログオンしてアクセスできること。これは、Oracle BI Server からログオン権限を割り当て、ユーザーを認証することによって実現されます。認証の詳細は、「Oracle BI Presentation Services のユーザー認証について」（138 ページ）を参照してください。
- 従業員は、自分にとって適切なデータにのみアクセスできること。これは、権限の形態でアクセス制御を適用することによって実現されます。
- 従業員は、自分にとって適切な操作のみを実行する権限を持つこと。これは、ユーザー権限の適用によって実現されます。

シングル・サインオン機能を Web サーバーから使用するように Oracle Business Intelligence を設定できます。Oracle BI Presentation Services では、エンド・ユーザーの情報を取得する場合にこの機能が使用されます。シングル・サインオンの詳細は、『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストレーションおよび構成ガイド』のユーザー認証のサポートに関する項を参照してください。

Oracle BI Presentation Services のアクセス制御と権限について

アクセス制御によって、Presentation Catalog の共有項目に対するアカウントにアクセスする権限が定義されます。カタログの項目は、フォルダとリクエストです。フォルダには、アプリケーション・フォルダ、ダッシュボード・フォルダおよびダッシュボード・ページ・フォルダがあります。

アカウントとは、次のいずれかです。

- 個々のユーザー
- 1 人以上のユーザーがメンバーとなっている Presentation Services グループ

権限は、アカウントのアクセスが許可されているオブジェクトへのアクセスのタイプを示します。たとえば、「Read」や「Full Control」があります。

Presentation Catalog の各項目には、各項目に対してどのアカウントがどの権限を持っているかが定義されるアクセス制御リストがあります。アクセス制御リストは、項目の対応する属性ファイル（.atr）に格納されます。アクセス制御リストには、表 14 に示すような一般的な形態があります。

表 14. カタログ項目のアクセス制御リスト

アカウント	権限
Presentation Services グループ 1	Read
Presentation Services グループ 3	Full Control
Presentation Services グループ 8	Read
ユーザー 4	Read
ユーザー 9	Full Control
ユーザー 11	Full Control

権限の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の権限（共有情報アクセス制御用）の設定について」（143 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services のユーザー権限について

権限とは、ユーザーが Oracle BI Presentation Services において実行する権利がある操作のことです。権限の例として、「Edit system-wide column formats」や「Create iBots」があります。

権限は、アカウント（つまり個々のユーザー）または Presentation Services グループに関連付けることによって管理します。特定のアカウントに、特定の権限が付与または拒否されます。これらの関連付けは、権限割当て表において作成されます。

一般的な形態の権限割当て表を 134 ページの表 15 に示します。右の列にある Presentation Services グループに対して、左の列にある権限が付与されます。

表 15. 権限割当て表

権限	権限の割当て先アカウント
権限 1	Presentation Services グループ 2、Presentation Services グループ 4
権限 2	Presentation Services グループ 1、Presentation Services グループ 3
権限 3	Presentation Services グループ 1、ユーザー 3
権限 4	Presentation Services グループ 1、ユーザー 1、ユーザー 4、ユーザー 6
権限 5	Presentation Services グループ 2、Web グループ 3、ユーザー 4

権限の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の権限（サービス利用全般）の設定について」（148 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services のユーザー認証について

認証は、ユーザー名とパスワードを使用して、ログオンするユーザーを識別するプロセスです。認証されたユーザーは、システム（ここでは Oracle BI Presentation Services）にアクセスするための適切な認可が付与されます。Oracle BI Presentation Services には独自の認証システムはなく、Oracle BI Server に組み込まれている認証システムに依存しています。

認証の詳細は、「Oracle BI Presentation Services のユーザー認証について」（138 ページ）を参照してください。

Presentation Services グループのタイプ

Presentation Services グループは、システムまたは Oracle Business Intelligence 管理者によって定義されます。ユーザーは、Presentation Services グループに割り当てられると、そのグループのメンバーになります。Presentation Services グループのメンバーシップは、明示的な割当てまたは継承によってユーザーに関連付けられる権限の指定に使用されます。

Presentation Services グループは、ユーザーに直接割り当てるデフォルト設定やプリファレンスなどに関してあいまいさが回避されるため、ユーザーにとってのロールとみなすこともできます。

この項の内容は次のとおりです。

■ 「Oracle BI Presentation Services におけるシステム定義 Presentation Services グループ」（135 ページ）
■ 「Oracle BI Presentation Services における管理者定義 Presentation Services グループ」（135 ページ）

Oracle BI Presentation Services におけるシステム定義 Presentation Services グループ

システム定義の Presentation Services グループは、事前構成されており、Oracle BI Presentation Services の正常な運用に必要です。システム定義の Presentation Services グループには、次の 2 種類があります。

- **Everyone**: デフォルトでは、すべてのユーザーが Everyone グループに属します。このため、アプリケーションの「Groups and Users」画面には、このグループは表示されません。
- **Oracle BI Presentation Services 管理者**：Oracle BI Presentation Services 管理者グループのメンバーは、Oracle BI Presentation Services 管理者であるユーザーです。このグループのデフォルトのメンバーは、Oracle BI Presentation Services Administrator です。デフォルトでは、Oracle BI Presentation Services 管理者グループのメンバーのみが管理機能にアクセスする権限を持っていますが、これは権限の割当てを変更することによって変更できます。

Oracle BI Presentation Services における管理者定義 Presentation Services グループ

管理者定義の Presentation Services グループは、Oracle BI Presentation Services 管理者によって作成されます。Oracle BI Presentation Services では、作成できる Presentation Services グループの数に制限はありません。

注意：ビルトイン・アプリケーションがある組織の場合、事前構成するグループは、事前構成された職責を使用して設定されます。詳細は、該当するアプリケーション用のドキュメントを参照してください。

定義した Presentation Services グループを使用して、ダッシュボードとコンテンツに同様にアクセスする必要があるユーザーをカテゴリ分けする必要があります。Presentation Catalog のフォルダ構造と Presentation Services グループを一緒に計画して、一貫性のあるセキュリティ・モデルを作成する必要があります。ガイドラインの詳細は、「Oracle BI Presentation Services のセキュリティを Presentation Catalog とダッシュボード用に構成するためのガイドライン」（157 ページ）を参照してください。Presentation Services グループのメンバーシップを Oracle BI Server から渡す方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services のユーザー認証について」（138 ページ）を参照してください。

Presentation Services グループの管理

Oracle BI Presentation Services Administration では、「Presentation Catalog Security: Groups and Users」画面を使用して、次の操作を実行できます。

- Presentation Services グループの作成
- Oracle BI Presentation Services からの Presentation Services グループまたはユーザーの削除
- 既存のグループへの Presentation Services グループまたはユーザーの追加
- 既存のグループからの Presentation Services グループまたはユーザーの削除

「Presentation Catalog Security: Groups and Users」画面にアクセスするには

1. Oracle BI Presentation Services にログインします。
2. 「Settings」→「Administration」を選択します。
3. 「Manage Presentation Catalog Groups and Users」リンクをクリックします。

Presentation Services グループを作成するには

1. 「Existing Catalog Groups and Users」領域で、「Create a new Catalog Group」リンクをクリックします。

   「Create Catalog Group」画面が表示されます。

2. 「Group Name」フィールドにグループの名前を入力します。

   注意：「Group Name」フィールドを空欄にすると、Oracle BI Presentation Services では Presentation Services グループのフォルダを作成できません。

   Presentation Services グループの名前は、Oracle BI Presentation Services にログインするユーザーの名前と同じにすることはできません。名前の比較では大文字と小文字は区別されません。たとえば、ユーザー名 F002 は、foo2 や FoO2 という名前の Presentation Services グループに一致します。ユーザーと Presentation Services グループの名前が同じであると、そのユーザーが Oracle BI Presentation Services にログオンしようとしたときに、無効なアカウントであることを示すメッセージが表示されます。

   注意：Oracle BI Server グループの名前（Oracle BI Administration Tool で設定）が、Presentation Services グループの名前と一致する場合、Oracle BI Server グループのメンバーは、Oracle BI Presentation Services にログオンしたときに自動的に Presentation Services グループのメンバーになります。メンバーシップは、そのユーザーがログオフしたときに終了します。ユーザーの名前が、Oracle BI Presentation Services 管理者に対して Presentation Services グループのメンバーとして表示されることはありません。Oracle BI Server グループ名と一致する Presentation Services グループ名を使用して、さらにユーザーをこのグループのメンバーとして表示できるようにし、グループのメンバーシップを維持する場合は、「Presentation Catalog Security: Groups and Users」画面を使用して、ユーザーを Presentation Services グループに明示的に追加する必要があります。

3. 「Dashboard Name」フィールドで、ダッシュボードの名前を入力します。

   既存のダッシュボードを Presentation Services グループに割り当てることも、新しいダッシュボードを Presentation Services グループ用に作成することもできます。いずれのオプションを選択した場合でも、Presentation Services グループのすべてのメンバーに、指定されたデフォルト・ダッシュボードに対する「Read」権限が付与されます。すぐにダッシュボードを作成しない場合は、後で「Manage Dashboards」画面で作成できます。

   新しい空のダッシュボードを作成する場合、同じ名前の新しい共有フォルダ内に作成されます。グループのメンバーには、このフォルダへの「Read」権限が付与されます。

4. 「Dashboard Builder」フィールドに、ダッシュボードのコンテンツを変更する権限の付与先となるユーザーまたはグループの名前を指定します。複数のエントリは、`user1,salesgroup` のようにカンマで区切ります。

5 「Finished」をクリックします。

注意： Presentation Services グループを作成し、そのグループの名前を作成すると、Oracle BI Presentation Services によってグループ・フォルダが Presentation Catalog に作成されます。Presentation Services グループのすべてのメンバーは、このフォルダへの「Read」権限を持ちます。手動で作成されたグループ・フォルダの場合、該当するグループのグループ・フォルダに対する権限を「Read」に設定する必要があります。

Presentation Services グループまたはユーザーを Oracle BI Presentation Services から削除するには

1 「Existing Catalog Groups and Users」領域の「Catalog Groups and Users」テーブルで、グループまたはユーザーを指定して、関連付けられている「Delete」アイコンをクリックします。

   対象となるグループまたはユーザーを探すために、次の操作を実行できます。

   - 「Show users and groups」の切替えを使用して、「Catalog Groups and Users」テーブルにグループのみを表示します。
   - 「Search」フィールドを使用して Presentation Services グループまたはユーザーを検索し、削除を行います。

2 「はい」をクリックして、削除を確認します。

3 「Finished」をクリックします。

注意： この手順によって、Oracle BI リポジトリのグループ定義やユーザー定義が削除されることはありません。削除されたユーザーが再びログオンした場合は、ユーザーの Oracle BI Presentation Services エントリが再び作成されます。ユーザーを完全に削除するには、Catalog Manager を使用して、そのユーザーのフォルダを削除します。

Presentation Services グループまたはユーザーを既存のグループに追加するには

1 「Existing Catalog Groups and Users」領域の「Catalog Groups and Users」テーブルで、Presentation Services グループまたはユーザーの追加先グループを指定して、関連付けられている「Edit」アイコンをクリックします。

   対象となるグループまたはユーザーを探すために、次の操作を実行できます。

   - 「Show users and groups」の切替えを使用して、「Catalog Groups and Users」テーブルにグループのみを表示します。
   - 「Search」フィールドを使用して Presentation Services グループまたはユーザーを検索し、追加を行います。

   「Edit Catalog Group」画面が表示されます。

2 「Group Membership」領域で、「Add New Member」リンクをクリックします。

   「Add Member to Group」画面が表示されます。

3 追加するユーザーまたはグループを指定して、関連付けられている「Add」リンクをクリックします。

   「Edit Catalog Group」画面が表示されます。

   「Group Membership」領域に、グループに現在所属しているメンバーのリストが表示されます。

4 「Finished」をクリックします。

Presentation Services グループまたはユーザーを既存のグループから削除するには

1. 「Existing Catalog Groups and Users」領域の「Catalog Groups and Users」テーブルで、Presentation Services グループまたはユーザーが所属する削除元グループを指定して、関連付けられている「Edit」アイコンをクリックします。

   対象となるグループまたはユーザーを探すために、次の操作を実行できます。

   - 「Show users and groups」の切替えを使用して、「Catalog Groups and Users」テーブルにグループのみを表示します。
   - 「Search」フィールドを使用して Presentation Services グループまたはユーザーを検索し、削除を行います。

   「Edit Catalog Group」画面が表示されます。

2. 「Group Membership」領域の「Members」テーブルで、メンバーを指定して、「Remove」アイコンをクリックします。
3. 「Finished」をクリックします。

注意：システム定義の Presentation Services グループやユーザー名 Administrator を削除することはできません。

Oracle BI Presentation Services のユーザー認証について

ユーザーがログオンすると、Oracle BI Server 構成ファイル NQSConfig.INI に指定されている認証方法を使用して、Oracle BI Server によってユーザーの認証が行われます。NQSConfig.INI の詳細は、『Oracle Business Intelligence Infrastructure インストレーションおよび構成ガイド』を参照してください。

この項では、Oracle BI Presentation Services を使用する状況において Oracle BI Presentation Services ユーザーに関連する認証方法について簡単に説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 「Oracle Business Intelligence の LDAP 認証または ADSI 認証」（138 ページ）
- 「Oracle Business Intelligence の外部テーブルによる認証」（139 ページ）
- 「Oracle Business Intelligence のデータベース認証」（139 ページ）
- 「Oracle Business Intelligence の内部認証」（139 ページ）

認証オプションの詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

Oracle Business Intelligence の LDAP 認証または ADSI 認証

LDAP 認証または ADSI 認証を使用して Oracle BI Server アクセス制御を行う場合、その他のセキュリティ情報を用意するように LDAP サーバーまたは ADSI サーバーを構成することもできます。たとえば、ユーザーが Oracle BI Presentation Services にログオンするときに「Welcome」テキストに表示される名前を、ユーザーの所属先 Presentation Services グループに固有の名前に構成できます。この情報は LDAP 変数に含まれ、ユーザー認証中に Oracle BI Server セッション変数に渡されます。

USER 変数は、LDAP 認証または ADSI 認証で使用されるシステム・セッション変数です。ユーザーが Oracle BI Presentation Services にログオンするときは常に、ユーザー名とパスワードが LDAP サーバーまたは ADSI サーバーに渡されて認証を受けます。認証が正常に実行されると、LDAP サーバーまたは ADSI サーバーから返された情報を使用して、各ユーザーのシステム・セッション変数またはシステム以外の他のセッション変数を移入できます。

セッション変数の詳細は、「Presentation Services グループとセッション変数について」（140 ページ）を参照してください。

Oracle Business Intelligence の外部テーブルによる認証

外部データベース・テーブルを認証で使用する場合は、テーブルに追加のアクセス制御情報を含めることができます。この情報としては、ユーザーが Oracle BI Presentation Services にログオンしたときに「Welcome」テキストに表示される名前や、ユーザーの所属先 Oracle BI Server グループと Presentation Services グループが含まれます。

ユーザーがログオンすると、ユーザー名とパスワードを使用して、このデータベース・テーブルにおいて認証のクエリーを実行する SQL 文を介して認証を受けます。認証が正常に実行されると、SQL クエリーの結果を使用して、各ユーザーのシステム・セッション変数およびシステム以外の他のセッション変数を移入できます。

セッション変数の詳細は、「Presentation Services グループとセッション変数について」（140 ページ）を参照してください。

Oracle Business Intelligence のデータベース認証

Oracle BI Server では、データベース・ログオンを使用してユーザーを認証できます。ユーザーが Oracle BI Presentation Services にログオンしようとすると、Oracle BI Server では、ログオン名とパスワードを使用して、認証データベースへの接続が試行されます。その際、認証データベースに関連付けられている最初の接続プールが使用されます。この接続が成功すると、ユーザーは、正常に認証されたとみなされます。

データベース認証では、追加のアクセス制御情報（ユーザーの表示名や Presentation Services グループのメンバーシップなど）を返すメカニズムは使用されません。データベース認証を単独で使用する場合や、外部テーブルによる認証とともに使用する場合は、ユーザーを適切な Presentation Services グループに明示的に追加する必要があります。

注意：Delivers は、データベース認証とは連動しません。詳細は、「Delivers iBot と偽装について」（64 ページ）を参照してください。

Oracle Business Intelligence の内部認証

Oracle BI Server の内部認証方法では、追加のアクセス制御情報が返されません。Oracle BI Server の内部認証を使用する場合、内部認証では GROUP 変数が使用されないため、ユーザーを適切な Presentation Services グループに明示的に追加する必要があります。

Presentation Services グループとセッション変数について

Oracle BI Server で外部テーブルまたは LDAP サーバーを認証で使用する場合は、システム・セッション変数をリポジトリにおいて構成する必要があります。

1 つのセッション変数ブロックに、各セッションの開始時に発行される特定の SQL 文が格納されます。このブロックに、システムで決められている意味を持つシステム・セッション変数（USER、GROUP、DISPLAYNAME、WEBGROUP など）と、使用している特定の環境に固有でシステム以外のセッション変数を含めることができます。セッション変数の使用方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

また、GROUP 変数や WEBGROUPS 変数に返されるすべての値に対応する Presentation Services グループを作成する必要もあります。これによって、Oracle BI Presentation Services のコンポーネントとリクエストに対する権限を制御します。

この項の内容は次のとおりです。

- 「Oracle Business Intelligence の GROUP セッション変数について」（140 ページ）
- 「Oracle Business Intelligence の WEBGROUPS セッション変数について」（140 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services の権限の設定」（141 ページ）

Oracle Business Intelligence の GROUP セッション変数について

GROUP 変数には、1 つ以上のグループ名がセミコロンで区切られて格納され、Oracle BI Server でセキュリティとコンテンツのフィルタ処理にも使用されます。多くの場合、これらの同じグループにより Oracle BI Presentation Services のコンテンツへのアクセス制御も十分できます。ビルトイン・アプリケーションでは、この GROUP 変数テクニックを使用して、Oracle BI Server からグループのメンバーシップを継承するよう事前構成されています。

Oracle Business Intelligence の WEBGROUPS セッション変数について

WEBGROUPS セッション変数は柔軟性が高く、Oracle BI Presentation Services ユーザーのロール（つまりクラス）がカテゴリ分けされる Presentation Services グループを定義できます。たとえば、次のグループを作成できます。

- ダッシュボードにのみアクセスできる Basic グループ
- Answers への最小限のアクセス権限を持つ Standard グループ
- Answers への完全なアクセス権限を持ち、iBot（Delivers）への最小限のアクセス権限を持つ Power Users グループ
- すべての機能に対して完全なアクセス権限を持つ Administrative グループ

権限設定を使用して、各グループに適切なポリシーを設定します。各ユーザーを複数の Presentation Services グループのメンバーにすると、そのユーザーを複数のロールに関連付けることができます。

Oracle BI Presentation Services の権限の設定

Presentation Services グループを設定したら、Presentation Catalog のフォルダ構造を作成して、適切な権限を各グループに割り当てます。各ユーザーを複数の Presentation Services グループのメンバーにすると、そのユーザーを複数のロールに関連付けることができます。WEBGROUPS を使用すると、Presentation Catalog のコンテンツへのアクセス（権限）を制御できます。一般的に、GROUP によりコンテンツが制御され、WEBGROUPS により操作を実行する権限が制御されます。

注意：GROUP によっては、対応する Oracle BI Presentation Services のコンテンツがない場合があります。この場合は、グループの作成時に、/Shared フォルダにおいて作成されたグループ・フォルダを削除して、作成したグループに対して他のグループ・フォルダとサブジェクト領域フォルダに対する権限を必要に応じて付与することができます。

セキュリティの設定手順の詳細は、「Oracle BI Presentation Services のセキュリティを Presentation Catalog とダッシュボード用に構成するためのガイドライン」（157 ページ）を参照してください。

権限の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の権限（共有情報アクセス制御用）の設定について」（143 ページ）を参照してください。

さらに、「Oracle BI Presentation Services の権限（サービス利用全般）の設定について」（148 ページ）も参照してください。

Oracle BI Presentation Services の権限の継承

権限は、ユーザーに対して直接割り当てたり、グループのメンバーシップを介して割り当てることができます。また、別の観点では、権限を明示的に割り当てたり実効的に割り当てることができます。実効的な権限は、Presentation Services グループ継承を介してから間接的に割り当てます。セキュリティを設定する方法としてこの方法をお薦めします。ある Presentation Services グループが別の Presentation Services グループのメンバーであるときに、権限の継承が発生します。

この項の内容は次のとおりです。

- 「Oracle BI Presentation Services における継承のルール」（141 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services において継承された権限の例」（142 ページ）

Oracle BI Presentation Services における継承のルール

- ユーザーに明示的に付与された権限は、そのユーザーの所属先 Presentation Services グループから継承された権限よりも優先されます。
- ユーザーが 2 つのグループに所属しており、両方のグループに権限が割り当てられている場合は、制限の少ない権限がユーザーに付与されます。

  たとえば、一方のグループで「Read」権限が許可されており、他方のグループでは「Change」権限が許可されている場合は、制限の少ない権限（この例では「Change」権限）が付与されます。

  注意：例外として、2 つのグループのいずれかが明示的に権限が拒否されている場合は、ユーザーのアクセスは拒否されます。

- あるユーザーが Presentation Services グループ X に所属していて、Presentation Services グループ X が Presentation Services グループ Y に所属している場合、グループ X に割り当てられるルールが、グループ Y に割り当てられるルールよりも優先されます。

  たとえば、Marketing グループに「Read」権限がある場合、Marketing グループのメンバーである Administrator は、「Full Control」権限を持つことができます。

- アクセスの明示的な拒否は、他の権限よりも優先されます。

権限を割り当てるとき、ユーザーとグループに対して解決済の権限が画面下部に表示されるので、すべてのユーザーが適切に権限を継承していることを確認することができ便利です。

Oracle BI Presentation Services において継承された権限の例

図 1 は、Presentation Services グループを介して権限が継承される仕組みを示しています。

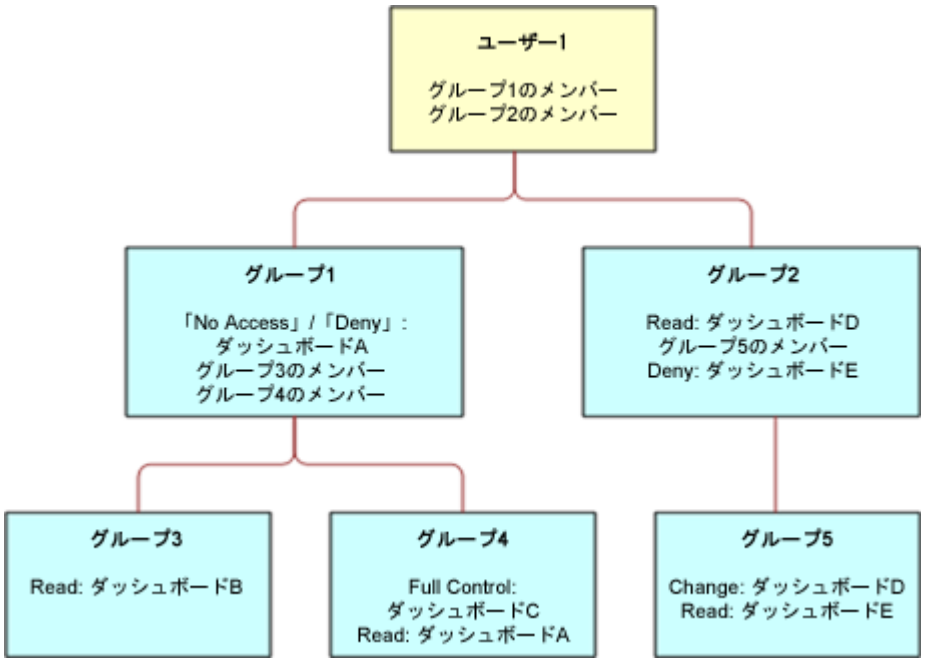

図 1.　Presentation Services グループの権限継承の例

この例では、次のことが示されています。

- ユーザー1 は、グループ 1 とグループ 2 の直接のメンバーで、グループ 3、グループ 4 およびグループ 5 の間接的なメンバーです。
- グループ 1 の権限では、ダッシュボード A にアクセスする権限はなく、ダッシュボード B に対しては「Read」権限、ダッシュボード C に対しては「Full Control」権限がそれぞれあります。
- 権限が競合する場合は、制限レベルが最も少ない認可が付与されます。このため、グループ 2 から継承された権限には、ダッシュボード D に対する「Change and Delete」権限が含まれます。

- 明示的に禁止されているアクセス（拒否）は常に、その他すべての設定より優先されます。このため、ダッシュボード A に対するグループ 1 のアクセスの拒否は、グループ 4 の「Read」権限より優先されます。この結果、グループ 1 にはダッシュボード A にアクセスする権限はありません。同様に、ダッシュボード E へのアクセスが、グループ 2 で明示的に拒否されているため、グループ 5 には、ダッシュボード E にアクセスする権限はありません。

ユーザー 1 に付与される総合的な権限は、次のようになります。

- アクセスが明示的に拒否されているため、ダッシュボード A とダッシュボード E にアクセスする権限はありません。
- ダッシュボード B に対しては「Read」権限があります。
- ダッシュボード C に対しては「Full Control」権限があります。
- ダッシュボード D に対しては「Change and Delete」権限があります。

ヒント： デフォルトの Everyone Presentation Services グループを、作成したその他の Presentation Services グループに追加しないでください。追加しなければ、ユーザーまたは認証済ユーザーが別の Presentation Services グループから権限を意図せずに継承することがなく、適切な Presentation Services グループ（およびユーザー）のみが指定された権限を持つようになります。

Oracle BI Presentation Services の権限（共有情報アクセス制御用）の設定について

この項で説明する権限は、次のものに含まれる共有情報へのアクセスの制御に使用されます。

- Presentation Catalog の項目
- Dashboards

権限は、明示的に設定される場合と継承される場合があり、次の場所から構成できます。

- 「Oracle BI Presentation Services Administration」画面
- Catalog Manager

  Catalog Manager の詳細は、第 7 章「Oracle BI Catalog Manager による Presentation Catalog の管理」を参照してください。

Oracle BI Presentation Services または Presentation Catalog において、アプリケーションのレベルから個々のリクエストに至るまでの権限を設定できます。

この項の内容は次のとおりです。

- 「Oracle BI Presentation Services における権限のタイプ」（143 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services における権限の設定に関する推奨事項」（144 ページ）

Oracle BI Presentation Services における権限のタイプ

Oracle BI Presentation Services では、次の権限がサポートされています。

- **Change/Delete**: コンテンツを表示できる認可レベルおよびコンテンツの変更や削除ができる認可レベルが付与されます。

- **Full Control**: コンテンツを表示できる認可レベル、コンテンツの変更や削除ができる認可レベル、権限を設定できる認可レベル、項目、フォルダまたはダッシュボードを削除できる認可レベルがそれぞれ付与されます。
- **No Access**: この認可レベルのユーザーまたはグループは、アクセスが許可されません。アクセスの明示的な拒否は、他の権限よりも優先されます。
- **Read**: 項目、フォルダまたはダッシュボードのコンテンツを表示できる認可レベルが付与されますが、変更はできません。
- **Traverse Folder**: 選択されたフォルダに対する権限を持たないユーザーに対して、選択されたフォルダにあるフォルダ・オブジェクトにアクセスできる認可レベルが付与されます。たとえば、ユーザーに /shared/test フォルダに対する「Traverse Folder」権限を付与したとします。この場合、ユーザーは /shared/test フォルダにあるオブジェクトにはアクセスできません。しかし、そのフォルダよりも下位レベルのフォルダ（/shared/test/guest など）にあるオブジェクトにはアクセスできます。

Oracle BI Presentation Services における権限の設定に関する推奨事項

権限を設定する場合は、次の推奨事項に従ってください。

- 1 人のユーザーに権限を割り当てる場合でも、Presentation Services グループのメンバーシップを介して権限を割り当てます。詳細は、「Presentation Services グループのタイプ」（134 ページ）を参照してください。
- 適切なグループのグループ・フォルダに対する権限を、「Read」に設定します。
- アクセス可能なダッシュボードとダッシュボード・コンテンツを変更するグループ（または必要に応じて、ユーザー）の場合は、そのグループの権限を「Full Contorl」に設定します。これは通常、ダッシュボードまたはコンテンツのビルダー・グループです。「Full Contorl」では、変更と削除の制御が許可され、さらに指定されたグループ（またはユーザー）は、権限の設定が許可され、項目、フォルダまたはダッシュボードの削除も許可されます。

  特定のグループに対して、多数のユーザーや様々なユーザーがダッシュボード・コンテンツの作成と変更ができるようにする場合、個別に対応するビルダー・グループを作成して、ビルダー・グループにそのプライマリ・グループのバックエンド権限を付与し、それぞれ別の名前を付けます。たとえば、Sales グループと SalesBuilder グループを作成できます。Presentation Catalog に対する適切な権限を SalesBuilder グループに付与することによって、ダッシュボードとコンテンツを変更できるユーザーの制御と変更を行うことができます。セッション変数のセキュリティが適切に設定されていれば、セキュリティ情報が格納されているデータベース・テーブルにおいて、ユーザーのグループを Sales から SalesBuilder に変更することによって、そのユーザーをダッシュボードのビルダーまたはコンテンツ作成者に指定できます。
- サブジェクト領域ごとに、/Requests フォルダ内の対応するサブジェクト領域フォルダ（およびそのコンテンツすべて）に対する「Read」権限を付与します。Everyone グループにはサブジェクト領域フォルダにアクセスする権限はないことを確認してください。
- 特定のサブジェクト領域に対してパブリックで使用するためにリクエストを保存できるようにする必要のあるグループの場合は、サブジェクト領域フォルダとそのコンテンツすべてに対する「Full Control」をそのグループに付与し、/Common フォルダに対しても同じ権限を付与します。権限の設定方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services Administration における権限の設定」（147 ページ）を参照してください。

- 指定された Presentation Services グループのメンバー（またはユーザー）のみが Presentation Catalog のフォルダ、フォルダのコンテンツおよび Dashboards にアクセスできるようにするには、デフォルトの Presentation Services グループ Everyone に明示的な権限を設定しないでください。

注意： Oracle BI Presentation Services では、自分自身の権限や管理者の権限を削除することはできません。これは、項目、フォルダまたはダッシュボードからロックアウトされないようにするためです。

ヒント： グループ内のすべてのユーザーが互いにリクエストを共有できるようにするには、サブジェクト領域フォルダの下に、たとえば Share や Publish などの名前でフォルダを作成し、そのフォルダに対してのみ、グループ全体に「Change/Delete」権限を付与します。

「Oracle BI Presentation Services Administration」画面の概要

「Oracle BI Presentation Services Administration」画面には、次のセクションがあります。

- **Product Information**: このセクションでは、使用中の製品バージョン、現在の Presentation Catalog へのパス、組織がライセンスを取得している機能のリストへのリンクなど、現在のインストールに関する情報が表示されます。

  Windows では、次の情報も表示されます。

  - **Available Paging Memory**: 空き物理メモリーと空きページング・メモリーの合計容量
  - **Available Virtual Address Space**: プロセスで使用可能な仮想アドレス空間の容量

  （これらの値のいずれかが非常に小さい場合は、Oracle BI Presentation Services でメモリー不足になることがあります。）

- **Activities**: このセクションには、管理機能へのリンクがあります。表 16 は、「Activities」セクションにあるリンクとその説明を示しています。

注意：「Activities」セクションには、組織がライセンスを取得しているその他の Oracle Siebel アプリケーション（Oracle Siebel onDemand や Oracle Siebel Marketing など）へのリンクが含まれている場合があります。これらのリンクは、表 16 には記載されていません。アプリケーション固有のリンクの詳細は、リンクをクリックしたときに開く画面の「Help」（存在する場合）をクリックするか、アプリケーションの管理者用ドキュメントを参照してください。

表 16. 「Oracle BI Presentation Services Administration」の「Activities」セクションにあるリンクの説明

リンク	説明
Manage Presentation Catalog Groups and Users	「Presentation Catalog Security: Groups and Users」画面が開きます。この画面では、Presentation Services グループと個々のユーザーの Oracle BI Presentation Services へのアクセスを制御できます。
Manage Presentation Catalog	「Manage Catalog」画面が開きます。この画面では、Presentation Catalog にあるフォルダと項目について、それらの編集、名前の変更、権限設定および削除ができます。この機能には、Answers の左ペインにある「Manage Catalog」ボタンをクリックすることによってもアクセスできます。

表 16. 「Oracle BI Presentation Services Administration」の「Activities」セクションにあるリンクの説明

リンク	説明
Manage Interactive Dashboards	「Manage Dashboards」画面が開きます。この画面では、ダッシュボードのセキュリティを管理できます。ログオンに使用するユーザー名に基づいて付与されている認可レベルに応じて、この画面を使用してダッシュボードの作成と削除を実行したり、この画面にアクセスしてダッシュボードに対するユーザーとグループの権限の変更およびダッシュボードのプロパティの変更を実行できます。
Manage Sessions	「Session Management」画面が開きます。この画面ではアクティブ・セッションを管理できます（実行中のリクエストの取消しや、リクエストに関する情報の NQQuery.log ログ・ファイルの表示など）。
Manage iBot Sessions	「iBot Session Management」画面が開きます。この画面では、現在アクティブな iBot セッションに関する情報を表示できます。
Manage BI Publisher	Oracle Business Intelligence Publisher Administration の URL が表示されます。この URL から、BI Publisher のユーザー、権限、ジョブ、ファイルおよびフォルダを管理できます。 （BI Publisher Administration の URL は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）の AdvancedReporting/AdminURL 要素で設定されます。） Oracle BI Publisher の詳細は、『Oracle Business Intelligence Publisher ユーザーズ・ガイド』を参照してください。
Manage Privileges	「Privilege Administration」画面が開きます。この画面では、Presentation Services グループと個々のユーザーの両方のために、様々な Oracle BI Presentation Services 機能に対する権限を管理できます。
Manage Device Types	「Manage Device Types」画面が開きます。この画面では、Delivers でサポートされるデバイス・カテゴリのデバイス・タイプを管理できます。
Issue SQL	「Issue SQL Directly」画面が開きます。この画面では、Oracle BI Server に直接発行される SQL 文を入力できます。この機能は、サーバーのみをテストする場合に便利です。結果はフォーマットされず、ここで発行された SQL 文をリクエストとして保存することはできません。
Toggle Maintenance Mode	「Maintenance Mode」のオンとオフを切り替えます。（「Maintenance Mode」がオンの場合、ユーザーは Presentation Catalog に書き込むことができません。）
Reload Files and Metadata	XML メッセージ・ファイルのリロード、サーバーのメタデータのリフレッシュおよび Oracle BI Presentation Services のキャッシュの消去を実行します。

Oracle BI Presentation Services Administration における権限の設定

Oracle BI Presentation Services Administration の「Change Item Permissions」画面を使用すると、Presentation Catalog の項目（ダッシュボード、ダッシュボード・ページ、フォルダなど）に対して次の操作を実行できます。

- Presentation Services グループとユーザーに付与されている明示的な権限の変更
- Presentation Services グループとユーザーの明示的な権限の追加

「Change Item Permissions」画面にアクセスするには

- 権限を設定する項目に対応する手順（詳細は、次を参照）に従います。

「Change Permissions」画面にアクセスするには：	手順
ダッシュボードの場合	1 Oracle BI Presentation Services にログインします。 2 「Settings」→「Administration」を選択します。 3 「Manage Interactive Dashboards」リンクをクリックします。 4 権限を変更するダッシュボードに関連付けられている「Permissions」アイコンをクリックします。
ダッシュボード・ページの場合	1 Oracle BI Presentation Services にログインします。 2 「Settings」→「Administration」を選択します。 3 「Manage Interactive Dashboards」リンクをクリックします。 4 ダッシュボードを選択して、「Properties」をクリックします。 5 「Dashboard Pages」領域で、権限を変更するダッシュボード・ページに関連付けられている「Page Security」アイコンをクリックします。
その他の Presentation Catalog 項目の場合	1 Oracle BI Presentation Services にログインします。 2 「Settings」→「Administration」を選択します。 3 「Manage Presentation Catalog」リンクをクリックします。 4 権限を変更する項目に関連付けられている「Permissions」アイコンをクリックします。フォルダ・リンクをクリックして目的の項目までドリルダウンする必要がある場合があります。

明示的な権限を変更するには

1 「Users and groups with explicit access to this item」テーブルで、次の操作を実行します。

- Presentation Services グループまたはユーザーに付与されている権限を変更する場合は、Presentation Services グループまたはユーザーに関連付けられている権限をクリックして、必要な権限に切り替えます。

  権限は、「**No Access**」→「**Traverse Folder**」→「**Read**」→「**Change/Delete**」→「**Full Control**」の順に切り替わります。

- 明示的な権限を削除する場合は、Presentation Services グループまたはユーザーに関連付けられた「Remove permissions for user/group」アイコンをクリックします。

2 必要に応じて、「Replace permissions with parent folder's permissions」リンクをクリックします。

3 必要に応じて、次のいずれかのオプションまたは両方のオプションを選択します。

- Apply permissions to sub-folders
- Apply permissions to items within folder

4 「Finished」をクリックします。

明示的な権限を追加するには

1 「Additional groups Add Explicit Permissions」テーブルで、対象となる項目に対する明示的な権限の割当て先 Presentation Services グループまたはユーザーを指定して、関連付けられている「Add」リンクをクリックします。

  対象となるグループまたはユーザーを探すために、次の操作を実行できます。

- 「Show users and groups」の切替えを使用すると、「Additional groups Add Explicit Permissions」テーブルにユーザーのみが表示されます。
- 「Search」フィールドを使用して Presentation Services グループまたはユーザーを検索し、追加を行います。
- 「Show effective permissions」チェック・ボックスを選択すると、「Additional groups Add Explicit Permissions」テーブルに有効な（つまり、継承された）権限が表示されます。

2 （オプション）「Users and groups with explicit access to this item」テーブルで、追加したグループまたはユーザーに割り当てる権限のタイプに切り替えます。

3 「Finished」をクリックします。

Oracle BI Presentation Services の権限（サービス利用全般）の設定について

この項で説明する権限とは、ユーザーが Oracle BI Presentation Services において実行する権利がある操作のことです。権限は、アカウント（つまり個々のユーザー）または Presentation Services グループに関連付けることによって管理します。特定のアカウントに、特定の権限が付与または拒否されます。これらの関連付けは、権限割当て表において作成されます。

共有情報アクセス制御用の権限と同様、この項で説明する権限は、グループ・メンバーシップを介して明示的に設定されるか継承されます。権限の明示的な拒否は、付与されて継承されている権限よりも優先されます。たとえば、あるユーザーが Answers の列計算式を編集する権限へのアクセスを明示的に拒否されているが、この権限を継承しているグループのメンバーである場合、このユーザーは列計算式を編集できません。

共有情報アクセス制御用の権限とは異なり、この項で説明する権限は一般的に、Everyone システム Presentation Services グループに付与されます。これによって、ユーザーは Oracle BI Presentation Services の一般的な機能にアクセスできるようになります。

Oracle BI Presentation Services の権限リストの詳細は、「デフォルトの Oracle BI Presentation Services 権限割当て」（150 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services Administration における権限の設定

Oracle BI Presentation Services Administration の「Change Privilege Permissions」画面を使用すると、次の操作を実行できます。

- 権限に対するユーザーの明示的なアクセスまたはグループの明示的なアクセスを変更する操作
- 権限に対する明示的なアクセスをユーザーまたはグループに追加する操作

「Change Privilege Permissions」画面にアクセスするには

1. Oracle BI Presentation Services にログインします。
2. 「Settings」→「Administration」を選択します。
3. 「Manage Privileges」リンクをクリックして、「Privilege Administration」画面を表示します。
4. 明示的なアクセスを変更する権限に関連付けられているユーザーとグループのリンクをクリックします。

権限に対する明示的なアクセスを変更するには

1. 「Users and groups with explicit access to this Privilege」テーブルで、次の操作を実行します。
   - Presentation Services グループまたはユーザーの、権限に対するアクセスを変更する場合は、その Presentation Services グループまたはユーザーに関連付けられている権限をクリックして、権限の付与（「**Granted**」）または拒否（「**Denied**」）を切り替えます。
   - 明示的な権限を削除する場合は、Presentation Services グループまたはユーザーに関連付けられた「Remove permissions for user/group」アイコンをクリックします。
2. 「Finished」をクリックします。

権限に対する明示的なアクセスを追加するには

1. 「Additional groups Add Explicit Permissions」テーブルで、権限に対する明示的なアクセスの割当て先 Presentation Services グループまたはユーザーを指定して、関連付けられている「Add」リンクをクリックします。

   対象となるグループまたはユーザーを探すために、次の操作を実行できます。

   - 「Show users and groups」の切替えを使用すると、「Additional groups Add Explicit Permission」テーブルにユーザーのみが表示されます。
   - 「Search」フィールドを使用して Presentation Services グループまたはユーザーを検索し、追加を行います。
   - 「Show effective permissions」チェック・ボックスを選択すると、「Additional groups Add Explicit Permission」テーブルに有効な（つまり、継承された）権限が表示されます。

2. （オプション）「Users and groups with explicit access to this Privilege」テーブルで、追加したグループまたはユーザーに割り当てる権限に切り替えます。
3. 「Finished」をクリックします。

注意：デフォルトでは、項目を作成したユーザーには、作成した項目を変更する権限があります。ただし、場合によっては、この権限を無効にする必要があります。対象となるユーザーまたはグループからの「Admin: Catalog Change Permissions」権限へのアクセスを拒否するよう適切な変更を加えます。

デフォルトの Oracle BI Presentation Services 権限割当て

表 17 は、制御可能な権限の一部と、それらの権限に対してデフォルトでアクセスが付与されている Presentation Services グループを示しています。

これらの権限は、Oracle Business Intelligence Infrastructure に適用されます。組織でビルトイン・アプリケーションを使用している場合、権限によっては事前構成されているものがあります。詳細は、該当するアプリケーション用のドキュメントを参照してください。

注意：「Privilege Administration」画面には、組織がライセンスを取得しているその他の Oracle Siebel アプリケーション（Oracle Siebel Marketing など）の権限も含まれる場合があります。アプリケーション固有のコンポーネントに対する権限が付与されている Presentation Services グループには、Marketing Analytics User などの説明的な名前が付いています。アプリケーション固有の権限の詳細は、該当するアプリケーションの管理者用ドキュメントを参照してください。

表 17. Oracle Business Intelligence Infrastructure の権限とデフォルト設定

コンポーネント	権限	説明	権限が付与されている Presentation Services グループ
Access	Access to Dashboards		Everyone
	Access to Answers		Everyone
	Access to Delivers		Everyone
	Access to Briefing Books		Everyone
	Access to Disconnected Analytics		Everyone
	Access to Administration		Presentation Services 管理者
	Access to Segments		Everyone
	Access to Segment Trees		Everyone
	Access to List Formats		Everyone
	Access to Oracle BI Publisher Enterprise	「More Products」→「BI Publisher」リンクが表示されます。このリンクからユーザーは BI Publisher を起動できます。 Oracle BI Publisher の詳細は、『Oracle Business Intelligence Publisher ユーザーズ・ガイド』を参照してください。	Everyone
Admin: Catalog	Change Permissions		Everyone
	Toggle Maintenance Mode		Everyone

表 17. Oracle Business Intelligence Infrastructure の権限とデフォルト設定

コンポーネント	権限	説明	権限が付与されている Presentation Services グループ
Admin: General	Manage Sessions		Presentation Services 管理者
	Manage Dashboards		Presentation Services 管理者
	See Session IDs		Presentation Services 管理者
	Issue SQL Directly		Presentation Services 管理者
	View System Information		Presentation Services 管理者
	Performance Monitor		Presentation Services 管理者
	Manage iBot Sessions		Presentation Services 管理者
	Manage Device Types	「Oracle BI Presentation Services Administration」画面に「Manage Device Types」リンクが表示されます。このリンクを使用して「Manage Device Types」画面を開きます。	Presentation Services 管理者
	Manage Marketing Jobs		Presentation Services 管理者
	Manage Marketing Defaults		Presentation Services 管理者
	Manage BI Publisher	「Oracle BI Presentation Services Administration」画面に「Manage BI Publisher」リンクが表示されます。このリンクを使用して Oracle Business Intelligence Publisher Administration の URL にアクセスします。 Oracle BI Publisher の詳細は、『Oracle Business Intelligence Publisher ユーザーズ・ガイド』を参照してください。	Presentation Services 管理者
Admin: Security	Manage Catalog Groups and Users		Presentation Services 管理者
	Manage Privileges		Presentation Services 管理者
	Take Ownership of Catalog Objects		Presentation Services 管理者
Briefing Book	Add To or Edit a Briefing Book		Everyone
	Download Briefing Book		Everyone

表 17. Oracle Business Intelligence Infrastructure の権限とデフォルト設定

コンポーネント	権限	説明	権限が付与されている Presentation Services グループ
Catalog	「Personal Storage」（「My Folders」と「My Dashboard」）		Everyone
	Reload Metadata		Presentation Services 管理者
	See Hidden Items		Everyone
	Create Folders		Everyone
	Archive Catalog		Presentation Services 管理者
Dashboards	Save Selections		Everyone
	Assign Default Selections		Everyone
Formatting	Save system-wide column formats		Presentation Services 管理者
My Account	Access to My Account		Everyone
	Change Preferences		Everyone
	Change Delivery Options		Everyone
Answers	Create Views		Everyone
	Create Prompts		Everyone
	Access Advanced Tab		Everyone
	Edit column formulas		Everyone
	Edit column filters		Everyone
	Enter XML and logical SQL		Everyone
	Edit Direct Database Requests		Presentation Services 管理者
	Create advanced filters and set operations		Everyone
	Save filters		Everyone
	Execute Direct Database Requests		Administrators

表 17. Oracle Business Intelligence Infrastructure の権限とデフォルト設定

コンポーネント	権限	説明	権限が付与されている Presentation Services グループ
Delivers	「Retrieve delivery destinations for iBots」（システム・コール）		Presentation Services 管理者、Administrators
	Create iBots		Everyone
	Publish iBots for subscription		Everyone
	Deliver iBots to specific or dynamically determined users		Presentation Services 管理者、Administrators
	Chain iBots		Everyone
	Chain iBots to custom scripts		Presentation Services 管理者、Administrators
	See iBot Instance Errors		Presentation Services 管理者、Administrators
	Modify current subscriptions for iBots		Presentation Services 管理者、Administrators
Proxy	Act As Proxy		Administrators
RSS Feeds	Access to RSS Feeds	フォルダのコンテンツとアラートとともに RSS フィードを受信する権限が付与されます。 Oracle BI Presentation Services で HTTPS プロトコルが使用されている場合は、使用する RSS リーダーで HTTPS プロトコルもサポートされている必要があります。	Everyone

表 17. Oracle Business Intelligence Infrastructure の権限とデフォルト設定

コンポーネント	権限	説明	権限が付与されている Presentation Services グループ
Oracle BI Publisher Enterprise Oracle BI Publisher の詳細は、『Oracle Business Intelligence Publisher ユーザーズ・ガイド』を参照してください。	Add BI Publisher Reports to Dashboard	「Dashboard Editor」画面の「Dashboard Objects」領域に、BI Publisher レポート・オブジェクトが表示されます。このオブジェクトを使用すると、ダッシュボード開発者は、BI Publisher レポートをダッシュボード・ページに追加できます。	Everyone
	View BI Publisher Reports	ユーザーが BI Publisher レポートをダッシュボード・ページで表示できるようになります。	Everyone
	Schedule BI Publisher Reports	BI Publisher レポート用の「Schedule」ボタンがダッシュボード・ページに表示されます。	Everyone
	Send BI Publisher Reports	BI Publisher レポート用の「Send」ボタンがダッシュボード・ページに表示されます。	Everyone
	Analyze BI Publisher Reports	BI Publisher レポート用の「Analyze」ボタンがダッシュボード・ページに表示されます。	Presentation Services 管理者、Administrators
List Formats	Create List Formats		Administrators
	Create Headers and Footers		Administrators
	Access Options Tab		Administrators
	Add/Remove List Format Columns		Administrators
Segmentation	Create Segments		Administrators
	Create Segment Trees		Administrators
	Create/Purge Saved Result Sets		Administrators
	Access Segment Advanced Options Tab		Administrators
	Access Segment Tree Advanced Options Tab		Administrators
	Change Target Levels within Segment Designer		Administrators
SOAP	Access SOAP		サブジェクト領域に応じて、Everyone または Presentation Services 管理者
サブジェクト領域（< サブジェクト領域名 >）	Access within Answers		Everyone

表 17. Oracle Business Intelligence Infrastructure の権限とデフォルト設定

コンポーネント	権限	説明	権限が付与されている Presentation Services グループ
View Column Filter Prompt	Add/Edit Column Filter Prompt View		Everyone
View Column Selector	Add/Edit Column Selector View		Everyone
View Compound	Add/Edit Compound View		Everyone
View Filters	Add/Edit Filters View		Everyone
View Funnel Chart	Add/Edit Funnel Chart View		Everyone
View Gauge	Add/Edit Gauge View		Everyone
View Dashboard Prompt	Add/Edit Dashboard Prompt View		Everyone
View Static Text	Add/Edit Static Text View		Everyone
View Image	Add/Edit Image View		Everyone
View Legend	Add/Edit Legend View		Everyone
View Narrative	Add/Edit Narrative View		Everyone
View Nested Request	Add/Edit Nested Request View		Everyone
View No Results	Add/Edit No Results View		Everyone
View Pivot Table	Add/Edit Pivot Table		Everyone
View Create Segment	Add/Edit Create Segment View		Everyone
View Logical SQL	Add/Edit Logical SQL View		Everyone
View Chart	Add/Edit Chart View		Everyone
View Table	Add/Edit Table View		Everyone
View Create Target List	Add/Edit Create Target List View		Everyone
View Ticker	Add/Edit Ticker View		Everyone
View Title	Add/Edit Title View		Everyone
View View Selector	Add/Edit View Selector View		Everyone
Write Back	Write Back to Database	データベースへのデータの書込み権限が付与されます。	Administrators
	Manage Write Back	書込みレポートを管理する権限が付与されます。	Presentation Services 管理者

Oracle BI Presentation Services のセキュリティを Presentation Catalog とダッシュボード用に構成するためのガイドライン

Presentation Catalog、ダッシュボードおよび Presentation Services グループで操作しているので、セキュアな Presentation Catalog とセキュアなダッシュボードを設定するために、前述の各章に記載された情報を理解しておく必要があります。

この項の内容は次のとおりです。

- 「Presentation Services グループの作成」（157 ページ）
- 「Presentation Catalog 構造の設定」（157 ページ）
- 「Presentation Catalog 項目に対する権限の設定」（159 ページ）
- 「共有 Dashboards の作成」（159 ページ）
- 「共有 Dashboards のページとコンテンツの追加」（160 ページ）
- 「共有項目の作成と使用」（161 ページ）
- 「Dashboards のテスト」（161 ページ）
- 「共有 Oracle Business Intelligence ドキュメント用の仮想ディレクトリの設定」（162 ページ）
- 「ユーザー・コミュニティへのダッシュボードのリリース」（162 ページ）

Presentation Services グループの作成

Presentation Services グループを作成すると、Presentation Catalog の共有グループ・フォルダが自動的に作成されます。Presentation Services グループの詳細は、「Presentation Services グループのタイプ」（134 ページ）を参照してください。グループ・フォルダの詳細は、「Presentation Catalog 構造の設定」（157 ページ）を参照してください。

Presentation Catalog 構造の設定

Presentation Catalog には、次の 2 つのメイン・フォルダがあります。

- **/Shared**: 共有フォルダ、共有ダッシュボードおよび共有ダッシュボード・コンテンツが格納されます。
- **/User**: 各ユーザーの個人用記憶域と「My Dashboard」が格納されます。

図 2 は、Presentation Catalog の /Shared フォルダで推奨される上位レベルのフォルダ構造を示しています。

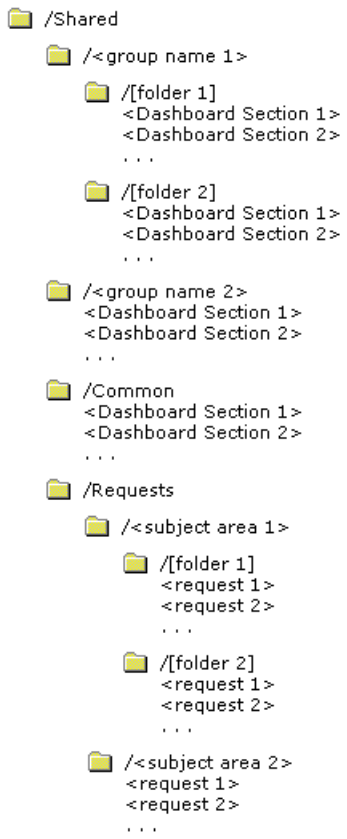

図 2.　Presentation Catalog の /Shared フォルダで推奨されるフォルダ構造

図 2 に示した Presentation Catalog フォルダ構造では、ユーザーと管理者は、簡単にコンテンツを再編成したり、ダッシュボードの共有セクションを使用可能にできます。これによって、ユーザーが共有コンテンツから選択できるようになるため、「My Dashboard」の作成が容易になります。

大カッコ（[ ]）で囲まれている項目はオプションです。山カッコ（< >）で囲まれている項目は、適切な名前に置換する必要があります。

グループ・フォルダ

Presentation Services グループを作成すると、作成したグループの共有フォルダが自動的に作成されます。Presentation Services グループのすべてのメンバーに、このフォルダに対する「Read」権限が自動的に付与されます。これらの権限は、作成するサブフォルダに継承されます。

グループ・フォルダには、Presentation Services グループのメンバーにのみ関連する共有ダッシュボード・コンテンツが格納されます。必要に応じて、共有コンテンツをさらにグループ・フォルダの下のサブフォルダに編成できます。

注意：グループ固有のコンテンツがない場合は、このフォルダを削除して、他のフォルダに対する権限をグループに付与できます。

/Common フォルダ

複数のグループ間で共有されるダッシュボード・セクションは、/Shared フォルダの下の /Common フォルダに保存されます。コンテンツを /Common フォルダの下のサブフォルダに編成できます。

/Shared フォルダの下には、/Common サブフォルダと /Requests サブフォルダのみを作成してください。

/Requests フォルダ

共有するリクエストを Answers で作成した場合、これらのリクエストを /Shared フォルダの /Requests フォルダに保存します。

各サブジェクト領域に対するリクエストを保存するフォルダをサブジェクト領域ごとに /Requests フォルダに作成します。これによって、サブジェクト領域のレベルで権限を管理できます。複数のサブジェクト領域が緊密に関連しているため、一方のサブジェクト領域に対する権限を持つユーザーのほとんどが他方のサブジェクト領域に対する権限も持つ場合、両方のサブジェクト領域に対するリクエストを保存する単一フォルダを作成できます。

注意：ユーザーが権限を持たないサブジェクト領域を参照する Presentation Catalog で、あるリクエストに対する権限を付与された場合でも、Oracle BI Server ではこのユーザーはそのリクエストを実行することはできません。

複数のサブジェクト領域において複数のリクエスト（SQL サブクエリーを含むリクエスト）がある場合、これらのリクエストをいずれかのサブジェクト領域のフォルダに配置したり、これらのサブジェクト領域に対する権限を持つユーザー用に新しいフォルダを作成することができます。

Presentation Catalog の操作方法の詳細は、第 6 章「Oracle BI Presentation Catalog の管理」を参照してください。

Presentation Catalog 項目に対する権限の設定

作成した Presentation Catalog 項目に対する権限を設定する前に、「Oracle BI Presentation Services の権限（共有情報アクセス制御用）の設定について」（143 ページ）の情報を確認してください。

共有 Dashboards の作成

Presentation Catalog の構造と権限を設定したら、他のユーザーが再利用できるように共有のダッシュボードとコンテンツを作成できます。グループの作成時にダッシュボードを指定しなかった場合は、ここで適切なグループ・フォルダを選択して、ダッシュボードを作成できます。

共有ダッシュボードの作成には、共有ダッシュボードで作成されるセクションが、実際には /Shared フォルダ内のフォルダへのショートカットであるという利点があります。このため、別の列、ページまたは別のダッシュボードにおいても、フォルダを削除したり再び追加できます。ユーザーは、「Add Folder」リンクをクリックして、Presentation Catalog の /Shared/Group フォルダまたは /Shared/Common フォルダから適切なフォルダを選択することによって、既存の共有セクションから「My Dashboard」を作成できます。

複数のユーザーが Presentation Services グループのデフォルトのダッシュボードを変更できるようにする場合は、これらのユーザーを別のグループに配置することを検討してください。たとえば、Sales という名前の Presentation Services グループを作成し、SalesHome という名前のデフォルトのダッシュボードを作成するとします。Sales グループのメンバーである 40 人のユーザーのうち 3 人を、SalesHome ダッシュボードのコンテンツを作成および変更できるようにする必要がある場合は、次の操作を実行します。プライマリ Sales グループと同じ権限の SalesAdmin グループを作成します。この新しい SalesAdmin グループに、SalesHome ダッシュボードとコンテンツの変更を許可する 3 人のユーザーを追加し、このグループに、Presentation Catalog に対する適切な権限を付与します。これによって、3 人のユーザーは、SalesHome ダッシュボードのコンテンツを作成および変更できるようになります。いずれかのユーザーで、ダッシュボードのコンテンツの変更権限が不要になった場合は、そのユーザーのグループ・メンバーシップを Sales に変更できます。Sales グループの既存のメンバーで、ダッシュボードのコンテンツの作成権限が必要になった場合は、そのユーザーのグループ・メンバーシップを SalesAdmin に変更できます。

ダッシュボードは特殊なフォルダ _portal に保存されます。このフォルダは、Presentation Catalog で操作しているときに非表示項目を表示するオプションを選択しないかぎり、表示されません。非表示の _portal フォルダは、グループ・フォルダの直下にあります。ダッシュボードはグループ・フォルダに含まれるため、そのグループ・フォルダに設定した権限はすべて継承されます。

複数のダッシュボードを 1 つのグループ・フォルダ内に作成して、各ダッシュボードに固有のフォルダ（ダッシュボードに割り当てる名前と同じ名前のフォルダ）を /_portal フォルダ内に作成できます。特定のダッシュボード・フォルダ（たとえば、/_portal/SalesGroup Dashboard）の下には、そのダッシュボードで作成したページに対応するフォルダがあります。ページ・フォルダの下には、列のフォルダがあります。

注意：列のフォルダには、システムによって自動的に名前が割り当てられます。

列のフォルダ内には、ダッシュボードに表示される項目または項目へのショートカットを含むセクション（フォルダまたはフォルダへのショートカット）があります。

共有ダッシュボードの作成方法の詳細は、「ダッシュボードの管理について」（74 ページ）を参照してください。

共有 Dashboards のページとコンテンツの追加

ダッシュボードを作成したら、ページとコンテンツを追加できます。

ページとコンテンツの追加

ページと列の追加方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

セクションの追加

セクションとは、ダッシュボード内に表示されるフォルダ、またはフォルダへのショートカットです。セクションをダッシュボードに追加する手順の詳細は、「ダッシュボードの管理」（74 ページ）を参照してください。

リクエストを Answers からセクションに追加する場合は、次のいずれかの操作を実行します。

- 前にサブジェクト領域フォルダに保存したリクエストを追加します。
- 新しいリクエストを作成して適切なサブジェクト領域フォルダに保存し、「Existing Request」リンクを使用して共有セクションにこれを追加します。

  いくつかの理由によりこの手法をお薦めします。サブジェクト領域フォルダの権限によって、ダッシュボードの権限を持つ場合があるが、特定のサブジェクト領域に対する権限は持っていないユーザーのダッシュボードからのリクエストがフィルタにより除外されます。同一のリクエストを複数のダッシュボード・セクションで参照したり、一度変更すればその変更をすべてのセクションに反映させることができます。

多数のグループ・フォルダに固有のコンテンツを操作している場合、/Shared フォルダの直下に、使用するための新しいフォルダを作成して、適切なグループの権限をこの新しいフォルダに対して「Read」に設定する必要が生じる場合があります。

共有項目の作成と使用

共有セクションの作成に加えて、共有セクションと「My Dashboard」セクション内で使用できる共有コンテンツを別に作成できます。たとえば、/Shared/Common フォルダに Images という名前のフォルダを作成することによって、イメージのライブラリを作成できます。このフォルダをダッシュボード（たとえば、Administrator の「My Dashboard」）のセクションとして追加します。セクションにイメージを配置した後は、ダッシュボードからそのセクションを削除できるため、どのダッシュボードにするかは問題ではありません。これは共有セクションであるため、フォルダはカタログの共有部分に残ることに注意してください。セクションを編集して、「Image」リンクをクリックすることによって、ライブラリで必要な各イメージを追加します。

注意：共有できるようにするライブラリが多数ある場合は、/Common フォルダ内に、/Sections と /Content または /Libraries という名前のフォルダを作成すると、他のダッシュボードの共通セクションとコンテンツを使用する場合に区別が容易になります。

「My Dashboard」セクションの共有コンテンツを使用するには、ユーザーは必要なセクションを編集して、「Item from Catalog」リンクをクリックし、/Shared/Common/Images フォルダにナビゲートして、追加するイメージをクリックします。

複数のダッシュボードまたはダッシュボード・セクションで使用したり使用する場合があるロゴ、イメージ、スクリプト、リンク、著作権などに、この同じ手法を使用する必要があります。これによって、1 箇所で項目に加えた変更をすぐにすべてのダッシュボードに反映させることができます。

Dashboards のテスト

ダッシュボードとコンテンツをユーザー・コミュニティにリリースする前に、いくつかのテストを実行します。

ダッシュボードをテストするには

1. 適切な権限を持つユーザーが、正常にアクセスして必要なコンテンツを表示できることを確認します。
2. 適切な権限を持たないユーザーはダッシュボードにアクセスできないことを確認します。
3. スタイルとスキンが仕様どおりに表示され、他の視覚要素も仕様どおりになっていることを確認します。
4. 問題が検出された場合はこれに対処してから再度テストします。正常な結果になるまでこのプロセスを繰り返します。

共有 Oracle Business Intelligence ドキュメント用の仮想ディレクトリの設定

仮想ディレクトリを Web サーバー上で共有ドキュメント用に設定します。仮想ディレクトリに /DashboardFiles という名前を付け、これを同じ名前の共有ネットワーク・ディレクトリにマップします。

これによって、適切な権限を持つユーザーは、このフォルダに対してファイルを公開したり、完全修飾されたネットワーク共有名ではなく相対 URL 名（たとえば、¥¥SharedServer¥CommonShare¥DashboardFiles¥AnnualReport.doc ではなく /DashboardFiles/AnnualReport.doc）でファイルを参照できるようになります。

ユーザー・コミュニティへのダッシュボードのリリース

テストの完了後、ダッシュボードが使用可能なことをユーザー・コミュニティに通知して、関連するネットワーク・アドレスを用意します。

代理ユーザーの承認について

Oracle BI Presentation Services では、あるユーザーを別のユーザーの代理にするよう承認できます。あるユーザー（プロキシ・ユーザー）が別のユーザー（ターゲット・ユーザー）の代理になる場合、プロキシ・ユーザーは、ターゲット・ユーザーのダッシュボードとレポートを表示できます。

あるユーザーを別のユーザーの代理にするよう承認することは、たとえば、管理者が作業の一部を直属の部下の 1 人に委任する場合や、IT サポート担当者が別のユーザーのアカウントをトラブルシューティングする場合に便利です。

ユーザーをプロキシ・ユーザーとして承認する場合、認可レベル（プロキシ・レベル）も割り当てます。プロキシ・レベルによって、ターゲット・ユーザーのダッシュボードとレポートにアクセスするときにプロキシ・ユーザーに付与される権限が決まります。

次の 2 つのプロキシ・レベルがあります。

- **Restricted**: ターゲット・ユーザーがアクセスできる項目に対する読取り専用の権限です。権限は、プロキシ・ユーザーのアカウント（ターゲット・ユーザーのアカウントではない）によって決まります。

  たとえば、プロキシ・ユーザーには「Access to Answers」権限が割り当てられておらず、ターゲット・ユーザーには割り当てられているとします。この場合、プロキシ・ユーザーがターゲット・ユーザーの代理になるとき、プロキシ・ユーザーは Answers にはアクセスできません。

- **Full**: 権限は、ターゲット・ユーザーのアカウントから継承されます。

  たとえば、プロキシ・ユーザーには「Access to Answers」権限が割り当てられておらず、ターゲット・ユーザーには割り当てられているとします。この場合、プロキシ・ユーザーがターゲット・ユーザーの代理になるとき、プロキシ・ユーザーは Answers にアクセスできます。

プロキシ・ユーザーとして代理するよう承認されたユーザーは、Oracle BI Presentation Services の「Settings」→「Act As」オプションを使用して、代理されるターゲット・ユーザーを選択できます。

ヒント： プロキシ・ユーザーがターゲット・ユーザーの代理になるには、ターゲット・ユーザーは 1 回以上 Oracle BI Presentation Services にログインして、自分のダッシュボードにアクセスしている必要があります。デフォルトのダッシュボードは、ダッシュボードが初めて表示されるときに作成されます。これには書込み権限が必要ですが、プロキシ・ユーザーはこの権限を持っていない場合があります。

代理ユーザーの承認のプロセス

ユーザーを代理ユーザーとして承認するには、次の作業を実行します。

- プロキシ・ユーザーとターゲット・ユーザーとの間における関連付けの定義（163 ページ）
- プロキシ機能用セッション変数の作成（164 ページ）
- プロキシ機能用 instanceconfig.xml ファイルの変更（165 ページ）
- プロキシ機能用カスタム・メッセージ・テンプレートの作成（165 ページ）
- プロキシ権限の割当て（168 ページ）

プロキシ・ユーザーとターゲット・ユーザーとの間における関連付けの定義

この作業は、代理ユーザーの承認のプロセス（163 ページ）における手順です。

プロキシ・ユーザーとターゲット・ユーザーとの間における関連付けをデータベースにおいて定義する場合、各関連付けで、次の項目を特定します。

- プロキシ・ユーザーの ID
- ターゲット・ユーザーの ID
- プロキシ・レベル（「full」または「restricted」）

たとえば、データベースに次のような Proxies という名前のテーブルを作成できます。

proxyId	targetId	proxyLevel
Ronald	Edward	full
Timothy	Tracy	restricted
Jeanne	Natalie	full
William	Kelly	restricted
Gail	Michael	restricted

プロキシ・ユーザーとターゲット・ユーザーとの間における関連付けを定義したら、Oracle BI Server の物理レイヤーにスキーマをインポートする必要があります。スキーマのインポート方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

プロキシ機能用セッション変数の作成

この作業は、代理ユーザーの承認のプロセス（163 ページ）における手順です。

プロキシ・ユーザーの認証では、次に示す 2 つのセッション変数とそれに関連付けられる初期化ブロックを作成します。

セッション変数	関連付けられる初期化ブロック

PROXY	初期化ブロック名：ProxyBlock
	初期化文字列の例：
	`select targetId`
	`from Proxies`
	`where 'VALUEOF(NQ_SESSION.RUNAS)'=targetId and ':USER'=proxyId`
	注意：使用しているデータベースのスキーマに応じてこの SQL 文を変更する必要があります。

PROXYLEVEL（オプション）
注意：PROXYLEVEL を作成しない場合、アクセス権限は「restricted」であるとみなされます。
	初期化ブロック名：ProxyLevel
	初期化文字列の例：
	`select proxyLevel`
	`from Proxies`
	`where 'VALUEOF(NQ_SESSION.RUNAS)'=targetId and ':USER'=proxyId`
	注意：使用しているデータベースのスキーマに応じてこの SQL 文を変更する必要があります。

セッション変数の作成方法の詳細は、『Oracle Business Intelligence Server 管理ガイド』を参照してください。

プロキシ機能用 instanceconfig.xml ファイルの変更

この作業は、代理ユーザーの承認のプロセス（163 ページ）における手順です。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）を変更して、プロキシ機能の次の情報を指定できます。

- Custom Messages フォルダにおけるカスタム・メッセージ・テンプレート（次の操作を実行する SQL 文が含まれる）名前。
  - プロキシ・ユーザーが代理することができるターゲット・ユーザーのリストの取得
  - プロキシ・ユーザーがターゲット・ユーザーの代理になることができるかどうかの確認
  - ターゲット・ユーザーの代理ができるプロキシ・ユーザーのリストの取得

  デフォルトの名前は LogonParamSQLTemplate です。

  カスタム・メッセージ・テンプレートの詳細は、「プロキシ機能用カスタム・メッセージ・テンプレートの作成」（165 ページ）を参照してください。
- 「Act As」ダイアログ・ボックスの「User」ボックスに一覧表示されるターゲット・ユーザーの最大数。1 人のプロキシ・ユーザーが代理できるターゲット・ユーザーの数がこの値を超えると、ターゲット・ユーザーのドロップダウン・リストのかわりに、プロキシ・ユーザーがターゲット・ユーザーの ID を入力できる編集ボックスがレンダリングされます。

  デフォルトは 200 です。

カスタム・メッセージ・テンプレートの名前とターゲット・ユーザーの最大数を、<TemplateMessageName> 要素と <MaxValues> 要素にそれぞれ指定します。これらの要素は、<LogonParam> 要素と </LogonParam> 要素との間に配置します。

次に例を示します。

```
<LogonParam>

    <TemplateMessageName>LogonParamSQLTemplate</TemplateMessageName>

    <MaxValues>100</MaxValues>

</LogonParam>
```

注意：<TemplateMessageName> 要素に指定する名前は、カスタム・メッセージ・ファイルの <WebMessage> 要素に指定する名前と一致する必要があります。詳細は、「プロキシ機能用カスタム・メッセージ・テンプレートの作成」（165 ページ）を参照してください。

プロキシ機能用カスタム・メッセージ・テンプレートの作成

この作業は、代理ユーザーの承認のプロセス（163 ページ）における手順です。

プロキシ機能カスタム・メッセージ・テンプレート（次の処理を実行する SQL 文が含まれる）を作成する必要があります。

- プロキシ・ユーザーが代理することができるターゲット・ユーザーのリストを取得する処理。このリストは、「Act As」ダイアログ・ボックスの「User」ボックスに表示されます。
- プロキシ・ユーザーがターゲット・ユーザーの代理になることができるかどうかを確認する処理。
- ターゲット・ユーザーの代理ができるプロキシ・ユーザーのリストを取得する処理。このリストは、ターゲット・ユーザーの「My Account」画面に表示されます。

カスタム・メッセージ・テンプレートで、これらの情報を取得するための SQL 文を次の XML 要素に配置します。

要素	説明
<getValues> </getValues>	ターゲット・ユーザーとそれに対応するプロキシ・レベルのリストを返す SQL 文を指定します。 この SQL 文では、次に示す列を 1 つ以上返す必要があります。 ■ 最初の列は、ターゲット・ユーザーの ID を返します。 ■ （オプション）2 番目の列は、ターゲット・ユーザーの名前を返します。
<verifyValue> </verifyValue>	現在のユーザーが、指定されたターゲット・ユーザーとして代理できるかどうかを確認する SQL 文を指定します。 この SQL 文は、ターゲット・ユーザーが有効な場合は 1 つ以上の行を、ターゲット・ユーザーが無効な場合は空のテーブルを返す必要があります。
<getDelegateUsers> </getDelegateUsers>	現在のユーザーとして代理できるプロキシ・ユーザーとそれに対応するプロキシ・レベルのリストを取得する SQL 文を指定します。 この SQL 文では、次に示す列を 1 つ以上返す必要があります。 ■ 最初の列は、プロキシ・ユーザーの名前を返します。 ■ （オプション）2 番目の列は、対応するプロキシ・レベルを返します。

カスタム・メッセージ・テンプレートを次のいずれかのファイルに作成できます。

- SAROOTDIR¥web¥msgdb¥customMessages フォルダ内のカスタムメッセージ・ファイル（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）
- SAROOTDIR¥web¥msgdb¥customMessages フォルダ内の別の XML ファイル（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）

カスタム・メッセージ・テンプレートを作成するには

1. カスタム・メッセージ・テンプレートを、元のカスタム・メッセージ・ファイルにおいて作成する手順は次のとおりです。
   a. 元のカスタム・メッセージ・ファイルのバックアップを別のフォルダに作成します。
   b. さらに開発コピーを別のフォルダに作成し、これをテキスト・エディタまたは XML エディタで開きます。

2 カスタム・メッセージ・テンプレートを別の XML ファイルにおいて作成する場合は、SAROOTDIR¥web¥msgdb¥customMessages フォルダでこのファイルを作成して開きます。SAROOTDIR はインストール・ディレクトリです。

3 <WebMessage> 開始要素と </WebMessage> 終了要素を追加して、カスタム・メッセージ・テンプレートを開始します。次に例を示します。

```
<webMessage name="LogonParamSQLTemplate">

</webMessage>
```

注意：<WebMessage> 要素に指定する名前は、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）において <TemplateMessageName> 要素に指定した名前と一致する必要があります。詳細は、「プロキシ機能用 instanceconfig.xml ファイルの変更」（165 ページ）を参照してください。

4 <WebMessage> 要素の後ろに、次の要素を追加します。

a <XML> 要素と </XML> 要素を追加します。

b <XML> 要素と </XML> 要素との間に、<logonParam name="RUNAS"> 要素と </logonParam> 要素を追加します。

c <logonParam name="RUNAS"> 要素と </logonParam> 要素との間に、次の各要素とそれに対応する SQL 文を追加します。

- <getValues> と </getValues>
- <verifyValue> と </verifyValue>
- <getDelegateUsers> と </getDelegateUsers>

次に、エントリの例を示します。

```
<XML>

   <logonParam name="RUNAS">

      <getValues>select targetId
                 from Proxies
                 where proxyId='@{USERID}'</getValues>

      <verifyValue>select targetId
                   from Proxies
                   where proxyId ='@{USERID}'
                   and targetId='@{VALUE}'</verifyValue>

      <getDelegateUsers>select proxyId, proxyLevel
                        from Proxies
                        where targetId ='@{USERID}'
      </getDelegateUsers>

   </logonParam>

</XML>
```

注意：例の SQL 文は、使用しているデータベースのスキーマに従って変更する必要があります。

5 カスタム・メッセージ・テンプレートを元のファイルの開発コピーに作成した場合は、customMessages フォルダの元のファイルを、新しく編集したファイルで置換します。

6 新しいファイルをテストします。

7 （オプション）カスタム・メッセージ・テンプレートを元のファイルの開発コピーに作成した場合は、バックアップ・コピーと開発コピーを削除します。

8 サーバーを再起動するか、「Oracle BI Presentation Services Administration」画面の「Reload Files and Metadata」リンクをクリックして、カスタム・メッセージ・テンプレートをロードします。「Oracle BI Presentation Services Administration」画面の詳細は、「「Oracle BI Presentation Services Administration」画面の概要」（145 ページ）を参照してください。

プロキシ権限の割当て

この作業は、代理ユーザーの承認のプロセス（163 ページ）における手順です。

プロキシ・ユーザーとして承認するユーザーごとに、またはプロキシ・ユーザーとして承認するメンバーが所属する Presentation Services グループごとに、プロキシ権限を割り当てる必要があります。権限の割当て方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services Administration における権限の設定」（149 ページ）を参照してください。

ユーザー開始管理操作の有効化

デフォルトでは、ユーザーは自分のパスワードを変更することも Presentation Services グループに参加することもできません。これはカスタマイズ可能であり、これらの権限のいずれかまたは両方を有効にできます。これは、ユーザー・コミュニティ全体に反映されます。

ユーザー開始管理操作を有効にするには

1 WWW、Web サーバーおよび Oracle Business Intelligence の各サービスを停止します。

2 ¥SAROOTDIR¥web¥msgdb¥messages¥controlmessages.xml を ¥SAROOTDIR¥web¥msgdb¥customMessages¥controlmessages.xml にコピーします。SAROOTDIR はインストール・ディレクトリです。

3 コピーしたファイルをテキスト・エディタで開きます。

4 ユーザーが Presentation Services グループに参加できるようにするには：

   a 次の構成キーを検索します。

```
<WebMessage name="kmsgJoinGroupLink"><!--<HTML><A insert="1"><MessageRef
name="kmsgUIJoinGroup"/></A></HTML> --></WebMessage>
```

   b 次のように編集します。

```
<WebMessage name="kmsgJoinGroupLink"><HTML><A insert="1"><MessageRef
name="kmsgUIJoinGroup"/></A></HTML></WebMessage>
```

   この編集により、<!-- と --> をキーから削除します。これらのコメント記号により機能が無効にされます。

5 ユーザーがパスワードを変更できるようにするには：

a 次の構成キーを検索します。

```
<WebMessage name="kmsgChangePasswordLink"><!--<HTML><A insert="1"><MessageRef
name="kmsgUIChangePassword"/></A></HTML> --></WebMessage>
```

b 次のように編集します。

```
<WebMessage name="kmsgChangePasswordLink"><HTML><A insert="1"><MessageRef
name="kmsgUIChangePassword"/></A></HTML></WebMessage>
```

この編集により、<!-- と --> をキーから削除します。これらのコメント記号により機能が無効にされます。

6 編集したファイルを保存します。

7 Oracle BI Server、Web サーバーおよび WWW の各サービスをこの順序で再起動します。

9 Oracle BI Presentation Services ロギングの使用

Oracle BI Presentation Services は、問題のトラブルシューティングに使用できる、情報記録用のロギング機能を備えています。また、このロギング機能は高度に構成できます。この章には、ロギング機能の構成パラメータの説明と、Oracle BI Presentation Services ログ・ファイルに関する情報が記載されています。

この章の内容は次のとおりです。

- Oracle BI Presentation Services ロギング機能の使用（172 ページ）
- Oracle BI Presentation Services 構成ファイルの構造（173 ページ）
- Oracle BI Presentation Services メッセージ構造（180 ページ）
- Oracle BI Presentation Services ロギング・レベル（181 ページ）
- Oracle BI Presentation Services ログ・フィルタ（182 ページ）

また、Siebel SupportWeb の Technical Note 519 も参照してください。

Oracle BI Presentation Services ロギング機能の使用

デフォルトでは、Oracle BI Presentation Services は、すべてのエラー・イベントと、重要性の高い情報イベントや警告イベントをログに記録するように構成されています。重要な情報イベントの一例としては、サーバーの起動と停止があります。ログ・ファイルには、sawlogxx.log という名前が付けられます。この xx は、増分される番号です。

ユーザーが見つけた特定の問題をデバッグするには、ロギング・レベルを上げてデフォルト構成よりも詳細な情報をログに記録させることができます。たとえば、Oracle BI Presentation Services の接続性に関する特定の問題をデバッグする際には、saw.odbc ログ・ソースのみの最大ロギング・レベルを増やせます。これにより、他のイベントの詳細ログによってログを乱雑にすることなく、そのコンポーネントの詳細ログが追加されます。その他の例として、グラフ・イベントのみを記録する新しいログ・ライターを作成できます。この例については、175 ページの図 5 を参照してください。

警告：特定の問題を診断する場合以外は、本番実装のロギングを増加しないでください。これは、ロギングがパフォーマンスに影響するためです。

Oracle BI Presentation Services の構成情報は、すべて logconfig.xml ファイルからロードされます。このファイルは、次のディレクトリにあります（オペレーティング・システム・プラットフォームによって異なる）。

- Windows の場合

  ```
  SADATADIR¥web¥config
  ```

- UNIX の場合

  ```
  SADATADIR/web/config
  ```

SADATADIR は、Oracle BI Presentation Services データ・ディレクトリです。

Oracle BI Presentation Services 構成ファイルの構造

構成 XML ファイルの構造を図 3 に示します。各ノードのカーディナリティは、大カッコで示されています。

```
Config
Default  [1..1]
    Writers  [0..1]
        Writer  [0..1]
            Filters  [0..1]
                FilterRecord  [0..n]
    WriterClassGroups  [0..1]
        WriterClassGroup  [0..n]
    Filters  [0..1]
        FilterRecord  [0..n]
```

図 3.　logconfig.xml ファイルの構造

4 つのライターを持つ logconfig.xml ファイルの例を図 4 に示します。

```
<?xml version="1.0" ?>
<Config>
    <Default>
    <Writers>
        <Writer implementation="FileLogWriter" name="Global File Logger"
          writerClassId="1" dir="{%SADATADIR%}/web/log" filePrefix="sawlog"
          maxFileSizeKb="10000" filesN="10" />
        <Writer implementation="CoutWriter" name="Global Output Logger"
          writerClassId="2" />
        <Writer implementation="EventLogWriter" name="Event Logger"
          writerClassId="3" />
        <Writer implementation="CrashWriter" name="CrashWriter" writerClassId="4"
       />
    </Writers>
    <WriterClassGroups>
        <WriterClassGroup name="All">1,2,3,4</WriterClassGroup>
        <WriterClassGroup name="File">1</WriterClassGroup>
        <WriterClassGroup name="Cout">2</WriterClassGroup>
        <WriterClassGroup name="EventLog">3</WriterClassGroup>
        <WriterClassGroup name="Crash">4</WriterClassGroup>
    </WriterClassGroups>
    <Filters>
        <FilterRecord writerClassGroup="Cout" path="saw" information="31"
          warning="41" error="41" security="41" />
        <FilterRecord writerClassGroup="File" path="saw" information="31"
          warning="100" error="100" security="41" />
        <FilterRecord writerClassGroup="File" path="saw.mktgsqlsubsystem.joblog"
          information="41" warning="100" error="100" security="41" />
        <FilterRecord writerClassGroup="File" path="saw.httpserver.request"
          information="51" warning="100" error="100" security="41" />
        <FilterRecord writerClassGroup="File" path="saw.httpserver.response"
          information="51" warning="100" error="100" security="41" />
    </Filters>
    </Default>
</Config>
```

図 4.　4 つのライターを持つ logconfig.xml ファイルの例

ライターの 1 つでグラフ・イベントを記録するように設定されている logconfig.xml ファイルの例を、図 5 に示します。

```
<Config>
<Default>
        <Writers>
                <Writer implementation="FileLogWriter" name="Global File Logger" writerClassId="1"
                        dir="{%SADATADIR%}/web/log" filePrefix="sawlog" maxFileSizeKb="10000"
                        filesN="10" />
                <Writer implementation="CoutWriter" name="Global Output  Logger"
                writerClassId="2"/>
                <Writer implementation="EventLogWriter" name="Event  Logger" writerClassId="3" />

          <!-- New log writer dedicated for charts -->
                <Writer implementation="FileLogWriter" name="Chart Logger"
                writerClassId="4"
                        dir="{%SADATADIR%}/web/log/chart" filePrefix="sawlog"
                        maxFileSizeKb="10000" filesN="10" />
        </Writers>
        <WriterClassGroups>
                <WriterClassGroup name="All">1,2,3,4</WriterClassGroup>
                <WriterClassGroup name="File">1</WriterClassGroup>
                <WriterClassGroup name="Cout">2</WriterClassGroup>
                <WriterClassGroup name="EventLog">3</WriterClassGroup>
                <WriterClassGroup name="Chart">4</WriterClassGroup>
        </WriterClassGroups>
        <Filters>
                <FilterRecord writerClassGroup="Cout" path = "saw" information="31" warning="41"
                error="41" security="41"/>
                <FilterRecord writerClassGroup="File" path = "saw" information="31" warning="100"
                error="100" security="41"/>
                <FilterRecord writerClassGroup="File" path = "saw.mktgsqlsubsystem.joblog"
                information="41" warning="100" error="100" security="41"/>
          <!-- Logs all chart events, including minor informational events -->
                <FilterRecord writerClassGroup="Chart" path = "saw.charts"
                information="100" warning="100" error="100" security="100"/>
                <FilterRecord writerClassGroup="Chart" path = "saw.views.chart"
                information="100" warning="100" error="100" security="100"/>
          </Filters>
</Default>
</Config>
```

図 5.　Chart Logger ライターを持つ logconfig.xml ファイルの例

構成階層内の各ノードの説明を表 18 に示します。

表 18. Oracle BI Presentation Services のログ構成ファイルの要素

要素	属性	説明
Writers	ライターの構成を含みます。 この構成は、起動時にロードされます。	
Writer	ライターを構成します。	
	implementation	ライターを実装する C++ クラスの名前。 次の実装が定義されています。 ■ FileLogWriter。ディスク・ファイルに書き込みます。 ■ CoutWriter。標準出力に書き込みます。 ■ EventLogWriter。Windows イベント・ログまたは UNIX syslog に書き込みます。 ■ CrashWriter。Oracle BI Presentation Services が特定のソース・ファイルや行番号からログを記録しようとするとクラッシュ・ダンプ・ファイルに書き込みます。 　■ 本番環境で、ログ対象にはなるが致命的ではないエラー（NQTEST の失敗など）情報の記録に使用されます。 　■ Windows の CrashWriter では、`dbghelp.dll` の適切なバージョン（6.0.17.0 以上）が必要です。`dbghelp.dll` の正しいバージョンは、`support¥windows¥system32` にあります。この DLL を、`WINNT¥system32` または `main¥bin` ディレクトリに配置します。登録は不要です。
	name	ライターの一意の名前。
	writerClassId	1 ～ 10 の整数の番号。フィルタでは、この番号を使用してロギングの可否を指定します。 個々のライターには、一意の値が必要です。この値は、後でフィルタの構成に使用されます。 異なるライターが同じクラス ID を持つことはできますが、フィルタによってライターが区別されなくなります。

表 18. Oracle BI Presentation Services のログ構成ファイルの要素

要素	属性	説明
Writer（続き）	fmtName	（オプション）ログに記録するメッセージのフォーマットを指定します。有効な値を次に示します。 ■ **default**: メッセージを、内容を識別する見出しとともにフォーマットします。 ■ **short**: メッセージを、内容を識別する見出しのない短縮形式でフォーマットします。 ■ **xml**: メッセージを XML 形式でフォーマットします。 この属性を設定しない場合は、ログ・メッセージが default フォーマットで記録されます。 これらのフォーマットの例については、「ログ・メッセージのフォーマットの例」（178 ページ）を参照してください。
	FileLogWriter 固有の属性：	
	dir	ログ・ファイルの作成先ディレクトリ。
	maxFileSizeKb	ログ・ファイルの最大サイズ（KB）。 ファイル・サイズ制限に達すると、ファイルは閉じられて新しいログ・ファイルが作成されます。
	filePrefix	ログ・ファイルの接頭辞。
	filesN	ログ・ファイルの最大数。 この数を超えると、ログ出力は 1 つ目のファイルの最初から書込みを開始します。
	EventLogWriter 固有の属性：	
	winSource	ログに記録されたイベントのイベント・ログ・ソース。
	CrashWriter 固有の属性：	
	file	ダンプ・ファイルのパス。 Windows では、ダンプ・ファイルは bin¥coredumps に作成され、Oracle BI Presentation Services の実行は中断されません。
	line	ダンプ・ファイルの行番号。
WriterClassGroups	ライター・クラスの定義を含みます。ライター・クラスは、ライター・クラス ID のグループです。	
WriterClassGroup	（子テキストとして）クラス ID のカンマ区切りリストを含みます。	
	name	WriterClassGroup の名前。
Filters	フィルタの構成を含みます。	

表 18. Oracle BI Presentation Services のログ構成ファイルの要素

要素	属性	説明
FilterRecord	writerClassGroup	このレコードが適用されるライターのグループを指定します。WriterClassGroup は、WriterClassGroups セクションで定義しておく必要があります。
	path	ログ・ソースのパス。SOAP 情報のロギングを有効にするには、次の値を入力します。 saw.httpserver.request.soaprequest 現在のフィルタ・レコードが、このパスで特定されるソフトウェア・コンポーネントとそのすべてのサブコンポーネントに適用されます。
	information	対応するメッセージ・タイプの重大度を指定する整数。 指定されている数値よりも重大度インデックスが低いメッセージのみがログに記録されます。
	warning	
	error	
	security	

ログ・メッセージのフォーマットの例

Writer 要素の fmtName 属性により、ログ・メッセージが default、short または xml のいずれかの形式でフォーマットされます。次に、これらのフォーマットの例を示します。

default フォーマットの例

default フォーマットでは、次に示すように、内容を識別する見出しとともにメッセージがフォーマットされます。

```
Type: Information
Severity: 30
Time: Wed Jul 26 11:22:20 2006
File: project¥sawserver¥sawserver.cpp
Line: 399
Properties: ThreadID-2552
Location:
        saw.sawserver
        saw.sawserver.initializesawserver
        saw.sawserver
OracleBI Presentation Server has started successfully.
```

short フォーマットの例

short フォーマットでは、次に示すように、内容を識別する見出しのない短縮形式でメッセージがフォーマットされます。

```
I30    Wed Jul 26 11:22:20 2006    sawserver.cpp    399    saw.sawserver    OracleBI
Presentation Server has started successfully.
```

XML フォーマットの例

xml フォーマットでは、次に示すように、XML 形式でメッセージがフォーマットされます。

```
<Message>
    <Type>I</Type>
    <Severity>30</Severity>
    <Time>Wed Jul 26 11:22:20 2006 </Time>
    <File>sawserver.cpp</File>
    <Properties>
        <Property>
            <Name>ThreadID</Name>
            <Values>4524</Values>
        </Property>
    </Properties>
    <Location>
        <Logsource>saw.sawserver</Logsource>
        <Logsource>saw.sawserver.initializesawserver</Logsource>
        <Logsource>saw.sawserver</Logsource>
    </Location>
    <MessageText>OracleBI Presentation Server has started successfully.</MessageText>
</Message>
```

Oracle BI Presentation Services メッセージ構造

Oracle BI Presentation Services でログに記録されるメッセージには、それぞれ表 19 に示すような、複数のコンポーネントがあります。

表 19. Oracle BI Presentation Services ログ・メッセージのコンポーネント

メッセージ・コンポーネント	説明
メッセージ・テキスト	ユーザーへのログ・メッセージ・テキスト。
メッセージ・タイプ	information、warning、error または security という 4 つのメッセージ・タイプがあります。 最初の 3 つのタイプの用途は一目瞭然です。security は、ユーザーのログイン、ログインの失敗、ユーザーがアクセスしたカタログ項目 XYZ など、セキュリティ・タイプ情報の監査用に予約されています。
重大度	重大度は、正の整数として表されます。 この値が小さいほど、メッセージの重要性は高くなります。つまり、重大度が 0 のメッセージが最も重要なメッセージ・タイプで、重大度が 1000 のメッセージがまったく重要でないメッセージになります。

ログ・ソース	ログ・ソースは、メッセージの発生する場所を示します。
	
	ソースは、常に saw.component.subComponent.function という形式になります。ソース内のピリオド（.）の数に制限はありません。ソースのレベルは、プログラマの判断でいくらでも深くできます。さらに、各ログ・メッセージには、エラーがログに記録される原因となったコード・パスに応じて、1 つまたは複数のログ・ソースを関連付けることができます。
	
	たとえば、「Unable to open file」というメッセージを、複数ソースのスタック *{saw.delivers, saw.charts}* やログ・ソース・スタック *{saw.views, saw.pdf}* と一緒にログに記録できます。
	
	既知のログ・ソースをすべて出力するには、次のように logsources コマンド・オプションを使用します。
	
	■ Windows の場合
	
	`SAROOTDIR¥web¥bin¥sawserver /logsources`
	
	SAROOTDIR は、インストール・ディレクトリです。
	
	■ UNIX の場合
	
	`. SAROOTDIR/setup/saw.sh`
	`SAROOTDIR/web/bin/sawserver -logsources`
	
	SAROOTDIR は、インストール・ディレクトリです。

表 19. Oracle BI Presentation Services ログ・メッセージのコンポーネント

メッセージ・コンポーネント	説明
メッセージ・プロパティ	プロパティは、その他の情報を示します。情報の種類は、メッセージに応じて異なります。ユーザー名、クライアント・ブラウザの IP アドレス、スレッド ID などを含みます。

注意：ログに「Config Key is not set」というメッセージがある場合、これはエラーではなく、構成キーのステータス（設定されているかどうか）を示しています。

Oracle BI Presentation Services ロギング・レベル

ログ・レベルのカテゴリ、影響および説明を表 20 に示します。

表 20. Oracle BI Presentation Services ロギング・レベル

カテゴリ	レベル	影響	説明
エラー	10	破損	データの破損が検出された。
	20	致命的	再起動なしではリカバリできない。
	25	不明	catch (...) 用の重大度の特殊なケース。
	30	クリティカル	注意を要するリカバリ可能なエラー。
	40	エラー	基本的なエラー・メッセージ。
	45	ユーザー	ユーザー入力エラー用の特殊な重大度。
警告	30	クリティカル	システムが正常に稼動し続けるには、なんらかの処置を即時に実行する必要がある。
	40	警告	基本的な警告。
	50	軽度	比較的軽度な警告。

表 20. Oracle BI Presentation Services ロギング・レベル

カテゴリ	レベル	影響	説明
セキュリティ	20	致命的	操作性が損なわれる。ライセンス・ファイルが存在しない、ライセンスされたコンポーネントがない、必要なディレクトリにアクセスできないなどの問題がある。
	30	クリティカル	不正な侵入のほか、アクセス拒否により Delivers サーバーへの接続が失敗するなどの問題がある。
	40	セキュリティ	必要なオブジェクトまたはリクエストされたオブジェクトへのアクセスが拒否される。
	50	軽度	不正なパスワードや ID によるユーザー・ログインを失敗させる機能などを実行可能。
	55	トレース	ユーザー・ログイン、ユーザー・ログアウトなど、通常のセキュリティ・アクティビティをトレースできる特殊な重大度。
情報	20	致命的	即時に確認が必要な致命的なイベント。
	30	クリティカル	起動、停止などの必須イベント。
	40	参照用	自動保存の完了などの管理情報。
	45	システム	キャッシュ・クリーンアップの開始や完了などの重要なシステム情報を表す特殊な重大度。
	50	軽度	セッション・タイムアウトなど、より重要性が低い詳細情報。

Oracle BI Presentation Services ログ・フィルタ

FilterRecord では、ロギングの詳細がカスタマイズされます。FilterRecord を使用すると、Web ログのカテゴリ（エラー、警告、セキュリティ、情報）に応じて実装（出力タイプ）とロギング・レベルを指定できます。

次の例では、最初の 2 つの FilterRecord に次の文字列が含まれています。

```
path="saw"
```

この文字列により、情報イベントがレベル 31 で、エラー・メッセージがレベル 41 でログに記録されます。

```
<FilterRecord writerClassGroup="Cout" path="saw" information="31" warning="41"
  error="41" security="41" />
<FilterRecord writerClassGroup="File" path="saw" information="31" warning="100"
  error="100" security="41" />
<FilterRecord writerClassGroup="File" path="saw.mktgsqlsubsystem.joblog"
  information="41" warning="100" error="100" security="41" />
```

このハイレベル・パスは、すべてのイベントに適用されます。

FilterRecord をカスタマイズするには、前述の例の 3 つ目の要素のように新しい FilterRecord を追加してから、各種イベントのログ・レベルをきめ細かく指定します。この例では、情報が saw.mktgsqlsubsystem.log からディスク・ファイルのログに記録されることにより、マーケティング・ジョブ・イベントが生成されます。

ジョブ詳細のロギングを停止するには、次の例に示すように情報レベルを 41 から 51 に変更するか、行をコメント・アウトします。

```
<FilterRecord writerClassGroup="File" path="saw.mktgsqlsubsystem.joblog"
  information="41" warning="100" error="100" security="41" />
<FilterRecord writerClassGroup="File" path="saw.httpserver.request"
  information="51" warning="100" error="100" security="41" />
<FilterRecord writerClassGroup="File" path="saw.httpserver.response"
  information="51" warning="100" error="100" security="41" />
```

10 Oracle BI Presentation Services のユーザー・インタフェースのカスタマイズ

この章では、Oracle BI Presentation Services のユーザー・インタフェースの外観をカスタマイズする方法について説明します。

注意： Oracle BI Presentation Services のユーザー・インタフェースの要素と外観のカスタマイズは、JavaScript の使用によってではなく、XML メッセージ・ファイルと、スタイルおよびスキンの変更によって実行されます。SAROOTDIR¥web¥app¥res フォルダにある JavaScript ファイルは変更しないでください（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）。その理由は、これらのスクリプト内のオブジェクトとメソッドは変更される可能性があり、アップグレード時にこれらのファイルが置換される可能性があるためです。（ダッシュボードでは、適切な権限を持つユーザーは、個々のダッシュボード・セクションに HTML を追加して各セクションをカスタマイズできます。この HTML には JavaScript を含めることができます。詳細は、『Oracle Business Intelligence Answers, Delivers, and Interactive Dashboards ユーザーズ・ガイド』を参照してください。）

この章の内容は次のとおりです。

- スキンおよびスタイルについて（186 ページ）
- Oracle BI Presentation Services のユーザー・インタフェース・スタイルの変更（187 ページ）
- Oracle BI Presentation Services のスタイルおよびスキンのデフォルトの指定（189 ページ）
- Oracle BI Presentation Services のダッシュボード以外のコンポーネントのカスタマイズ（190 ページ）
- XML メッセージ・ファイルを使用した Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースのカスタマイズ（190 ページ）
- Oracle BI Presentation Services 画面への言語の選択の追加（195 ページ）
- 頻繁にカスタマイズされる Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェース・メッセージ（196 ページ）
- Oracle BI Presentation Services ログイン画面の外観のカスタマイズ（197 ページ）
- Oracle Business Intelligence ReportUI Portlet の構成（197 ページ）

スキンおよびスタイルについて

Oracle BI Presentation Services 管理者は、スキンとスタイルを作成して、Oracle Business Intelligence インタフェースの表示方法を制御できます。スキンとスタイルの一番大きな違いは、スキンはログオン時にユーザーに自動割当て可能であるのに対して、スタイルは実行時にユーザーが選択してテーブル・フォーマットなどの項目を制御できる点にあります。製品に付属するデフォルトのスキンとスタイルは、Oracle BI Presentation Services のアプリケーション・リソース・ディレクトリ（インストール・ディレクトリ内の ¥web¥app¥res ディレクトリ）の sk_* および s_* フォルダにあります。

スキンは、システム・セッション変数 SKIN の値に基づいて割り当てられます。そのうえで、ユーザーは、Oracle Business Intelligence へのログオン時にスタイルを選択して、リクエスト結果（またはダッシュボード）に適用する一部の要素（フォント、色、テーブルおよびグラフの各種属性など）を変更できます。スキンは、企業ロゴやその他のイメージなど、変更不可の要素で構成されます。

スタイルは、テキストおよびリンクの色、フォントとテキスト・サイズ、テーブルの枠線、グラフの色と属性など、ダッシュボードと結果に適用する表示フォーマットを制御します。スタイルは変更可能な要素で構成され、スタイルシートにまとめるのが一般的です。

SKIN 変数の使用

SKIN 変数は、変更不可の要素を含む、Oracle BI Presentation Services のディレクトリを指し示します。これらのディレクトリは Oracle BI Presentation Services のデータ・リソース・フォルダ（¥SADATADIR¥web¥res）にあり、sk_ で始まります。たとえば、ディレクトリの名前が sk_MyCompany であれば、SKIN 変数は MyCompany に設定します。スタイルは、変更可能な要素を含む同様のディレクトリにまとめます。スタイル・フォルダとスタイルシートは、s_ で始まるディレクトリ内のリソース・フォルダにあります。たとえば、ディレクトリの名前が s_MyCompanyStyle であれば、そのスタイル名は My CompanyStyle になります。

スキン・ディレクトリとスタイル・ディレクトリには、ともにカスケード・スタイルシート（拡張子が .css のファイル）、イメージ、およびグラフのテンプレートを含めることができます。Oracle BI Presentation Services 管理者は、Oracle BI Presentation Services に新しいスタイル・ディレクトリと新しいスキン・ディレクトリを作成して、新しいスタイルと新しいスキンを作成できます。

注意：スタイルおよびスキンの名前には、アンダースコアを含めることはできません。

スキンおよびスタイルの使用

スキンとスタイルは、ロゴ、色スキーム、フォント、テーブル枠線などの要素を指定することで、レポートおよびダッシュボードのルック・アンド・フィールのカスタマイズに使用するのが通常ですが、対象のスタイルシート（.css）ファイルに特定のスタイル・タグを含めることで、ページ・コントロールなどの要素の位置を制御する目的にも使用できます。たとえば、ページ・コントロールのテープ・デッキは、デフォルトではテーブルの中央下に表示されます。テープ・デッキの表示位置（テーブルの上、下、または表示しないなど）は、テーブルのプロパティを必要に応じて編集することで制御できます。また、ページ・コントロールの位置揃えは、特定のスタイル・タグを使用することでも制御できます。たとえば、横長のテーブルでは、中央揃えのページ・コントロールが、ユーザーが右方向にスクロールしないと見えない場合があります。対象のスキンまたはスタイルシート（.css）ファイルに次のスタイル・タグを含めることで、位置を左揃えに変更できます。

```
.TapeDeckCell
{
text-align: left;
```

Oracle BI Presentation Services のユーザー・インタフェース・スタイルの変更

デフォルトのインストール・ディレクトリにあるカスケード・スタイルシート（CSS）ファイルとイメージを変更して、カスタム・ユーザー・インタフェースを作成できます。デフォルトのイメージとスタイルシートは、SAROOTDIR¥web¥app¥res¥s_oracle10 フォルダにあります（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）。このディレクトリには、現行の Oracle Business Intelligence のスタイルに関連するサブディレクトリ（b_mozilla_4、charts、images、maps、meters、popbin、portal および views）が含まれます。

スタイルシートの知識と操作経験のある Web 開発者は、デフォルトの Oracle BI Presentation Services のスタイルを変更できます。

注意： グラフ処理に使用される PopChart の外観ファイルへの変更はサポートされません。

この項の内容は次のとおりです。

- 「カスケード・スタイルシートを使用したデフォルトの Oracle BI Presentation Services のスタイルの変更」（187 ページ）
- 「カスケード・スタイルシートの属性と Oracle BI Presentation Services について」（188 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services での新しいダッシュボード・スタイルの作成」（188 ページ）
- 「例：Oracle BI Presentation Services でのダッシュボードのバナー・イメージのカスタマイズ」（189 ページ）

カスケード・スタイルシートを使用したデフォルトの Oracle BI Presentation Services のスタイルの変更

スタイルシートの知識と操作経験のある Web 開発者は、デフォルトの Oracle BI Presentation Services のスタイルを変更できます。ほとんどのダッシュボードのユーザー・インタフェースは、次の 3 つのファイルの影響を受けます。

- **PortalBanner.css:** ダッシュボードの上部セクションの外観全体に影響を与えます。これには、ダッシュボードの名前やリンクなどが含まれます。
- **PortalContent.css:** ダッシュボードのメイン・コンテンツ領域の外観全体に影響を与えます。
- **Views.css:** Oracle Business Intelligence の各リクエスト・ビュー（タイトル、テーブル、ピボット・テーブル、グラフ、説明、ティッカなど）に対応します。

デフォルトの Oracle 10 スタイルシートのサンプルを表示するには

1. ダッシュボードを右クリックして「View Source」を選択し、テキスト・エディタで Web ページを表示します。

   複数の CSS ファイルが Web ページのヘッダー（<HEAD>....</HEAD>）で参照されています。

2 ソース・ドキュメント内で検索を実行し、キーワードとして class を探します。

1 つの CSS ファイルの使用可能な属性ごとにクラス変数が 1 つあります。

最初に検出されるクラスは PortalBody クラスです（<body class="PortalBody">）。PortalContent.css ファイルを開くと、PortalBody に対応するセクションがあります。たとえば、次のように設定されています。

```
.PortalBody {
        font-family: Verdana, Arial, Sans-serif;
        font-size: 9pt;
        background-color: #FFFFFF;
        margin: 0 0 2 0;
}
```

ここでダッシュボード・ページの背景色を変更するには、16 進の色表記を #FFFFFF（白）から好みの色に変更します。この変更を保存したら、Web ブラウザに戻って更新をクリックし、変更結果を表示できます。

様々な CSS クラスを変更することで、Oracle Business Intelligence アプリケーションの外観全体を調整できます。これは時間のかかるプロセスですが、編集可能なクラスや最も頻繁に使用されるクラスがわかれば、テキスト・エディタで検索と置換を実行することによってスタイルを一括変更できるようになります。

カスケード・スタイルシートの属性と Oracle BI Presentation Services について

Web 開発者は、カスケード・スタイルシートによって、Oracle Business Intelligence 内のあらゆるオブジェクトを制御できます。イメージ、背景、フォントの色とサイズ、テーブル・セルのグリッド線やセル内の余白などを変更できます。

カスケード・スタイルシートの詳細は、Microsoft Developer Network（MDDN）などの関連リソースを参照してください。

Oracle BI Presentation Services での新しいダッシュボード・スタイルの作成

新しいスタイルを作成する最も簡単な方法は、SAROOTDIR¥web¥app¥res¥s_oracle10 ディレクトリ（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）をコピーして、SADATADIR¥web¥res ディレクトリ（SADATADIR はデータ・ディレクトリ）に貼り付けることです。メインのインストール・ディレクトリではなくデータ・ディレクトリにコピーすることで、カスタマイズした CSS ファイルとイメージがソフトウェアのアップグレード時に上書きされるのを防止できます。

スタイルをコピーしたら、ディレクトリの名前を s_oracle10 から意味のある名前（s_ProspectName など）に変更します。

b_mozilla_4.0 ディレクトリには、ダッシュボードにクイック変更を行うための重要なファイルが含まれます。

注意：「Dashboard Properties」画面からから新しいスタイルシートを表示するには、Oracle BI Presentation Services のサービスを再起動する必要があります。

新しいスタイルを作成するには

1 SAROOTDIR¥web¥app¥res¥s_oracle10 ディレクトリをコピーします（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）。

2. SADATADIR¥web¥res ディレクトリに貼り付け（SADATADIR はデータ・ディレクトリ）、意味のある名前に変更します。
3. 変更を保存します。

   新しいスタイルシートが「Dashboard Properties」画面で使用可能になるのは、Oracle BI Presentation Services のサービスの再起動後です。

例 : Oracle BI Presentation Services でのダッシュボードのバナー・イメージのカスタマイズ

bg_Banner.gif イメージは、ダッシュボードの上部セクションに表示されます。開発者は bg_Banner.gif ファイルを開いて変更したり、それを削除して新しい bg_Banner.gif ファイルを再作成したりできます。

Oracle BI Presentation Services のスタイルおよびスキンのデフォルトの指定

ユーザーが Dashboards の「Dashboard Properties」画面でデフォルのスタイルを選択する際に使用されるスタイルとスキンを指定するには、Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）に必要なエントリを追加します。

- 「使用する Oracle BI Presentation Services のスタイル・フォルダの指定」（189 ページ）
- 「使用する Oracle BI Presentation Services のスキン・フォルダの指定」（189 ページ）

ユーザーがスタイルを選択しなかった場合、またはこれらのエントリが instanceconfig.xml ファイルにない場合は、オラクル社のスタイルとスキンが使用されます。これらのスタイルとスキンは、それぞれ SAROOTDIR¥web¥app¥res ディレクトリ（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）の s_oracle10 フォルダと sk_oracle10 フォルダにあります。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における作業の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

使用する Oracle BI Presentation Services のスタイル・フォルダの指定

ユーザーが Dashboards の「Dashboard Properties」画面で「Styles」ドロップダウン・リストから「Default」オプションを選択したときに使用される、¥web¥app¥res フォルダ内のスタイル・フォルダを指定できます。スタイル・フォルダ名が s_TestStyle などのように s_ から始まる場合は、エントリからそれらの文字を省略できます。

次に、エントリの例を示します。

```
<DefaultStyle>TestStyle</DefaultStyle>
```

使用する Oracle BI Presentation Services のスキン・フォルダの指定

「使用する Oracle BI Presentation Services のスタイル・フォルダの指定」（189 ページ）の説明で選択したスタイル・フォルダと組み合せて使用するスキン・フォルダを指定するには、次のエントリを追加します。スキン・フォルダ名が sk_TestSkin などのように sk_ から始まる場合は、エントリからそれらの文字を省略できます。

次に、エントリの例を示します。

```
<DefaultSkin>TestSkin</DefaultSkin>
```

Oracle BI Presentation Services のダッシュボード以外のコンポーネントのカスタマイズ

ダッシュボード以外のコンポーネントには、Answers、Delivers、Oracle BI Presentation Services Administration などがあります。これらのコンポーネント用の CSS ファイルは、メイン・インストール・ディレクトリ（SAROOTDIR¥web¥app¥res¥sk_oracle10）内の sk_ ディレクトリにあります。サブディレクトリの b_mozilla_4 には、Answers、Delivers、Oracle BI Presentation Services Administration などに対応付けられた CSS ファイルがあります。

「Oracle BI Presentation Services のユーザー・インタフェース・スタイルの変更」（187 ページ）の説明と同じロジックを使用して、Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースのダッシュボード以外のコンポーネントに変更を加えます。

ダッシュボード以外のコンポーネントはグローバルに制御されます。ダッシュボード以外のコンポーネントでは、複数のユーザー・インタフェースを切り替えて使用することはできません。

XML メッセージ・ファイルを使用した Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースのカスタマイズ

この項では、XML 文字列を使用してメッセージ・ファイル内のテキスト要素をカスタマイズすることで、Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースのデフォルトの外観と動作を管理する方法について説明します。

注意：この項の目的は、XML の専門技術を持つ組織を対象として、さらなるカスタマイズの実行方法を説明することにあります。XML の専門技術が十分でない場合は、サード・パーティにカスタマイズのサポートを要請することを検討してください。

この項の内容は次のとおりです。

- 「Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースの XML メッセージ・ファイルについて」（191 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services の XML メッセージ・ファイルの構造」（191 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services の XML メッセージのカスタマイズ」（191 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services の XML メッセージ名要素の名前解決」（193 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services の XML テンプレートのサンプル」（193 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services の custommessages.xml ファイルの例」（194 ページ）

注意：このマニュアルの他の項では、メッセージ・ファイルのテキスト要素をカスタマイズして実行可能な追加カスタマイズについて説明されています。たとえば、「Answers のピボット・テーブル設定の構成」（49 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースの XML メッセージ・ファイルについて

Answers、Delivers およびダッシュボード・ページに表示されるテキスト要素の多くをカスタマイズできます。テキスト要素の例には、テキスト文字列の内容、リンク名やボタン名などのプロンプト・テキスト、アクションの結果としてユーザーに表示されるエラーおよび情報メッセージのテキストなどがあります。

これらのテキスト要素は、Oracle BI Presentation Services に付属する外部メッセージ・ファイルに記述されています。メッセージ・ファイルは XML 形式です。言語固有のメッセージは、SAROOTDIR¥web¥msgdb¥l_xx¥messages フォルダにあります。ここで、SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ、xx は選択されているロケールの言語識別子です（たとえば、アメリカ英語の識別子は en）。言語に依存しないメッセージは、SAROOTDIR¥web¥msgdb¥messages フォルダにあります（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）。

メッセージ・ファイルは直接編集しないでください。これは、新しいバージョンまたはサービス・リリースのインストール時に変更が保持されないためです。詳細は、「Oracle BI Presentation Services の XML メッセージのカスタマイズ」（191 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services の XML メッセージ・ファイルの構造

個々のメッセージ・ファイルには、それに含まれるコンテンツの種類を表す名前が付けられています。たとえば、logonmessages.xml ファイルには、アプリケーションへのログオン / ログオフに関連するメッセージ・コンテンツが保持されています。各 XML ファイルでは、WebMessage name= 要素によってメッセージ名が定義されます。WebMessage name= 要素は、メッセージ識別子と呼ばれます。

MessageRef 要素を使用することで、特定のメッセージから別のメッセージ・コンテンツを参照することもできます。たとえば、logonmessages.xml ファイルの次のメッセージは、別のメッセージの値を参照しています。

```
<WebMessage name="kmsgAuthenticateNotLoggedOnToLogOnClickHere">
 <HTML>
  You are not currently logged in to the
  <MessageRef name="kmsgProductServer" />
```

このメッセージのエントリ `<MessageRef name="kmsgProductServer" />` は、メッセージ識別子が kmsgProductServer であるメッセージからサーバー名の値が取得されることを表します。このメッセージは productmessages.xml ファイルにあり、その値は Oracle BI Server です。

```
<WebMessage name="kmsgProductServer" CRC="nnnnnnnnnnnnnnnnnnnn">

 <TEXT>Oracle BI Server</TEXT>
```

著作権情報や製品名などが含まれるような一部のメッセージは保護されているため変更できません。productmessages.xml ファイルを確認すると、WebMessage 要素の前に、関連付けられた名前が変更できないことを示す説明書きがあります。

Oracle BI Presentation Services の XML メッセージのカスタマイズ

この項では、保護されていないメッセージ・コンテンツの変更方法について例を示しながら説明します。この項の目的はメッセージ・テキストの変更方法を示すことであり、XML の説明ではありません。

メッセージをカスタマイズするには

1. 同じ名前を持つメッセージ識別子を作成して、そのテキストをカスタマイズします。
2. customMessages という名前でカスタム・メッセージ・フォルダを作成します。

   注意：Oracle Business Intelligence アプリケーションを使用している組織では、このフォルダにファイルが既存する場合があります。このファイルは、Oracle Business Intelligence による Oracle Business Intelligence アプリケーションのサポートに必要なファイルであるため、絶対に変更、移動および削除しないでください。
3. customMessages フォルダの 1 つ以上の XML ファイルにメッセージを配置して、customMessages フォルダを次の場所に配置します。

   ```
   SADATADIR¥web¥msgdb¥l_xx
   ```

   ここで、SADATADIR はデータ・ディレクトリ、xx は選択されているロケールの言語識別子です（たとえば、アメリカ英語の識別子は en）。

   複数の言語が必要ない場合は、customMessages フォルダを l_en フォルダに配置します。言語固有のバージョンが見つからない場合、メッセージのデフォルトは l_en になります。l_xx フォルダは、SADATADIR¥web¥msgdb フォルダ内に作成する必要があります。
4. Oracle BI Server を再起動します。

customMessages フォルダには、複数の XML ファイルを作成することも、カスタマイズしたすべてのメッセージを含む custommessages.xml などの 1 つの XML ファイルを作成することもできます。これは、アプリケーションによって customMessages フォルダ内が走査され、ファイル名に関係なく、XML 拡張子を持つすべてのファイルが読み取られるためです。カスタマイズしたメッセージが多数ある場合は、それらを個別のファイルに整理すると便利です。

注意：複数言語のサポートが必要な場合は、customcontrolmessages.xml という名前の 1 つのファイルに制御メッセージ（翻訳されないメッセージ）を配置します。翻訳されるメッセージは、customuimessages.xml などの名前の別のファイルに配置します。これによって、customuimessages.xml ファイルのローカライズされたバージョンが、¥OracleBIData¥web¥msgdb¥l_de¥customMessages や ¥OracleBIData¥web¥msgdb¥l_fr¥customMessages などの各言語フォルダに適切に配置されます。

リンクは特別なケースです。リンク・メッセージに対する変更は、Dashboards と Delivers では期待どおりに表示されます。同じ変更を Answers で表示するには、kuiAnswersMainBar メッセージを変更する必要があります。

カスタム・メッセージ・ファイルを編集するには

1. 元のファイルのバックアップを別のフォルダに作成します。
2. さらに別のフォルダに開発用のコピーを作成します。
3. テキスト・エディタまたは XML エディタで開発バージョンのファイルを編集します。
4. customMessages フォルダ内の元のファイルを新しく編集したファイルで置換します。
5. 新しいファイルをテストします。
6. （オプション）バックアップと開発用のコピーを削除します。

Oracle BI Presentation Services の XML メッセージ名要素の名前解決

WebMessage name 要素のデフォルト・テキストは、Oracle BI Presentation Services の初期化時に、カスタマイズされた XML ファイルにある同等の名前の要素のテキストに置換されます。次に、その優先順位を高いものから示します。

- SADATADIR¥web¥msgdb¥l_xx¥customMessages フォルダ（言語固有のフォルダ）内の XML（SADATADIR はデータ・ディレクトリ）
- SADATADIR¥web¥msgdb¥l_en¥customMessages フォルダ内の XML（言語固有のユーザー・ログオン時に、WebMessage name 要素が言語固有のフォルダになく、このフォルダにある場合）
- SADATADIR¥web¥msgdb¥customMessages フォルダ内の XML
- SAROOTDIR¥web¥msgdb¥l_xx¥messages フォルダ内の XML（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）
- SAROOTDIR¥web¥msgdb¥messages フォルダ内の XML

たとえば、Oracle BI Presentation Services を起動すると、最初にインストール・ディレクトリにあるフォルダ SAROOTDIR¥web¥msgdb¥l_xx¥messages のメッセージが読み取られ、次にフォルダ SADATADIR¥web¥msgdb¥l_xx¥customMessages のメッセージが読み取られます。これらのメッセージのデフォルト・テキストが、カスタマイズされたテキストによって置換されます。保護されているメッセージのテキストを変更しようとすると、かわりに、そのことを示すメッセージが表示されます。

Oracle BI Presentation Services の XML テンプレートのサンプル

次に、SADATADIR¥web¥msgdb¥l_xx¥customMessages フォルダに配置する custommessages.xml ファイルのサンプル・テンプレートを示します（SADATADIR はデータ・ディレクトリ）。custommessages.xml ファイルの例は、次の項で紹介します。

すべてのメッセージは <WebMessage name=> 要素で始まり </WebMessage> 要素で終わります。カスタマイズ可能なメッセージ・テキストは、<TEXT> 要素または <HTML> 要素の開始タグと終了タグの間に記述します。メッセージを非表示にする場合は、これらの要素のテキストを削除します。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<WebMessageTables>

     <WebMessageTable system="Custom Messages">
     <!-- The name of a message must match the name of the message you are
overriding. -->
     <WebMessage name="kmsgExampleOverrideMessage">

     <!-- A message can have TEXT and/or HTML versions of it.It is not necessary
to have both.(TEXT will be automatically converted to HTML when necessary). -->

     <TEXT>Example message.</TEXT> <!-- Format used in a text only output -->
     <HTML><b>Example message with bold HTML tags.</b></HTML> <!-- Format used
in an HTML output -->

    </WebMessage>
</WebMessageTable>

</WebMessageTables>
```

サンプル・テンプレートを作成するには

1. テキスト・エディタでサンプル・テンプレートのコピーを作成します。
2. ファイルの名前を custommessages.xml（または任意の名前）にします。
3. 対応する SADATADIR¥web¥msgdb¥l_xx フォルダに作成した customMessages フォルダに、新しいファイルを配置します。

Oracle BI Presentation Services の custommessages.xml ファイルの例

次に、4 つのメッセージがカスタマイズされた custommessages.xml ファイルの例を示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<WebMessageTables>

<WebMessageTable system="Custom Messages">

<!-- First message -->
     <WebMessage name="kmsgAuthenticateRemembermyIDandpassword">
     <TEXT>Remember my signon name and password.</TEXT>
</WebMessage>

<!-- Second message -->
     <WebMessage name="kkmsgPrivilegeDisplayerAccountUnknown">
     <TEXT>Unknown Account (<Param insert="1"/>).Call the Help Desk at extension
9999 to set up a new account.</TEXT>
</WebMessage>

<!-- Third message --
     <WebMessage name="kmsgWelcomeFrameCreateNewRequest">
     <HTML>Create a <b>new request</b> by clicking on a Subject Area below.After
creating the request, click on the <b>Done</b> button at the bottom of the page.</
HTML>
</WebMessage>

<!-- Fourth message -->
     <WebMessage name="kmsgUIAdmin">
     <HTML></HTML>
</WebMessage>

</WebMessageTable>

</WebMessageTables>
```

- 最初のカスタマイズ・メッセージのメッセージ識別子は、kmsgAuthenticateRemembermyIDandpassword です。このメッセージのデフォルト・テキストは、SAROOTDIR¥web¥msgdb¥l_xx¥messages フォルダの logonmessages.xml ファイルにあります（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）。

- 2 番目のカスタマイズ・メッセージのメッセージ識別子は、kmsgPrivilegeDisplayerAccountUnknown です。このメッセージのデフォルト・テキストは、SAROOTDIR¥web¥msgdb¥l_xx¥messages フォルダの viewmessages.xml ファイルにあります（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）。このメッセージには、変数（ `<Param insert="1"/>` ）が含まれます。

  注意：変数を含むメッセージをカスタマイズする場合、変数は変更しないでください。UNIX 環境では、カスタマイズするメッセージ名の大文字 / 小文字を同じにする必要があることに注意してください。

- 3 番目のカスタマイズ・メッセージのメッセージ識別子は、kmsgWelcomeFrameCreateNewRequest です。このメッセージのデフォルト・テキストは、SAROOTDIR¥web¥msgdb¥l_xx¥messages フォルダの searchsysmessages.xml ファイルにあります（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）。このメッセージは HTML フォーマットで、HTML タグ（ `<b>` ）を使用してテキストを太字表示します。

- 4 番目のカスタマイズ・メッセージのメッセージ識別子は、kmsgUIADMIN です。このメッセージのデフォルト・テキストは、SAROOTDIR¥web¥msgdb¥l_xx¥messages フォルダの uimessages.xml ファイルにあります（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）。このメッセージは HTML フォーマットです。このメッセージ識別子は、Answers、Delivers またはダッシュボード・ページの上部に「Admin」リンクを表示する目的で使用します。<HTML> タグと </HTML> タグの間のテキスト Admin を削除すると、リンクは非表示になります。

Oracle BI Presentation Services 画面への言語の選択の追加

Oracle BI Presentation Services のログイン画面と Answers の「My Account」画面にはそれぞれ、ユーザーが作業に使用する言語を選択する言語の選択ドロップダウン・リストが配置されています。選択可能にしたい言語が言語の選択ドロップダウン・リストにない場合は、必要な言語を追加できます。

ログイン画面および「My Account」画面の言語の選択ドロップダウン・リストに言語を追加するには

1. SADATADIR¥web¥msgdb ディレクトリに l_*xx* ディレクトリを追加します。ここで、*xx* は追加する言語の言語拡張子（たとえば、アメリカ英語は en）、SADATADIR はデータ・ディレクトリです。
2. SAROOTDIR¥web¥msgdb¥messages ディレクトリの languagenames.xml ファイルを SADATADIR¥web¥msgdb¥messages ディレクトリにコピーします。ここで、SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ、SADATADIR はデータ・ディレクトリです（languagenames.xml ファイルには、言語の選択ドロップダウン・リストに表示される言語のリストが含まれます）。
3. テキスト・エディタを使用して、SADATADIR¥web¥msgdb¥messages ディレクトリの languagenames.xml ファイルを開きます。
4. 追加する言語がこのファイルに既存しないことを確認します。既存しない場合は、次のエントリを作成して言語を追加します。

   ```
   <webMessage name="kmsgLanguageName_xx">
   <TEXT>LanguageName</TEXT>
   </webMessage>
   ```

   ここで、*xx* は言語拡張子（ar など）、*LanguageName* は言語名（アラビア語など）です。

頻繁にカスタマイズされる Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェース・メッセージ

頻繁にカスタマイズされるメッセージは、uimessages.xml ファイルにあります。このファイルには、ユーザー・インタフェース全体の表示要素とリンクのテキスト文字列が含まれます。

たとえば、次のメッセージには、ユーザー・インタフェースにあるリンク「Admin」、「Alerts!」および「Answers」の各テキストが定義されています。必要な場合は、このテキストをカスタマイズしたり、削除してリンクを非表示にしたりできます。

```
<WebMessage name="kmsgUIAdmin">
  <HTML>Admin</HTML>
</WebMessage>

<WebMessage name="kmsgUIAlerts">
  <HTML>Alerts!</HTML>
</WebMessage>

<WebMessage name="kmsgUIAnswers">
  <HTML>Answers</HTML>
</WebMessage>
```

たとえば、ユーザーは、リクエストしたデータを Microsoft Excel ファイルにエクスポートできます。Excel へのダウンロード・オプションをサポートしないようにする場合は、該当するリンクを削除します。

ダウンロード・リンクを削除するには

1. viewscontrolmessages.xml ファイルを開きます。
2. 次のメッセージを custommessages.xml ファイルにコピーします。

```
<WebMessage name="kmsgEVCDownloadLinks">
  <HTML>
    <a insert="1">
      <MessageRef name="kmsgEVCLinkDownloadExcel" />
    </a>

    <a insert="2">
      <MessageRef name="kmsgEVCLinkDownloadData" />
    </a>
  </HTML>
```

3. 最初のメッセージ識別子のアンカーを削除します。

```
    <a insert="1">
      <MessageRef name="kmsgEVCLinkDownloadExcel" />
    </a>
```

4. custommessages.xml ファイルを保存します。

custommessages.xml ファイルの詳細は、「Oracle BI Presentation Services の custommessages.xml ファイルの例」（194 ページ）を参照してください。

Oracle BI Presentation Services ログイン画面の外観のカスタマイズ

ユーザーが Dashboards や Answers などの Oracle BI Presentation Services コンポーネントにアクセスするには、最初に Oracle BI Presentation Services へのログインが必要です。このログオン・プロセスでは、Oracle BI Server の認証プロセスへのユーザー・インタフェースが提供されます。

ユーザーが Oracle BI Presentation Services にアクセスすると、Oracle BI Presentation Services のデフォルトのログイン画面が表示されます。ユーザーは、適切な Oracle Business Intelligence ユーザー名およびパスワードを入力する必要があります。認証が完了したら、ユーザーは対応付けられた Oracle BI Presentation Services コンポーネントにアクセス可能となり、ユーザーのデフォルト・ダッシュボードが表示されます。詳細は、「Oracle BI Presentation Services のユーザー認証について」（138 ページ）を参照してください。

ログイン画面の外観をカスタマイズするには

- logoncontrolmessages.xml ファイルにある関連するメッセージを上書きします。

  注意：セッションのタイムアウト時に使用される「Not Logged On」画面（kmsgAuthenticateNotLoggedOn）は、ログオンしていないユーザーがダイレクト・ログオンをサポートしていない URL にアクセスしようとしたときにのみ表示されます。たとえば、ユーザーが Answers にアクセスして、「Log Off」リンクをクリックしたとします。このとき、ユーザーがブラウザの戻るボタンをクリックし「My Account」リンクをクリックすると、「Not Logged On」画面が表示されます。

XML メッセージを使用したユーザー・インタフェースのカスタマイズに関する全般的な情報は、「XML メッセージ・ファイルを使用した Oracle BI Presentation Services ユーザー・インタフェースのカスタマイズ」（190 ページ）を参照してください。

注意：Oracle BI Presentation Services 管理者は、この機能によって、実際に使用されるユーザーの認証方法を制御することはできません。認証のオプションの詳細は、「Oracle BI Presentation Services のユーザー認証について」（138 ページ）を参照してください。

Oracle Business Intelligence ReportUI Portlet の構成

Oracle BI ReportUI Portlet は、Oracle BI Presentation Services のコンテンツをポータル・サーバー内のポートレットに表示するソフトウェア・コンポーネントです。Oracle BI ReportUI Portlet は JSR 168 ポートレット仕様に準拠するため、JSR 168 準拠のあらゆるポータル・サーバー上で動作します。次のポータル・サーバーで動作テストが行われています。

- Oracle Application Server Portal 10.1.4.0.0

  この Oracle Application Server Portal にはパッチ 4900785 が必要です。また、Oracle BI ReportUI Portlet のインストール先となる OC4J インスタンスには、事前に WSRP コンテナがインストールされている必要があります。

- WebSphere Portal 5.1.0.4

Oracle BI ReportUI Portlet の実装は、Oracle BI Presentation Services の SOAP レイヤーによって提供される既存の HTML ビュー・サービスに基づいています。

接続のスキーマは次のとおりです。

1. Oracle Application Server PortalまたはWebSphere Portalを表示するブラウザに組み込まれたOracle BI ReportUI Portlet が、Oracle BI Presentation Services レポートをリクエストします。
2. Oracle Application Server Portal サーバーまたは WebSphere Portal サーバーがリクエストを受信し、Oracle BI Presentation Services ポートレット Web アプリケーション内のブリッジ・サーブレットに転送します。
3. ブリッジ・サーブレットが Oracle BI Presentation Services に接続します。
4. Oracle BI Presentation Services が、Oracle BI Presentation Services ポートレット Web アプリケーション内の ReportUI Portlet にレポート情報を配信します。
5. ReportUI Portlet が Oracle Application Server Portal サーバーまたは WebSphere Portal サーバーに情報を送信し、それがユーザーの Web ブラウザに転送され表示されます。

Oracle BI ReportUI Portlet のインストールおよび構成

この項の説明と手順は、Oracle Application Server Portal サーバーまたは WebSphere Portal サーバーが正しくインストールされていることと、Oracle Application Server Portal サーバーまたは WebSphere Portal サーバーが起動されていることが前提となります。Oracle BI ReportUI Portlet の完全なインストールには、次のアクティビティが必要です。

- 「portlet.xml ファイルの編集による Oracle BI ReportUI Portlet の構成」（198 ページ）
- 「Oracle BI ReportUI Portlet のデプロイ」（201 ページ）
- 「Oracle BI ReportUI Portlet での認証の構成」（201 ページ）

portlet.xml ファイルの編集による Oracle BI ReportUI Portlet の構成

Oracle BI ReportUI Portlet をデプロイする前に、portlet.xml ファイルを編集し、Oracle BI Presentation Services の URL と管理者の資格証明を指定する必要があります。

portlet.xml ファイルは、sawjsr168portlets.war ファイルの構成ファイルとして配布されています。sawjsr168portlets.war は Web アーカイブ（WAR）ファイルで、SAROOTDIR/web/skd フォルダにあります（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）。

portlet.xml ファイルを編集するには

1. sawjsr168portlets.war ファイルの解凍先として {portletconfig} という名前の空のフォルダを作成します（portletconfig は任意の名前）。
2. SAROOTDIR/web/skd フォルダ（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）で sawjsr168portlets.war ファイルを探し、それを {portletconfig} フォルダにコピーします。

3 {portletconfig} フォルダを現行フォルダにし、JDK インストールに付属する jar ユーティリティを使用して sawjsr168portlets.war ファイルを解凍します。

```
jar -xf sawjsr168portlets.war
```

4 テキスト・エディタを使用して、{portletconfig}/WEB-INF にある portlet.xml ファイルを開きます。

5 次の各 preference/name 要素に値を設定します。

要素	値
oracle.bi.presentation.sawserver.URL	Oracle BI Presentation Services のアクセス URL。この URL 値には疑問符以降を含めず、通常は saw.dll で終わります。 デフォルト値： `http://localhost/analytics/saw.dll`
oracle.bi.presentation.portlets.jsr168.reportui.AdminUserName	Oracle Business Intelligence 管理者のユーザー名。 管理資格証明によって認証が行われるときに必要になります。詳細は、「Oracle BI ReportUI Portlet での認証の構成」（201 ページ）を参照してください。
oracle.bi.presentation.portlets.jsr168.reportui.AdminPwd	Oracle Business Intelligence 管理者のパスワード。 管理資格証明によって認証が行われるときに必要になります。詳細は、「Oracle BI ReportUI Portlet での認証の構成」（201 ページ）を参照してください。
oracle.bi.presentation.portlets.websphere.SuperuserSlotId	（WebSphere Portal のみ）WebSphere の共有クリデンシャル・ボールト・スロットの名前。これには、前述の URL で指定された Oracle BI Presentation Services の管理ユーザー名とパスワードが格納されています。 管理資格証明によって認証が行われるときに使用されます。詳細は、「Oracle BI ReportUI Portlet での認証の構成」（201 ページ）を参照してください。 WebSphere の共有クリデンシャル・ボールト・スロットの詳細は、WebSphere Portal のドキュメントを参照してください。

6 {portletconfig} フォルダを現行フォルダにし、JDK インストールに付属する jar ユーティリティを使用して sawjsr168portlets.war を更新します。

```
jar -uf sawjsr168portlets.war WEB-INF/portlet.xml
```

portlet.xml の例

次の XML ファイルは、portlet.xml ファイルの例です。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>
<portlet-app xmlns="http://java.sun.com/xml/ns/portlet/portlet-app_1_0.xsd"
   xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance"
   xsi:schemaLocation="http://java.sun.com/xml/ns/portlet/portlet-app_1_0.xsd http://
   java.sun.com/xml/ns/portlet/portlet-app_1_0.xsd" version="1.0"
   id="Oracle Business Intelligence Report View Portlet Application">
   <portlet>
      <portlet-name>Oracle Business Intelligence Report View Portlet</portlet-name>
      <portlet-class>com.siebel.analytics.web.portlets.jsr168.ReportUI</portlet-class>
      <expiration-cache>0</expiration-cache>
      <supports>
          <mime-type>text/html</mime-type>
          <portlet-mode>edit</portlet-mode>
          <portlet-mode>edit_defaults</portlet-mode>
      </supports>
      <portlet-info>
         <title>Oracle Business Intelligence Report View Portlet</title>
      </portlet-info>
      <portlet-preferences>
         <preference>
            <name>oracle.bi.presentation.report.Path</name>
            <value/>
            <read-only>false</read-only>
         </preference>
         <preference>
            <name>oracle.bi.presentation.report.ViewName</name>
            <value />
            <read-only>false</read-only>
         </preference>
         <preference>
            <name>oracle.bi.presentation.sawserver.URL</name>
            <value>http://localhost/analytics/saw.dll</value>
            <read-only>false</read-only>
         </preference>
         <preference>
            <name>oracle.bi.presentation.portlets.jsr168.reportui.AdminUserName</name>
            <value/>
            <read-only>false</read-only>
         </preference>
         <preference>
            <name>oracle.bi.presentation.portlets.jsr168.reportui.AdminPwd</name>
            <value/>
            <read-only>false</read-only>
         </preference>
         <preference>
            <name>oracle.bi.presentation.portlets.websphere.SuperuserSlotId</name>
            <value/>
            <read-only>false</read-only>
         </preference>
      </portlet-preferences>
   </portlet>
   <custom-portlet-mode>
      <description xml:lang="en">This mode signifies that the portlet should render a
screen to set the default values for the read-only preferences that are typically changed
```

```
in the EDIT screen.Calling this mode requires that the user must have administrator
rights.</description>
      <portlet-mode>edit_defaults</portlet-mode>
   </custom-portlet-mode>
</portlet-app>
```

Oracle BI ReportUI Portlet のデプロイ

Oracle BI ReportUI Portlet は、SAROOTDIR/web/skd フォルダ（SAROOTDIR はインストール・ディレクトリ）にある sawjsr168portlets.war ファイルにパッケージ化されています。Oracle BI ReportUI Portlet をデプロイするには、Portal のドキュメントに記載されている手順に従ってください。

ヒント： Oracle BI ReportUI Portlet を Oracle Application Server Portal にデプロイする場合は、最初に、Web Services for Remote Portals（WSRP）をサポートする OC4J インスタンスに、sawjsr168portlets.war ファイルを Web アプリケーションとしてデプロイします。次に、次の URL にアクセスして、デプロイが成功したことをテストします。
http://{Portal server host}:{Portal server port}/{Portlet application URL}/portlets?WSDL
成功の場合は、有効な WSDL ドキュメントが返されます。

ヒント： Oracle BI ReportUI Portlet のデプロイに失敗した場合は、他のポートレットをデプロイして、ポータル・サーバーが正しく動作していることを確認します。

Oracle BI ReportUI Portlet での認証の構成

Oracle BI ReportUI Portlet は、ユーザーを認証する目的で Portal から現行ユーザーのログイン名を取得し、それを Oracle BI Presentation Services に渡します。Oracle BI Presentation Services は、そのログイン名が認証されたユーザーの名前であることを確認するために、そのログイン名が信頼できるソースにあることを検証する必要があります。この検証には、次の 2 通りのアプローチがあります。

- 管理資格証明による認証 - このアプローチでは、Oracle BI ReportUI Portlet が Oracle BI 管理者の資格証明（つまり、ユーザー名とパスワード）を記憶しており、それを現行ユーザーのログイン名とともに Oracle BI Presentation Services に渡します。Oracle BI Presentation Services では Oracle BI 管理者のユーザー名とパスワードがわかっているため、現行ユーザーのログイン名が間違いなく、適切に認証されたユーザーの名前であることを信頼できると判断できます。
- SSL 証明書による認証 - このアプローチでは、Oracle BI ReportUI Portlet は SSL 証明書を使用して Oracle BI Presentation Services から自分自身の認証を受けます。

管理資格証明を使用する認証を構成するには

- portlet.xml ファイルで次の要素を設定します。
  - Oracle Application Server Portal の場合：
    - oracle.bi.presentation.portlets.jsr168.reportui.AdminUserName
    - oracle.bi.presentation.portlets.jsr168.reportui.AdminPwd
  - WebSphere Portal の場合：oracle.bi.presentation.portlets.websphere.SuperuserSlotId

portlet.xml ファイルの編集の詳細は、「portlet.xml ファイルの編集による Oracle BI ReportUI Portlet の構成」（198 ページ）を参照してください。

SSL 証明書を使用する認証を構成するには

注意：ここでの手順は、SSL に関する全般的な知識があることと、ブリッジ・サーブレットを実行する Web サーバー、およびポータル・サーバーの管理に精通していることが前提になります。

1. portlet.xml ファイルで、次の要素に空の文字列が設定されていることを確認します。
   - oracle.bi.presentation.portlets.jsr168.reportui.AdminUserName
   - oracle.bi.presentation.portlets.jsr168.reportui.AdminPwd

   portlet.xml ファイルの編集の詳細は、「portlet.xml ファイルの編集による Oracle BI ReportUI Portlet の構成」（198 ページ）を参照してください。

2. ブリッジ・サーブレットを実行する Web サーバー、およびポータル・サーバー用に、2 つの SSL 証明書を作成して署名します。Web サーバーの証明書には、Web サーバーの正しいドメイン・ネーム・システム（DNS）名が含まれることを確認します。

3. ブリッジ・サーブレットを実行する Web サーバーで、次を構成します。
   - https 接続の許可。https を使用してブラウザから Oracle BI Presentation Services にアクセスできることと、ブラウザにドメイン名の不一致によるセキュリティ・エラーが表示されないことをテストします。
   - クライアント証明書の受入れ。

     たとえば、Tomcat では、server.xml ファイルの Connector 要素の属性として SSL パラメータを構成します。clientAuth="want" 属性はクライアント証明書を有効化し、truststoreFile 属性はポータル・サーバーの証明書の署名に使用した認証局の証明書を識別します。

4. Oracle Application Server PortalまたはWebSphere Portalがクライアント証明書を受け入れるよう構成します。

   たとえば、Oracle Application Server Portal では、Java コマンドラインを編集し、SSL 関連の Java プロパティを指定できます。それには、WSRP をサポートする OC4J インスタンスの「管理」画面を表示し、「サーバー・プロパティ」リンクをクリックします。次に、Java オプション・ファイルで、SSL プロパティを追加してトラスト・ストアおよびキー・ストアを構成します。次に例を示します。

   ```
   -Djavax.net.ssl.trustStore=D:/certificates/jsr168portal.keystore
   -Jjavax.net.ssl.keyStorePassword=password
   -Djavax.net.ssl.keyStore=D:/certificates/jsr168portal.keystore
   ```

   ここで、`-Djavax.net.ssl.trustStore` はブリッジ・サーブレットを実行する Web サーバーの署名に使用した認証局の証明書を識別し、`-Djavax.net.ssl.keyStore` はポータル・サーバーの署名に使用した認証局の証明書を識別します。

5. Web サーバーの web.xml ファイルに com.oracle.bi.web.TrustedRemoteDNs 要素（信頼できる証明書の、セミコロンで区切られた識別名（DN）の一覧を識別）を追加して、ブリッジ・サーブレットがポータル証明書を認識するよう構成します。次に例を示します。

```
<param-name>com.oracle.bi.web.TrustedRemoteDNs</param-name>
<param-value>
        CN=Portal, OU=OrgUnit, O=Organization, L=City, ST=State, C=Country
</param-value>
```

ブリッジ・サーブレットは信頼できる証明書を受け取ると、CN 値を抽出して、現行のリモート・ユーザーとして Oracle BI Presentation Services に渡します。

6 Oracle BI Presentation Services 構成ファイル（instanceconfig.xml）の EnableWebServerAuthInSoap 要素を Y に設定して、Oracle BI Presentation Services が SOAP を介したリモート・ユーザーの認証をパスワードなしで許可するよう構成します。

Oracle BI Presentation Services の構成ファイル（instanceconfig.xml）における操作方法の詳細は、「Oracle BI Presentation Services の構成の変更」（14 ページ）を参照してください。

7 Oracle BI Presentation Services が証明書ストアからポータル・ユーザーのユーザー・パスワードを取得できるようにします。これには 2 通りの方法があります。

- セキュリティを重視する場合は、Oracle BI Presentation Services の証明書ストアに、ポータル証明書の CN 属性の値と同じキーを持つエントリを作成します。Oracle BI Presentation Services の証明書ストアの詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。
- セキュリティを重視しない場合は、次の手順を実行します。
  - instanceconfig.xml ファイルに次のエントリを追加します。

    ```
    <CredentialStore>
        <CredentialStorage type="file" path={full_path_to_credential_store}/>
    </CredentialStore>
    ```

  - credentialstore.xml ファイルを作成します。詳細は、『Oracle Business Intelligence Enterprise Edition デプロイメント・ガイド』を参照してください。

11 HTTP を使用した Oracle BI Presentation Services の企業環境への統合

この章では、Oracle BI Presentation Services の企業環境への統合に使用できる HTTP メソッドについて説明します。Oracle BI Presentation Services は、システムに公開されるほとんどの機能のエントリ・ポイントを提供します。HTTP を介して、簡単な URL 構文または JavaScript コマンドを使用したコールを実行できます。UNIX のインタフェースは、Java サーブレットを使用して公開されます。この章の内容は次のとおりです。

- Go URL コマンドを使用した Oracle Business Intelligence の結果の外部ポータルまたは外部アプリケーションへの取込み（206 ページ）
- Oracle BI Presentation Services の Dashboard URL コマンドを使用した外部ポータルまたは外部アプリケーションでのダッシュボード・コンテンツの参照（209 ページ）
- Oracle BI Presentation Services の Go URL コマンドを使用した SQL の発行とフィルタの受渡し（210 ページ）
- Oracle Business Intelligence とサード・パーティの SQL ツールとの統合例（215 ページ）

Go URL コマンドを使用した Oracle Business Intelligence の結果の外部ポータルまたは外部アプリケーションへの取込み

この項では、Oracle BI Presentation Services の Go URL コマンドを使用して、外部ポータルまたは外部アプリケーションに結果を取り込む方法について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 「Oracle BI Presentation Services の Go URL コマンドについて」（206 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services の基本の Dashboard URL コマンドの構造」（210 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services の Go URL コマンドのオプション・パラメータ」（207 ページ）

Oracle BI Presentation Services の Go URL コマンドについて

Oracle BI Presentation Services の Go URL コマンドを使用すると、特定の Oracle Business Intelligence の結果を外部ポータルまたは外部アプリケーションに取り込むことができます。Go URL コマンドは、お気に入りに結果を追加したり、ダッシュボードや外部 Web サイトへのリクエストにリンクを追加したりする場合に使用します。このコマンドの動作は、様々な書式やオプション引数を使用して制御できます。

Go URL コマンドは、Form としてポストすることも、URL として発行することもできます。URL の一部としてパラメータを発行する場合は、適切なエスケープが必要となります。たとえば、空白はプラス記号（ + ）で置換する必要があります。つまり、値として East Region を渡す場合は、「East+Region」と入力します。

Oracle BI Presentation Services の画面（ダッシュボードや HTML 形式の結果ビューなど）からコールする場合は、URL の先頭に次の文字を使用する必要があります。

```
saw.dll?Go
```

同じ Web サーバーの別の画面からコールする場合は、URL の先頭に次の文字を使用する必要があります。

```
/Analytics/saw.dll?Go
```

別のサーバーの画面から参照する場合は（電子メールで送信するなど）、URL の先頭に完全修飾されたサーバー名または IP アドレスを使用する必要があります。

```
http://server_name_or_ip_address/Analytics/saw.dll?Go
```

これらのコマンドをテストするには、Internet Explorer のアドレス・フィールドに完全修飾されたバージョンを入力します。

Oracle BI Presentation Services の基本の Go URL コマンドの構造

基本の Go URL コマンドには、実行するリクエストの完全な Presentation Catalog パスを記述する必要があります。これにより、リクエストに定義されているデフォルトの結果ビューが返されます。

たとえば、次の Go URL コマンドを実行すると、SB2 という名前のリクエストに定義されているデフォルトの結果ビューが返されます。

```
saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/SB2
```

Oracle BI Presentation Services の Go URL コマンドのオプション・パラメータ

Go URL コマンドの動作は、次の 1 つ以上のパラメータを追加することによって変更できます。無効な URL（パラメータの入力ミスなど）を指定すると、「The page cannot be found」というエラー・メッセージが詳細テキスト「HTTP 400 - Bad Request」とともにブラウザに表示されます。

注意：次のパラメータ例に使用されている SB2 は、実行するリクエストの名前です。

- **ユーザー ID とパスワード。**リクエストにユーザー ID とパスワード情報が指定されていない場合、およびユーザーがログオン情報を記憶するオプションを選択していない場合、ユーザーは、ユーザー ID とパスワードの入力を求められます。

  書式は次のとおりです。uuu はユーザー ID、ppp はパスワードです。

  ```
  &NQUser=uuu&NQPassword=ppp
  ```

  例：

  ```
  saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/SB2&NQUser=user1&NQPassword=rock
  ```

  このコマンドは、user1 というユーザー ID と rock というパスワードでログオンしてリクエストを実行します。

- **リンク・オプション。**結果にリンクが表示されます。

  書式は次のとおりです。

  ```
  &Options=x
  ```

  x には、次の文字を 1 つ以上使用できます。

文字	リンク
m	Modify Request
f	Printer Friendly
d	Download to Excel
r	Refresh Results

  例：

  ```
  saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/SB2&Options=md
  ```

  このコマンドは、結果に「Modify Request」リンクと「Download」リンクを表示します。

- **プリンタ優先。**結果を印刷用のフォーマットで表示します。ページ・コントロール、ホット・リンクなどは表示しません。

  書式は次のとおりです。

  ```
  &Action=print
  ```

  例：

  ```
  saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/SB2&Action=Print
  ```

- **アプリケーション優先。** 結果を Microsoft Excel などのアプリケーション用のフォーマットで表示します。ページ・コントロール、ホット・リンクなどは表示しません。

  書式は次のとおりです。

  ```
  ＝&Action=Extract
  ```

  例：

  ```
  saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/SB2&Action=Extract
  ```

  抽出処理もナビゲーション処理として機能するため（「URL（ナビゲーション）を使用した Oracle BI Presentation Services の Go URL コマンドへのフィルタの受渡し」（211 ページ）を参照）、コールによって返される結果をフィルタ処理できます。

- **特定のビュー。** デフォルトの複合ビューではなく、個別の結果ビューを表示します。

  書式は次のとおりです。xx は、ビューの名前です。

  ```
  saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/SB2&ViewName=xx
  ```

  例：

  ```
  saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/SB2&ViewName=Chart
  ```

  このコマンドは、リクエストに Chart という名前のグラフ・ビューが指定されていることを前提として、グラフ・ビューのみを表示します。

- **特定のスタイル。** 指定されたスタイルで結果を表示します。スタイルが存在しない場合は、デフォルトが使用されます。

  書式は次のとおりです。xx は、スタイルの名前です。

  ```
  saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/SB2&Style=xx
  ```

  例：

  ```
  saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/SB2&Style=Lime
  ```

  このコマンドは、Lime という名前のスタイルを使用して結果を表示します。

- **結果フォーマット。** 結果のフォーマットを制御します。

  書式は次のとおりです。xx は、XML または HTML です。

  ```
  saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/SB2&Format=xx
  ```

  例：

  ```
  saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/SB2&Format=XML
  ```

  このコマンドは、XML 形式で結果を表示します。

すべてのレコードのテーブル形式での表示

すべてのレコードをテーブル形式で表示するには、次の 2 通りの方法があります。

- 「Table」ビューの「Rows per Page」プロパティを 10,000 に設定し、基本の Go コマンドを使用します。この方法は、もう 1 つの方法よりも簡単です。
- 制御するビューが Table という名前であることを前提に、次の URL を発行します。

```
saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/SB2&Action=Scroll&P5=-1&ViewID=go~Table
```

Oracle BI Presentation Services の Dashboard URL コマンドを使用した外部ポータルまたは外部アプリケーションでのダッシュボード・コンテンツの参照

この項では、Oracle BI Presentation Services の Dashboard URL コマンドの使用方法について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 「Oracle BI Presentation Services の Dashboard URL コマンドについて」（209 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services の基本の Dashboard URL コマンドの構造」（210 ページ）
- 「Oracle BI Presentation Services の Dashboard URL コマンドのオプション・パラメータ」（210 ページ）

Oracle BI Presentation Services の Dashboard URL コマンドについて

Oracle BI Presentation Services の Dashboard URL コマンドは、外部ポータルまたは外部アプリケーションで、特定のダッシュボード・コンテンツを取り込んだり、参照したりする際に使用できます。このコマンドの動作は、様々な書式やオプション引数を使用して制御できます。

Dashboard URL コマンドは、Form としてポストすることも、URL として発行することもできます。URL の一部としてパラメータを発行する場合は、適切なエスケープが必要となります。たとえば、空白はプラス記号（ + ）で置換する必要があります。つまり、値として East Region を渡す場合は、「East+Region」と入力します。

Oracle BI Presentation Services の画面（ダッシュボードや HTML 形式の結果ビューなど）からコールする場合は、URL の先頭に次の文字を使用する必要があります。

```
saw.dll?Dashboard
```

同じ Web サーバーの別の画面からコールする場合は、URL の先頭に次の文字を使用する必要があります。

```
/Analytics/saw.dll?Dashboard
```

別のサーバーの画面から参照する場合は（電子メールで送信するなど）、URL の先頭に完全修飾されたサーバー名または IP アドレスを使用する必要があります。

```
http://server_name_or_ip_address/Analytics/saw.dll?Dashboard
```

これらのコマンドをテストするには、Internet Explorer のアドレス・フィールドに完全修飾されたバージョンを入力します。

Oracle BI Presentation Services の基本の Dashboard URL コマンドの構造

基本の Dashboard URL コマンドには、パラメータは不要です。このコマンドは、ユーザーを認証した後、ユーザーのデフォルトのポータルを表示します。

書式は次のとおりです。

```
saw.dll?Dashboard
```

Oracle BI Presentation Services の Dashboard URL コマンドのオプション・パラメータ

Dashboard URL コマンドの動作は、ユーザー ID とパスワードのパラメータを追加することによって変更できます。これらのパラメータを省略すると、ユーザーは、最後のログオン時にログオン情報を記憶するオプションを選択していないかぎり、ユーザー ID とパスワードの入力を求められます。セッション ID またはチケットを使用している場合は、それを NQUser パラメータとして渡します。次のパラメータ例に使用されている SB2 は、実行するリクエストの名前です。

書式は次のとおりです。uuu はユーザー ID、ppp はパスワードです。

```
&NQUser=uuu&NQPassword=ppp
```

例：

```
saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/SB2&NQUser=user1&NQPassword=rock
```

このコマンドは、user1 というユーザー ID と rock というパスワードでログオンしてダッシュボードを表示します。

無効な URL（パラメータの入力ミスなど）を指定すると、「The page cannot be found」というエラー・メッセージが詳細テキスト「HTTP 400 - Bad Request」とともにブラウザに表示されます。

Oracle BI Presentation Services の Go URL コマンドを使用した SQL の発行とフィルタの受渡し

この項では、Go URL コマンドを使用して SQL を発行する方法、およびナビゲーションに使用するフィルタを渡す方法について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 「Oracle BI Presentation Services の Go URL コマンドを使用した SQL の発行」（210 ページ）
- 「URL（ナビゲーション）を使用した Oracle BI Presentation Services の Go URL コマンドへのフィルタの受渡し」（211 ページ）

Oracle BI Presentation Services の Go URL コマンドを使用した SQL の発行

Go URL コマンドを使用して、Oracle Business Intelligence の SQL を発行できます。この書式の Go URL コマンドは、テーブル形式の結果を返します。このコマンドにも、基本的なオプションである &Style= および &Options= を使用できます。

Oracle Business Intelligence の簡易 SQL を発行するには、Go URL のパラメータとしてエスケープした SQL を使用します。次に例を示します。

```
saw.dll?Go&SQL=select+Region,Dollars+from+SupplierSales
```

FROM 句は、クエリーするサブジェクト領域の名前です。

また、IssueRawSQL コマンドを使用すると、Web 処理を回避して Oracle BI Server に直接 SQL を発行することもできます。

URL（ナビゲーション）を使用した Oracle BI Presentation Services の Go URL コマンドへのフィルタの受渡し

Go URL コマンドは、フィルタなどのコンテキストを宛先リクエストに渡す場合にも使用できます。これには、コールにパラメータを追加します。受渡しの対象となるすべての列が、Is Prompted フィルタまたは特定のデフォルトのフィルタとともに宛先に設定されていることを確認する必要があります。

ナビゲーション・パラメータ

ナビゲーション・コマンドの基本構文は、「Oracle BI Presentation Services の基本の Dashboard URL コマンドの構造」（210 ページ）で説明した構文と同じですが、さらに Action=Navigate パラメータを追加し、P1 ～ Pn のパラメータを必要な数だけ使用することができます。

&Action=Navigate

&P0=n　n はフィルタ処理する列の数です。現在使用できる数は 1 ～ 6 です。

&P1=op　op は次の演算子のいずれかです。

演算子	意味
eq	等しい、または含まれる
neq	等しくない、または含まれない
lt	より小さい
gt	より大きい
ge	以上
le	以下
bwith	次で始まる
ewith	次で終わる
cany	（&P3 内の値の）いずれかを含む
call	（&P3 内の値の）すべてを含む
like	通常の % ワイルドカードのかわりに、%25 を入力する必要があります。後述の like の例を参照してください。
top	&P3 の値は 1+n です。n は、先頭に表示する項目の数です。

演算子	意味
bottom	&P3 の値は 1+n です。n は、末尾に表示する項目の数です。
bet	の間にある（&P3 には 2 つの値を指定します）
null	NULL（&P3 は 0 になるか、省略される）
nnul	NULL でない（&P3 は 0 になるか、省略される）
&P2=ttt.ccc	ttt はテーブルの名前、ccc は列の名前です。テーブルまたは列にスペースが含まれる場合は、二重引用符で囲む必要があります。空白は %20 としてエスケープする必要があります（例：Measures."Dollar%20Sales"）。
&P3=n+xxx+yyy+...+zzz	n は値の数です。xxx、yyy および zzz は実際の値です。 **注意：**P3 の値が数字で始まる場合は、値全体を引用符で囲む必要があります。次に例を示します。 `saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/SB2&Action=Navigate&P0=1&P1=top&P2=Customers.Region&P3="7West"`

注意：&P1、&P2 および &P3 の設定は、&P0 の値に応じて、&P4 ～ P6、&P7 ～ P9、&P8 ～ P10、&P11 ～ P13、&P14 ～ P16 および &P17 ～ P19 についても必要なだけ繰り返すことができます。

ナビゲーションの例

次の例は、East および Central 地域のレコードを返します。

```
Saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/
SB2&Action=Navigate&P0=1&P1=eq&P2=Customers.Region&P3=2+Central+East
```

次の例は、名前の最初の文字が E で末尾が t（E....t）の地域のレコードを返します。

```
saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/
SB2&Action=Navigate&P0=1&P1=like&P2=Customers.Region&P3=1+E%25t
```

次の例は、販売額（ドル）を基準とした上位 2 つの地域を返します。

```
saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/
SB2&Action=Navigate&P0=1&P1=top&P2="Sales%20Facts".Dollars&P3=1+2
```

次の例は、引数の数が指定されていない構文を示しています。

```
saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/
SB2&Action=Navigate&P0=1&P1=top&P2=Customers.Region&P3=Central
```

注意：引数の数の指定を省略できるのは、引数の値を 1 つしか使用しない場合のみです。

次の例は、販売額が 2,000,000 ～ 2,500,000 ドルに該当するレコードを返します。

```
saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/
SB2&Action=Navigate&P0=1&P1=top&P2="Sales%20Facts".Dollars&P3=2+2000000+2500000
```

次の例は、名前が文字 E で始まる地域のレコードを返します。

```
saw.dll?Go&Path=vate&P0=1&P1=bwith&P2=Customers.Region&P3=1+E
```

次の例は、名前に文字 E が含まれ、販売額が 2000 万ドルを上回っている地域のレコードを返します。

```
saw.dll?Go&Path=/Shared/Test/
SB2&Action=Navigate&P0=2&P1=cany&P2=Customers.Region&P3=1+e&P4=gt&P5="Sales%20Fact
s".Dollars&P6=1+20000000
```

Oracle BI Presentation Services では、現在、グラフ・ビュー、テーブル・ビュー、ピボット・テーブル・ビュー、HTML ビュー、外部アプリケーションおよび Web ページからのナビゲーションがサポートされています。宛先の検索には、コンテキストを取得する列に定義されているフィルタを設定する必要があります。これには、特定のフィルタ（通常は Is Prompted フィルタ）を指定できます。宛先に適用されるのは、ナビゲーション・コールで具体的に参照される Table.Column 値だけでなく、対応する table.columns が宛先に設定されているソース・リクエストのすべてのフィルタです。したがって、ソースの適切なコンテキストを宛先に渡すことができます。

グラフからのナビゲーション

「chart properties」画面で「Navigate」ラジオ・ボタンを選択し、表示されたフィールドに、保存されている検索または関心のあるポータルへの完全なパスを入力します。たとえば、次のように入力します。

```
/shared/topaz/performance/transaction details
```

JavaScript を使用したナビゲーション

現在ナビゲーションは、列のカスタムのテキスト / 日付フォーマッタを使用して実行できます。その主要概念は、ナビゲート元の列を検索に追加することです。その後、列のプロパティで「Custom Text Format」を選択し、提供されている 2 つの JavaScript 関数のいずれかをコールする HTML を入力します。この手法は、列の並べ替えやカスタム JavaScript 関数のコールなど、多くの処理を実行するために使用できます。

Oracle BI Presentation Services には、テーブル・ビューおよびピボット・ビューからナビゲートできる 2 つの JavaScript 関数（GoNav および PortalNav）が用意されています（これらの関数の動作を確認する場合は、SAROOTDIR¥web¥app¥res¥b_mozilla¥viewhelper.js から取得してください。SAROOTDIR はインストール・ディレクトリです）。前者は、特定の検索へのナビゲーションを処理します。後者は、特定のダッシュボードへのナビゲーションを処理します。これらの関数の構文の説明、およびナビゲーションの実装に使用できるカスタム・テキスト・フォーマットの例を以下に示します。

注意：スタイルシートを使用してナビゲート可能なテキストの外観を制御するために、Oracle BI Presentation Services では、class=Nav を標準で使用します。

GoNav 関数

関数 `GoNav(event, sPath, sTbl, sCol, sVal, sTarget)`

`event`: イベント・インジケータ

`sPath`: 宛先検索のカタログ・パス

`sTbl`: フィルタ対象の論理テーブル名

sCol: フィルタ対象の論理列名

sVal: フィルタ処理の基準となる値

sTarget（オプション）：新しいブラウザ・ウィンドウに結果を表示するには "_blank" と指定します。

GoNav コールのカスタム・テキスト・フォーマットの例

GoNav コールおよび PortalNav コールは、HTML 文に含めることができます（引用符を含みます）。

```
[html]"<font class=nav onclick=¥"JavaScript:GoNav(event, '/shared/topaz/performance/
transaction details','Transaction','Quality','"@"');¥">"@"</font>
```

表 21 に、この例の要素と詳細を示します。

表 21. GoNav コールの要素の説明

要素	説明
[html]	Oracle BI Presentation Services に、後続のテキストを HTML として解釈するよう指示します。不等号の「より小さい」を示す文字（<）は、HTML タグ内で使用することが目的の場合、二重引用符を前に付ける必要があります。
"<font	JavaScript コールを添付できる HTML タグ。 、、<a> などを使用できます。
class=nav	HTML タグのフォーマット設定に使用される CSS スタイル・クラス。
onclick=¥"JavaScript:GoNav('event, /shared/topaz/performance/transaction details','Transaction','Quality','"@"');¥"	JavaScript 関数をコールするメソッド。ユーザーがこの HTML タグの内容をクリックすると、JavaScript 関数がコールされます。
>	font タグの最後の文字。
"@"	Oracle BI Presentation Services に、アットマーク（@）を実際の列の値に置換するよう指示します。[html] を使用する場合、@ 記号は引用符で囲む必要があります。
	<font> タグに対応する終了タグ。

次の GoNav の例は、この HTML をダッシュボードに配置します。

```
<a href="javascript:GoNav(event, '/shared/topaz/performance/transaction
details','Transaction','Quality','Some value');">Click here to navigate to Transaction
Details with ''Some value'</a>
```

PortalNav 関数

関数 PortalNav(event, sPortal,sTbl,sCol,sVal)

event: イベント・インジケータ

sPortal: 宛先ポータルのカタログ・パス

sTbl: フィルタ対象の論理テーブル名

sCol: フィルタ対象の論理列名

sVal: フィルタ処理の基準となる値

PortalNav コールのカスタム・テキスト・フォーマットの例

引用符は必ず次の例と同じ位置に挿入してください。

```
"<font class=nav onclick=¥"JavaScript:PortalNav(event, '/shared/topaz/_portal/
transaction analysis','Transaction','Type','"@"');¥">"@"</font>"
```

HTML の結果からのナビゲーション

この方法は、「JavaScript を使用したナビゲーション」（213 ページ）で説明した方法と同じです。ただし、カスタム・フォーマッタを使用するのではなく、HTML 構文に @ 記号にかわる静的な値を入力します。

Oracle Business Intelligence とサード・パーティの SQL ツールとの統合例

この項では、Microsoft Access との統合例を取り上げながら、サード・パーティの SQL ツールを Oracle Business Intelligence に統合する際の要件について説明します。Oracle Business Intelligence は、企業データのアクセスと統合に使用するミドルウェア・プラットフォームとして設計されているため、一般的なレポート・ライターやビジネス・インテリジェンス・ツールは Oracle BI Server とネイティブに通信できます。

サード・パーティの SQL ツールのほとんどは、クロス結合を避けるために、クエリー内に結合条件を定義する必要があります。クロス結合はリクエストに WHERE 句が使用されていない場合に発生し、それにより、結合に使用されるテーブルのデカルト積が作成されます。デカルト積のサイズは、1 つ目のテーブルの行数と 2 つ目のテーブルの行数の積になります。

Microsoft Access を Oracle BI Server に統合するには、Oracle BI Server 管理者が Oracle BI Administration Tool のプレゼンテーション・レイヤー内のキーを公開する必要があります。

サード・パーティの SQL ツールの統合例:

1. ビジネス・モデルとマッピング・レイヤーのキーをプレゼンテーション・レイヤーにドラッグ・アンド・ドロップし、リポジトリを保存します。
2. Microsoft Access を開いて、「空のデータベース」オプションを選択します。プロンプトが表示されたら、名前に「siebel-analytics.mdb」と入力し、「作成」をクリックします。
3. 新しい Microsoft Access データベースが作成されたら、画面の空白部分を右クリックして、「テーブルのリンク」を選択します。
4. 「ファイルの種類」ドロップダウン・リストから、「ODBC データベース」を選択します。

   「データ ソースの選択」ダイアログが表示され、DSN 名を入力するよう求められます。

5 「コンピュータ データ ソース」タブをクリックし、Analytics_Web DNS を選択して、「OK」をクリックします。

Oracle BI Server にログインするよう要求されます。

6 ユーザー ID とパスワードを入力します。

「オブジェクトのインポート」ダイアログ・ボックスが表示されます。

7 「すべて選択」ボタンをクリックするか、Oracle Business Intelligence から目的の論理テーブルを選択します。

インポートにはしばらく時間がかかる場合があります。

8 インポートが完了したら、画面の空白部分を右クリックして、「リレーションシップ」を選択します。

a 目的のテーブルを追加し、キーをディメンション・テーブル（Period、Market、Product）からファクト・テーブル（Sales Measures）にドラッグ・アンド・ドロップします。

b キー列に、Period キーをドラッグ・アンド・ドロップします。対応するキーごとにこの操作を繰り返して結合を作成します。

これで、リクエストのテストと実行を行えるようになりました。

9 「Create query in Design view from the Queries」ボタンを選択します。

a 「Markets」、「Products」および「Sales Facts」を選択します。

b 「Region」、「Brand」、「Units」および「Dollars」をそれぞれ追加して、「Run」をクリックします。

索引

記号

/Common フォルダ、概要 159
/Requests フォルダ、概要 159
/Shared フォルダ、概要 157
/User フォルダ、概要 157

A

Access（Microsoft）、Oracle Business Intelligence との統合例 215
Answers
custommessages.xml ファイル、例 194
Oracle BI Presentation Services の WebMessage name タグ、名前解決 193
XML テンプレート、サンプル 193
XML メッセージ・ファイル、カスタマイズ 191
XML メッセージ・ファイル、構造 191
XML メッセージ・ファイル、複数言語のサポート 192
カスタマイズ、概要とファイルの場所 190
キャッシュ、アクセス 27
ダウンロード（Excel）ハイパーリンク、削除 196
ポータルまたはイントラネット、統合 83
ユーザー・インタフェース、XML メッセージ・ファイルを使用したカスタマイズについて 190
ユーザー・インタフェース・メッセージ、頻繁なカスタマイズ 196
Answers、管理
Flash、デフォルトとしてのダウンロードと使用について 46
Flash の新規バージョンのダウンロード・プロンプト、有効化 47
Flash のデフォルトのダウンロード元、変更 47
グラフ・イメージ・サーバー、設定の管理 46
グラフ・キャッシュ、一時記憶域の場所の指定 48
グラフ設定、管理 47
グラフのイメージ・タイプ、指定 46
グラフの対話型動作、指定 48
グラフのナビゲーション、URL の指定 48
通貨、カスタマイズしたサブジェクト領域に指定 51
テーブル・ビュー、行の最大数の指定 50
デフォルトの通貨、変更 51
ナビゲーションとドリルダウン、サポートの追加 50
ピボット・テーブル、移入されるセルの最大数の指定 49
ピボット・テーブル、処理するレコードの最大数の指定 49
ピボット・テーブル設定、構成 49
フォルダ、選択ペインでのネスト 52
API
Dashboard URL、使用 209
Go URL 206
SQL、Go コマンドを使用した発行 210
サード・パーティの SQL ツール、統合例 215

B

b_mozilla_4 フォルダ 61
Bot
「iBot」を参照

C

Catalog Manager
Presentation Catalog 間における項目のコピーと貼付け 117
Presentation Catalog 項目の検索 116
Presentation Catalog テキスト文字列の検索と置換 122
Presentation Catalog データ表示レポートの作成 124
Presentation Catalog のアーカイブ 127
Presentation Catalog の解凍 127
Presentation Catalog のキャプションのローカライズ 124
Presentation Catalog の共有フォルダ、非表示項目の表示 108
Presentation Catalog の新規バージョンへのアップグレードについて 127
Presentation Catalog のテキスト文字列のローカライズ 125
XML 形式でのオブジェクトの表示と編集 121
オブジェクトのプレビュー 122
概要 112
起動 112
項目の権限の設定 119
項目のプロパティの操作 119
項目名の変更 118
コンポーネント 115

操作に関する推奨事項　112
ブラウザ・プリファレンス　121
ワークスペース　115
Catalog Manager におけるオブジェクトのプレビュー　122
Catalog Manager のガイドライン　112
Catalog Manager のコンポーネント　115
Catalog Manager の操作　112
Catalog Manager のブラウザ・プリファレンス　121
Catalog Manager のワークスペース　115
Catalog Manager のワークスペースのビュー　116
「Change/Delete」権限
概要　143
グループ、グループ内におけるリクエスト共有の設定　145
付与、概要　67
Cookie ドメイン、構成
Cookie ドメイン情報、指定　28
Cookie ドメイン・パス、上書き　28
Cookie、有効期限の指定　29
作業、リスト　28
custommessages.xml ファイル、例　194

D

Dashboard URL
PortalPath パラメータ、使用　210
概要と書式　209
基本の Dashboard URL、概要と書式　210
ユーザー ID とパスワードのパラメータ、使用　210
Delivers、管理
Delivers の無効化　65
iBot、概要と偽装　64
iBot とウイルス対策ソフトウェア、概要　64
iBot の配信内容、格納先ディレクトリの変更　66
iBot ログ・ディレクトリ、エントリの表示　65
Oracle BI Scheduler、実行するマシンの指定　66
Oracle Siebel Workflow、統合　67
アクティブな iBot セッションに関する情報の表示　72
ウイルス対策ソフトウェアとスクリプトブロック機能　64
権限設定、概要と iBot　67
サーバー・キャッシュ、シードのために使用　67
データベース認証、操作について　139
デバイス・タイプ　68
Delivers のデバイス・タイプ　68
Delivers の無効化　65
「Download」リンク、結果をダウンロードするためのオプション　83

E

Everyone Presentation Services グループのユーザー、Presentation Services グループへの追加について　143
Everyone グループ、概要　135
Excel、ダウンロード・リンクの削除　196

F

Flash ソフトウェア
Flash の新規バージョンのダウンロード・プロンプト、有効化　47
Flash のデフォルトのダウンロード元、変更　47
デフォルトのイメージ・タイプとしてのダウンロードと使用、概要　46
「Full Control」権限、概要　144
「Full」プロキシ・レベル　163

G

Go URL
HTML の結果、ナビゲーション　215
JavaScript、ナビゲーションに使用　213
SQL、発行とフィルタの受渡しに使用　210
アプリケーション優先フォーマット、結果の表示　207
概要　206
基本の Go URL、概要と例　206
グラフからのナビゲーション　213
結果フォーマット、制御　208
テーブル、すべてのレコードの表示　208
特定のスタイル、結果の表示　208
ナビゲーションの例　212
ナビゲーション・パラメータの構文　211
ビューの指定、表示　208
フィルタ、URL を介した受渡しについて　211
プリンタ優先フォーマットと例　207
ユーザー ID とパスワード、プロンプト表示　207
リンク・オプション、書式と例　207
GoNav JavaScript 関数、概要　213
GROUP、コンテンツがない場合の Web コンテンツの設定　141
Group セッション変数、概要　140

H

HTML 入力　33

I

iBot
アクティブなセッションに関する情報の表示　72
ウイルス対策ソフトウェア、概要　64
概要と偽装　64
権限設定、概要と Delivers　67
配信オプション　70

配信内容、格納先ディレクトリの変更　66
ログ・ディレクトリ、エントリの表示　65
iBot の配信オプション　70
instanceconfig.xml　14, 43

J

Javahost サービス
概要　34
起動　34
構成　38
コマンドライン・オプション　35
コマンドライン・プロパティ　37
停止　34
ロギング　43
Javahost サービスの構成　38
Javahost サービスのコマンドライン・オプション　35
Javahost サービスのコマンドライン・プロパティ　37
Javahost サービスの停止　34
Javahost サービスのロギング　43
JavaScript、ユーザー・インタフェースのカスタマイズでの使用について　185

L

LDAP 認証の概要　138

M

Microsoft
Access、Oracle Business Intelligence との統合の例　215
Excel ファイル、ダウンロード（Excel）リンクの削除　196
IIS Web Server、一時ファイルについて　94

N

「No Access」権限、概要　144

O

ODBC DSN、変更　15
Oracle 10 スタイルシートのサンプル　187
Oracle Application Server Portal　197
Oracle BI Answers
「Answers」および「Answers、管理」を参照
Oracle BI Catalog Manager
「Catalog Manager」を参照
Oracle BI Dashboards
「ダッシュボード」および「ダッシュボード、管理」を参照
Oracle BI Delivers
「Delivers、管理」を参照
Oracle BI Presentation Catalog
「Presentation Catalog」および「Presentation Catalog、管理」を参照
Oracle BI Presentation Services Replication Agent　100
Oracle BI Presentation Services 権限割当て、概要と表　150
Oracle BI Presentation Services の WebMessage name タグ、名前解決　193
Oracle BI Presentation Services のスタイルおよびスキン　189
Oracle BI Presentation Services ログ　180
Oracle BI ReportUI Portlet
構成　197
デプロイ　201
認証の構成　201
Oracle BI ReportUI Portlet のデプロイ　201
Oracle BI Scheduler
Windows ファイル・システム、アクセスについて　64
実行するマシン、指定　66
Oracle BI Server グループ、自動的に Presentation Services グループのメンバーになる仕組みについて　136
Oracle Business Intelligence の統合
Dashboard URL、使用　209
Go URL、使用　206
SQL、Go コマンドを使用した発行　210
サード・パーティの SQL ツール、統合例　215
フィルタ、URL を使用した Go コマンドへの受渡し　211
Oracle Siebel Workflow、Delivers との統合　67

P

PopChart Image Server
グラフのイメージ・タイプ、指定　46
グラフ、レンダリングに使用　46
PortalBanner.css
ダッシュボードのバナー・イメージ、カスタマイズの例　189
portalbanner.css
概要　187
portalcontent.css ファイル　187
PortalNav JavaScript 関数、概要　213
Presentation Catalog
/Common フォルダ、概要　159
/Requests フォルダ、概要と権限　159
4000 人を超えるユーザー用の構成　93
Catalog Manager、権限の設定　119
Catalog Manager で開くためのモード　113
Presentation Services グループ、作成について　157

XML 形式でのオブジェクトの表示と編集　121
アーカイブ　106, 127
解凍　127
カタログ構造、推奨フォルダ構造（図）　157
カタログ構造、設定　157
カタログ項目、権限の設定　159
概要　92
キャッシュの管理　93
キャプションのローカライズ　124
共有ダッシュボード、作成　159
共有ダッシュボード、ページとコンテンツの追加　160
共有ドキュメント、仮想ディレクトリの設定　162
グループ・フォルダ、概要と権限　158
項目に対する権限の追加　148
項目の権限の変更　147
項目のコピーと貼付け　117
作成　94
新規バージョンへのアップグレードについて　127
セキュリティ、設定のプロセス　157
ダッシュボード、コミュニティへのリリース　162
ダッシュボード、テスト　162
テキスト文字列のエクスポート　125
テキスト文字列の検索と置換　122
テキスト文字列の公開　126
データ表示レポートの作成　124
場所　92
開く方法　113
別のインストールへの移動　94
レプリケート　95

Presentation Catalog 間における項目の貼付け　117

Presentation Catalog、管理
Catalog Manager、概要　112
Catalog Manager、起動　112
Catalog Manager のワークスペース、概要　115
Presentation Catalog 間における項目のコピーと貼付け　117
Presentation Catalog の共有フォルダ、非表示項目の表示　108
Presentation Catalog の共有フォルダ、表示　107
新しいフォルダ、コンテンツの表示　108
新しいフォルダ、作成　108
項目、コピーまたは移動　109
項目、所有権の取得　108
項目の権限の設定　119
項目名の変更、Catalog Manager の使用について　118
新規 Presentation Catalog、作成　94
操作に関する推奨事項　112
名前および場所、変更　93
フォルダまたは項目、削除　109
フォルダまたは項目、名前の変更　109
プロパティの操作　119

Presentation Catalog テキスト文字列の置換　122

Presentation Catalog の新規バージョンへのアップグレード　127

Presentation Catalog のテキスト文字列のエクスポート　125

Presentation Catalog のテキスト文字列の公開　126

Presentation Catalog の場所　92

Presentation Catalog を Catalog Manager で開くためのモード　113

Presentation Catalog を開くためのオフライン・モード　113

Presentation Catalog を開くためのオンライン・モード　113

Presentation Catalog を開く方法　113

Presentation Services Administrators グループ　135

Presentation Services グループ
Everyone Presentation Services グループ、追加について　143
Presentation Catalog の共有グループ・フォルダ、作成について　157
Presentation Services グループ、削除　137
Presentation Services グループ、作成　136
「Read」権限、概要　137
WEBGROUPS セッション変数、概要　140
管理者定義 Presentation Services グループ、概要　135
概要とユーザー　134
グループ間の相違点　132
継承のルール、概要とリスト　141
継承、割当てについて　141
権限、継承の例と図　142
権限、設定　141
システム定義 Presentation Services グループ、リスト　135
セッション変数ブロック、概要　140
注意、Oracle BI Server グループ、自動的にメンバーになる仕組みについて　136
デフォルトの Oracle BI Presentation Services 権限割当て（表）　150
ユーザーまたはグループ、既存グループへの追加　137
ユーザーまたはグループ、削除　138

「Publish iBots for Subscription」権限、アクセスする権限の付与について　67

R

「Read」権限、概要　144

Replication Agent　100

「Restricted」プロキシ・レベル　163

S

sawrepaj ユーティリティ 100
SA システム・サブジェクト領域 69, 70
SQL
Go コマンドを使用した SQL の発行とフィルタの受渡し 210
サード・パーティのツールの統合例 215

T

「Traverse Folder」権限、概要 144

U

UNICODE、UNICODE フォーマット以外による結果のダウンロード 83
URL
完全修飾された URL、生成の指定 32
生成とリソース・ファイルの場所、概要 29
生成、方法の指定 30
静的 URL、生成方法の指定 30

V

view.css ファイル 187

W

WEBGROUPS セッション変数
概要 140
権限、設定 141
WebMessage name タグ、名前解決 193
WebSphere Portal 197
Web キャッシュ、消去 19

X

XML テンプレート、サンプル 193
XML メッセージ・ファイル
custommessages.xml ファイル、例 194
Oracle BI Presentation Services の WebMessage name タグ、名前解決 193
XML テンプレート、サンプル 193
複数言語、サポート 192
メッセージ、カスタマイズ 191
メッセージ・ファイル、構造 191
ユーザー・インタフェース、カスタマイズでの使用について 191
XSS（クロスサイト・スクリプティング） 33

あ

アーカイブ
Presentation Catalog 106, 127
オブジェクト 94
カタログ・フォルダ 106, 127
アクション・リンク、作成 76
アプリケーション・プログラミング・インタフェース
「API」を参照
イメージ・タイプ
Flash、デフォルトとしてのダウンロードと使用について 46
Flash の新規バージョンのダウンロード・プロンプト、有効化 47
Flash のデフォルトのダウンロード元、変更 47
グラフのイメージ・タイプ、指定 46
色、反転バーの色の変更 61
インテリジェント・エージェント
「iBot」を参照
イントラネット、Answers の統合 83
ウイルス対策ソフトウェア、iBot スクリプト・コールのブロック 64
オープン・レコード・セット、最大数の指定 28
オブジェクト
Catalog Manager におけるプレビュー 122
XML 形式での表示と編集 121
本番環境へのコミット 94
オプション、iBot の配信 70

か

解凍
Presentation Catalog 127
オブジェクト 94
カタログ・フォルダ 127
書込み
権限 86
制限 89
接続プール 86
テーブル 86
テンプレート 86, 87
テンプレートの例 88
カスケード・スタイルシート、操作
新しいダッシュボード・スタイル、作成 188
カスケード・スタイルシート、詳細 188
ダッシュボードのバナー・イメージ、カスタマイズの例 189
ダッシュボードのユーザー・インタフェース、影響するファイル 187
場所 187
カスタマイズしたサブジェクト領域、通貨の指定 51
仮想ディレクトリ、共有ドキュメント用の設定 162
仮想パス、上書き 31
カタログ
Presentation Services グループ、作成について 157
カタログ構造、推奨フォルダ構造（図） 157
カタログ構造、フォルダについて 157
項目、Catalog Manager を使用しての権限の設定 119

カタログ・フォルダ
アーカイブ　106, 127
解凍　127
管理　107
管理
Cookie ドメイン、作業リスト　28
Cookie ドメイン情報、指定　28
Cookie ドメイン・パス、上書き　28
Cookie、有効期限の指定　29
ODBC DSN、変更　15
URL、生成とリソース・ファイルの場所　29
URL、生成方法の指定　30
Web キャッシュ、消去　19
オープン・レコード・セット、最大数の指定　28
完全修飾された URL、生成の指定　32
キャッシュ、アクセス　27
キャッシュ、エントリが使用後に存在できる最短時間　28
キャッシュ、エントリが存在できる最短時間　27
キャッシュ、エントリが存在できる最長時間　27
キャッシュ・エントリ、リクエストに関連付けられているものを消去　19
クエリー・ファイル、リクエストの情報の確認　19
構成の変更、実行について　14
構成ファイルのパス、設定　15
実行中のリクエスト、1 つのリクエストの取消し　19
実行中のリクエスト、すべてのリクエストの取消し　19
静的 URL、生成方法の指定　30
デフォルトの言語、ログイン画面に指定　33
プライマリ以外のリソース・ファイル、場所の指定　31
プライマリ以外のリソース・ファイル、パスの指定　32
プライマリ・リソース・ファイル、場所の指定　30
プライマリ・リソース・ファイル、パスの指定　31
放置されたリクエスト、取り消す時間の設定　21
保存されていないリクエスト、保持する時間の設定　20
有効期限、クライアント・セッションに対する設定　20
ユーザーの自動ログオフ、時間の設定　21
ユーザーの名前とパスワードの記憶、無効化　16
ログオン中のユーザーと実行中のリクエスト、情報の表示　17
管理者定義 Presentation Services グループ、概要　135
管理操作、ユーザー開始　168
外部テーブルによる認証、概要　139
画面、言語の選択の追加　195
キー、構成　43
起動
Catalog Manager　112
Javahost サービス　34
キャッシュ、Presentation Catalog 用の管理　93
キャッシュ設定、管理
オープン・レコード・セット、最大数の指定　28
キャッシュ、アクセス　27
キャッシュ、エントリが使用後に存在できる最短時間　28
キャッシュ、エントリが存在できる最短時間　27
キャッシュ、エントリが存在できる最長時間　27
キャプション、Presentation Catalog のローカライズ　124
共有項目、作成と使用　161
共有ダッシュボード
共有ドキュメント、仮想ディレクトリの設定　162
コミュニティ、ダッシュボードのリリース　162
削除　75
テスト　162
偽装、概要と iBot　64
クエリー・ファイル、リクエストの情報の確認　19
クライアント・セッション
削除、時間の設定　20
閉じる、時間の設定　16
クロスサイト・スクリプティング　33
グラフ・イメージ・サーバー、設定の管理
Flash、デフォルトとしてのダウンロードと使用について　46
Flash の新規バージョンのダウンロード・プロンプト、有効化　47
Flash のデフォルトのダウンロード元、変更　47
概要　46
グラフのイメージ・タイプ、指定　46
グラフ・キャッシュ、一時記憶域の場所の指定　48
グラフ設定、管理
概要　47
グラフ・キャッシュ、一時記憶域の場所の指定　48
グラフの対話型動作、指定　48
グラフのナビゲーション、URL の指定　48
グラフのナビゲーション、URL の指定　48
グループ
Presentation Services グループ、概要とユーザー　134
Presentation Services グループ、既存への追加　137
Web グループ間の相違点　132
既存 Presentation Services グループ、削除　138
権限、割当て　150
グループ・フォルダ、概要と権限　158
継承された権限、構成について　143

結果、UNICODE フォーマット以外、ダウンロード 83
権限
Catalog Manager、設定 119
Change/Delete 143
Everyone Presentation Services グループ、追加について 143
Full Control 144
No Access 144
Presentation Services グループ、継承の例と図 142
Presentation Services グループ、設定 141
Read 144
Traverse Folder 144
書込み 86
継承のルール、概要とリスト 141
継承、割当てについて 141
権限、設定と例について 148
権限の削除、概要 145
項目の設定 119
設定、Delivers と iBot 67
設定、概要 143
設定と例について 148
設定に関する推奨事項 144
タイプ 143
追加 148
デフォルトの Oracle BI Presentation Services 権限割当て、概要と表 150
プロキシ 168
変更 147
明示的なアクセス、変更 149
ユーザー権限割当て表の例 134
ユーザーまたはグループ、権限の割当て 150
権限の追加 148
権限の変更 147
検索
Presentation Catalog 項目 116
Presentation Catalog テキスト文字列の置換 122
言語
デフォルトの言語、ログイン画面に指定 33
複数の言語とメッセージ、サポート 192
言語の選択、画面への追加 195
構成
Cookie ドメイン、作業リスト 28
Cookie ドメイン情報、指定 28
Cookie ドメイン・パス、上書き 28
Cookie、有効期限の指定 29
ODBC DSN、変更 15
URL、生成とリソース・ファイルの場所 29
URL、生成方法の指定 30
オープン・レコード・セット、最大数の指定 28
完全修飾された URL、生成の指定 32
キャッシュ、アクセス 27
キャッシュ、エントリが使用後に存在できる最短時間 28
キャッシュ、エントリが存在できる最短時間 27
キャッシュ、エントリが存在できる最長時間 27
構成ファイルのパス、設定 15
静的 URL、生成方法の指定 30
デフォルトの言語、ログイン画面に指定 33
プライマリ以外のリソース・ファイル、場所の指定 31
プライマリ以外のリソース・ファイル、パスの指定 32
プライマリ・リソース・ファイル、場所の指定 30
プライマリ・リソース・ファイル、パスの指定 31
変更、実行について 14
放置されたリクエスト、取り消す時間の設定 21
保存されていないリクエスト、保持する時間の設定 20
ユーザーの自動ログオフ、時間の設定 21
ユーザーの名前とパスワードの記憶、無効化 16
構成キー 43
構成ファイル、値の集中管理 14
項目
共有の作成と使用 161
権限の追加 148
権限の変更 147
検索 116
コピーまたは移動 109
削除 109
所有権、取得 108
名前の変更 109
非表示表示 108
プロパティの操作 119
項目の移動 109
項目名の変更
概要 118
参照の更新 118
参照を更新しない 118
コピー
カタログ間におけるコンテンツの貼付け 117
項目 109

さ

サード・パーティの SQL ツール、統合例 215
サーバー・キャッシュ、Delivers を使用したシード 67
削除
Presentation Services グループ 137
既存グループのユーザーまたはグループ 138
ダッシュボード 75
デバイス・タイプ 68
フォルダまたは項目 109

作成
Presentation Catalog データ表示レポート　124
デバイス・タイプ　68
サブジェクト領域
SA システム　69, 70
システム・セッション変数
Group セッション変数、概要　140
WEBGROUPS セッション変数、概要　140
権限、設定　141
セッション変数ブロック、概要　140
システム定義 Presentation Services グループ、リスト　135
スキン
Oracle BI Presentation Services のスキン・フォルダ、使用するフォルダの指定　189
デフォルト、指定について　189
スタイルシート
新しいダッシュボード・スタイル、作成　188
カスケード・スタイルシート、詳細　188
ダッシュボードのバナー・イメージ、カスタマイズの例　189
ダッシュボードのユーザー・インタフェース、影響するファイル　187
場所　187
セキュリティ
LDAP 認証、概要　138
Presentation Services グループ、概要とユーザー　134
Presentation Services グループ、作成　136
アクセス制御と権限、概要とフォーマット　133
カタログとダッシュボード、構成するためのガイドライン　157
外部テーブルによる認証、概要　139
権限、継承　141
権限、設定について　143
設定、場所　132
データベース認証、概要　139
内部認証、概要　139
認証プロセスの説明　138
目標、リスト　133
ユーザー権限　134
ユーザー認証、概要　134
セッション、管理
Web キャッシュ、消去　19
アクティブな iBot に関する情報の表示　72
キャッシュ・エントリ、リクエストに関連付けられているものを消去　19
クエリー・ファイル、リクエストの情報の確認　19
実行中のリクエスト、1 つのリクエストの取消し　19
実行中のリクエスト、すべてのリクエストの取消し　19
ログオン中のユーザーと実行中のリクエスト、情報の表示　17
セッション変数
Group セッション変数、概要　140
WEBGROUPS セッション変数、概要　140
権限、設定　141
タイムゾーン　25
プロキシ機能　164
接続プール、書込み　86
操作、ユーザー開始管理　168
属性ファイル　92

た

タイムゾーン
値の指定　25
指定　24
使用方法　22
セッション変数　25
設定　25
ユーザーに対する設定　22
ユーザーの優先　24
優先順位　24
タイムゾーンに対する設定　25
タイムゾーンの値に含まれるアンパサンド　25
タイムゾーンの指定　24
タイムゾーンの優先順位　24
代理ユーザーの承認　162
ダッシュボード
Presentation Services グループ、作成について　157
新しいダッシュボード・スタイル、作成　188
カタログ構造、設定　157
管理　74
管理について　74
共有ドキュメント、仮想ディレクトリの設定　162
権限の変更　74
コミュニティ、ダッシュボードのリリース　162
削除　74
作成　74
セキュリティ、設定のプロセス　157
テスト　162
バナー・イメージ、カスタマイズの例　189
バナー・ファイル（portalbanner.css）、概要　187
プロパティの変更　74
ダッシュボード以外のコンポーネント、カスタマイズ
custommessages.xml ファイル、例　194
Oracle BI Presentation Services の WebMessage name タグ、名前解決　193
XML テンプレート、サンプル　193
XML メッセージ・ファイル、カスタマイズ　191
XML メッセージ・ファイル、構造　191

XML メッセージ・ファイル、複数言語のサポート 192
概要とファイル 190
ダウンロード（Excel）ハイパーリンク、削除 196
ユーザー・インタフェース、XML ファイルを使用したカスタマイズ 190
ユーザー・インタフェース・メッセージ、頻繁なカスタマイズ 196
ダッシュボード、管理
Answers、他のポータルまたはイントラネットへの統合 83
「Dashboards」リンクのテキスト、変更 84
アクション・リンク、作成 76
結果、UNICODE フォーマット以外によるダウンロード 83
ダッシュボード、削除 75
ダッシュボード名、表示する個数の設定 77
ダッシュボード・リンク、リンク先の変更 84
ブリーフィング・ブック・リンク、数の設定 82
通貨
カスタマイズしたサブジェクト領域、通貨の指定 51
デフォルトの通貨、Answers での変更 51
テーブル・ビュー、行の最大数の指定 50
テキスト文字列
Presentation Catalog のためのエクスポート 125
Presentation Catalog のための公開 126
Presentation Catalog のためのローカライズ 124, 125
テンプレート
XML テンプレート、サンプル 193
書込み 86, 87
書込み例 88
プロキシ機能用カスタム・メッセージ 165
ディレクトリ、共有ドキュメント用の仮想ディレクトリの設定 162
データ・ウェアハウス、デフォルトの通貨の設定 51
データベース認証の概要 139
デバイス・タイプの表示 68
デバイス・タイプの編集 68
ドキュメント、共有ドキュメント用の仮想ディレクトリの設定 162
ドリルダウン、Answers でのサポートの追加 50

な

内部認証、概要 139
ナビゲーション
Answers、サポートの追加 50
ブリーフィング・ブック・リンク、数の設定 82
名前、ログオンにおける大文字と小文字の区別 70
認可レベル 162
認証
LDAP 認証、概要 138
Oracle BI ReportUI Portlet での構成 201
外部テーブルによる認証、概要 139
システム・セッション変数、構成 140
データベース認証、概要 139
内部認証、概要 139
プロセスの説明 138
ユーザー認証、概要 134

は

配信デバイス 70
配信プロファイル 70
反転バー、色の変更 61
バー、反転バーの色の変更 61
非表示項目、表示 108
ピボット・テーブル設定、構成
移入されるセル、最大数の指定 49
概要 49
レコード、処理する最大数の指定 49
フィルタ
Go URL、URL を介した受渡し 211
フォルダ
/Common フォルダ、概要 159
/Requests フォルダ、概要 159
/Shared フォルダ、概要 157
/User フォルダ、概要 157
Presentation Catalog の共有フォルダ、非表示項目の表示 108
Presentation Catalog の共有フォルダ、表示 107
アーカイブ 106, 127
新しい Presentation Catalog フォルダ、コンテンツの表示 108
新しい Presentation Catalog フォルダ、作成 108
解凍 127
カタログの管理 107
グループ・フォルダ、概要と権限 158
選択ペインでのネスト 52
名前付け 109
フォルダの削除 109
フォルダ、b_mozilla_4 61
ブラウザのクライアント・セッション
有効期限、クライアント・セッションに対する設定 20
有効期限、クライアント接続に対する設定 16
ブリーフィング・ブック・リンク、数の設定 82
プライマリ以外のリソース・ファイル
場所、指定 31
パス、指定 32
プライマリ・リソース・ファイル
場所、指定 30

パス、指定　31
プロキシ機能
instanceconfig.xml の変更　165
カスタム・メッセージ・テンプレートの作成　165
概要　162
セッション変数　164
設定　163
プロキシ権限の割当て　168
プロキシ・ユーザーとターゲット・ユーザーとの間における関連付けの定義　163
プロキシ機能用カスタム・メッセージ・テンプレート　165
プロキシ機能用メッセージ・テンプレート　165
プロキシ権限　168
プロキシ・ユーザー　162
プロキシ・レベル　162
プロパティ
Catalog Manager での操作　119
Javahost サービスのコマンドライン　37
別のインストールへの Presentation Catalog の移動　94
放置されたリクエスト、取り消す時間の設定　21
保存されていないリクエスト、保持する時間の設定　20
本番環境、オブジェクトのコミット　94
本番環境へのオブジェクトのコミット　94
ポータル、Answers の統合　83

ま

明示的なアクセス、権限に対する変更　149
明示的な権限の設定、構成について　143
メッセージ
custommessages.xml ファイル、例　194
カスタマイズ　191
複数言語、サポート　192
ログ・ファイル　180

や

有効期限
クライアント・セッション、設定　20
クライアント接続、設定　16
有効な権限、概要　141
ユーザー
Presentation Services グループ、追加　137
Web キャッシュ、消去　19
既存 Presentation Services グループ、削除　138
権限、割当て　150
代理　162
名前とパスワード、記憶機能の無効化　16
ユーザーの自動ログオフ、時間の設定　21
優先タイムゾーンの設定　22
ログオン中のユーザーと実行中のリクエスト、情報の表示　17
ユーザー・インタフェース、カスタマイズ
custommessages.xml ファイル、例　194
Oracle BI Presentation Services の WebMessage name タグ、名前解決　193
Oracle BI Presentation Services のスキン・フォルダ、使用するフォルダの指定　189
Oracle BI Presentation Services のスタイルおよびスキン、デフォルトの指定　189
Oracle BI Presentation Services のスタイル・フォルダ、使用するフォルダの指定　189
XML テンプレート、サンプル　193
XML メッセージ・ファイル、カスタマイズ　191
XML メッセージ・ファイル、カスタマイズでの使用について　190
XML メッセージ・ファイル、構造　191
XML メッセージ・ファイル、複数言語のサポート　192
新しいダッシュボード・スタイル、作成　188
カスケード・スタイルシート、詳細　188
カスケード・スタイルシート、操作　187
ダウンロード（Excel）ハイパーリンク、削除　196
ダッシュボード以外のコンポーネント、カスタマイズ　190
ダッシュボードのバナー・イメージ、カスタマイズの例　189
デフォルトのイメージとスタイルシート、場所　187
ユーザー・インタフェース・メッセージ、頻繁なカスタマイズ　196
ログイン・ページ、カスタマイズ　197
ユーザー・インタフェースの言語、設定について　33
ユーザー開始管理操作　168
ユーザーの優先タイムゾーン　24
ユーティリティ、sawrepaj　100

ら

リクエスト
キャッシュ・エントリ、リクエストに関連付けられているものを消去　19
クエリー・ファイル、リクエストの情報の確認　19
グループ内におけるユーザーのリクエストの共有、概要　145
実行中のリクエスト、1 つのリクエストの取消し　19
実行中のリクエスト、すべてのリクエストの取消し　19

保存されていないリクエスト、保持する時間の設定　20
ログオン中のユーザーと実行中のリクエスト、情報の表示　17
リソース・ファイル
完全修飾された URL、生成の指定　32
場所、管理と URL の生成について　29
プライマリ以外のリソース・ファイル、場所の指定　31
プライマリ以外のリソース・ファイル、パスの指定　32
プライマリ・リソース・ファイル、場所の指定　30
プライマリ・リソース・ファイル、パスの指定　31
リンク
アクション・リンク、作成　76
ダッシュボード・リンク、リンク先の変更　84
ブリーフィング・ブック・リンク、数の設定　82
レプリケーション
Oracle BI Presentation Services Replication Agent　100
Presentation Catalog　95
sawrepaj ユーティリティ　100
再開　99
レプリケーションの再開　99
ログイン画面、デフォルトの言語の指定　33
ログイン・ページ、カスタマイズ　197
ログオフ、時間の設定　21
ログオン名、大文字と小文字の区別　70
ログオン名における大文字と小文字の区別　70
ログ・ファイル
iBot ログ・ディレクトリ、エントリの表示　65
メッセージ　180